國譯禪學大成

第二十五卷

國譯禪學大成第二十五卷凡例

一、本大成第二十五卷には、前の第二十四卷に次いで、圓滿本光國師見桃錄卷之四の譯文及び原文と永源寂室和尚語錄四卷とを收載せり。

一、見桃錄に就いては、前の二十四卷の凡例及び解題に於て大略述べたれども、本卷收載の卷之四に就いて一言せん。卽ち見桃錄卷之四には、預請の秉炬と題して、其の生前に於ける下火及び秉炬一百九篇と、附錄と題して、後奈良天皇の宸翰以下、妙心寺及び臨濟寺山門疏など數篇を收錄せり。之によつて觀れば、何れも皆國師の典雅なる文章に接し得ると共に、師は又如何に多くの衆生を濟度したるかを知るに足るべし。

一、永源寂室和尚語錄は又『寂室錄』とも略稱し、近江の永源寺開山、寂室和尚の語要を輯錄したるものにして、禪師の滅後、十一年目の永和三年、僧性均なるものが初めて二卷本として開版せり。其の後、寛永二十一年再版に附するに際して一絲和尚作の禪師行狀を之に添ふ。又元祿十年に至り、頭注を加へて『頭書寂室錄』と題し、四卷本として刊行せり。更に寛延四年に至り、元祿の頭注本を重刊 冠注と改めて出版せり。其の外、寛文元年刊の三卷本。正保二年刊の二卷本、享保元年刊行の二卷本などあ

り。今次、國譯するに際しては、寛延の刻本を底本となし、之に寛永の刊本を以て校合せり。

一、寂室和尚は當時、詩文の名手を以て聞えしかば、本錄の如きは宗派の如何を問はず、洽く僧俗の間に愛讀せられ、本邦禪林の語錄中、本書の如く廣く世に流布したるものは希なり。而して本錄卷の一及び卷の二には、偈頌、佛僧贊、自贊を收め、卷の三には、小佛事、說及び書簡を錄し、卷の四には法語、跋及び增補などを收錄し、終りに佛頂國師(一絲)作の寂室和尚行狀を添附せり。故に之等によつて、何れも和尚の崇高なる德風と卓絕せる文藻とを窺ふことを得べし。

昭和五年十月

編者　佐藤黃楊識す

國譯禪學大成 第二十五卷

目次

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之四

遠孫比丘衆等重編

預請の秉炬

西隱秦公座元、預め㋑百年後の秉炬の語を求む

「透過す百二十の秦關、無所從來那處にか還る、石火電光追へども及ばず、等閑に踢倒す鐵圍山。共しく惟れば、西隱秦公座元、形容枯槁、手段頑、㋺大箍を滄海に制し、靈鷲を塵寰に接す。或時は孤峯頂に向つて草庵を盤結す、口、三世佛を呑む。或時は一心田を開いて荊棘を剗除す、業、五無間を滅す。這裏に到つて、甚麼の德山の棒、臨濟の喝をか用ひん、什麼の㋩釋迦の富、彌勒の慳をか管せん。然も是の如くなりと雖も、向上の一曲子を聽かんと要すや。丙丁童子高く擊節す、虛空唱へ起す菩薩蠻。」咄。

東陽院頭月岑珠公首座の下火　預請

㋑死後といふが如し、尙ほ預請なれば、百年忌の意をも含む、隨分面白い流行である。人間も此の邊迄徹すればよろしいが、それに反して此の時代の天下の形勢は所謂戰國時代で我が國二千五百年の靑史上、最も亂脈を極めたる時にして、君臣父子の道の棄れたること是れより甚だしきはなし、彼の春秋時代に頁く相類

「一顆の明珠本自ら圓かなり。徑雲深き處龍淵を出づ、鐵鎚擊碎して後の消息、臘月花開く火裏の蓮。夫れ惟れば、東陽院殿月岑珠公首座、權有り實有り、黨も無く偏も無し。㊁東陽の清規を學ぶときは、則ち野外に綿蕝す。南方の佛法に參ずるときは、則ち風顚を擒住す。首座道を行ず、威音已前、生死卽ち涅槃、水流れて元海に入る。涅槃卽ち生死、月落ちて天を離れず。正與麼の時、什麼の聲聞果、緣覺果とか說かん、什麼の如來禪、祖師禪をか論ぜん。若し未だ然らずんば、火把子の敷宣を聽け。」火把を拋つて、「此れは是れ長生眞の秘訣、冰桃實を結ぶ歲三千。」喝一喝す。

賢仲啓聚首座預請百年後秉炬の語

「地獄天堂一聚の塵、塵塵解脫す本來人、好し西嶺千秋の雪に和して、鐵鑄の梅花火裏の春。夫れ惟れば、賢仲啓聚首座、流を截る香象、浪を衝く錦鱗、自を利し他を利す、膝下の黃金之れを用ふれども盡くる無し。佛を殺し祖を殺す、眉間の寶劍磨すれども磷かず。涅槃の明鏡を打破し、生死の苦輪を脫卻す。箇箇轉處に立在す、密密要津を把定す。㊄舜若多神面皮黑し、燈籠口を開いて笑閭閭。然も恁麼なりと雖も、向上の一路如何

す、有爲轉變の世の現象として又然るべき事にや。

㊂大龜なり。

㊃釋迦の娑婆往來八千遍、四十九年の橫說縱說の演法に對し、彌勒菩薩は龍華樹の下に成佛後、只だ三會の說法をなされて入滅し給ふ、故にその富と慳とを輕く言はれたるなり。

㊁東陽德輝禪師、元統三年秋、順宗の詔を奉じて百丈清規を修す、龍翔寺の住職大訴、又勅を奉じて之れを校正し、師又重れて命を奉じて之れを編修すといふ、今日行はるゝ勅修清規は卽ち是れなり。

㊄梵語 Sunyata なり、空性と譯す、二釋あり、其の一は虛空の實體を指して空性と名づく、空卽性の持業釋なり。其の二は、諸法の空無を指して空といひ、空の性を空性と名

が指陳せん。」火把を拋つて、「溪聲は廣長舌、山色は清淨身。」咄一咄。

鳳林超公書記の下火　預請

「泥洹の一路轉身の時、石火電光も猶ほ鈍遲、地獄天堂昨宵の夢、風驚き花落つ杜鵑の枝。夫れ惟れば、鳳林超公記室禪師、濁世の㋬烏跋、叢林の白眉、肘後の符を懸けて禍を避くと雖も、禪本草を讀んで未だ醫することを得ず。佛日慧日頓に癡暗を破す、大藏小藏僅に瘡痍を拭ふ。積翠强ひて三關を設く、屋頭の山色豈に清淨に非ざらんや。㋣永明誤つて六字を唱ふ、門前の湖水卽ち是れ寶池。凡聖㋠朕迹を留めず、自他何ぞ毫釐を隔てん。露裸裸赤條條、全く菩提の證す可き無し。清寥寥㋷白的的、寧ろ生死の離る應き有らんや。腳下實地に蹈著す、機前須彌を踢倒す。緊要の時節、向上の鉗鎚子、如何が提持し去らん。」火把を拋つて、「紅爐放出す鐵烏龜。」喝一喝す。

秀岳梵才書記の下火　預請

「此れは是れ宗門直指の才、當機踢倒す涅槃臺、無陰陽の地春風轉ず、火裏の優曇朶朶開く。夫れ惟れば、秀岳梵才書記、翰墨の任に居して棟梁の材を負ふ。多福の話頭を提撕して、三年受用、只だ竹を栽う。少室の祖意を漏泄して、一日の工夫、半は梅と爲る。生也、石火光中留むれども住ま

づく、空三性の依主釋なり。眞如の體を指す。

㋬又烏鉢に作る、優鉢羅（Utpala）の略、花の名、青蓮花、紅蓮花、黛花などと譯す。

㋣永明延壽大師、六字の念佛を坐禪の一方に於て唱道す。

㋠朕はぬひめなどの意ありて痕跡と云ふに等し。

㋷明々了々の意なり。

らず。死也、閃電機裏喚べども囘らず。向上の鉗鎚下に觸れて、虚空消し鐵山摧く。這裏に到つて何物か恁麽に去り、何物か恁麽に來る。書記、還つて會す麽。」火把を拋つて、「燈籠壁に沿うて天台に上る。」

大初最公藏主の下火　預請

「最初の一句、末後の牢關、直に透過して看れば、綠水青山。夫れ以れば、大初最公藏主、道肥えて貌瘦せ、年老いて心間なり。大小の藏鑰を掌り、東西の序班に列る。方袍の(ヌ)菡萏、圓頂の栴檀、位、十地已上に超ゆ。前輩の芍藥、後生の(ル)茉莉、時二佛の中間に丁る。因は則ち因を用ひ、果は則ち果を用ふ。愚にして愚ならず、頑にして頑ならず。破草鞋三文兩文、雲無心にして岫を出づ。折拄杖七尺八尺、鳥飛ぶに倦んで還ることを知る。此れは是れ藏主平生著力底、若し復た向上に轉ぜば、文殊、普賢其の境界を失し、德山、臨濟猶ほ塵寰を隔つ。這裏に到つて妙と說くも、罪過罪過。禪と道ふも、慚顏慚顏。手を長空の外に撒す、望む可し攀づ可からず。然も恁麽なりと雖も、虎斑は見易し、誰か人斑を窺はん。」火把を拋つて、「聞くや、雪峰は南、趙州は北、還鄉の曲菩薩蠻。」咄一咄す。

掬月軒主德良藏主預請秉炬の語、

(ヌ)蓮の蕾を菡萏といふ。轉じてやがて、妙法の眞を體得すべき秀才をいふ。

(ル)茉莉、草花の名。

(ヲ)娑婆世界に出現したまへる過去莊嚴劫の三佛、現在賢劫の中の四佛を併稱していふ、即ち毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、

「艮男矣ヲ七佛の師、倒に金毛の獅子兒に跨る、忽ち轉身を解する底の時節、一聲吼裂す五須彌。夫れ惟れば、掬月軒主、先聖を重ぜず、何ぞ舊規に拘らん。仙山五色の瑞雲、不老の藥を錬る。寶泉一滴の甘露、破戒の巵に洒ぐ。應變自在、殺活時に臨む。三千刹界の袈裟、横に拽き竪に拽く。十二街頭の尺八、順に吹き逆に吹く。拄杖舞を作し、燈籠眉を開く。如來禪、祖師禪、ワ水を掬すれば月手に在り。煩惱濁、衆生濁、花を弄ずれば香衣に滿つ。畢竟是れ何物ぞ、端的相知らず。此れは是れ藏主平日の作略、更に格外の玄機有り、試みに山僧が提持するを看よ。」火把を拋つて、「咄咄咄、萬煅爐中の鐵カ蒺蔾。」

慶寶藏主百年後の下火

「寶相眞如體本然、百年三萬六千遷る、端無く棒頭に觸著し去つて、東海の鯉魚跳つて天に上る。寶藏主寶藏主、涅を不生と言ふ、翡翠蹈飜す荷葉の雨。寶藏主寶藏主、槃を不滅と云ふ、杜鵑啼破す竹林の煙。」火把を拋つて、「向上の一路、佛祖不傳。」喝一喝す。

明谷防公侍者預請秉炬の語

此郎廿五白雲の端、倒に驢兒に跨つて活路寛し、少林の無孔笛を吹き起して、還鄕の一曲萬年

迦葉佛、釋迦牟尼佛、是れ也。

ワ名字を酬出するなり。于良史の春山月夜の詩に曰く、「春山勝事多し、賞玩して夜歸るを忘る、水を掬すれば月手にあり、花を弄すれば香衣に滿つ」と、自然妙得の義にたとふ。

カ蒺蔾ははまびし、藥草也、三角の刺ある實を結ぶ、鐵蒺蔾は鐵にて其の形に作れる兵具。

歡。夫れ惟れば、明谷防公侍者、青燈燒き盡し、黄卷讀み殘す。㊂南山に一條の鼈鼻蛇有り、擒縱與奪。西川に八角の烏頭子を出す、甘苦辛酸。其の如來禪に參ずることは易く、蓋し祖師意を會することは難し。卽佛卽心、何ぞ彌勒五月の降誕を待たん。生に非ず滅に非ず、疾く瞿曇雙樹の涅槃に入る。鐵團圝百雜碎、百雜碎鐵團圝。虛空筋斗を飜し、日月朱欄に轉ず。」火把を拋つて、「會すや、防侍者防侍者、門前の刹竿を倒卻せん。」喝一喝す。

賀屋玄慶禪人の下火　預請

「金襴傳ふる外の事如何、慶喜の問端葉波を瞞ず、刹竿頭に向つて身を轉じ去る、敎海と禪河とを蹈飜す。慶禪人還つて會すや、若し會得すと道はゞ、達磨、禪を會せず。梅瘦せて春を占むること少し。若し不會と道はゞ、瞿曇已に成道。庭寬くして月を得ること多し。會と不會と都來是れ錯、滅と不滅と畢竟佗に非ず。淨躶躶承當を絕す、空空空の時、眞も也た立せず、赤洒洒窠臼沒し。玄玄玄の處、妙も也た須らく呵す可し。水は竹邊より出で、風は花裏より過ぐ。」喝一喝す。「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

㊂雪峰衆に示して曰く、南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人切に須らく好看すべし。長慶曰く、今日堂中大いに人有つて喪身失命す。僧玄沙に擧似す、沙曰く、須らく稜兄にして始めて得べし、然も是の如くなりと雖も、我れは卽ち不恁麽。僧曰く、和尚作麽生。沙曰く、南山を用ひて作麽かせん。雲門拄杖を以て峰の面前に擲向して怕るる勢を作すと。雪峰は南山に一條の鼈鼻蛇ありと、諸人適切に看取せよといふ、長慶慧稜と玄沙師備と雲門文偃師との三師玩弄して、一は蛇の全威を是認し、一は蛇の全威を併呑し、一は蛇をして活氣あらしむ、自ら心中の主人公を借りて蛇となす、心の作用一に弄するものゝ活手に待つものを示す。

三翁徳惠庵主の下火　預請

「竺乾の猛將陣堂堂、惠劍光寒し三尺の霜、生死涅槃秋一夢、火中の菡萏覺めて猶ほ香し。惠庵主惠庵主、恁麼に承當せよ。倘し復た未だ承當せずんば、頻に小玉と呼ぶも只だ檀郎を要す。輭語の魯直帷帳中に坐す。或時は燕寢螺甲、沈水隨身の兜率、袈裟角に裹む。或時は魚行酒肆婬坊、看るや、山色清淨、聞くや、溪聲廣長、驀直に轉じ去れ、思量に渉ること莫れ。凡聖に通ぜず、封疆を把定す。然も是の如くなりと雖も、向上の田地に到らんと欲せば、山僧爲に擧揚せん。」火把を擲つて、「崑崙奴齊しく怒發して、門外の㊂金剛を推倒す。」

柏庭祖永尼首座の下火　預請

「永劫の無明淨法身、法身覺了すれば却つて塵を生ず、到頭霜夜前溪の月、龍女の寶珠磨すれども磷がず。夫れ惟れば、柏庭祖永尼、市中に隱をトし、屋裏に春を藏す。松源の餘波を海東の外に傳へ、蘭溪の剩馥を河内の民に施す。蓋し以れば、吾が首座、靈樹に到る。尼長老の聖因に住するに勝れり。有餘涅槃、無餘涅槃、花間夢を作す雙胡蝶。大善知識、小善知識、棒頭敲き出す玉麒麟。迷悟を立せず要津を把定す。恁麼の時節、恁麼の阿鼻の依正とか說かん、什麼の苦海の沈淪をか論ぜん。生涯洒洒落落、心地歷歷明明。此れは是れ祖永大姉、三萬日を斷送して、十二辰を使ひ得る底。別に西來意を會せんと要せば、

㊂梵語「ヴァジラ」の譯、金中最剛の意、堅と利との二義あり、堅は萬物能く是れを碎破し得ざるが故に、利は能く萬物を擊破するを以てなり、多くは佛智、大智慧、摩訶般若等に譬ふる語なり。

柏樹子の成佛せんことを待つて、汝に向つて指陳せん。」火把を擧して、「虚空筋斗を蹴し、燈籠笑つて誾誾。」火把を抛つて、「囫。」

久庵桂公尼首座の下火　預請

「少林の嫩桂久昌昌、眞丹と搏桑とを蓋覆す、昨夜毘嵐忽ち吹き倒す、百年一夢醒めて猶ほ香し。夫れ以れば、久庵桂公尼、精神掬す可し、意氣當り難し。末後の牢關是れ放開、是れ㋹捏聚、本來の面目。濃抹に非ず、淡粧に非ず。生死を截斷して金剛王を抛つ。塵塵無垢世界、歩歩涅槃會場。青山綠水、體露㋷眞常、此れは是れ大姉の間受用。若し向上に轉じ去らんと要せば、別に山僧が擧揚を聽け。」火把を抛つて、「黄金鑄出す崑崙鐵、火裏の龜毛數尺長し。」咄一咄す。

宗銀尼首座の下火　預請

「天堂地獄假銀城、遊戲神通傀儡棚、春夢一場頻に喚起す、曉鶯枝上花を出づる聲。夫れ惟れば、寶生尼寺住持宗銀尼首座大姉、晩節保ち難し、㋻坤德、利貞なり、少林門下の總持肉を得たり。法華會上の菩薩名を求む。一枝の佛法的的、㋤百草の祖意明明。山として雲を帶びずといふこと無し、人人具足、水有り皆月を含む。箇箇圓成、須彌燈

㋹放開の反對、つまみ集むること。

㋷眞如常住の簡語、佛法究極の意、第一義諦を示す。

㋻坤德は女德をいふ。

㋤一切萬象の意にして、差別界の事象を概括する語なり、語はもと龐居士の「明々たる百草頭、明々たる祖師意」といふに基づく。從容錄第四則の頌に、「百艸頭上邊の春、手に信せて拈じ來つて用ひ得て親し」と。又信心銘拈古に、「殺活の杖子を提起して、百草頭上に向つて七穿八穴横拈す」と。

王佛、鍼孔に入り、勝熱婆羅門の火坑を出づ。會す麼。」火把を拋つて、「自己清淨を認むること莫れ、直に毘盧の頂を踏んで行く。」喝一喝す。

檀溪宗香尼首座の下火　預請

「法身堅固本來の香、郁郁乎として十方に薫徹す、試みに㊉心頭の火を滅卻して看よ、鑊湯爐炭自ら清涼。夫れ惟れば、檀溪宗香尼、灑面輭語、石心鐵腸、散花の天、維摩の默默を勘破す。半杓の水、㋶末山の孃孃を賺過す。無明卽明、栴檀木を燒いて猗蘭の臭氣を奪ふ。諸相相に非ず、桃李の實を貪つて梅花の孤芳を忌む。出生入死、窠臼を存せず、戒皮定肉、分張するに一任す。正與麼の時、丙丁童子を撥倒し、閻羅大王を棒殺す。丈夫の作略、誰れか肎て抵當せん。然も恁麼なりと雖も、更に眞歸の處有り、山僧が擧揚を聽取せよ。」火把を拋つて「玉樓翡翠を巢はしめ、金殿鴛鴦を鎖す。」咄一咄す。

桃谷周仁尼首座の下火　預請

「千年の桃核舊時の仁、惡鉗鎚に觸れて點塵を絕す、靈雲不疑の地に到らんと欲せば、花は開く空劫以前の春。夫れ惟れば、桃谷周仁尼、預め未來の苦果を懼れて、頓に㋰佛性の三因を了ず。靈山の

㊉心頭を滅却すれば火も又涼しの意。
㋶高安大愚の法嗣、筠州の人。
㋰天台宗にて法華經の意によりて立つる三種の佛性、一には緣因佛性（智慧を緣助して益々明かならしむる六度等の修行）、二に了因佛性（眞如の理を照了し、證悟する智慧）、三に正緣佛性（一切の衆生が具へたる眞如の理これ正しく佛となるべき本性なり）をいふ。

法華會中に臨むときは、則ち無垢の勝光佛を壓倒す。洋嶼の麤竹篦下に觸るるときは、則ち秦國大夫人を冷笑す。或時は南方界に化を戢め、或時は北斗裏に身を藏す。赤洒洒、紅絲綿を斷ず、活鱍鱍、鐵磨の輪を碎く。然も與麼なりと雖も、千里不傳の處、大休歇の地に到るを要すや。試みに火把子の指陳を聽け。」火把を拋つて、「雲破れ月來つて花影を弄す、寒山手を拍して笑誾誾。」喝一喝す。

玉英祥璠尼首座の下火　預請

「大乘の法器魯の㋻璵璠、本有圓成君自ら看よ、未だ一鎚を下さざるに鎚碎し了る、青山月上つて影團團。夫れ惟れば、玉英祥璠尼、竹の節有るに似、環の端無きが如し。春嶺梅に入る、㋼村獦獠の盧能、明鏡を打破す。雪庭栢を埋む、野狐精の達磨、空棺を蓋卻す。悉有佛性、佗の瞞を受けず。淨裸裸、承當を絶す、甚の眞如解脱とか說かん。赤洒洒、窠臼沒し、什麼の菩提涅槃をか論せん。然も恁麼地なりと雖も、向上還つて事有り、心肝を吐露し去らん。」火把を拋つて、「石女雲中に舞を作し、木人萬年歡を奏す。」咄一咄す。

桃雲宗悟尼首座の下火　預請

「迷悟を分たず凡聖を絶す、百歲の光陰春夢の中、春夢醒め來つて一年無し、桃花舊に依つて面皮紅なり。夫れ惟れば、桃雲宗悟尼、心鏡清淨、戒珠玲瓏、一氣を瞥轉して、劉鐵磨の作略を具す。

㋻一種の美玉、名字によりて翻出するなり。
㋼六祖慧能大鑑禪師が明鏡も又臺に非ずと喝破せしをいふ。

五障を掃除して憍曇彌の遺蹤を踏む。智行運動、理事圓融、文殊に二文殊無し。胸中吉祥の宅、彌勒に半彌勒有り、天上の兜率宮。了了了の時、霞碧落を穿ち、玄玄玄の處、月清風を拂ふ。會すや、石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること罔し。」火把を抛つて、喝一喝す。

花屋宗因尼首座の下火　預請

「這の野狐精不昧の因、大雄峯下飜身を解す、端無く蹈倒す涅槃の窟、鐵樹花開く火裏の春。夫れ惟れば、花屋宗因尼、金剛の圈を透り、鐵磨の輪を轉ず。濁世の粃糠を掃除して、ノ馬祖の簸箕跳不出。形山の一寶を秘在して、龍女の明珠磨すれども磷かず。幻生幻滅、線路を放開す、不去不來、紅塵を截斷す。更に送行の句有り、山僧が指陳を聽け。」火把を抛つて、「夜深けて一片、オ虛櫺の月、寫し出す梅花面目の眞。」露。

春芳宗椿尼首座の下火　預請

莊椿一萬六千歲、昨夜毘嵐吹倒し來る、試みに聽け無上眞の曲調、花間の胡蝶三臺を舞ふ。夫れ惟れば、春芳宗椿尼、形枯木の如く、心死灰に似たり。ク兜率の三關を透過するときは、則ち葵花眼無うして日に隨つて轉ず。臨濟の一喝に觸著するときは、則ち芭蕉耳無うして雷を聞いて開く。鑊湯爐炭一時に滅し、劍樹

ノ馬祖道一禪師、簸箕を作る家に生れたるを以て、馬祖を馬簸箕と稱し、轉じて大馬祖の口唇の簸箕に似たる點より、又馬祖の言說をも馬簸箕といふ。

オ格子より洩るゝ月。

ク兜率從悅禪師、三つの機關を設けて學人を接得す、一、撥草參玄は只だ見性を圖る、即今上人の性、甚の所にか在る、二、自性を識得すれば方に生死を脫す、眼光落地の時、什麼か脫せん、三、生死を透得すれば、便ち去處を知る、四大分散して何の處に向つてか去ると、是れなり。

刀山一時に摧く、是れ甚麼の時節ぞ。看よ看よ、燈籠露柱笑哈哈。錯錯。

雲仲心祥尼首座の下火　預請

「率陀天上の雲を劈破して、行に臨んで一朶好し君に呈するに、㋳龍華三會夢中の說、殘漏聲沈んで曉色分る。祥首座祥首座、夢中の說、還つて聽取すや。三世の諸佛も亦夢を說く、前臺花發けて後臺に見る。六代の祖師も亦夢を說く、上界鐘淸うして下界に聞く。山僧も亦夢を說く、㋮漆園の胡蝶若箇影を分つ。末後慇だ慇懃、㋘槐國の螻蟻多少群を作す。生死涅槃昨夢のごとし、鐵枷三百斤を脫卻す。淨躶躶拘束沒し、赤洒洒功勳を絕す。與麼の時節阿鼻獄卻つて夢宅と成る。丙丁童子笑誾誾。」喝一喝す。

希溪善灌尼首座の下火　預請

「迅機截斷す灌溪の流、末後の牢關去つて留まらず、但だ看る百年三萬日、槿花半は照して夕陽收まる。夫れ惟れば、希溪善灌尼、㋫繡佛晋を欺き鐵磨劉を瞞ず。博く毘尼を究めて西天の㋙苾蒭草を學ぶ。先聖を帶累して東福多子の榴を劈く。是なるときは則ち總持肉を得、非なるときは則ち演若頭を失す。玄玄玄の處、又須らく呵す可し。涅槃に入らざる淸淨の行

㋳龍華は彌勒菩薩成道の際に於ける菩提樹の名。

㋮漆園は莊子をいふ、嘗て漆園の吏となる故にいふ。

㋘槐國は槐安國をいふ、淳于棼、廣陵に家す、宅の南に古槐樹あり、棼醉ひて其の下に臥す、夢みらく、二使者曰く、槐安國の王、邀へ奉ると、棼、使に隨つて空中に入る、榜を見る、曰く、大槐安國と、其の王曰く、吾が南柯郡の政事理らず、卿を屈し守となして、之れを治めしめんと、棼、郡に至りて凡そ二十歲、送りて歸らしむ、遂に覺む、因りて古槐下の穴を尋ぬるに、洞然として明朗なり、一榻を容るべし、一大蟻あり、乃ち王なり、又一穴を尋ぬるに直ちに南柯に上る、卽ち棼が守りし所の郡なりと。

者、了了了のとき、了ず可き無し。地獄に墮せざる破戒の比丘、五逆消滅萬機罷休す。」火把を拋つて、「會すや、向上の那一路、何の處にか蹤由を覓めん。」喝一喝す。

前住明禪玉宗琳尼藏主、預め百年後秉炬の語を請ふ

「百歲の光陰瞬息の中、五蘊有に非ず又空に非ず、鍼鋒頭上轉身の路、歸らば便ち歸る可し兜率宮。夫れ惟れば、宗琳尼、衆流を截斷して、㊂偃跛脚を瞞ず。正法を扶起して岳瀆翁を慕ふ。一雙の胡蝶葵花に上る。堅固法身長有り短有り。兩箇の黃鸝翠柳に啼く。眞如自性始無く終無し。赤洒洒拘束沒し、淨躶躶羅籠を絕す。與麼の時節、向上の那一句、如何が君が爲に通ぜん。」火把を拋つて、「看よ看よ、丙丁童子面門紅なり。」喝一喝す。

一宗秀統尼藏主の下火　預請

「釋門の正統苾蒭尼、冷笑す少林の尼總持、夜半人有り負ひ將ち去る、鍼鋒頭上の五須彌。夫れ惟れば、一宗秀統尼、預め鶴林滅度の相を示して、龍華下生の時を待たず。眼裏の花を掃除するときは、則ち劍樹刀山、卽ち眞如界。心頭の火を滅卻するときは、則ち鑊湯爐炭、清涼池と變ず。這裏に到つて甚麼の五障とか說かん、什麼の㊃三祇をか論ぜん。機輪轉ずる處閃電も猶ほ遲し。尼藏主還つて會

㊀唐詩選飲中八仙歌に、「蘇晉長齋繡佛の前、醉中往々逃禪を愛す」と、繡佛は刺繡せる佛像をいふ。

㊁印度所生の草、此の草五德を具ふと、之れを出家人にたとふ。

㊂ちんばあしをいふ。

㊃菩薩が佛果を得給ふ迄經たまふ修行の年時なり。

すや。」火把を抛つて、「花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。」喝一喝す。

寶山珍尼藏主の下火　預請

「寶山に祕在す滄海の珍、靈光一點緇磷せず、端無く紅爐の雪に和卻して、百錬し將ち來つて色轉た新なり。夫れ惟れば、寶山珍尼藏主、末山の頂を坐斷し、鐵磨の輪を推轉す。清淨本然、十方三界、世尊の面、常照寂爾、萬象の中、獨露身頭頭、顯露物物、全眞線路を通ぜず、要津を把定す。然も恁麼なりと雖も、更に向上宗乘の事有り、試みに山僧が指陳を聽け。」火把を抛つて、「白灰撥ひ出す玉麒麟。」喝一喝す。

月心宗珠尼藏主の下火　預請

「衣裏の明珠琢磨せず、一鎚に鎚碎す看よ如何、大千倶に壞する底の時節、全身を放下して火蛇に與ふ。夫れ惟れば、月心宗珠尼、舌霹靂を轟し、辯懸河を瀉ぐ。一路涅槃門、水有り月を含む。十方薄伽梵、風無きに波を起す。身を北斗に藏し、夢を南柯に託す。箇箇圓成、甚麼の現在佛、過去佛とか說かん。人人具足、什麼の煩惱魔、生死魔をか論ぜん。了了了の時、沒交涉。玄玄玄の處、早く蹉過す。然も是の如くなり雖も、末後の一句、還つて會得すや。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

悅巖宗忻尼藏主の下火　預請

「一踢に踢飜す生死海、一拳に拳倒す涅槃堂、棚頭の傀儡百年の夢、無絲の玉線を牽き得て長し。夫れ惟れば、悦巖宗忻尼、釘觜鐵舌、錦心繡腸。娑婆即ち是れ華藏、伽耶豈に寂光に非ざらんや。杜鵑啼破す落花の村、赤洒洒拘束沒し、翡翠蹈飜す荷葉の雨、淨躶躶承當を絕す。然も恁麼なりと雖も、向上宗乘の一著、試みに山僧が擧揚を聽け。」火把を拋つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」喝一喝す。

揔持開基頓庵宗圓尼大姉の下火　預請

「少林門下の揔持尼、元自ら圓成頓機を了ず、再見何ぞ勞せん百年の後、殘花啼落す杜鵑の枝。夫れ惟れば、揔持開基頓庵宗圓大姉、短世風驚き雨過ぐ、刹那物換り星移る。鵲噪鴉鳴、㋐檀郎を要して小玉と喚ぶ。牛搏馬蹈、鐵磨を拽いて大潙に到らしむ。機輪轉ずる處閃電も猶ほ遲し。淨躶躶赤洒洒、甚の兜率泥犂とか說かん。也た奇快也た奇快、昨夜有力の者、㋚醯雞須彌を負ひ去る。」火把を拋つて、「咦。」

速緣妙淨禪尼百年後下火の語

「鍊り出す㋖舍那淸淨の身、紅爐焰裏纖塵を絕す、線路を放開して消息を通す、雨過ぎて靑山色轉た新なり。夫れ惟れば、速緣妙淨禪尼、預め苦果を懼れて、蚤に良因を修す。㋙婆子燒庵正に好し趯ひ出すに。倩女離魂

㋐夫をいふ。

㋚醯鷄は酒に生ずる蟲なり、莊子に「孔子、老聃に見え、顏淵に告げて曰く、丘の道に於けるや、それ猶ほ醯雞の如きか、夫子の我が覆を發する微りせば、吾れ豈に天地の大全を知らんや。」劉師道の詩に、「醯雞甕裏の天」と、列子にも「醯雞は酒に生ず」とあり、小

那箇か是れ眞。生也、樹は風の體態を呈す。死也、波は月の精神を弄す。之れを涵せども濁らず、磨すれども磷かず。然も恁麼なりと雖も、向上の田地に到らんと要せば、試みに山僧が指陳を聽け。」火把を拋つて、「咄咄咄、冷灰撥ひ出す玉麒麟。」

琴溪妙泉禪尼の下火　預請

「天に先つて物有り黃泉に徹す、自性の彌陀地を易へば然らん、從來する所無く所去する處無し、頭を擧すれば殘照住居の西。夫れ惟れば、琴溪妙泉尼、迷雲盡きて心月圓なり。人は靜中に向つて忙はし。臺山の婆子を勘破す、路は平處より嶮し。(メ)趙州老禪を瞞卻す、廣長舌を掉ふこと八十餘年。白滴滴淸寥寥、涅槃の一路を蹈倒す。淨躶躶赤洒洒、生死の兩邊を截斷す。這裏に到つて甚の五障とか說かん、甚の十纒をか論ぜん。然も恁麼なりと雖も、向上卻つて事有り、山僧が敷宣を聽け。」火把を拋つて、「木人石女希有と叫ぶ、臘月花開く火裏の蓮。」喝一喝す。

月渚明圓禪尼の下火　預請

「一輪の心月本來圓なり、明鏡臺に非ず碧天に輝く、無孔の鐵鎚鎚碎し

を以て大を負ふを云ふ。
(キ)毘盧舍那の略なり。
(ユ)老婆が庵主を點檢せし逸話、又公案として依用せらる、昔婆子あり、一庵主を供養すること二十年を經たり、常に一妙齡の女子をして飯を送りて給侍せしむ、一日女子をして抱定せしめて曰く、「正當恁麼の時如何、」庵主曰く、「枯木寒巖に倚る、三冬煖氣なし」と、女子、婆子に擧似す、婆曰く、「我れ二十年間たゞ此の俗漢を供養し得たり」といつて、終に逐ひ出して庵を燒却せりといふ。一休和尙之れを頌して曰く、「老婆心賊の爲に梯を與ふ、今夜美人若し我を約さば、枯楊春老い更に稊を生ぜん」と。
(メ)趙州二庵主を勘破すること前に見ゆ。

了る、江南の野水白鷗の前。夫れ惟れば、月渚明圓禪尼、眉宇秀發、和氣靄然、三世の妙德尊、智母と稱す。五障の婆竭女、華鮮と號す。邪を捨てゝ正に歸し、實を顯し權を開す。加之、清淨の行者涅槃に入らず、翡翠蹈飜す荷葉の雨。破戒の比丘地獄に墮せず、鷺鷥衝破す竹林の烟。就くこと莫れ錯錯錯。須らく呵すべし玄玄玄。禪尼還つて會す麽。」火把を拋つて、「向上の一路千聖不傳。」咄一咄す。

春榮慶壽尼大姉の下火　　預請

「閻浮壽盡きて百年移る、泥洹の活路を蹈倒し來る、一點の塵埃何の處にか著けん、火蛇呑卻す五須彌。夫れ惟れば、春榮慶壽尼大姉、水中の乳味、泥裏の摩尼。或底は繞路に禪を說く、木塔を喚んで老婆子と作す。或底は㊂當陽直指、林際を瞞じて㊁小厮兒と稱す。其の人金の如く玉の如し、磨すれども磷かず、涅にすれども緇まず。生也、春風桃李花の開く日、死也、秋雨梧桐葉の落つる時。淨躶躶定肉を割き、赤洒洒戒皮を脫す。萬機休罷、佛祖も知らず。向上に轉じ去れ、多岐に涉ること莫れ。與麽の時節、大姉還つて會すや。」火把を拋つて、「會と不會と都來錯、江月照し松風吹く。」

雲林宗怡尼大姉の下火　　預請

「直に雲林を把つて鶴林と作す、紅爐煉り出す㊃紫磨金、端無く入得す如來地、一段の靈光古今を

㊂當陽は文明の義、左傳に、「文公四年天子陽に當つて諸侯命を用ふ」とあり、集覽に「師古の曰く、天子朝に臨む、之れを當陽といふ」と。

㊁めし使の小兒をいふ。

㊃紫磨黃金、紫金ともいふ、紫色の光澤ある黃金をいふ、もと閻浮檀金を稱する語なれども、轉じて佛身を稱するに至る、大聖を現す表徵なり。

照す。怡大姉怡大姉、門より入る者は自家の珍に匪す。心卽ち是れ佛、佛卽ち是れ心。心外に佛を求むるは、海底に鍼を摸るがごとし。淸淨の行者、涅槃に入らず、雨を聽いて寒更に盡く。破戒の比丘、地獄に墮せず、門を開けば落葉深し。別に向上の那一竅有り、大姉何の處に向つてか參尋せん。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、高山流水知音を絕す。」喝一喝す。

芳室見春尼大姉の下火　預請

「一場の春夢百年の榮、地獄天堂客路程、到り得歸り來つて別事無し、杜鵑啼落す月三更。夫れ惟れば、芳室見春大姉、栴檀の圓頂、桂籍の芳名、親しく鶴樹の終談を聞く、能く苾芻尼の戒律を持つ。龍華の初會を待たず、自ら桃花色の衆生と作る、豈に修證を假らんや。本來圓乘、權大乘、實大乘、火は熱し水は冷かなり。棒正覺喝正覺、電卷き雷轟く、甚麼の眞如佛性とか說かん、甚麼の聖解凡情をか論せん。石女長壽を舞ひ、木人太平を歌ふ。然も與麼なりと雖も、別に少林の那一曲有り、(ヒ)陽關の第四聲を唱ふること莫れ。」火把を抛つて、「須彌座下の烏龜子、直に毘盧頂上を踏んで行け。」喝一喝す。

古柏宗庭大姉の下火　預請

「庭前喫し盡す黃金の草、這の老牸牛鼻巴無し、忽ち潙山に到つて角を

(ヒ)陽關は送別の曲、唐の王維の元二の安西に使するを送る詩に、「渭城の朝雨輕塵を浥す、客舍青々柳色新なり、君に勸む更に盡せ一杯の酒、西陽關を出づれば故人なからん。」後人之れを陽關の曲といふ、三疊して之れを唱ふ、蘇軾の詩に、「陽關三疊君須らく秘すべし、陽西を除却して歇を解せ

拗折す、化して火裏の牡丹花と成る。夫れ惟れば、古柏宗庭大姉、三界の獄を出でて五蘊の家を離る。死と説き生と説く、炎天の梅蘂に彷彿たり。夢の如く幻の如し、雪裏の蕉芭に依係たり。脚下の紅線を截斷して項上の鐵枷を脱卻す。吾が宗に語句無し、須ひず口吧吧なることを。」火把を拋つて、「犀は月を翫ぶに因つて紋角に生じ、象は雷に驚されて花牙に入る。」喝一喝す。

す。」又白樂天の詩に「相逢ふ且く推辭し去る莫れ、唱ふるをきく陽關第四聲。」

慈德庵春溪明榮大姉の下火　預請

「榮耀は花の如し花は夢に似たり、夢中三萬六千春。靈光昧さず涅槃の月、影は浮雲の淺き處に在つて新なり。夫れ惟れば、某名、慈を以て宅と爲す、維れ德隣有り。預め當來の苦果を怖れて、茲に現在の勝因を修す。有時は七軸の蓮を轉じて、八歲の龍女を敎壞す。有時は一莖草を拈じて、丈六の金身を熱瞞す。卽心卽佛、全假全眞。常啼誤つて東請し、善財強ひて南詢す。鐵壁銀山、凡聖を通ぜず、愛河欲海、要津を把定す。正與麼の時、生死去來本住處無し、地獄天堂、豈に纖塵を立せんや。赤條條空索索、口吧吧笑誾誾。此れは是れ明榮大姉平生の如幻三昧底、卽今火焔裏に向つて大法輪を轉ず。諸人還つて看るや。倘し或は未だ委悉せずんば、試みに山僧が指陳を聽け。」火把を拋つて、「白灰拂ひ出す紅麒麟、錯錯錯。」

太虛理圓大姉の下火　預請

「本是れ圓成の那一佛、靈光不昧古來今、忽然として寂滅現前する處、雨殘紅を洗つて新綠深し。夫れ以れば、太虛理圓大姉、外緣飾少く、內戒禁を持す。三萬六千日の前、繡工夫、梅と爲つて香魂夢に入る。三萬六千日の後、間受用、㊅竹を栽ゑて塵事に心無し、獼猴の鏡を打破して、翡翠の簪を抛擲す。加之、總持少室を扣いて、投機强ひて皮髓を分つ。德雲別峯に在つて、相見何ぞ參尋を勞せん。線路を放開して官には針をも容れず。生魔死魔、粘を去り縛を解す。男相女相、鐵に點じて金と成す。這裏に到つて甚麼の七凹八凸とか說かん、什麼の四大五陰をか論ぜん。別に轉身の句有り、試みに火把子の獅子音を發するを聽け。」火把を抛つて、「末山の頂日杲杲、鐵磨の輪風凜凜たり。」喝一喝す。

玉江道琳禪定門の下火　預請

「虛空地に落つる時を待たず、活機前阿毘を蹈倒す、黃頭碧眼間夢無し、蘿月松風吹くに一任す。」夫れ惟れば、玉江道琳禪定門、瑚璉價有り、㊆琳琅玼無し。隨緣眞如、不變眞如。雪裏の芭蕉摩詰が畫。分段生死、變易生死。炎天の梅蘂簡齋が詩。展ぶるときは則ち十法界に徧し、收むるときは則ち五須彌を呑む。與麼の時節、什麼の人空法空とか說かん。淨躶躶、天に四壁無し。什麼の眞諦俗諦をか論ぜん。赤洒洒、地に八維を絕す。泥洹の一路多岐に涉ること莫れ。」火把を抛つて、「看よ看よ、紅爐放出す鐵烏龜。」喝一喝す。

㊅竹は中空虛心なるを以ていふか。
㊆美石の名、又は玉のふれる清き音をいふ。

越州太守雲江守慶居士の下火　預請

「魔軍百萬の兵を掃蕩して、七花八裂す涅槃城、凱歌の一曲忽ち歸り去る、屋後の松風愈好聲。共しく惟れば、越州太守雲江守慶居士、義井古を汲み、心地精を研く。厥の勇也、蚤に㊄六韜を學ぶ、張子房が黄石に從ふが如し。厥の節也、二主に仕へず、司馬氏の淵明に於けるに似たり。紅塵劍三尺、白髮雪千莖。此の郎子に就いて號を求む、吾が師他の爲に安名す。再び龍潭の舊房を修して、萬年計ることを作す。假に鶴林の滅度を示して、三日庚に先つ。「平生輭頑の手段、通身金剛の眼睛。聖に在つては聖に同じ、凡に在つては凡に同ず、青山限り無く好し。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す、黄河徹底清し。空空空畢竟空、何物か恁麼に死す。錯錯錯都來錯、何物か恁麼に生ず。」喝。「更に向上の那一著有り、試みに山僧が施呈するを聽取せよ。」火把を拋つて、「須彌倒に鐵馬に跨つて、丙丁童を踢飜して行く。」

㊄舊本周呂望撰すと爲す、然れども其の文義三代の作に類せず、恐らくは後人の僞作ならん、蓋し莊子の金版六弢の語によりて附會したるものなるべし、陸德明の莊子釋文に謂ふ、太公の六韜は文武虎豹龍犬なりと。

神野氏雙月慧晃居士の下火　預請

「不生不滅涅槃門、門外の青山月一痕、舜若多神驚いて舌を吐く、火蛇呑卻す鐵崑崙。夫れ惟れば、神野氏雙月慧晃居士、南嶽の祖に承けて東海の孫と稱す。道家の蓬萊、弱水三萬里を縮む。神野の種草、出雲八重垣を詠ず。維摩居士を靠倒し、大覺世尊を罵呵す。放行するときは則ち虎穴魔宮一喝に

喝散し、把住するときは則ち㋑鶴樓鵡洲一踢に踢飜す。淨裸裸赤灑灑、窠臼を離れ籠樊を絶す。更に向上宗乘の事有り、吾れ齒牙の餘論を惜まず。」火把を拋つて、「聞くや、杜鵑啼破す落花の村。錯錯。」

宗靖居士百年後の下火

火把、圓相を打して、「第一の達磨陶靖節、蓮社を修せず禪に參ぜず、人人本有圓成佛、秋菊春蘭地を易へば然らん。夫れ惟れば、宗靖居士、騎射兩ながら得たり、文武兼ね全し。竺土の黄面老、一卷の兵書を説く、籌を運し勝つことを決す。林際の白拈賊、三玄の戈甲を施す。鋭を執り堅を被す。意氣雷霆を奔らしめ、眼睛坤乾に輝く。世緣淺うして道根深し。黄太史、五祖を稱す、天魔降し波旬伏す。韓京兆、大顛に參ず、菩薩の第十地を超え、居士の不二門に入る。有餘涅槃、無餘涅槃、活計を鬼窟に作す。半字の知識、滿字の知識、妙手を龍泉に試む。鐵團圝百雜碎、㋺華甲子萬斯年、別に轉身の處有り。山僧重ねて宣べんと欲す。」火把を拋つて、「倒に鐵馬に鞭つ春風の裏、須彌の最上巓を抹過す。」喝一喝す。

玉麟宗仁居士の下火　預請

「能仁元是れ大醫王、壽域萬年八荒を開く、試みに看よ㋩五千の貝多葉、頤神換骨の一靈方。夫れ惟れば、玉麟宗仁居士、烏豆の喙吻、狼毒の肝腸、佐使君臣、㋥本草經を佛日に諳んず。焙乾生熟、炮

㋑黄鶴樓、鸚鵡洲をいふ。
㋺六十一歳を華甲といふ、華の字を分析すれば、十の字六つと一の字一つよりなる故に云ふなり、なほ邦俗に八十八を米年といふが如し。
㋩五千餘卷の經卷をいふ。

炙論を湛堂に學ぶ。四味の平胃散を點じて、一念相應湯と名く、能く邪氣を除き忽ち顚狂を治す。面瘴煙に染んで木瓜の杲風子を瞞ず。力民社を拯ふて人蔘の司馬光を欺く。或時は八火を用つて、般若波羅蜜を煉り、或時は(ホ)三熱を除いて、知見解脫香を抹す。實を瀉し虛を補ふ、味 脾胃を和す。空に沈み寂に滯る、病膏肓に入る。幻生幻滅、無病に艾を著く。持齋持律、禁物粮を絕す。能殺能活、吾が愚老に任す、患聾患盲、他の謝郎に還す。菩提果熟し、安心藥良なり。然も與麼なりと雖も、至聖の命脈、陰陽に屬せず。仁居士仁居士、冬來の事如何が商量せん。」火把を拋つて、「(ヘ)疎山の作略將軍の令、舊に依つて京師(ト)大黃を出す。」

心源宗徹居士の下火　預請

「西江吸盡して心源に徹す、靠倒す龐蘊居士の門、到り得歸り來る底の時節、杜鵑啼過す落花の村。夫れ惟れば、心源宗徹居士、武門の閥閱、法社の藩垣、此の郎迹を蓬島に託す。其の先姓を菅原と賜ふ。丈夫の威雄を振ふときは、則ち溟鵬九萬里の名翼を展ぶ。大善知識に參ずるときは、則ち野狐五百生の精魂を離る。碧巖集昔燒却す、黃石の書今尙ほ在す。有餘

(ニ)三十九卷、明人李時珍が三十年の歲月を費して著したる書にして、子書の醫家類に屬す、寬文十二年の和版あり。蓋し此の人醫師なりしか。

(ホ)諸の龍陀に三患あり、之れを三熱といふ、一に熱風熱砂身に付き、その皮肉骨髓を燒きて苦惱をなす、二には惡風吹起りて、蛇龍の居所及び飾衣等を失はしめ、龍身を苦惱せしむ、三には諸龍娛樂の時、金翅鳥あり、龍の所居に入りて生るゝ所の龍子を搏奪して之れを食ひ、龍をして恐怖せしむと、法華經に見ゆ。

(ヘ)疎山光仁禪師、洞山良价禪師の法嗣、疎山の有句無句の公案名高し。

(ト)蓼科植物、支那原產の多年生草、高五尺に達す、葉大形、掌狀に淺裂し、且つ鋸齒を有

涅槃、無餘涅槃、水枯れ雪盡く。棒下の正覺、喝下の正覺、電卷き雷奔る。諸聖の解脱を求めず、豈に閻王の平反を借らんや。淨裸裸、赤洒洒、明杲杲、暗昏昏、更に眞の般若有り、無説又無言。會す麽。」炬を拋つて、「火光三昧に入得して看よ、黄金鑄出す鐵崑崙。」喝一喝す。

　前の豐州太守和智氏太成宗功居士の下火　預請

「此の郎今代の一英雄、未だ麒麟に上らざるに先づ功を識り、從來する所無く所去する無し、夕陽は長く我が西に在つて紅なり。夫れ惟れば、前の豐州太守、棟梁の質を具し、㋠葵藿の忠を抱く。威十方に振ふ、譬へば㋷漢の隆準公の沛邑に起るが如し。名四海に喧し、恰も宋の執拗夫が元豐に出づるに似たり。忽ち國家の興盛に遇ふ、永く山河の始終を誓ふ。或時は生死の流を截つて、臨濟三尺の劍を提ぐ。或時は威音の㋦梁を築いて、石鞏一張の弓を拜す。箭鋒相拄へ毒氣以て攻む。白的的兮淸寥寥、娑婆華藏を隔てず。淨裸裸兮赤洒洒、地獄天宮を管すること莫れ。千佛の一數、廣額兒刀子を拋つ、萬法不侶、龐居士心空と叫ぶ、末後の句有り、更に君が爲に通せん。」火把を拋つて、「泥牛月に吼え、木馬風に嘶ゆ。」喝一喝す。

　江州建部左典厩鐵船宗堅居士の下火　預請

して互生し、消化不良、浸性下痢等に用ひ、又瀉下劑にも用ひらる。

㋠從順の誠を有するに比す。

㋷漢の高祖をいふ、史記に漢太祖高皇帝は堯の後なり、姓は劉氏、名は邦、字は季といふ、沛豐邑の中陽里の人也、母の媼大澤の陂に息ひて夢に神と遇ふ、時に大いに雷雨して晦暝なり、父の大公往きて交龍を其の上に見る、已にして劉季を産む、隆準にして龍顏なりとあり。

㋦矢を受くる爲に的をかけ置く處。

「法身堅固鐵團圝、吾が鉗鎚下に觸著して看よ、百雜碎兮百雜碎、凉風月を吹いて欄干に上す。共しく惟れば、某名、銜を筆陣に折き、將に詩壇に拜す、茂を騰げ英を飛ばす。朝廷の上に置くときは、則ち三槐九棘、根を深くし蔕を固うす。山林の中に在るときは、則ち十蕙一蘭。將に謂へり、江州の白司馬、由來㋸宛陵の梅都官、天女散花惟れ新なり。毘耶の老居士、假に病を示す、宗師落草且く爾り。瑞岩の主人公、何ぞ瞞を受けん。或時は武を能し文を能す、雲門の紅旗風偃す。或時は佛を殺し祖を殺す、林際の金剛霜寒し。泥洹の一路を踢飜し、生死の兩端に涉ること莫れ。然も與麼なりと雖も、更に頤神の妙術有り、君が爲に平安を報じ去らん。」火把を拋つて、「倒に一枝の笛を把つて、吹き起す萬年歡。」喝一喝す。

寂知宗空居士預請百年後秉炬の語

「太虛空に向つて鐵船を駕す、須彌頂上浪滔天、大唐載せ得て歸り來つて看れば、紅海棠開く秋日の西。夫れ惟れば、寂知宗空居士、才華俗を銷し、釣築賢を收む。法法圓融、㋾裴相國、心を黃檗に傳ふ。塵塵解脫、㋻陶醉漢、眉を白蓮に皺む。將に謂へり天地に先つて物有りと。元來淨土を離れて禪無し。或時は峭峻孤危、禪板蒲團、用不得。或時は遊戲三昧、舞衫歌扇、舊

㋸梅堯俞、名は堯臣、宋の宣州宣城の人、仁宗召して試み、國子監直講と爲り、都官員外郎に遷る、唐書を修するに預る、歐陽修の詩友たり、宛陵集四十卷を著す。

㋾裴休、法を黃檗禪師に受く。

㋻陶淵明など白蓮社に入り、惠遠法師と共に念佛を唱へしをいふ。

㋕仙人の罪せられて人間界に下れるもの、轉じて詩人などが事によりて、都より遠き所に謫遷せられたるものにいふ、李白少にして逸才あり、志氣豪放、飄然超世の才あり、天寶

因緣。囘也儒門の知識と稱するを羨むと雖も、卻つて笑ふ軾が人間の㋕謫仙と作ることを。楓葉落ち兮荻花乾く。萬機休するときは則ち全く方寸に歸す。松風吹き兮蘿月照す。一念起るときは則ち早く大千を隔つ。涅槃の四柱を拗折して生死の兩邊に涉ること莫れ。錯錯錯、都て是れ錯。玄玄玄、須らく玄を呵す可し。然も與麼なりと雖も、更に宗乘向上の事有り。試みに山僧が敷宣を聽け。」火把を拋つて、「雨中に杲日を看、火裏に淸泉を酌む。」

義翁宗高居士の下火　預請

「日高山を照して遍界明かなり、一人も復た暗中に行く無し、網珠範を垂る雜華藏、眼を開いて看來れば㋵乾闥城。夫れ惟れば、義翁宗高居士、光を韜み彩を鏟る、思を覃ぼし精を研く、邪正分ち難し。天魔外道、八萬劫を了ず。因果昧さず、野狐精魅、五百生を脫す。崑崙の鼻孔に撞着し、金剛の眼睛を突出す。㋟兜率權に三關を設く、華嶽連天の色を擘開す。瞿曇一字を說かず、黃河徹底の淸を放出す。轉身自在、受用縱橫。端的を識らんと欲せば、多程に涉ること莫れ。然も與麼なりと雖も、更に末後の句有り。山僧が施呈するを聽け。」火把を拋つて、「㋹滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふ可し、滄浪の

の初め長安に至り、賀知章を見る、知章その文を見て歎じて曰く「子は謫仙人なり」と。

㋵乾闥婆城、尋香城と譯す、龍神が空中に示現する城郭にして、即ち彼の蜃氣樓のことなり。大智度論に「日初出時城門、樓櫓、宮殿、行人出入を見る、日轉た高ければ轉た滅す、但だ眼見すべく、實あるにあらず、乾闥婆城を見る」とあり。

㋟南岳下十二世寶峰克文禪師の法嗣、兜率從悅禪師なり。

㋹孟子の離婁に「孺子あり、歌ひて曰く、滄浪の水云々と、孔子曰く、小子之れを聞け、淸まば斯に纓を洗ひ、濁らば則ち足を濯ふ、自ら之れをとる也」と、此の歌當時の俗謠なり、漁父の辭にも引けり。

水清めらば、以て吾が纓を濯ふ可し。」喝一喝す。

天眞宗守信男預請秉炬の語

「眞如自性天眞を守る、元是れ金剛不壞の身、一夢百年三萬日、花は開く桃李火中の春。夫れ惟れば、天眞宗守信男、預め苦果を懼れて、逆め良因を修す。起居動靜、六時念佛、論詞蒸嘗、四序神に賽す。唐朝の㋞白文殊、鳥窠師に參ず、蒲牢夜吼ゆ。㋡宋家の黄達磨、晦堂老に見ゆ、桂花露匂し。涅槃を證して涅槃に任せず、淸風明月を拂殺す。生死を示して生死に染まず、溪水紅塵を截斷して、凡聖を通せず、要津を把定す。木人高く奏す長壽の曲、燈籠口を開いて笑閻閻。然も恁麽なりと雖も、更に向上宗乘有り、試みに山僧が指陳を聽取せよ。」火把を擲つて、「色色只だ舊に依る、靑山雨後新なり。」喝一喝す。

寶隣宗善信男預請百年後秉炬の語

「善惡都來思量すること莫れ、阿爺の面目露堂堂、百年壽盡きて後の消息、火裏の蓮華遍界香し。夫れ惟れば、某名、維れ時大法の季運に丁つて、其の家積善の餘慶を保つ。釋迦を東土に揖し、彌陀を西方に念ず。涅槃城を打破して、直に梅陽の竹篦子に觸る。生死の縛を截斷して、倒に林際の金剛王を提ぐ。淨躶躶赤洒洒、窠臼を離れ承當を絕す。然も恁麽なりと雖も、若し向上に轉じ去らんと要せば、試みに眞正の擧揚を聽け。」火把を擲つて、「㋧三足の金烏飛んで海に

㋞白居易の鳥窠禪師に見ゆるをいふ、衆善奉行、諸惡莫作の話、名高し。
㋡黄山谷、晦堂祖心に見ゆ、山谷木犀の話、前に見ゆ。
㋧莊子に曰く、「烏に足三あり」と。

入る、曉天舊に依つて扶桑を照す。」喝一喝す。

　春岳宗英信男の下火　　預請

「蝸牛角上の一英雄、心地收め來る汗馬の功、吹いて紅爐焔中の雪と作す、刀山劍樹落花の風。夫れ惟れば、某名、才文武を兼ね、節始終を克す、(十)五位の槍旗を竪つ。其の先、昔洞山の顯訣を傳ふ、三玄の戈甲を用ふ。此の老、今臨濟の正宗を興す。龜毛の箭を架し、兎角の弓を張る。或時は佛を殺し祖を殺す、寶劍光寒うして、塵塵解脫。或時は凡を錬り聖を錬る、金鎚影動いて、物物圓融。涅槃の窠窟を出で、生死の羅籠を脫す。本來圓成、麻矢は直く蓬矢は曲れり。當陽直指、李花は白く桃花は紅なり。恁麼不恁麼、一口に吸盡す西江の水。不恁麼恁麼、一棒に打破す太虛空。然も是の如くなりと雖も、後昆を保祐する底の一句、試みに丙丁童子に問取し去れ。」火把を拋つて、「面り王覇を陳す龍庭の上、手ら乾坤を拔く虎口の中。」

　泰岳宗韓信男百年後秉炬の語

一韓佛を摧く佛何ぞ摧けん、端的邪を捨てゝ正に歸し來る、劫火洞然として毫末盡く、泰山舊に依つて碧崔嵬。夫れ惟れば、泰岳宗韓信男、箕

(十)洞山良价禪師の五位頌の偏中至に曰く、「兩刄鋒を交ふ、避くることを用ひず、好手猶ほ火裏の蓮の如し、宛然自ら沖天の氣あり」と。

(十一)莊子の駢拇篇に「長きもの餘りありと爲さず、短きもの足らずと爲さず、是の故に鳧の脛短しと雖も、之れを續がば憂へなん、鶴の脛長しと雖も、之れを斷たば悲まん、故に性の長きは斷つ所に非ず、性の短きは續ぐ所に非ず、憂を去る所無きなり」と。

(十二)陸亘大夫、南泉に見ゆ、問うて曰く、古人瓶中に一鵞を養ふ、鵞漸く長大にして出すこ

裘の業を繼いで、棟梁の材を負ふ。生死の流を截る、風塵三尺の劍。文武の道を學ぶ、丹心一寸の灰。法爾如然、㊁鶴脛は長く、鳧脛は短し。無常迅速、牛頭沒し馬頭囘る。阿鼻獄を掀飜し、涅槃臺を踢倒す。赤洒洒、窠臼を離れ、淸寥寥、纖埃を絕す。然も與麼なりと雖も、後昆を保祐する底の活句。元亨利貞、德大なる哉。」火把を抛つて、「倒に少林の無孔笛を把つて、風に和して吹き落す一枝の梅。」咄一咄す。

春澤宗光禪定門の下火　預請

「靈臺不昧靈光を發す、乾坤を映徹して覆藏を絕す、閻浮百年の夢を喚び醒して、曉鐘月落つ一聲の霜。夫れ惟れば、春澤宗光禪定門、備陽の華族、藤家の棟梁、全假全眞、晦堂、黃太史を接して、月中の桂子を示す。如夢如幻、㊂南泉、陸大夫を召して庭前の花王を指す。鼻を穿ち眼を換ふ、腹を倒し腸を傾く。無明卽明、鑊湯爐炭。眞如地諸相相に非ず、劍樹刀山古道場。赤洒洒全く窠臼沒し、淨躶躶何ぞ封疆を守らん。燈籠露柱を呑盡し、泥人金剛を撥倒す。然も恁麼なりと雖も、向上宗乘の事、只だ重ねて商量せんことを要す。」火把を抛つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、身心を滅卻すれば火も自ら涼し。」

義江光忠信男の下火　預請

と能はず、鵝を損ずることを得ず、和尚作麼生か出すことを得んと、泉、大夫を召す、陸應諾す、泉、曰く、出せりと、大夫玆に於いて省ありと。

「白髪丹心(ノ)の畎畝の忠、法社に金湯として全功を立つ、呵呵として手を拍して好し歸り去るに、失脚して蹈飜す都率宮。夫れ惟れば、義江光忠信男、在家の菩薩、亂世の英雄、苦樂逆順、道其の中に在り。生死涅槃、芭蕉葉上に愁雨無し。擒縱與奪、電光影中春風を斬る。佛界魔界に入らず、頓に人空法空を了ず。淨躶躶赤灑灑、窠臼を離れ羅籠を絶す。此れは是れ光忠禪定門行履の處、猶ほ梅花の路未だ通ぜざる有り。」火把を拋つて、「門外の金剛白汗出づ、丙丁童子面皮紅なり。」喝一喝す。

但州太守大用宗碩信男の下火　預請

「百年一枕(ヰ)の黑甜の餘、索索たる涼風秋墟に入る、大用現前軌則無し、龍泉斗を射て淸虛を犯す。」共しく惟れば、但州太守大用宗碩信男、世緣淺しと雖も、俗氣未だ除かず。是の故に(リ)香至の季子、大乘の器を(オ)赤縣の東に求む、暗に隻履を失す。竺乾の猛將、涅槃城を金河の側に構へて、徒らに兵書を說く。松源の黑豆の法を用ふるに依俙たり。(ク)輞川が雪芭苴を畫くに彷彿たり。無滅無生、火光三昧を證得す。卽空卽假、物我一如を會し盡す。恁麼に轉じ去れ、敢て躊躇すること莫れ。」火把を拋つて、「乾坤を呑却す鍼眼の魚。」喝一喝す。

(ノ)畎は田間の「みぞ」なり、畝は田の「うね」なり、田舍といふが如し、孟子に「舜畎畝の中より發り」とあり。

(ヰ)黑甜は午睡なり、支那南方の俗語なり。

(リ)西天の初祖菩提達磨をいふ。

(オ)漢土一名赤縣神州といふ、史記孟軻傳に「中國名けて赤縣神州といふ、赤縣神州の內、自ら九州あり、禹の序する九州是なり」と。

(ク)王維字は摩詰、開元九年進士第一に擢んでらる、尙書右丞に遷る、輞川に別墅あり、故に又輞川といふ。名畫錄に維輞川の圖を畫く、山谷鬱盤、雲水飛動、意塵外に出で怪生端に生ず、秦大虛云ふ「予病

覺林宗圓信男の下火　預請

「光萬象を吞んで月孤圓、心外に心を求む錯つて果然、生死涅槃別路無し、等閑に踢倒す率陀天。夫れ惟れば、覺林宗圓信男、時節因緣、柏樹の成佛を待つこと莫れ。當陽直指、頻に落葉の單傳を掃ふ。正覺喝下、寂滅現前、甚の七顛八倒をか說き、甚の㋳五蓋十纏をか論ぜん。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の活句、試みに火把子の敷宣を聽け。」火把を抛つて、

「頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。」喝一喝す。

續芳宗繼信男の下火　預請

「武門の閥閱箕裘を繼ぐ、亂世の英雄獨り尤を拔く、生死涅槃是れ常事、一刀兩段凡流を截る。夫れ惟れば、續芳宗繼信男、調羹補袞、跨竈衝樓、眞如隨緣、二乘聲聞空寂に沈む。邪見卽正、五逆の㋮調達冤讎を結ぶ。燈籠口を開けば露柱點頭す。更に末後の句有り、汝聽取せよ、我れ焉んぞ度さん。」火把を抛つて、「碧眼黃頭會不得、野梅風定つて暗香浮ぶ。」咄

荆叟宗玉信男の下火　預請

「玉本圓成緇磷を絕す、之れを求むれば轉た遠し求めざれば臻る、㋘形

あり、高符中輞川の圖を携へて予に示す、予之れを閱して恍として維と輞川に入るが如く、數日にして病癒ゆ」と。

㋳心を蓋ふ五種の煩惱、一に次貪蓋、二に瞋恚蓋、三に惛眠蓋、四に掉悔蓋、五に疑蓋、之れを五蓋といふ。

㋮提婆達多をいふ。

㋘雲門の示衆に曰く、「乾坤の內宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す、燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す」と、形山は五蘊所成の肉身をいふ。宇宙乾坤に秘在する一寶を、其の儘に我等人人の五蘊山中に秘在す、宇宙と肉團と大小の差ある如くなれども、秘在する所の寶は一寶なり。又荆山は名玉の產地故、暗に其の意をも含む、よつて荆字を打する也。

山手に信せて劈開し了る、萬里雲無くして月一輪。夫れ惟れば、荊叟宗玉信男、村上帝に承けて源の朝臣と稱す。法社の金湯、臨濟の大龍に跨つて頭角を拗折す。武門の棟梁、洋嶼の黑蚖に觸れて凡鱗を脫御す。佛を殺し祖を殺す、全俗全眞。了了了の時、甚の溪聲廣長舌にか干らん。妙妙妙の處、山色清淨身と認むること莫れ。畢竟門より入る者は、是れ家珍にあらず。我れをして如何が說かしめん。物の比倫に堪へたる無し。」火把を拋つて、「錯、㋑春草池塘の夢、昨花今日の塵。錯錯。」

希道宗弘信男の下火　預請

「生死を截斷して、寶劍光寒し、閃電擊石、多端に移らず。夫れ惟れば、某名、文韜武略、義膽忠肝。人主を輔佐して、孤を立つるを難しと爲す。京師舊に復して世を安泰に置く。㋺魯直鼻を穿つて㋩蟾桂を認著す、王老夢を說いて牡丹を指示す。㋥露電泡影、如是觀を作す。預め冥福を修して、報應の殫きんことを懼る。是の故に五逆の達多、頓に地獄を出づ、千佛の廣額、直に涅槃を證す。鬼畜人天同じく一致に歸す。迷悟凡聖、全く兩般なし。須彌崩倒し大海枯乾す。希道希道、一期願の後、如何が相看せん。秋風索索として葉落ちて根に歸す。聞くや木人笛を把つて萬年歡を奏す。」咄一咄す。

道本禪門の下火　預請

㋑朱文公の詩に云ふ「未だ覺めず池塘春草の夢、堦前の梧葉已に秋風」と。
㋺魯直、黃山谷なり、祖心禪師に從つて山中に木犀花を嗅ぐ、前に見ゆ。
㋩月の桂にて、木犀のことを云ひしなり。
㋥六喩の偈に曰く、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」と。

「人人本有圓成佛、古に輝き今に騰つて大光を放つ、惡鉗鎚に觸れて爐鞴を出づ、黄金色上に更に黄を添ふ。道本禪門、耳邊に看るや、山色淸淨。眼處に聽くや、溪聲廣長。虛空を打破して芭蕉の拄杖子を奪ふ、生死を截斷して林際の金剛王を提ぐ。正與麼の時節、甚麼の無明煩惱とか說かん、甚麼の地獄天堂をか論ぜん。赤洒洒窠臼無し、淨躶躶承當を絕す。別に宗乘向上の事有り、來れ吾れ汝と與に商量せん。」火把を抛つて、「鳥啼いて人見えず、花落ちて木猶ほ香し。」喝一喝す。

石窓秀堅大姉預請の秉炬

堅固法身變遷無し、鍼鋒頭上に坤乾を定む、末後の牢關子を打開して、月は落つ㋖金雞一拍の天。夫れ惟れば、石窓秀堅大姉、河陽の新婦子を欺き、濟北の老風顚を瞞ず。金沙灘頭馬郎に約して、菩提樹に上り無明樹に上る。靈山會上龍女を接して、當體蓮を說き、譬喩蓮を說く。休休休、百年壽盡きて後、妙妙妙、一漚未だ發せざる先。或時は放去收來、泥牛耕破す瑠璃の地、或時は出生入死、玉兎挨開す碧落の門。須彌筋斗を飜し、虛空鐵船を駕す。更に眞の歸處あり、山僧が敷宣を聽け。」火把を抛つて、「頭を擧すれば殘照在り、本是れ住居の西。」咄一咄す。

聞溪宗音大姉の下火　預請

此の方眞の敎音聞に在り、心腸を傾倒して君に說與す、諸佛出身の那一路、青青たる脩竹㋚南薫を

㋖祖庭事苑に曰く、「人間本金鷄の名なし、以て天上金雞星に應ずるなり」と。
㋚南方の薰風なり。

送る。夫れ惟れば、聞溪宗音大姉、始終一節、末後慇懃、尼摠持吾が肉を得たり、(七)仙陀婆其の群を出づ。隨縁眞如、不變眞如、水有り皆月を含む。觀照般若、實相般若、山として雲を帶びずといふこと無し。拄杖七八尺を拗折して、鐵枷三百斤を脱御す。正與麼の時、還つて寒毛卓竪することを覺ゆるや。紅爐焔裏雪紛紛。

江甫秀淸大姉の下火　預請

「法身淸淨本然の體、大地山河活眼睛、金鴨香消して人見えず、頻に小玉と呼ぶ是れ何の聲ぞ。夫れ惟れば、江甫秀淸大姉、老瞿曇の遺敎を受け、尼摠持の芳名を慕ふ。恁麼不恁麼、分れて六和合と成る。不恁麼恁麼、本是れ一精明。生也、佛界魔宮紅爐の雪、死也、地獄天堂乾闥城。左轉右轉、逆行順行。看よ看よ、毘盧頂上月白く風淸し。」咄一咄す。

天慶元祐大姉預請百年後秉炬の語

「百年幾許ぞ天祐を保つ、生死涅槃春夢の中、虚空を打破して一事無し、(八)鷓鴣啼き亂る落花の風。夫れ惟れば、天慶元祐大姉、胸襟映徹、戒珠玲瓏、少林門下の尼摠持、意氣相奪ふ。法華會上の大愛道、記莂全く同じ。(九)八

(七)王索仙陀婆、王は大王にして索は要求なり、仙陀婆未だ詳ならず、一名四寶を義とす、水、鹽、器、馬、一名にして水鹽器馬の四種を含むが故に、王、群臣に向つて仙陀婆を索むるも、智慧拔群の者に非ずんば奉仕するを得ずと、自由の機輪を示す。

(八)鷓鴣鶉類に屬する鳥の名、多く支那南地に産す、形は鶉に似て稍大なり、背部は灰蒼にして柿色の斑點あり、腹部は灰色なり、春陽花の咲く頃、多く相對して鳴くといふ。「鷓鴣鳴く所百花香し」などの語あり。

(九)眼、耳、鼻、舌、身、意の六識に末那識、阿賴耶識を加へて八識といふ　七情は喜怒哀樂愛惡慾をいふ。

(十)論語先進に、「南容白圭を三復

識七情、風來れば波浪起る、三從五障、日出でゝ乾坤融す。眞如不變、豈に始終有らんや。正與麽の時、無明煩惱他物に非ず、正法眼藏汝が躬に在り。赤洒洒窠臼沒し、淨裸裸羅籠を絕す。此れは是れ元祐大姉、平常受用底。卽今鍼鋒頭上に筋斗を飜し、火焔裏に神通を現ず。看よ看よ。」火把を拋つて、「妙處言はんと欲するに言ひ及ばず、海棠雨過ぎて夕陽紅なり。」喝一喝す。

す」とあり、詩の大雅抑の篇に、「白圭の玷けたる尙ほ磨くべし、斯言の玷けたる爲むべからず、」孔子の弟子南容の言語を謹みたるをいへるなり。

惟淸了圭大姉の下火　預請

「㊂白圭玷無し本來圓なり、形山に祕在す一百年、拈得す分明に人に與へて看せしむ、華鯨吼破す夕陽の天。夫れ惟れば、惟淸了圭大姉、內晩節を持ち、外塵緣を謝す。玉線金針を穿つて、日種氏の鴛鴦の敎を笑ふ。藥爐經卷を把つて、秦國太の蚌蛤の禪に參ずるを瞞ず。丈夫の意氣大千を捏聚す。幻化空身卽法身、花は猶ほ風雨の後、無明の實性卽佛性、松は只だ雪霜の先。正與麽の時、什麽の泥洹の一路をか認めん。甚麽の生死の兩邊にか涉らん。」火把を擧して、「會すや、龍女變じて男子と成る處、枝頭露重し火中の蓮。」喝一喝す。

古梅妙林大姉の下火　預請

「地獄と天宮とを蹈飜して、死路に通ずる時活路通ず、此れは是れ少林眞の一曲、三千刹界落梅の風。夫れ惟れば、古梅妙林大姉、戒乘倶に急に、心境混融す。菩提坊裏の病維摩、□□□□、金沙灘頭

鎖子骨、誦經玲瓏。三賢十聖電拂の如く、四大五蘊本來空。空空に非ず、色色に非ず。始に始無く、終に終無し。上霄漢に透り、下己躬を絕す。正與麼の時、什麼の冥官鬼主とか說かん、什麼の黃頭碧瞳をか論ぜん。然りと雖も、妙林大姉・畢竟如何が研窮し去らん。」炬を抛つて、「劫火洞然毫末盡く、青山舊に依る白雲の中。」

蘭室理秀大姉の下火　　預請

「蘭に秀でたる有り菊に芳しき有り、法身邊の事露堂堂、夜來吹き送る涅槃の雨、心頭を滅せざれども火自ら涼し。夫れ惟れば、蘭室理秀大姉、能く細禮を學んで、彩糕を掃除して㊂三心を點出す、㊃臭婆子が德嶠を接するを笑ふ。五障を消得して尼長老の戒香に住するを瞞ず、平生の作略意氣當り難し。是の故に寂然不動、春の花に在るが如し。了了了、分曉無し、眞如隨緣、月の水に印するに似たり。玄玄玄、沒商量、透關萬重、或は擒縱、或は與奪。還鄉の一曲、角徵に非ず、宮商に非ず。正に好し力を著くるに。黑漆桶を打破す、直に得たり行に臨んで金剛王を拋擲することを。這箇は理秀大姉平生の間伎倆。」火把を擧して、「別に勝熱婆羅門大光を放つを看よ。」咄、「紅日扶桑を照

㊂一に喜心、二に老心、三に大心なり、喜心は喜悅感謝の心、老心は慈悲愛憐の心、大心は不偏不黨の心をいふ。

㊃德山嘗て青龍の疏鈔を擔ふて蜀を出で、澧陽に至る路上、一婆子の餅を賣るを見、因みに肩を休め、餅を買ふて點心せんとす、婆子、擔を指して曰く、這箇は是れ何の文字ぞ、師曰く、青龍の疏鈔なりと、婆曰く、我れに一問あり、儞若し答へ得ば點心を與へん、若し答へ得ずんば別所に去れ、金剛經に曰く、過現、未不可得と、未審し上座那箇の心をか點ず」と、師無語と。

す。」

心田永安大姉の下火　　預請

「眼界平なる時心地安じ、三更の紅日黒漫漫、崑崙倒に孃生の袴を著く、火裏の梅花雪を吹いて寒し。夫れ惟れば、心田永安大姉、越裳の翡翠、摩利栴檀、五障本空、項上の枷鎖を脱卻す、百年夢の如し。庭前の牡丹を指示す、迹を洛涇に寄せ、道を邯鄲に假る。加之、或時は龍女宮中に在つて、是文殊の說法を聽き、非文殊の說法を聽く。或時は㊁蟭螟國裏に入つて、善知識と相看す、惡知識と相看す。易易、凡を轉じて聖と成すことは易し。難難、聖を轉じて凡と成すことは難し。生也、鐵壁迸開す雲片片、死也、黑山輥出す月團團。永安大姉、驀直に去る、太だ端無し。若し向上の事を要せば、是の如くの觀を作す應し。」火把を擲つて、「一把の柳絲收不得、風に和して搭在す玉欄干。」

陽甫玄春大姉の下火　　預請

「威音空劫の春を待たず、無根樹子花を著けて新なり、毘嵐昨夜忽ち吹倒す、大地茫茫として人を愁殺す。夫れ惟れば、陽甫玄春大姉、名珪類無し、粧鏡塵を絶す。生也、蝴蝶夢中家萬里、死也、翡翠簾前月一輪。凡聖を通せず、要津を把定す。玄春大姉、正與麼の時、何の處に向つてか渾身を著け去らん。」火把を抛つて、「須彌跨跳す鍼鋒上、丙丁童子笑誾誾。」喝一喝す。

㊁小蟲の名なり、列子に「江浦の間麼蟲を生ず、其の名を焦螟と云ふ、群飛して蚊睫に集り、而して相觸る」と、人の世にありて互に相爭ふを達觀するときは、猶ほ焦螟が蚊睫に集りて相觸るゝが如しとなり。

穆庵芳春禪定尼の下火　預請

「喚起す一場の春夢婆、落花啼鳥百年過ぐ、端無く心頭の火を吹滅して、月白く風淸し安樂窩。」夫れ惟れば、穆庵芳春禪定尼、脚實地を踏み、心劫波を澄しむ。甘露門を開いて、採菽、青提女を拯ふ。楞嚴會を設けて、甘蔗、摩登伽を度す。寸刃を施さず、魔佛を殺し盡す。毫端を隔てず、自他を忘了す。甚麼の生死涅槃とか說かん、驪珠光燦爛。什麼の無明煩惱をか論ぜん、㊀蟾桂影婆娑。更に向上の那一路有り、試みに一歩を進め得てんや。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」喝一喝す。

㊀月の桂なり。

雪溪宗春信女の下火　預請

「風驚き雨過ぐ百年强、心火滅する時心自ら涼し、啼鳥落花人見えず、一場の春夢覺めて猶ほ香し。」夫れ惟れば、雪溪宗春信女、錦心繡口、鐵肝石腸、水の源有るが如し。姓を賜うて淸和の苗裔と稱す。禪の海に歸するに似たり。師を擇んで鄧林の棟梁を得たり。黄河帶を誓ひ、岷江觴を濫ぶ。或時は生死の流を截る、赤洒洒窠臼沒し。或時は如來地を超えて、淨躶躶承當を絕す。這裏に到つて甚麼の無明煩惱とか說かん、什麼の地獄天堂をか論ぜん。線路を通ぜず、封疆を把定す。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の一句、試みに山僧が擧揚し去るを聽け。」火把を抛つて、「自家頻に門前の雪を掃つて、他人屋上の霜を管すること莫れ。」喝一喝す。

全室宗盛信女の下火　　預請

「百年三萬六千霜、盛者必衰人常ならず、漏盡き鐘鳴る底の時節、泥犂兜率黑甜の鄕。夫れ惟れば、全室宗盛信女、懷胎の兎子、乳を擇ぶ鵝王、截流の機を具して、秦國夫人洋嶼に參ず。救世の願を起して、㊆鎖骨菩薩馬郞に嫁す。見性羅縠を隔てず、我れを試むるに革囊を以てすること莫れ。煩惱卽菩提、水は竹邊より流出して冷に。婆婆卽華藏、風は花裏より過ぎ來つて香し。向上宗乘の事、直下に承當し去れ。」喝一喝し、火把を抛つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」

㊆魚籃の觀音の馬郞に嫁するをいふ、前に見ゆ。

壽岳宗永信女の下火　　預請

「王母が蟠桃永年を祝す、神仙の祕訣錯つて流傳す、崑崙の核子果して何物ぞ、今日看來れば火裏の蓮。夫れ惟れば、壽岳宗永信女、奕葉秀を競ふ、貞節彌〻堅し。靈山會上の龍女、華鮮如來と號す、邪を捨てて正に歸す。金沙灘頭の馬婦、鎖骨菩薩と化す、感に赴き緣に隨ふ。眞如界に入つて眞如に住せず、花は猶ほ風雨の後。生死の中に在つて生死に染まず、松は只だ雪霜の先。虛空裂けて地に落ち、須彌跳つて天に上る。然も恁麼なりと雖も、後昆を興す底の一句、試みに山僧が敷宣を聽け。」火把を抛つて、「臨濟命根元斷せず、一條の紅線手中に牽く。」喝一喝す。

梅屋妙薰信女の下火　　預請

「諸佛出身活路開く、薰風昨夜南より來る、端無く吹いて紅爐の雪と作す、六月炎天一朶の梅。夫れ惟れば、梅屋妙薰信女、五障を掃除し、㋺三災を消得す。說法度生、應身の如來、鶴林に滅を唱ふ。拔苦與樂、積行の菩薩、龍門に顋を曝す。見性猶ほ羅縠を隔つ、遺骨强ひて冷灰を撥ふ。了了了の時、乾坤窄く、星辰黑し。玄玄玄の處、虛空消し鐵山摧く。妙薰妙薰、是れ甚麼の時節ぞ。」火把を拋つて、「石女舞成す長壽の曲、燈籠露柱笑哈哈たり。」喝一喝す。

春榮壽椿信女の下火　預請

「莊椿世を閱八千歲、胡蝶園中一刹那、無說無聞眞の般若、燈籠口を開いて摩訶を念ず。夫れ惟れば、春榮壽椿信女、稗沙門を拜して草袈裟を受く。盛者必衰、鶴樹の滅を甘蔗氏に示すと雖も、熾然常說、龍華會を迦葉波に待たず。物物全眞、無數の飛花、圓通の境。塵塵解脫、兩三の脩竹、安樂の窩。從前の間絡索は且く置く、向上宗乘如何。」火把を拋つて、「白鷗は人間の暑を受けず、江上の淸風雨を吹き過ぐ。」喝一喝す。

松溪宗貞信女の下火　預請

「貞節彌〻堅うして始終を克す、眞如佛性絕だ如同、丙丁童子呵呵として笑ふ、㋑三十三天活

㋺水災、火災、兵災の稱。又小三災、四劫の中住劫(減劫)の人壽十歲の時起る、饑饉災、疾疫災、刀兵災の稱。又大三災、四劫の中、壞の最後の一劫、卽ち外器壞の時起る、火災、水災、風災の稱(世界)。

㋑忉利天のことなり、須彌山說によれば、須彌山の頂上に四峰あり、而して各峰に八つの天あり、その中央に喜見城ありて帝釋天これに住し、四方三十二天を統ぶ、この內外の三十三天を忉利天(欲界第二の天)といふ、而して日月の二輪、須彌の半腹を廻りて晝と夜とを爲すと。

火紅なり。夫れ惟れば、松溪宗貞信女、本然淸淨、內外玲瓏。諸佛出興、水天を浮べ、天水を浮ぶ。世尊入滅、風月を拂ひ、月風を拂ふ。生死去來全く住處無し、苦樂逆順、道其の中に在り。正與麽の時節、甚麽の千生萬劫とか說かん、什麽の五障三從をか論せん。轉身自在、八達七通、然も恁麽なりと雖も、向上の事を知らんと欲せば、須らく敎外の宗に參ず可し。」火把を拋つて、「看よ看よ、一棒に打破す太虛空。」喝一喝す。

景雲壽慶信女百年後秉炬の語

「地獄天堂一夢の中、五障を掃除し三從を絕す、凡鱗脫盡する底の時節、其の面華鮮なり ㊀婆竭龍。夫れ以れば、景雲壽慶信女、世間の相を觀じて敎外の宗に歸す。隨緣眞如、不變眞如、煙翠竹を鎖す。觀照般若、實相般若、風幽松を吹く。了了了の時、是れ何物ぞ、玄玄玄の處、蹤を留むること莫れ。然も恁麽なりと雖も、聲前の一句、君聽取せよ。」火把を拋つて、「靑山改めず舊時の容。」咄一咄す。

宗光信女の下火　預請

「萬機休して無心に住まらず、一段の靈光古今に亘る、向上の鉗鎚纔に手を下せば、都盧大地黃金と變す。宗光宗光、還つて萬兩の黃金を消得すや。煩惱卽菩提、蜂房を截つて獅子窟と作す。娑婆卽華

㊀八大龍王の一、新華嚴五十一、如來出現品に「沙羯羅龍王、龍王大自在力を現じ、衆生を饒益し、咸く歡喜せしめんと欲し、四天下より他化自在天處に至る、大雲網を興し、周匝彌覆、其の雲色相、無量差別云々」と。

藏、荊棘を變じて栴檀林と成す。木人暗に玉線を穿ち、石女密に金針を度す。」火把を拋つて、「無生の那一曲を聽かんと要すや、三千里外知音を絕す。」

芳室宗繼信女の下火　預請

「手中の絲線の長を截斷して、繡し成す端的兩鴛鴦、涅槃生死春宵の夢、枕破の斜紅覺めて尙ほ香し。夫れ惟れば、芳室宗繼信女、露芽蘭秀で、晚節菊芳し。本是れ一精明、華鮮如來、龍女と現ず、分れて六和合と作る。鎖骨菩薩、馬郎に嫁す、天も蓋ふこと無く地も載すること無し。昔生ぜず今亡せず。淨躶躶窠臼を出で、赤洒洒覆藏を絕す。燈籠跳つて露柱に入り、泥人金剛を攧倒す。向上宗乘の事を識らんと要すや。鏡を打破し來れ、儞と與に商量せん。」火把を拋つて、「㊀少林の嫩桂久昌昌たり。」喝一喝す。

桂雲昌慶信女預請百年後秉炬の語

火把、圓相を打して、「珠を獻ずる龍女太だ顢頇、信せずんば一鎚に鎚碎して看よ、鐵壁迸開す雲片片、黑山輥出す月團團。昌慶信女、還つて會すや。當陽直指、多端に涉らず。昔甘蔗先生、西方に出でゝ法華を一由旬に布く、袈裟下に毒藥を藏す。後香至大士、東海に入つて慈航を十萬里に泛ぶ、平地上に波瀾を起す。甚麼の三車火宅とか說か

㊀達磨、東土に來らんとする時、般若多羅曰く、法の往く所、其の法の趣く所の者は繁くして、稻麻竹葦の若し、數ふるに勝ふべからず、然して其の國我が滅後六十餘歲必ず難有るべし、水中文布を作し、自ら之れを降せ、然して汝彼の南方に至り、卽ち止るべからず、蓋し其の天王方に有爲を好む、恐らくは汝を信ぜざらん、吾が偈をきけ、曰く「路行水を跨いで又羊に逢ふ、獨り自ら棲々暗に江を渡る、日下憐むべし雙象馬、二株の嫩桂久昌々」と。我が禪門の榮ゆべきをいふ。

ん、什麼の隻履空棺をか認めん。三世の心不可得。心を將ち來れ、汝が爲に安ぜん。然も恁麼なりと雖も、百年壽盡きて後、應に是の如きの觀を作すべし。知見知を立する、卽ち無明の本、知見見無き、斯れ卽ち涅槃。」火把を拋つて、喝一喝す。

花溪宗春信女預請秉炬の語

「驚き起く一場の春夢婆、百年の光景鳥飛び過ぐ、虛空昨夜希有と叫ぶ、火裏花開く優鉢羅。夫れ惟れば、花溪宗春信女、肅爾として粧淡く、溫然として氣和す。㊀三萬の猊牀、維摩病に毘耶室に臥す。五千の貝葉、瞿曇滅を㊁尼連河に示す。衆生の母と作つて、煩惱の魔を降す、本來の面目露堂堂。梅瘦せて春を占むること少し、金剛の眼睛烏律律。庭寬くして月を得ること多し。當陽直指、端的會すや。」火把を拋つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」喝一喝す。

瑞甫清珍信女の下火　預請

門より入る者は家珍にあらず、龍女寶珠磨すれども磷かず、直下に天外に出頭して看よ、浮雲散ずる處月光新なり。淸珍淸珍、是れ甚麼ぞ、是れ甚麼ぞ。溪聲は廣長舌、山色は淸淨身。迷悟を立せず、要津を把定す。正與麼の時、三世の諸佛、火焰裏に向つて大法輪を

㊀維摩經の弟子品、菩薩品、文殊問疾品等に委し。

㊁具には尼連禪河、梵音「ナイランヂャナ、」有金河、不樂著河と譯す、摩訶陀國王舍城附近を流るゝ河の名、釋尊苦行の眞の修行にあらざることを知りて、これを棄て、此の河に浴し、積年苦行の身垢を洗ひ、木に攀ぢて岸に上り、牧女の牛乳の供養を受け、身力を恢復して後、佛陀伽耶に行き、菩提樹下に端坐し給へりと云ふ傳記によりて知らる、今のリラヂャン河是れなり

轉ず。然も是の如くなりと雖も、更に歸處有り。試みに山僧が指陳を聽け。咄咄咄、白灰撥ひ出す玉麒麟。

梅窻理清信女の下火　預請

「直に純清絕點を得る時、機輪轉ずる處電光も遲し、丙丁童子希有と叫ぶ、火裏の優曇雪に和して吹く。夫れ惟れば、梅窻理清信女、物を愛して黨無し、民に莅んで慈有り。法華會中、倒に㊀五臺の獅子に跨る。無垢世界、忽ち八歲の龍兒と化す。直に涅槃の一路に入る、何ぞ生死の兩岐に涉らん。公案現成、荷葉團團鏡似も團に。當陽直指、菱角尖尖錐似も尖きなり。淨躶躶地、寸絲を挂けず。然も恁麽なりと雖も、向上還つて事有り。山僧誰にか說向せん。」火把を抛つて、「花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。」咄一咄す。

心源宗清信女の下火　預請

「心源を放出して徹底淸し、清寥寥地太だ分明、一條界破す轉身の路、直に毘盧頂上を蹈んで行け。夫れ惟れば、心源宗清信女、山川秀を鍾めて閭里榮に向はんとす。露柱懷胎、鹿足般若の說を感ず。明珠掌に在り、龍女華鮮の名を受く。直に佛果を證す、豈に凡情に墮せんや。花を弄すれば香衣に

㊀支那山西省代州五臺縣にあり、支那六朝時代より佛敎の靈地として普く知らる。無著文喜、五臺山にあつて典座たりしとき、文殊粥鍋上に現じたりしと云ふ話柄、禪林に膾炙す。文殊は獅子に乘り給ふ故に、此所の五臺は單に輕く文殊と見てよし。

滿つ。遊戲神通、解脫國土、岳に步すれば風面を吹く。刹那に滅卻す阿鼻の火坑。正與麼の時、甚の三從五障とか說かん、甚の萬劫千生をか論ぜん。然も恁麼なりと雖も、末後の那一句、如何が施呈し去らん。」火把を拋つて、「頻に小玉と呼ぶ元も無事、只だ(ト)檀郎が聲を認得せんことを要す。」

天章宗淸信女の下火　預請

火把、圓相を打して、「直に浮雲絕點の時を得て、一輪の明月自ら淸奇、當處を離れず南方界、龍女の寶珠我れに還し來れ。夫れ惟れば、天章宗淸信女、五障を掃除し(チ)二儀を化育す。隨緣眞如、不變眞如、荷盡きて已に雨を擎ぐる蓋無し。觀相般若、實相般若、菊殘つて猶ほ霜に傲る枝有り。這裏に到つて、甚の菩提煩惱とか說かん、甚の兜率泥犂をか論ぜん。然も恁麼なりと雖も、向上の那一句を聞かんと要すや。」火把を拋つて、「針眼の魚須彌を呑卻す。」咄一咄す。

和仲妙春信女の下火　預請

「生死涅槃春夢婆、天堂地獄亦南柯、當陽直指君聽取せよ、風楓林を攪して一雨過ぐ。夫れ惟れば、和仲妙春信女、香を燒いて佛を禮し、鏡を挂けて魔を降す。苦海の慈航、濡首五障の龍女を化度す。昏衢の慧炬、慶喜四果の登伽に逢著す。單傳霜寒し、流蓬落葉、大法秋晚る。折葦枯荷、誰が家か春ならざらん。塵塵隨身の兜率、水有り月を含む。物物唯心の彌陀、無佛

(ト)元稹が詩に、「小玉牀に上りて夜衾を鋪き、檀郎謝安同處に眠ろ」と、註に檀郎は潘安仁、小字は檀と名づく、之れより婦は夫を檀郎と名くと。

(チ)二儀は乾坤をいふ、卽ち天地なり。

の處、住することを得ず。玄々の窟、須らく呵すべし。從前の關絡索は且く措く、向上宗乘の事如何。」火把を抛つて、「驪珠光燦爛、蟾桂影婆娑たり。」喝一喝す。

大有宗豐信女の下火　預請

「二神豐葦原を開きしより、今に至るまで天地是れ同根、泥犁兜率春閨の夢、醒めて後簾前月一痕。夫れ惟れば、大有宗豐信女、精神雪潔く笑語春温なり。混沌の眉を畫いて膾岳の生苕帚を拈ず。正法眼を滅して、(リ)密庵の破沙盆を皷す。暗に祖師の鼻孔を穿ち、明に諸佛の心源に徹す。無餘涅槃、泥牛耕破す瑠璃の地。不昧因果、玉兎挨開す碧落の門。百丈山、一拳に拳倒し、(ヌ)四大海、一踢に踢翻す。那箇か眞底の倩女離魂。」火把を抛つて、「紅爐一點の雪、鑄出す鐵崑崙。」

保天慶祐信女預請下火の語

火把、圓相を打して、「(ル)坤德至れる哉天これを祐く、始終一節曾て移らず、行に臨んで唱へ起す還鄕の曲、風前に向つて(ヲ)竹枝を歌ふこと莫れ。夫れ惟れば、保天慶祐信女、五障を掃除し二儀を化育す。其の人金の如く玉の如し。短褐磷かず緇まず。生也、春風桃李花の開くる夜、死也、秋雨梧桐葉の落つる時。淨躶躶、赤洒洒、生死を離れ、去來を絶す。恁麽不恁麽、毛呑海を

(リ)密庵咸傑禪師、衢州の明果庵に到つて應庵華に參す、一日應庵室中に問ふ、如何なるか是れ正法眼、師曰く、破沙盆と、應庵之れを肯ふと。

(ヌ)須彌山の周圍にある四香水海をいふ。

(ル)坤德は婦德のこと、坤は地なる故なり。

(ヲ)土地のはやり歌なり。

呑む。不恁麼恁麼、芥、須彌を納る。驀直に轉じ去れ、兩岐に渉ること莫れ。然も是の如くなりと雖も、山僧痛處に向つて、重ねて鍼錐を下さん。」火把を擲つて、「力囲希、咄咄咄、紅爐放出す鐵烏龜。」

海雲宗龍信女百年後秉炬の語

火把、圓相を打して、「生死の海を出でゝ龍鱗を脱す、元是れ如々淨法身、一陣の清風明月を掃ふ、門より入る者は家珍にあらず。夫れ惟れば、海雲宗龍信女、胸中芥せず、眼裏塵無し。其の德也、金の如く玉の如し。其の行也、緇まず磷かず。四大本空、紅英地を掃つて風曉に驚く。五蘊有にあらず、綠葉陰を成して雨春を洗ふ。鍼眼の魚石佛を呑む、丙丁童笑閙閙。更に向上宗乘の事有り、試みに休上座が指陳を聽け。」火把を抛つて、「千峰萬岳雲收つて後、翡翠簾前月一輪。」喝一喝す。

德陰妙性信女の下火　預請

「成佛は他の見性の人に還す、無陰陽の地纖塵を絕す、夜來月半江に入り去る、龍女の寶珠磨すれども磷かず。夫れ惟れば、德陰妙性信女、苾蒭草の種、桃花色の民、大慧の禪を慕ふ。臨濟中興の日に際す、㋻永明の旨を會す、彌勒下生の辰に値ふ。允なるかな矣、則天皇后の化迹、記すや否や。秦國夫人の舊因、彩鳳丹霄に舞ふ。涅槃の古鏡を打破す、清風明月を拂ふ、生死の苦輪を脫卻す。凡を轉

㋻永明延壽大師、翠巖に隨つて得度し、後天台德韶に隨つて法を嗣ぐ、法眼宗第三祖となる。禪と念佛とを兼修し、夜は別峰に行道念佛するを常とせり、德陰妙性信女は淨土教の人なりしや。

じて聖と作し、假を弄して眞を像る。淨躶躶、承當を絕す。針鋒頭に足を翹て、火焔裏に身を藏す。」喝一喝して、「然も恁麼なりと雖も、後昆を覆蔭する底の活句、試みに休上座が指陳を聽け。」火把を拋つて、「㋕揭諦波羅僧揭諦、故家の喬木又春に逢ふ。」

覺林妙等信女の下火　預請

「平等一如々の法門、百千の妙德心源を接す、須彌跨跳して鍼眼に入る、八角の磨盤空裏に奔る。夫れ惟れば、覺林妙等信女、風を移し俗を換ふ、子を抱き孫を弄す。其の芳隣や、左は花を以てし、右は竹を以てす。其の貞節や、兄に梅有り、弟に礬有り。理智圓融、甚麼の始覺本覺とか說かん。與奪自在、什麼の上根下根をか管せん。端的雙收雙放、畢竟亡に非ず存に非ず。㋵黃鶴樓に和して一拳に拳倒す、鴛鴦湖を把つて一踢に踢飜す。此れは是れ妙等信女、眞履實踐の處、百年壽盡きて後の消息、火把子の重ねて論ずるを聽取せよ。」火把を拋つて、「紅爐一點の雪を拾ひ得て、黃金鑄出す鐵崑崙。」喝一喝す。

花屋周林信女の下火　預請

「鶴林滅を示す二千年、山色は灰の如く花は烟に似たり、元是れ圓成の

㋕心經の呪文、彼の五種不翻の一なり、然れども强ひて之れを譯する時は、揭諦は、去と度との過去を現す文字なり、故に去れり度せりとの意を含む、即ち自ら一切の苦厄を度し、他一切の衆生の苦厄を度し終りたりと云ふ意、叮寧したるなり。

㋵事言要玄地集四に、「府城の西、黃鶴磯上に仙人子安、黃鶴に乘じて此を過ぐ、又費文褘登仙して黃鶴に駕して返り、此所に憩ふと傳ふ、唐の閻伯程、記を作り、文褘が事を以て信と爲す」と。唐の崔顥が詩に、「昔人已に白雲に乘じて去り、此の地空しく餘す黃

那一佛、木人石女蒼天と叫ぶ。夫れ惟れば、花屋周林信女、有情世間の事を觀じて、無生の一大緣を了ず。七賢女、死屍を尸陀林に問ふ、時有りて盡く。八歳の龍、正覺を無垢界に唱ふ、地を易へば皆然らん。虛空裏に筋斗を飜し、須彌頂に鐵船を駕す。洛陽是れ兜率、風は南岸の柳を吹く。娑婆即華藏、雨は北地の蓮を打つ。峭巍巍、孤迥迥。窠臼を離れ蓋纏を出づ。上件底は且く措く、達磨甚としてか禪を會せざる。」喝一喝す。

月溪妙秋信女の下火　預請

「秋風昨夜乾坤を動す、葉落ち樹凋みて本根に歸す、心空の那一火に和御して、黃金鑄出す鐵崑崙。夫れ惟れば、月溪妙秋信女、美玉價無し、㋟赤繩婚を定む。摩耶千佛の母爲り、則天三會の尊と稱す。生死涅槃、翡翠蹈飜す荷葉の雨。眞如實相、玉兎挨開す碧落の門。」火把を拋つて、喝一喝す。

宗眞信女の下火　預請

「試みに看よ孃生面目の眞、窻中の眉黛遠山新なり、端無く打破す曹溪の鏡、放出す天邊の月一輪。夫れ惟れば、宗眞信女、南無佛と唱へて、西子の顰に効ふ。隨緣眞如、不變眞如、翠竹風冷し。觀照般若、實相般若、黃花露勻し。金の如く玉の如し、緇まず磷かず。然も恁麼なりと雖も、門より

鶴樓、黃鶴一たび去つて復た返らず、白雲千載空しく悠悠、晴川歷々たり漢陽樹、芳草萋々たり鸚鵡州、日暮郷關何の處か是なる、烟波江上人をして愁へしむ」と。

㋟書言故事に「婚姻の前定せるを赤繩足を繫ぐといふ、」唐の韋固、旅行中、月下の老人に問ふ、囊中何物かあると、曰く「赤繩子なり、以て夫婦の足を繫ぐ。讐敵の家、吳楚の異鄕、富貴懸隔すと雖も、この繩一度繫げば、遂に逭るべからず」と見ゆ。

入る者は不是、那箇か是れ自家の珍。」火把を抛つて、「鍼鋒頭に足を翹て、火焔裏に身を藏す。」喝一喝す。

宗龜信女の下火　預請

「紅爐放出す鐵烏龜、皮骨を褁むか骨皮を褁むか、當時の大隋老を屑とせず、草鞋猴を生じて天に上り來る。夫れ惟れば、宗龜信女、鍼鋒足を翹て苕帚眉を鬪す。自性の源に徹するときは、則ち黃河を攪いて酥酪と成す。心頭の火を滅するときは、則ち鑊湯を變じて寶池と作す。意氣堂堂、一踢に踢飜す四大海。眼光爛々、一拳に拳倒す五須彌。這裏に到つて菩提の證す可き無く、生死の離る可き無し。石火も及ばず閃電も猶ほ遲し。向上に轉じ去れ、多岐に涉ること莫れ。」咄一咄、火把を抛つて、「花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。」

春芳妙榮信女の下火　預請

「㋹朝榮暮辱共に空と成る、今日の顏昨日の紅に非ず、生死涅槃一場の夢、天堂地獄大槐宮。夫れ惟れば、春芳妙榮信女、偏も無く黨も無し、始を克し終を克す。總持尼を接して、達磨皮髓を分張す。登伽女に逢ふて、慶喜婬躬を撫摩す。眞如佛性、顢頇儱侗。縱ひ般若の光を放つも、蚌蛤天上の明月を含む。定慧の力を得ると雖も、蚊虻空裏の猛風を弄す。淨躶躶赤

㋹白樂天の太行路に曰く、「人生婦人の身と作る莫れ、百年の苦樂他人に由る、行路難山よりも難く水よりも險し、獨り人世の夫と妻のみにあらず、近代の君臣皆此の如し、君見ずや左納言右納史、朝に恩を受けて暮に死を賜ふ」と。

洒洒、諸方の羅籠を受けず。三從五障を掃除して、直に八達七通を得たり。金剛圏を透り、栗棘蓬を呑む。然も是の如くなりと雖も、轉身の處を識らんと要せば、丙丁童に問取せよ。」火把を抛つて、喝一喝す。

妙蓮信女百年後下火の語

「夢幻空花一百年、風驚き雨過ぎて刹那に遷る、回光返照自ら看取せよ、露清香を滴る火裏の蓮。夫れ惟れば、妙蓮信女、五障を消滅し、十纒を脫離す。將に謂へり、金沙灘頭の鎖骨と。元來無垢世界の華鮮、鍼鋒頭上の五須彌、石女起つて舞を作す。地獄門前の鬼脫卯、扇子跳つて天に上る。驀直に轉じ去れ、言詮に渉ること莫れ。會すや。」火把を抛つて、「向上の一路、千聖不傳。」咄咄咄。

⑨盧生、邯鄲に夢む、一代の榮を夢に盡す、覺め來れば僅かに黃粱一炊の間。

宗祐信女の下火　預請

「⑨半は黃粱を熟す夢蝶の牀、頭を回せば三萬六千場、明明に說與す西來意、紅槿花の前夕陽ならんと欲す。夫れ惟れば、宗祐信女、精神雪潔く、貞節菊芳し。五障本空、文殊佛に代つて龍女を度す。兩願成就、觀音婦と作つて馬郎に約す、罪垢を蕩滌す。經卷流水、生死を截斷す、慧劍秋霜。赤洒洒窠臼沒し、淨躶躶承當を絕す。然も是の如くなりと雖も、向上還つて事有り、我れ汝が爲に擧揚せん。」火把を擲つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」喝一喝

す。

心月妙性信女、預め三十三白忌の冥福を修するの次で、更に百年後の秉炬の語を請ふ

「佛性元來變遷無し、時節と因緣とを論ぜず、請ふ君指頭を離卻して看よ、月は靑天に在つて夜夜圓なり。夫れ惟れば、心月妙性信女、劫波濁ると雖も、晩節彌〻堅し。翠袖の佳人、竹疎壁に動く。赤豆畫眉の京兆、花細川に滿つ。夫れ美名を身後に留めんよりは、如かじ冥福を生前に修せんには。三十三年、兩車、無量壽を唱ふること百萬玉函、七軸妙法華を轉ずること一千、終を愼み遠きを追ふ。三十三年、無明卽ち明、普廣王に對して鴛鴦敎を說く、諸相相に非ず。秦國太を接して蚌蛤の禪を露す。涅槃の窠窟を出でて、生死の蓋纏を脫す。燈籠露柱に入り、虛空鐵船を駕す。然も恁麼なりと雖も、更に向上宗乘の事有り、試みに山僧が敷宣を聽け。」火把を拋つて、「雨中杲日を看、火裏に淸泉を酌む。」

西夕明慶信女預め百年後の下火の語を請ふ

「元是れ餘慶積善の家、光明照徹す盡河沙、試みに看よ大用現前の處、火裏の優曇一朶の花。夫れ惟れば、西夕明慶信女、神氷雪を潔くし、語煙霞を帶ぶ。㊀栽松の禍根、五祖の兒、周氏に託す。甘蔗の惡孽、千佛の母、摩耶と稱す。心生ずれば種種の法生ず、深閨洞房、枕上の化蝶、心滅すれば種種の法滅す、地獄天堂、

㊀五祖大滿禪師を栽松道者といふ、其の生前の因緣によりて名づく。舊說に曰く、四祖大醫禪師、牛頭山に居る、山中

杯中の假蛇。頓に三界の火宅を出で、直に一乘の大車に駕す。江月照すと雖も、曉風に遮らる。赤洒洒拘束沒し、淨躶躶諸訛を絕す。末後の句を知らんと要せば、金口の吧吧を聽け。」火把を拋つて、「會すや、夕陽は長く我が西に在つて斜なり。」咄一咄す。

希西唯心信女の下火　預請

「卽心卽佛一精明、吹滅して阿毘の大火坑、若し檀郎を認めば千萬錯、頻に小玉と呼ぶ杜鵑の聲。夫れ惟れば、希西唯心信女、群を出でて萃に拔く、茂を騰げ英を飛す。龍女、華鮮如來と號す、頭を改め面を換ふ。馬婦、鎖骨菩薩と化す、物を接し生を利す。轉身自在、遊戲縱橫、生死涅槃、落花三片五片。眞如實相、脩竹一莖兩莖、塵塵解脫、箇箇圓成。露堂堂月白く、淨躶躶風淸し。然も恁麼なりと雖も、向上卻つて事有り、端的君が爲に呈せん。」火把を拋つて、「一心を本とす常樂我淨、一氣に始まる元亨利貞。」喝一喝す。

渭川宗淸信女の下火　預請

「昔 (ネ) 日種氏四十九年、三說鹿野に資つて始めて鶴林に終を示す。爾よ

老僧ありて松を栽う、人呼んで栽松道者といふ、嘗て四祖に謂ふ、法道聞くことを得べきや、曰く、汝已に老ゆ、聞くことあるとも其れ能く化を敷かんや、儻し能く再來せば吾れ尙ほ汝を待つべしと、乃ち去つて水邊に行き、周家の女子の衣を浣ふを見、揖して曰く、宿を寄することを得るや否や、女曰く、我れに父兄あり、往いて之れを求むべし、曰く、諾せば我れ卽ち行かん、女首肯す、僧策を回らして去る、女歸つて輙ち孕む、父母之れを惡みて逐ふ、女歸する所無く、日々里中に庸紡して夕に衆館の下に於いてす、既にして一子を生む、以て不祥となして水中に棄つ、明日之れを見るに流に泝つて上る、氣體鮮明なり、大いに驚いて之れを擧ぐ、童となりて母に

り來、地藏の願輪に乘ずるときは、則ち外聲聞を現じ、內菩薩を祕す。㊉彌陀の利劍を揮ふときは、則ち上攀仰無く、下己躬を絕す。無明の窠窟を出で、生死の羅籠を破る。木人太平の歌、長樂の鐘花外に響く。石女長壽の曲、關山の笛月中に揚る。塵塵解脫、法法圓融。然も是の如くなりと雖も、向上還つて事有り、一偈君が爲に通じ去らん。」火把、圓を打して、「淸容獨り秀づ內家叢、粉黛三千淡濃を爭ふ、去無く來無く所住無し、夕陽は長く我が西に在つて紅なり。」火把を抛つて、喝一喝す。

眞如妙性信女の下火　預請

「眞如妙性曾て移らず、昨夜虛空地に落つる時、從來する所無く所去無し、蟭螟呑却す五須彌。夫れ惟れば、眞如妙性信女、火中の木母、泥裏の摩尼、百媚千嬌、金沙灘頭の馬婦、鎖骨菩薩と現ず。三從五障、靈山會上の龍女、華鮮如來と稱す。甚だ希有甚だ希有、也太奇也太奇。淨躶躶承當を絕す、甚の鑊湯爐炭とか說かん。赤洒洒窠臼沒し、甚の兜率泥犂をか論ぜん。」喝一喝、火把を抛つて、「杜鵑啼いて落花の枝に在り。」

古梅妙意信女の下火　預請

隨つて食を乞ふ、邑人呼んで無姓兒と爲す、今の五祖弘忍卽ち是れなりと。

㋯釋迦をいふ。

㊉阿彌陀佛、無量と譯す、西方極樂世界の敎主、因位には法藏比丘と稱し、世自在王佛の所に諸佛の淨土を親見し、五劫の思惟を重ねて四十八の大願を建立す、永劫の修行を經て、所願滿足成佛して阿彌陀と名づけ、淨土を西方に設く、阿彌陀は光明無量壽命無量なる因願酬報の覺體なり、宗門にては己身の彌陀、唯心の淨土にして來世の往生、他力の救濟を求めず、現身に彌陀覺體を成じ、此の土に極樂淨土を現ずるを以て理想となす。

「祖師無意西來せず、虚空を吹裂して鐵笛哀む、道ふことを休めよ少林消息斷ゆと、送行唯だ一枝の梅有り。夫れ惟れば、古梅妙意信女、正因信淨く、世相心灰す。雅曇三界の師、燈籠合掌、摩耶千佛の母。露柱懷胎、教外別傳、葵花眼無うして日に隨つて轉ず。喝下正覺、芭蕉耳無うして雷を聽いて開く。希有希有、奇なる哉奇なる哉。曹家女寶鏡臺に現ず。看よ看よ、本來無一物、何の處にか塵埃を惹かん。」火把を抛つて、咄一咄す。

春芳妙榮信女の下火　預請

「百年の富貴一場の榮、風落花を攪して春夢驚く、歸らば便ち歸る可し兜率の路。杜鵑枝上月三更。夫れ惟れば、春芳妙榮信女、錦心繡口、㋶玉振金聲、堅固法身、磨すれども磷かず、涅にすれども緇まず。眞如自性、之れを溷せども濁らず、之れを澄せども清まず。倩女離魂、那箇か眞底、㋰龐婆團圝、共に無生を說く。瑜伽の法水を瀉いで、阿鼻の火坑を滅す。教外の宗旨を知らんと要せば、山僧汝が爲に施呈し去らん。」火把を抛つて、「誰が家の別館ぞ池塘の裏、一對の鴛鴦畫けども成らず。」喝一喝す。

維馨宗范信女の下火　預請

「無常迅速太だ端無し、假に雙林の㋒般涅槃を示す、此れは是れ孃生、本來の面、月梅影を移して

㋶孟子に、「伯夷は聖の清なるものなり、伊尹は聖の任なる者、柳下惠は聖の和なる者なり、孔子は聖の時なるものなり、」孔子は之れを集めて大成すといふは、金聲のべて玉之れを振む、金聲とは條理を始むるなり、玉之れを振むとは條理を終るなり、條理を始むるは、智の事なり、條理を終るは聖の事なり。

㋰龐蘊居士の母をいふなり。

㋒入槃涅槃の略なり、滅度をいふ。

欄干に上す。夫れ惟れば、維馨宗葩信女、珠簾玉案、禪板蒲團。少林の顰に效ふときは、則ち西施が淡糚、興化を除非す。首楞の咒を持するときは、則ち㊉摩登が愛纒、阿難を逼殺す。手に壙中の雙履を携へ、脚に門前の刹竿を倒す。加之初頓の華嚴、後分の華嚴、南詢の善財正覺を成ず。實相般若、觀照般若、東請の常啼心肝を賣る。眞箇若し未穩在ならば、心を將ち來れ、汝が與に安ぜん。」火把を抛つて、喝一喝す。

渭川宗淸信女の下火　預請

「鑊湯爐炭淸涼界、熱鐵洋銅安樂窩、佛法南方梅一點、人を驚かす春色多きことを須ひず。夫れ惟れば、渭川宗淸信女、竹の節を保つが如く、花の和を養ふに似たり。山として雲を帶びずといふこと無し。則天下生の彌勒、水有り皆月を含む。㋷豐干上品の彌陀、淨に入り穢に入り、佛に入り魔に入る。天女花を散ず、維摩の憑を芻室に判ず。古人菊に題す、涅槃の相を金河に示す。了了了の時了す可き無く、玄玄玄の處亦須らく呵すべし。然も恁麼なりと雖も、末後の事如何。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」喝一喝す。

㊉摩登伽（Matangi）又は摩登祇（Matangi）の略、男を摩登伽、女を摩登祇といふ、義翻して本性といふ、楞嚴に性比丘尼と云ふ、具には阿徒多摩登祇旃陀羅と云ふ、此れ女卑賤なり。

㋷豐干禪師、天台山國淸寺に居り、髮を剪りて眉に等しうし布裘を衣る、人、佛理を問へば隨時の二字を以て之れに答ふ、本寺の厨中に二人の苦行あり、寒山、拾得といふ、之れと相親しむ、古鏡磨せざるとき如何が照燭せん、曰く、冰壺影像無し、猿猴水月を探る、曰く、此れは是れ照燭せざる也、更に請ふ、師道へ、曰く、萬德將來せずんば、我をして什麼とか道はしめん、寒拾共に禮拜すといふ、尋で獨り五臺山に入りて巡禮す、會て閭丘胤、丹丘に牧たりし

芳園妙椿信女の下火　預請

「這の一株無根の大椿、花開き花落つ幾回の春ぞ、毘嵐昨夜忽ち吹倒す、驚起す南華夢裏の人。夫れ惟れば、芳園妙椿信女、髮を截る㋔陶母、機を斷つ軻親。預め未來の兩果を懼れて、逆め現在の三因を修す。聞くや、溪聲廣長舌、見るや、山色淸淨身。龐老、心空の第に登り、龍女、無價の珍を獻ず。吾が這裏密密密の處、凡聖を通ぜず。了了了の時、何ぞ主賓を分たん。然も恁麼なりと雖も、向上の一句、如何が指陳せん。」火把を拋つて、「只だ補袞調羹の手を將つて、如來の正法輪を撥轉す。」喝一喝す。

玉浦妙珍信女の下火　預請

火把、圓を打して云く、「價直三千衣裏の珍、靈光昧さず緇磷を絕す、百年夢覺めて後の消息、翡翠簾前月一輪。夫れ惟れば、玉浦妙珍信女、佛見忽ち盡き、凡情已に泯す。繡彌勒の前、吾が室に入つて八齋戒を受く。珠羅漢の後、聖位を證して二乘の倫を超ゆ。鶴算龜齡、王母が蟠桃實を結ぶ。烏飛び兎走る、㋗姮娥が靈藥、神を頣ふ。聞くや、溪聲廣長舌、見るや、山色淸淨身。然も溷麼なりと雖も、倩女離魂、那箇か是れ眞。若

時、豐干に師事して法要を問ふ、曰く、此の二菩薩何くにありや、師曰く、國淸寺に爨をとつて器を洗ふもの寒山拾得是れなりと、閭丘拜辭してゆくと。

㋔陶侃の母湛氏、一夜鄱陽の孝廉范逵來りて侃が家に宿す、適々大いに雪ふる、依つて其の髮を截ち、隣人に賣りて肴饌を買ひて以て供す、逵之れを聞いて嘆じて曰く、此の母に非ずして此の子を生むこと能はずと、侃遂に功名を成すと。

㋗姮娥は羿の妻なり、羿不死の藥を西王母に請ふ、之れを服するに及ばず、姮娥盜みて之れを食ひ、仙たるを得、去りて月中に入り、月の精となる。

㋳浩然は盛大流行の形、氣卽ち體に充つるもの、もと自ら浩然たるなり。孟子公孫丑上に「我れ善く吾が浩然の氣を養

し復た會せずんば、我れ指陳し去らん。」火把を擲つて、「冷灰撥ひ出す玉麒麟。」

賢屋利養大姉の下火　預請

長養功成つて年を記せず、㋳浩然の一氣自ら完全、眼光落地底の時節、朶朶新に開く臘月の蓮。

ふ、敢へて問ふ、何をか浩然の氣といふか、曰く、言ひ難きなり、其の氣たるや、至大至剛、直を以て養ひて害ふなきときは天地の間に塞る」とあり。

㋑後平城帝の宸翰

朕、參禪年尙し矣。祖師許多の話頭古則、一一參究、一一證明す。本有圓成の話を擧して、未聞の聞を獲焉。後一日別峯に在り、直に㋺德雲比丘と相見了也。從前參得底、悟得底、一時に瓦解氷消す。洒洒地落落地、是れより佛祖の瞞を受けず、受用確乎たり、大安樂を得。此の恩甚だ深し、何の日か報謝し盡さん。縷縷不宣。

天文壬寅五月十三日

大休上人禪室

大休和尙 後平城帝に上る法語

世尊正法眼藏を摩訶大迦葉に付してより以來、一絲毫をも移易せず、東西の諸祖、的的相承、直に山僧に至るなり。恭しく以れば、日出處の國百六代 聖天子、吾が禪に參ずること年尙し矣。一日召して再三請益し、奏するに本有圓成の話

㋑第百四代後奈良帝なり、御名は知仁、後柏原帝の皇子、御母は贈左大臣教秀の女、豐樂門院藤原藤子、後柏原帝崩じて即位す、此の頃は所謂戰國時代にして皇室の式微甚だしく皇室民屋に異ならず、公卿多くは皆諸侯に寄食し、或は出でて食を乞ふものあり、帝在位三十一年、弘治三年崩す、陵は深草にあり。

㋺妙心寺山内の德雲院に住せしよりしか云ふ。

を以てす。陛下の答處、百了千當、珠を盤に走す如くに相似たり。山僧掌を抵つて奏して曰く、「徹せり矣。」蓋し蕭梁の武帝を冷笑し、李唐の㋩肅宗を熱瞞する者陛下に非ずして其れ誰そ哉。願はくは寶祚萬安を保ち、永く佛法の檀越と爲りたまはんことを。珍重。

天文十一龍集壬寅迎佛會の辰　詔を奉じ妙心に住す　臣僧宗休謹書。

後平城帝圓滿本光國師徽號の㋥宸翰

朕、曩の時、大燈の正傳を聞いて、挑つて師の室下に在り、詔して師を迎ひて內に入れ、密參垂語、其の示誨を受くること玆に年有り矣。師の印證を得るの後、國師を以て之れを稱せんと欲す、未だ其の志を遂げず。道風を　㋭北闕に遺し、德化を西京に輯む。本體如然の靈光、寔に大人妙用なり。蓋し在日の旨に例して、特賜の號を以て、之れを稱して圓滿本光國師と爲すと爾云ふ。

天文十九年二月七日　　御押

大休國師の門徒等

後平城帝本有圓成國師徽號の宸翰

朕、本光國師を召して、關山祖、拈得する底の本有圓成の公案を參得して、大機大用を得たり。今而

㋩唐第七代の皇帝、玄宗の第三子なり、肅宗太子たりし時、政を攝す、是の時慧忠國師、白崖山に在りて道譽甚だ高し、肅宗師に就いて深く禪要を研む、卽位の後、國師を入內せしめ、敬慕師の禮をとる、上元二年を以て崩ず。

㋥天子の親しく書したまふをいふ。

㋭天子の宮殿の北の正門なり、上奏謁見の徒の出入する所。漢書高帝紀に「蕭何、未央宮を治む、東闕、北闕、前闕を立つ、」卽ち北にあるは玄武闕をいふ、宮中のことをいふ。

祖忌二百年に當つて、勅して本有圓成國師と諡して、以て恩に酬い德に報ゆと爾云ふ。

弘治三年三月十二日

微笑塔下

大休の號

宗休首座、別稱を需む、之れに命じて大休と曰ふ。仍つて頌以て證と爲すと云ふ。

千峯の勢は嶽邊に到つて止まり、萬派の聲は海上に歸して收まる、林下何ぞ曾て朝市に換へん、縱ひ塵劫を經るも頭を回さざれ。

永正元年十一月　日　　前の大德特（へ）芳叟

正法山妙心禪寺に住する（ト）山門疏　　東山（チ）雪嶺和尙製

正法山妙心禪寺山門、欽んで北闕の綸旨を奉じて、前の第一座大休禪師を敦請して本寺に住持せしむ。國の爲に開堂演法、皇圖の萬安を祝贊する者なり。右伏して以れば、法社、師を擇ぶ、海棠は多く甘棠は少なり。學徒己に克つ、初節は易く晩節は難し。久しく（リ）贋浮圖を見ることを厭ふ、忽ち佳衲子に逢ふことを欣ぶ。共しく惟れば、新命堂上大休大禪師、舌、霹靂を走らしめ眼は乾坤を空ず、虛堂慧海の航と稱す。心、千古に涵す、洋

（へ）諱は禪傑、尾張熱田の人なり、業を妙喜庵の瑞巖石に受く、後、雪江璨の輪下にありて契悟す、出でて尾の瑞泉寺、丹波の龍興寺、攝津の海淸寺、京の妙心寺等に遷る、又大德寺に陞る。

（ト）住持を勸請する宣疏なり、官府の疏なきときは、山門疏に聖壽を祝せよの語を加ふ。

（チ）諱は永璉、別に識盧、又樵庵と號す、丹後に生る、幼にして建仁寺に入り、十如院の九峰

嶼、(ヌ)法門の鼎たり。名諸方に重く、廼祖道を行ず。獅擲象旋、後昆家を興す。鳳毛麟角、敎黌禪府、蚤に(ル)永明百卷の書を檢す。棒雨喝雷、曉に臨濟三要の印を佩ぶ。慈氏の兜率より下るかと疑ふ、輪王の閻浮を化するに類す。(ヲ)張蒼、漢を佐け、(ワ)呂尙、周を相く、來つて勝會に赴く。(カ)皐陶は虞を歌ひ、奚斯は魯を頌す。仰いで(ヨ)丕圖を祈る、謹んで疏す。今月　日疏。

知事比丘、頭首比丘、勤舊比丘、西堂比丘。

(タ)同門の疏　　　　(レ)慧峯の湖月如尙製

同門玆に奮にす、正法山妙心禪寺、適ゝ主席を虛しうす、特に綸旨を降して、大休禪師を德雲精舍に起して以て補處す。是に於て、法系に昆季たる者、此の盛擧を聞いて(ソ)忻抃に堪へず、胥率ゐて疏を製し、厥の駕を從臾すと云ふ。德雲、別峯に相見す、水有り皆月、虛堂諸老に徧歷す、誰が家か春ならざらん。寧ろ知識に逢ひ難しと曰はんや、學者の惑ひ多きことを其れ奈せん。共しく惟れば、新命妙心大休禪師、精神矍鑠、手段輭頑、面壁得髓、達磨拈華して大乘を赤縣に接す。頌古垂示、(ツ)雪竇落草して百則を碧巖に評す。孔葦の玄を窺ひ、衡瘴の毒に觸る。牀角七八尺の藤杖、

成に就いて芟染稟具し、後參詳久しうして法を九峰に嗣ぎ、常に十如院に留る、永正五年勅を奉じて建仁寺に遷住し、文筆の才に長じ、其の名叢社に鳴る。

(リ)にせ寺院といふ程の意、名ありて實なきをいふ。

(ヌ)法門の寶であるとなり。

(ル)永明禪師の宗鏡錄百卷を著す

(ヲ)陽武の人なり、秦に事へ御史となる、後、漢に歸し、從つて臧荼を攻め、功を以て北平侯に封ぜらる、孝文の初め、丞相となり、年百餘歳にして卒す、書十八篇を著し、專ら陰陽律曆の事を說く。

(ワ)呂尙は太公望なり。

(カ)皐陶は舜の時の司徒なり。

(ヨ)大なる圖なり。

(タ)賀疏の一種、新命の住持と同門の人が同門の故を以て、其の入院を賀して呈する所の文

寒時の闍梨、熱時の闍梨、擔頭一兩枝の梅花、者箇の行李、那箇の行李、南方の佛法を商量して、東海の兒孫を勃興す。未だ先宗を墜さず、是れを本色と謂ふ。烏寺に住して一巡祖を罵る、宜しく度生を急にすべし。(ネ)龕山に到つて連聲、兄と叫ぶ、同志に如くは莫し。

永正龍丙子に集る春三月　日疏。

前大德(ナ)宗恕　前妙心惠樹　前妙心宗繕　前(ラ)妙心玄訥

前廣嚴永蚕　知慶宗諗　前大德宗棟

駿州大龍山臨濟禪寺に住する山門の疏

駿州路(ム)大龍山臨濟禪寺山門、欽んで大檀越源府君の嚴命を奉つて、靈雲大休禪師を敦請して本寺に住持せしむ。國の爲に開堂演法し、皇圖の萬安を祝贊する者なり。右伏して以れば、虎丘、臨濟の正宗を振ひ、西華山五千仭に聳ふ。駿河、圓通を安倍に出す、東海道十四州に冠たり。人境を待ち境人を待つ、聖は天を希ひ天は聖を希ふ。共しく惟れば、新命堂上大休和尚大禪師、名宇宙に喧しく、語煙霞を帶ぶ。吾が師三門開堂、說法第一、智慧第一、曾祖四月入寺、住山八十、行脚八十、紫伽梨、影を禁池に

疏なり。

(レ)慧峰は慧日山東福寺なり、湖月和尚、諱は信鏡、別に雙庵と號す、時に或は楠溪、吽阜の號を用ふ、幼にして出家し、東福寺の商霖佐に就いて參究し、其の法を嗣ぎ、後、東福寺に出世す、師文辭を樂みとなし、常に古文眞寶を以て學徒に敎ふと。

(ソ)喜びて手をたゝくこと。

(ツ)雪竇重顯禪師、智門光祚の法嗣、字は隱之、遂州の人、嘗て景德傳燈錄によりて古則一百則をぬきて之れが頌古を作る、後に圜悟、評唱して碧巖集と稱するもの卽ち是なり。

(ネ)雪峰義存禪師が師兄巖頭全豁の提撕を受けて、鰲山に在つて大悟成道せしこと前に見ゆ。

(ナ)大德六十二世、仁濟宗恕禪師なり。

満し、烏跋華、瑞を濁世に現ず。靈雲山頭の古月、之れを仰げば彌〻高し、洛陽城裏の秋風、思ひて忘るゝこと能はず。美なる哉牽陀、五鳳修造宜しきなり。方丈大龍蟠居、邦君、弩を負ひて前驅し、府主、疏を作つて以て敦請す。文は歐蘇に至り、禪は妙喜に至る、百世の師を得たり。俗は成康の若く、壽は高宗の若し。萬乘の主を祝す、謹んで疏す。今月　日疏、知事比丘、頭首比丘、勤舊比丘。

臨濟寺殿㋒用山玄公大禪定門十三年忌の拈香　駿州臨濟寺に就いて忌を修す

前の臨川江心西堂　天龍寺三秀院

「這箇過去に於てするときは、則ち沈水佛と號して度生す、梅早うして白し、分身の身。法報應化、現在に於てするときは、則ち香春佛と稱す、出世杏晩くして紅なり。無說の說、刹塵熾然、凡は凡に同じく、聖は聖に同じ、方は自ら方、圓は自ら圓なり。栴檀世界の栴檀、如來、東國土に煒煒煌煌たり。㋼薝蔔叢林、薝蔔圍繞す、西竺乾に鬱鬱葱葱たり。本來無染至理絕詮、之れを爇卻して師恩に酬ゆる者は、春日の知識、秋日の知識に供

㋶字は景堂、山城の人、少より景川和尚に親炙し、參禪究決す、大心院に住す、妙心開堂進寺すること兩次、後又尾の瑞泉を董す。

㋰大龍山と號し、靜岡縣安倍郡安東村にあり、享祿年間、四品前駿河太守今川氏輝公の開基に係り、特芳傑の嗣法、即ち大休宗休禪師の開山にして當時は今川義元勅命を奉じて堂宇を建立し、次いで武田信玄、德川家康等各勅命によりて再建せり、後奈良帝の勅願所なり。

㋒後文によりて考ふるに、今川義元の兄、氏輝なり、氏輝子なし、遺囑によりて義元立つ。即ち四品前駿河太守今川氏輝公、當山の開基なり。

㋼薝蔔は梵音、此に黃花と譯す、本草綱目に「卮子花を占蔔と名く」とあり、異同辨じ難し、

養す。之れを插向して聖壽を祝する者は、香山の大仙、雪山の大仙に逢著す。江南の螺甲以て澄俗と爲す、吳中の鷓斑猶ほ是れ(リ)腥羶。法は空處より起り、人は鼻端に向つて參ず。或時は大法を九衢紅塵の裏に轉ず、材、佛宮の餘を收め、工、子來の助有り。或時は沈材を一燧黃雲の邊に取る、功德八百を具足し、芬芳大千に遍滿す。薰籠字字相凝る、鷲嶺の文、龍宮の藏を寫し出す。滿爐縷縷として絕せず、鷄足の襴、熊耳の棉を織り成す。趙宋の善神几上に九代の祖を冷笑し、(オ)匡廬の法師社中に十八賢を集むるを泥視す。一雨普霑す、大根大莖大枝大葉、諸漏已に盡く。木に非ず空に非ず、火に非ず煙に非ず。將に謂へり趙州の柏樹と、元來崑崙の蘭荃。看よ看よ、用山大禪定門、這の一炷の薰力に憑つて、三界の蓋纏を脫卻し、直處、密教教主拔苦王と同じく華臺の寶蓮を坐斷せん。」香を擧して云く、「手に信せて拈じ來る別物無し、大龍山裏の大龍涎。娑婆世界南瞻部洲大日本國駿河州居住、大功德主源朝臣義元、天文十有七年三月十有七日、伏して臨濟寺殿用山玄公大禪定門一十三白の遠忌の辰に値ふ。預め大龍山に就いて緇流を集め白業を修す。大日覺王の尊像を彫刻する者一軀、法華妙典頓寫漸寫印寫若干部、水陸妙供圓通妙懺各一會、(ワ)英檀自ら壽量の一品を書し、

維摩經觀衆生品に曰く「人の薝蔔林に入つて唯々薝蔔を嗅いで餘香を嗅がざるが如し」と、蓋し芳香美麗なる花樹林なるべし。

(リ)血生臭きをいふ。

(オ)慧遠法師、蓮社十八賢社を結ぶ。

(ワ)英檀は即ち今川義元をいふ。

(ヤ)法華經方便品に出づ、如是は萬法の當體、ありのまゝをいふ、十如是は諸法の當體に含まれたる十種の普遍性をいふ、即ち如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等、これを十如是といふ。

且つ㋳十如是を十首の和歌に演出し、筆墨を以て佛事を成ずる者尙ぶ可し矣。自餘の作善、僧官の宣讀に詳かなり。今散筵に當つて、香華燈燭、茶菓珍饈を嚴備し、謹んで現前の清衆に命じて、同音に究竟堅固無上神咒を諷演するの次で、靈雲堂上大和尙を拜請して、陞座說法、兼ねて小比丘承董に副命して、這の㋮乾陀羅耶を焚いて、本師釋迦牟尼大覺世尊、東方藥師醫王善逝、西方無量壽佛、今日の教主大日如來、當來下生彌勒尊佛、文殊普賢の二菩薩、現座道場の觀音大士、六道能化地藏願王、西天東土の歷代傳法の諸祖、開山七朝の國師、日本國內大小の神祇、天界地界冥府冥官、各各騈騈等に供養す。集る所の㋘殊勛、大禪定門の爲に報地を莊嚴し往愆を滅除し奉る。玆に承る、大禪定門、年未だ㋫而立ならず、簀を易ふるの日、國を英檀賢弟に讓る。維れ時禍蕭牆に起ると雖も、一日の中一戰して覇たり、國家を泰山の安に措く。是に於てか、仁祠を營みて山を大龍と號し、寺を臨濟と扁す。夜禪晝誦、淨侶の勤修する者、其の員を知らず。昔㋙破庵と松源と同じく密庵の門に出づ、一門の二甘露と爲す。破庵一傳して圓照に至り、三傳して佛國國師に至り、四傳して正覺國師に至る。松源の道、㋓正法の師祖に至るまで五世、其れ昌なり。爾より來、此の兩派、大唐に濫觴して大倭に彌綸す。法幢を建て、法霈を施す者枚擧するに遑あらず。蓋し英檀、當寺を創建するの始め、吾が先

㋮梵語 Gandhalaya なり、佛國の名、香積と譯す、こゝは乾陀羅樹より製したる香料。
㋘殊勳に同じ。
㋫三十而立の語より來る、三十に至らざるをいふ。
㋙密庵は咸傑禪師の法嗣なり。
㋓妙心寺開山慧玄禪師をいふ。松源、運庵、虛堂、南浦、宗峰と五世なり。

國師を勸請して開山祖と爲す。其の先、定光寺殿、佛國の道風を慕ふて、其の迹を師とする者なり、所以有る哉。加之、大禪定門、正法の師祖と異代同諱、僉曰ふ、甚だ奇甚だ特なりと。且つ復た大源禪師、龍山の山主と爲つて、晨鐘暮鼓、禮樂一新、月斧雲斤、㋢輪奐美を盡す。頃日山門佛殿落成、修鳳の手を施す、修造住持、說法住持、㋐二難相幷す。今日適ゝ此の忌辰に際して、禪師、英檀の嚴命を傳へて、靈雲老師を拜して、陞座普說し、山野亦驥尾に附して蛙鳴を作す。累世通家、左右源に逢ふ、先師未了の因緣を了する者乎。桃花㋚上巳の風景を今朝に餘し、宜なるかな、說法靈雲和尙をして師子吼後ならしむることを。木犀雙徑塢の天香を三月に吐く、耐耐なり、亂道圓照の遠孫をして、野干鳴先ならしむ。慚赧慚赧。共しく惟れば、臨濟寺殿用山大禪定門、才色兼ね麗しく、忠孝兩ながら全し。今川の源氏の嫡流に出づるや、㋖殑伽河、信度河、縛芻河、徙多河の衆水、其の涯涘を窺ふに足らず。用山の㋴淸和の後裔に承くるや、普賢山、仙人山、白墡山、負重山の奇峯、何ぞ敢て厥の層巓を望まん。之れを澄せども淸からず、之れを淆せども濁らず、之れを仰げば彌高く、之れを鑽れば彌

㋢輪奐は結構をいふ。

㋐賢主と嘉賓とを二難といふ。

㋚上は初の義なり、三月初めの巳の日を以て上巳の節とす、後世は巳の日にかゝはらず、三月三日を節日と定めたれども、なほ古名を用ふ、即ち祓禊して流水の上に飮す、以て水上盥潔の意にとる、今和俗の桃の節句なり、羲之が蘭亭の記にも見ゆ、即ち彼の風物を今に移したる意ならん。

㋖此の四川は印度の四河をいふならん。

㋴淸和源氏なるが故にいふ。

㋱韓信、淮陰侯に封ぜらる、張良、蕭何(或は陳平)と共に漢室創業の三傑と稱せらる、初め項羽に從ひ、後、漢に歸して大將軍となり、諸侯を伐つて天下を統一す、後、呂后に忌まれ、高祖十一年に捕れて

堅し。子房は是れ英、㈡淮陰は是れ雄、金卯の赤帝を輔く可し。趙昌が花、邊鸞が雀、畫工の黄筌を屑とせず。枕を高うするは遠江州の水聲、近く聽く、欄に凭れば則ち浮島が原、山色遥に連る。善御夜白の逸群に乘す、盡く㈢王良と爲す。闔國駿馬を好む、平生海青の猛捷を臂にす。常に景升が臺に登つて鷹鸇を呼ぶことを笑ふ。事一時に美なり、語千載に流ふ、道九野を光し、德八埏に載つ。兵を談れば㈣吳に合し孫に合す、孫子は孟子、吳子は論語、家を興して文有り武有り。武王は春王、文王は元年、華胄煒煒、瓜瓞綿綿たり。牡丹海棠名いはず、溫國年少の譽を馳す、芝蘭玉樹、秀を鍾む、謝家風流の煽なるに擬す。難兄難弟行を成す、鴻鴈朋と曰ひ友と曰ふ。座に盈つる貂蟬、地三河の魏を連ね、景八境の虔を移す。泰範・範政の先緒を振起し、㈤定家・家隆の遺編を熟讀す。㈥曼卿は歌に豪なり、歐陽は文に豪なり、太白は詩に豪なり。歌詞妙絶、芳聲藉藉たり。胡照は其の骨を得、韋誕は其の筋を得、索靖は其の肉を得たり。骨格超越、筆勢翩翩たり。藝に遊ぶときは、則ち薛嵩が蹴鞠に効ひ、射を學ぶときは、則ち㈦羿氏の控弦に勝れり。嘗に三代の㈧禮樂を整ふるのみに匪ず、矧ん

殺さる、嘗て辱を忍びて屠中少年の股下を出でたるは著明なる美譚なり。

㈢王良は古の名高き御者。孟子滕文公に「昔は趙簡子、王良をして嬖奚と與に乘ぜしむ」とあり。又韓文公の石處士を送る序に、「駟馬輕車に駕し、熟路に就いて而して王良造父をして之れが前後を爲さしむるが如し」とあり。

㈣孫吳の兵法に精しく又兼ねて文を能くするをいふ。

㈤藤原定家、鎌倉時代の歌人、俊成卿の子、後鳥羽上皇の知遇を蒙り、歴宮に詣りて歌の判者となる、勅を受けて源通具等と新古今和歌集を撰す、正二位に叙し、權中納言となる、世に京極黄門と稱す、彼の百人一首は小倉山莊の障子に書きしものといふ。家隆は光隆の子、歌を俊成に學び、定家

や一世の威權を執るをや。治安の策を獻じ、勳業の鞭を著く。河南河北從ふ者、南と無く北と無し。關東關西歸する者、東よりし西よりす。淸見潟、台星照臨、雕輪㋜咿軋、宇度の濱、天人降下、羽衣翩躚、之れを駐むるに叫ぶこと無し。莫要去莫要去の鷓鴣、之れを勸めて呼ぶこと有り。不如歸不如歸の杜鵑、烟光淺間の嶽頂に凝り、橋聲安部の市鄽に報ず、草木禽獸恩光を借る。草木の主也、禽獸の主也、㋑芻蕘雉兎寵渥に沐す、芻蕘の者も往き焉、雉兎の者も行く焉。偉なる哉臧孫、魯に後有る。哿なるかな矣昭王、士を燕に致す。胸中自ら丘嶽有り、公餘多く林泉を愛す。五郎易の六郎、昌宗淸標を玉座に望む。一人は道安、半人は鑿齒、緇徒を門扇に引く。隣好を修して以て木李を投じ、以て瓊玖を報ず。淳風の茅茨を剪らす、采椽を斲らざるを貴ぶ。蓋世功を成すの項羽に比すと云ふと雖も、惜む可し不幸短命の顏淵に似たることを。去つて後木枯の森、深秋寂寞。今に至るまで田籠の浦の佳月、㋺嬋娟三城の帳、昇平の夢に屬し、一曲の鈴、悵望の心に關る。因つて懷ふ公幕府に居ることを。萬里の春、逐客の來るに從ひ、十年の花、佳人の老を送る。圖らざりき、吾れ齋筵に赴かんとは。願はくは言れ居易、兜率に歸せんことを。胡爲れぞ裴休于闐に生

と名を等しうす、吟詠總て六萬首に及ぶ。宮內卿從二位に進み、壬生二位と稱す。

㋪石曼卿は宋代の奇士也、常に古人の奇節偉行非常の功を慕ひ、世俗を見る屑々として其の志を動すに足るもの無し、常に落々として酒を呑んで自ら志を放にす、曾て濟州金鄕縣に知たり、其の文章勁健、雄逸甚だ見るべきものあり。

㋲羿は古の射の名人。

㋝夏、商、周をいふ、禮記に、「三代の禮は一なり、民共に之れによる」と。

㋜うめききしること。

㋑艸を刈るもの、薪をきるもの。

㋺あてやかなること。

まる、何の處の深林にか鷴を覓めん。倭國の富士、金華學士の句に入る、者の風顚漢虎鬚を捋づ。臨濟老師、黃檗先師の禪を倡ふ、其の夢幻泡影を觀ぜんよりは、若し㋩廣續普聯を挑げんに曷ぞ。此の山本色の住持を接して、妙門を掲示し正法を流通す。當處に歷代の祖師を呵して、直指を掃蕩し單傳を拂散す。什麽の默時說、說時默とか論ぜん、什麽の偏中正、正中偏をか談ぜん。陰陽不到の處に向つて、父母未生の前を會す。理上の工夫、事上の工夫を了じて、㋥陸亘が普願に見ゆるに依俙たり。棒下の正覺、喝下の正覺を成じて、韓愈が大顚に參ずるを㋭睥睨す。頓に衆罪の霜露を消し、直に自己の山川を領ず。也太奇也太奇。鑊湯爐炭を蹈倒して一步を動せず。勿可把勿可把。地獄天堂を打破して一拳を勞せず。濁世烏鉢を現じ、虛空鐵船を駕す。正與麽の時、香嚴童子出で來て妙語芳鮮、曰く、如上の所說、如かじ之れを棄捐せんには。大禪定門の受用三昧底、言を以て宣ぶべからず。洒洒落落として本分に歸田すと雖も、卽今英檀の孝心を感じて、此の法會に向つて象馭回旋す。之れに緣つて無量の化菩薩、袂を挹き肩を拍つ。山野旃れを瞻仰し、旃れを讃歎し、小祇夜一篇を以てす。

　木人涙落つ暮春の天、光景遷ると雖も物遷らず、聽くや燒香無譜の曲、松風聲度る㋬十三絃。」

㋩廣燈、續燈、普燈、聯燈の五燈ある僧傳。

㋥陸亘大夫、南泉普願禪師に法を受く。

㋭なゝめに見る、にらむこと、史記に「睥睨して故らに久しく立つ」とあり。

㋬十三年遠忌の緣語を用ろ也。

㋣北斗星のあるところをいふ、又はめぐる道。

㋠他の作りし詩に相和して作るをいふ、次韻、用韻、依韻の三體あり、次韻は原韻の儘和

景川和尚三十三回忌の香語　　松岳和尚

那伽三十有三年、舌上の龍泉(小)斗躔を衝く、道ふ莫れ先師に此の語無しと、黃鸝啼破す綠楊の煙。

松岳和尚の(子)韻に和す　　相國寺恕西堂

伊陽洛を隔つ幾多年ぞ、仰ぎ見る德星の今躔に聚ることを、一雨過ぐる時百花發く、春風吹き起す鷓鴣の煙。

して前後易ふることなきをいふ、用韻は原韻を用ふるも前後に拘泥せざるなり、依韻は原作と同韻中にある文字を用ひ、必ずしも原韻の字を用ひざるなり、また用韻依韻とを合せて和韻といひて、次韻に對する說もあり。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之四　終

圓滿本光國師見桃錄卷之四

遠孫比丘衆等重編

預請の秉炬

西隱秦公座元預求二百年後秉炬語一

透過百二十秦關、無所從來那處還、石火電光追不レ及、等閑踢倒鐵圍山、共惟、西隱秦公座元、形容枯槁、手段輭頑、制二大鼇於滄海、接二靈鷲於塵寰、或時向孤峯頂盤二結草庵、口吞二三世佛、或時開二一心田、剗二除荊棘、業滅二五無間、到二這裏、用二甚麼德山棒・臨濟喝、管二什麼釋迦富・彌勒慳、雖二然如レ是、別要レ聽二向上一曲子、麼、丙丁童子高擊節、虛空唱起菩薩蠻、咄。

東陽院頭月岑珠公首座下火　預請

一顆明珠本自圓、徑雲深處出二龍淵、鐵鎚擊碎後消息、臘月花開火裏蓮、夫惟、東陽院殿月岑珠公首座、有レ權有レ實、無レ黨無レ偏、學二東陽清規、則綿二蕝野外、參二南方佛法、則擒二住風顚、首座行レ道、威音已前、生死卽涅槃、水流元入レ海、涅槃卽生死、月落不レ離レ天、正與麼時、說二什麼聲聞果緣覺果、論二什麼如來禪祖師禪、若未レ然、聽二火把子敷宣、拋二火把、此是長生眞秘訣、冰桃結レ實歲三千、

喝一喝。

賢仲啓聚首座預請百年後秉炬語

地獄天堂一聚塵、塵塵解脫本來人、好和西嶺千秋雪、鐵鑄梅花火裏春、夫惟、賢仲啓聚首座、截流香象、衝浪錦鱗、利自利他、膝下黃金、用之無盡、殺佛殺祖、眉間寶劍、磨而不磷、打破涅槃明鏡、脫卻生死苦輪、箇箇立在轉處、密密把定要津、舜若多神面皮黑、燈籠開口笑閭閭、雖然恁麼、向上一路如何指陳、拋火把、溪聲廣長舌、山色清淨身、咄一咄。

鳳林超公書記下火　預請

泥洹一路轉身時、石火電光猶鈍遲、地獄天堂昨宵夢、風驚花落杜鵑枝。　夫惟、鳳林超公記室禪師、濁世烏跋、叢林白眉、懸肘後符而雖避禍、讀禪本草而未得醫、佛日慧日頓破癡暗、大藏小藏僅拭瘡痍、積翠强設三關、屋頭山色豈非清淨、永明誤唱六字、門前湖水即是寶池、凡聖不留、朕迹自他何隔毫釐、露裸裸赤條條、全無菩提之可證、清寥寥白的的、寧有生死之應離、脚下踏著實地、機前踢倒須彌、緊要時節、向上鉗鎚子、如何提持去、拋火把、紅爐放出鐵烏龜、喝一喝。

秀岳梵才書記下火　預請

此是宗門直指才、當機踢倒涅槃臺、無陰陽地春風轉、火裏優曇朵朵開、夫惟、秀岳梵才書記、居翰墨任、負棟梁材、提撕多福話頭、三年受用、只栽竹、漏泄少室祖意、一日工夫半為梅、生也石火光中、留不住、死也閃電機裏、喚不回、觸向上鉗鎚下、虛空消鐵山摧、到這裏何物恁麼去、

何物恁麼來、書記還會麼、拋火把、燈籠沿壁上天台。

大初最公藏主下火　預請

最初一句、末後牢關、直透過看、綠水青山、夫以、大初最公藏主、道肥貌瘦、年老心閒、掌大小藏鑰、列東西序班、方袍藟苕、圓頂栴檀、位超十地已上、前叢芍藥、後生茉莉、時丁二佛中間、因則用因、果則用果、愚而不愚、頑而不頑、破草鞋三文兩文、雲無心出岫、折拄杖七尺八尺、鳥倦飛知還、此是藏主平生著力底、若復向上轉、文殊普賢失其境界、德山臨濟猶隔塵寰、到這裏說妙罪過罪過、道禪慚顏慚顏、撒手長空外、可望不可攀、雖然恁麼、虎斑易見、誰窺人斑、拋火把、闍麼、雪峯南趙州北、還鄉曲菩薩蠻、咄一咄。

掬月軒主德良藏主預請秉炬語

良男矣七佛之師、倒跨金毛獅子兒、忽解轉身底時節、一聲吼裂五須彌、夫惟、掬月軒主、不重先聖、何拘舊規、仙山五色瑞雲、鍊不老藥、寶泉一滴甘露、洒破戒卮、應變自在、殺活臨時、三千刹界袈裟、橫拽竪拽、十二街頭尺八、順吹逆吹、拄杖作舞、燈籠開眉、如來禪祖師禪、掬水月在手、煩惱濁衆生濁、弄花香滿衣、畢竟是何物、端的不相知、此是藏主平日作略、更有格外玄機、試看山僧提持、拋火把、咄咄咄、萬投爐中鐵蒺藜。

慶寶藏主百年後下火

寶相眞如體本然、百年三萬六千遷、無端觸著棒頭去、東海鯉魚跳上天、寶藏主寶藏主、涅言不生、翡翠蹈飜荷葉雨、寶藏主寶藏主、槃言不滅、杜鵑啼破竹林煙、拋火把、向上一路、佛祖不

傳、咄一咄

明谷昉公侍者預請秉炬語

此郎廿五白雲端、倒跨驢兒活路寬、吹起少林無孔笛、還郷一曲萬年歡、夫惟、明谷昉公侍者、青燈燒盡、黃卷讀殘、南山有一條鼈鼻蛇、擒縱與奪、西川出八角烏頭子、甘苦辛酸、其參如來禪易、蓋會祖師意難、即佛即心、何待彌勒五月之降誕、非生非滅、疾入瞿曇雙樹之涅槃、鐵圍圌百雜碎、百雜碎鐵圍圌、虛空翻筋斗、日月轉朱欄、抛火把、會麼、昉侍者昉侍者、倒卻門前刹竿、喝一喝。

賀屋玄慶禪人下火　預請

金襴傳外事如何、慶喜問端嚇葉波、向刹竿頭轉身去、蹈翻教海與禪河、慶禪人還會麼、若道會得、達磨不會禪、梅瘦占春少、若道不會、瞿曇已成道、庭寬得月多、會不會都來是錯、滅不滅畢竟非佗、淨躶躶絕承當、空空空時眞也不立、赤洒洒沒窠臼、玄玄玄處妙也須呵、水自竹邊出、風從花裏過、喝一喝、石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌。

三翁德惠庵主下火　預請

竺乾猛將陣堂堂、惠劍光寒三尺霜、生死涅槃秋一夢、火中菡萏覺猶香、惠庵主惠庵主、恁麼承當、倘復來承當、頻呼小玉只要檀郎、輭語魯直坐帷帳中、或時燕寢螺甲、沈水隨身兜率、裏袈裟角、或時魚行酒肆婬坊、看麼、山色清淨、聞麼、溪聲廣長、驀直轉去、莫涉思量、不通凡聖、把定封疆、雖然如是、欲到向上田地、山僧爲擧揚、擲火把、昆侖奴齊怒發、推倒門外金剛。

柏庭祖永尼首座下火　預請

永劫無明淨法身、法身覺了御生塵、到頭霜夜前溪月、龍女寶珠磨不礙、夫惟、柏庭祖永尼、市中卜隱、屋裏藏春、傳松源餘波於海東外、施蘭溪剩馥於河內民、蓋以、吾首座到靈樹、而勝尼長老住聖因、有餘涅槃、無餘涅槃、花間作夢雙胡蝶、大善知識小善知識、棒頭敲出玉麒麟、不立迷悟、把定要津、恁麼時節、說什麼阿鼻依正、論什麼苦海沈淪、生涯洒洒落落、心地歷歷明明、此是祖永大姉、斷送三萬日、使得十二辰底、別要會西來意、待柏樹子成佛、向汝指陳、舉火把、虛空驟筋斗、燈籠笑闇闇、拋火把、団。

久庵桂公尼首座下火　預請

少林嫫桂久昌昌、蓋覆眞丹與搏桑、昨夜毘嵐忽吹倒、百年一夢醒猶香、夫以、久庵桂公尼、精神可掬、意氣難當、末後牢關、是放開是捏聚、本來面目、非濃抹非淡粧、截斷生死、拋金剛王、塵塵無垢世界、步步涅槃會場、青山綠水、體露眞常、此是大姉開受用、若要向上轉去、別聽山僧舉揚、拋火把、黃金鑄出崑崙鐵、火裏龜毛數尺長、咄一咄、

宗銀尼首座下火　預請

天堂地獄假銀城、遊戲神通傀儡棚、春夢一場頻喚起、曉鶯枝上出花聲、夫惟、寶生尼寺住持宗銀尼首座、大姉晚節難保、坤德利貞、少林門下總持得肉、法華會上菩薩求名、一枝佛法的的、百草祖意明明、無山不帶雲、人人具足、有水皆含月、箇箇圓成、須彌燈王佛入鍼孔、勝熱婆羅門出火坑、會麼、拋火把、莫認自己清淨、直踏毘盧頂行、喝一喝。

檀溪宗香尼首座下火　預請

法身堅固本來香、郁郁乎薰徹十方、試滅却心頭火看、鑊湯爐炭自清涼、夫惟、檀溪宗香尼、溫面輭語、石心鐵腸、散花天、勘破維摩默默、半杓水、賺過末山孃孃、無明卽明、燒栴檀木而奪猗蘭之臭氣、諸相非相、貪桃李實而忌梅花孤芳、出生入死、不存窠臼、戒皮定肉、一任分張、正與麼時、撈倒丙丁童子、棒殺閻羅大王、丈夫作略、誰肯抵當、雖然恁麼、更有眞歸處、聽取山僧擧揚、拋火把、玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦、咄一咄。

桃谷周仁尼首座下火　預請

千年桃核舊時仁、觸惡鉗鎚絕點塵、欲到靈雲不疑地、花開空劫以前春、夫惟、桃谷周仁尼、預爲未來苦果、頓了佛性三因、臨靈山法華會中、則壓倒無垢勝光佛、觸洋嶼麤竹篦下、則冷笑秦國大夫人、或時南方界戢化、或時北斗裏藏身、赤灑灑斷紅絲線、活鱍鱍碎鐵磨輪、雖然漝麼、千聖不傳處、要到大休歇地麼、試聽火把子指陳、拋火把、雲破月來花弄影、寒山拍手笑閭閭、喝一喝。

玉英祥璠尼首座下火　預請

大乘法器魯璵璠、本有圓成君自看、末下一鎚鎚碎了、青山月上影團團、夫惟、玉英祥璠尼、似竹有節、如環無端、春入嶺梅、村獦獠盧能、打破明鏡、雪埋庭柏、野狐精達磨、蓋却空棺、悉有佛性、不受佗瞞、淨躶躶絕承當、說甚眞如解脫、赤灑灑沒窠臼、論什麼菩提涅槃、雖然恁地、向上還有事、吐露心肝去、拋火把、石女雲中作舞、木人奏萬年歡、咄一咄。

桃雲宗悟尼首座下火　預請

不分迷悟絕凡聖、百歲光陰春夢中、春夢醒來無一事、桃花依舊面皮紅、夫惟、桃雲宗悟尼、心鏡清淨、戒珠玲瓏、瞥轉一氣、具劉鐵磨作略、掃除五障、踊憍曇彌遺蹤、智行運動、理事圓融、文殊無二文殊、胸中吉祥宅、彌勒有半彌勒、天上兜率宮、了了了時、霞穿碧落、玄玄玄處、月拂清風、會麼、石火莫及、電光罔通、拋火把、喝一喝。

花屋宗因尼首座下火　預請

這野狐精不昧因、六雄峯下解髑身、無端蹈倒涅槃窟、鐵樹花開火裏春、夫惟、花屋宗因尼、透金剛圈、轉鐵磨輪、掃除濁世粃糠、馬祖簸箕跳不出、祕在形山一寶、龍女明珠磨不磷、幻生幻滅、放開線路、不去不來、截斷紅塵、更有送行句、聽山僧指陳、拋火把、夜深一片虛欞月、寫出梅花面目眞露。

春芳宗椿尼首座下火　預請

莊椿一萬六千歲、昨夜毘嵐吹倒來、試聽無上眞曲調、花開胡蝶舞三臺、夫惟、春芳宗椿尼、形如枯木、心似死灰、透過兜率三關、則葵花無眼隨日轉、觸著臨濟一喝、則芭蕉無耳聞雷開、鑊湯爐炭一時滅、劍樹刀山一時摧、是甚麼時節、看看、燈籠露柱笑哈哈、錯錯。

雲仲心祥尼首座下火　預請

劈破率陀天上雲、臨行一朶好呈君、龍華三會夢中說、殘漏聲沈曉色分、祥首座祥首座、夢中說還聽取麼、三世諸佛亦說夢、前臺花發後臺見、六代祖師亦說夢、上界鐘清下界聞、山僧亦

說夢、漆園胡蝶若箇分影、末後慇懃、槐國螻蟻多少作群、生死涅槃猶昨夢、脫卻鐵枷三百斤、淨躶躶沒拘束、赤洒洒絕功勳、與麼時節、阿鼻獄卻成夢宅、丙丁童子笑閻閻、喝一喝。

希溪善灌尼首座下火　預請

迅機截斷灌溪流、末後牢關去不留、但看百年三萬日、槿花半照夕陽收、夫惟、希溪善灌尼、欺補佛晉、瞞鐵磨劉、博究毘尼、學西天苾蒭草、帶累先聖、劈東福多子榴、是則總持得肉、非則演若失頭、玄玄玄處又須呵、不入涅槃清淨行者、了了了時無可了、不墮地獄破戒比丘、五逆消滅萬機罷休、拋火把、會麼、向上那一路、何處覓蹤由、喝一喝。

前住明禪玉宗琳尼藏主、預請百年後秉炬語

百歲光陰瞬息中、五蘊非有又非空、鍼鋒頭上轉身路、歸便可歸兜率宮、夫惟、宗琳尼、截斷衆流、瞞偃跛腳、扶起正法、慕岳瓚翁、一雙胡蝶上葵花、堅固法身有長有短、兩箇黃鸝啼翠柳、眞如自性無始無終、赤洒洒沒拘束、淨躶躶絕羅籠、與麼時節、向上那一句、如何爲君通、拋火把、看看、丙丁童子面門紅、喝一喝。

一宗秀統尼藏主下火　預請

釋門正統苾蒭尼、冷笑少林尼總持、夜半有人負將去、鍼鋒頭上五須彌、夫惟、一宗秀統尼、預示鶴林滅度相、不待龍華下生時、掃除眼裏花、則劍樹刀山卽眞如界、滅卻心頭火、則鑊湯爐炭變清涼池、到這裏、說甚麼五障、論什麼三祇、機輪轉處閃電猶遲、尼藏主還會麼、拋火把、欲問花來處、東君亦不知、喝一喝。

寶山珍尼藏主下火　預請

祕在寶山滄海珍、靈光一點不緇磷、無端和郤紅爐雪、百錬將來色轉新、夫惟、寶山珍尼藏主、坐斷末山頂、推轉鐵磨輪、淸淨本然、十方三界世尊面、常照寂爾、萬象之中、獨露身頭頭、顯露物物、全眞不通線路、把定要津、雖然恁麼、更有向上宗乘事、試聽山僧指陳、抛火把、白灰撥出玉麒麟、喝一喝。

月心宗珠尼藏主下火　預請

衣裏明珠不琢磨、一鎚鎚碎看如何、大千俱壞底時節、放下全身與火蛇、夫惟、月心宗珠尼、舌轟霹靂、辯瀉懸河、一路涅槃門、有水含月、十方薄伽梵、無風起波、藏身北斗、託夢南柯、箇箇圓成、說甚麼現在佛過去佛、人人具足、論什麼煩惱魔生死魔、了了了時沒交涉、玄玄玄處早蹉過、雖然如是、末後一句、還會得麼、抛火把、石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌。

悅巖宗忻尼藏主下火　預請

一踢踢飜生死海、一拳拳倒涅槃堂、棚頭傀儡百年夢、牽得無絲玉線長、夫惟、悅巖宗忻尼、釘觜鐵舌、錦心繡腸、娑婆卽是華藏、伽耶豈非寂光、杜鵑啼破落花村、赤洒洒沒拘束、翡翠蹈飜荷葉雨、淨裸裸絕承當、雖然恁麼、向上宗乘一著、試聽山僧擧揚、抛火把、安禪未必須山水、滅郤心頭火自涼、喝一喝。

摠持開基頓庵宗圓尼大姉下火　預請

少林門下摠持尼、元自圓成了頓機、再見何勞百年後、殘花啼落杜鵑枝、夫惟、摠持開基頓庵

宗圓大姉、短世風驚雨過、刹那物換星移、鵲噪鴉鳴、要檀郎喚小玉、牛搏馬蹈、拽鐵磨到大潙、機輪轉處、閃電猶遲、淨躶躶赤洒洒、說甚兜率泥犂、也奇快也奇快、咋夜有力者、疆雞負須彌去、抛火把、咦、

速緣妙淨禪尼百年後下火語

鍊出舍那淸淨身、紅爐焰裏絕纖塵、放開線路通消息、雨過靑山色轉新、夫惟、速緣妙淨禪尼、預懼苦果、蚤修良因、婆子燒庵正好趕出、倩女離魂那箇是眞、生也、樹呈風體態、死也、波弄月精神、涵之不濁、磨而不磷、雖然恁麼、要到向上田地、試聽山僧指陳、抛火把、咄咄咄、冷灰撥出玉麒麟。

琴溪妙泉禪尼下火　預請

先天有物徹黃泉、自性彌陀易地然、無所從來無所去、擧頭殘照住居西、夫惟、琴溪妙泉禪尼、迷雲盡心月圓、人向靜中忙、勘破臺山婆子、路從平處嶮、瞞卻趙州老禪、掉廣長舌八十餘年、白滴滴淸寥寥、蹈倒涅槃一路、淨躶躶赤洒洒、截斷生死兩邊、到這裏說甚五障、論甚十經、雖然恁麼、向上卻有事、聽山僧敷宣、抛火把、木人石女叫希有、臘月花開火裏蓮、喝一喝。

月渚明圓禪尼下火　預請

一輪心月本來圓、明鏡非臺輝碧天、無孔鐵鎚鎚碎了、江南野水白鷗前、夫惟、月渚明圓禪尼眉宇秀發、和氣藹然、三世妙德尊稱智母、五障娑竭女號華鮮、捨邪歸正、顯實開權、加之、淸淨行者不入涅槃、破戒比丘不墮地獄、鷺鷥衝破竹林烟、莫就錯錯錯、須呵玄

玄玄禪尼還會麼、抛火把、向上一路千聖不傳、咄一咄。

春榮慶壽尼大姉下火　預請

閻浮壽盡百年移、蹈倒泥洹活路來、一點塵埃何處著、火蛇呑卻五須彌、夫惟、春榮慶壽尼大姉、水中乳味、泥裏摩尼、或底繞路說禪、喚木塔作老婆子、或底當陽直指、瞞林際稱小厮兒、其人如金如玉、磨不磷涅不緇、生也春風桃李花開日、死也秋雨梧桐葉落時、淨躶躶割定肉、赤洒洒脫戒皮、萬機休罷、佛祖不知、向上轉去、莫涉多岐、與麼時節、大姉還會麼、抛火把、會不會都來錯、江月照松風吹。

雲林宗怡尼大姉下火　預請

直把雲林作鶴林、紅爐煉出紫磨金、無端入得如來地、一段靈光照古今、怡大姉怡大姉、從門入者匪自家珍、心卽是佛、佛卽是心、心外求佛、海底摸鍼、淸淨行者、不入涅槃、聽雨寒更盡、破戒比丘、不墮地獄、開門落葉深、別有向上那一竅、大姉向何處叅尋、抛火把、石女舞成長壽曲、高山流水絕知音、喝一喝。

芳室見春尼大姉下火　預請

一場春夢百年榮、地獄天堂客路程、到得歸來無別事、杜鵑啼落月三更、夫惟、芳室見春大姉、栴檀圓頂、桂籍芳名、親聞鶴樹終談、能持苾芻尼戒律、不待龍華初會、自作桃花色衆生、豈假修證、本來圓成、權大乘實大乘、火熱水冷、棒正覺喝正覺、電卷雷轟、說甚麼眞如佛性、論甚麼聖解凡情、石女舞長壽、木人歌太平、雖然與麼、別有少林那一曲、莫唱陽關第四聲、抛火把、須

彌座下烏龜子、直踏毘盧頂上行、喝一喝。

古柏宗庭大姉下火　預請

庭前喫盡黄金草、這老牸牛無鼻巴、忽到潙山拗折角、化成火裏牡丹花、夫惟、古柏宗庭大姉、出三界獄、離五蘊家、説死説生、彷彿炎天梅蘂、如夢如幻、依俙雪裏蕉芭、截斷脚下紅線、脱卻項上鐵枷、吾宗無語句、不須口吧吧、抛火把、犀因翫月紋生角、象被驚雷花入牙、喝一喝。

慈德庵春溪明榮大姉下火　預請

榮耀如花花似夢、夢中三萬六千春、靈光不昧涅槃月、影在浮雲淺處新、夫惟、某名、以慈爲宅、維德有隣、預怖當來苦果、茲修現在勝因、有時轉七軸蓮、教壞八歳龍女、有時拈一莖草、熱瞞丈六金身、卽心卽佛、全假全眞、常啼誤東請、善財强南詢、鐵壁銀山不通凡聖、愛河欲海把定要津、正與麼時、生死去來本無住處、地獄天堂豈立纖塵、亦條條空索索、口吧吧笑誾誾、此是明榮大姉平生如幻三昧底、卽今向火焰裏轉大法輪、諸人還看麼、倘或未委悉、試聽山僧指陳、抛火把、白灰拂出紅麒麟、錯錯錯。

太虛理圓大姉下火　預請

本是圓成那一佛、靈光不昧古來今、忽然寂滅現前處、雨洗殘紅新綠深、夫以、太虛理圓大姉、外少緣飾、内持戒禁、三萬六千日前、繡工夫、爲梅香魂入夢、三萬六千日後、開受用、栽竹塵事無心、打破獼猴鏡、抛擲翡翠簪、加之、總持扣少室、投機强分皮髓、德雲在別峯、相見何勞參尋、放開線路、官不容針、生魔死魔、去粘解縛、男相女相、點鐵成金、到這裏説甚麼七凹八凸、論什

骸四大五陰、別有轉身句、試聽火把子發獅子音、拋火把、末山頂日杲杲、鐵磨輪風凜凜、喝一喝。

玉江道琳禪定門下火　預請

不待虛空落地時、活機前蹈倒阿毘、黃頭碧眼無間夢、蘿月松風一任吹、夫惟、玉江道琳禪定門、瑚璉有價、琳琅無玭、隨緣眞如、不變眞如、雪裏芭蕉摩詰畫、分段生死變易生死、炎天梅蘂簡齋詩、展則徧十法界、收則呑五須彌、與麼時節、說什麼人空法空、淨躶躶天無四壁、論什麼眞諦俗諦、赤洒洒地絕八維、泥洹一路莫涉多岐、拋火把看看、紅爐放出鐵烏龜、喝一喝。

越州太守雲江守慶居士下火　預請

掃蕩魔軍百萬兵、七花八裂涅槃城、凱歌一曲忽歸去、屋後松風愈好聲、共惟、越州太守雲江守慶居士、義井汲古、心地研精、厥勇也、丕學六韜、如張子房從黃石、厥節也、不仕二主、似司馬氏於淵明、紅屋劍三尺、白髮雪千莖、此郎就予求號、吾師爲他安名、再修龍潭舊房、萬年作計、假示鶴林滅度、三日先庚、平生轗頑手段、通身金剛眼睛、在聖同聖、在凡同凡、青山無限好、逢佛殺佛、逢祖殺祖、黃河徹底淸、空空空畢竟空、何物恁麼死、錯錯錯都來錯、何物恁麼生、喝、更有向上那一著、試聽取山僧施呈、拋火把、須彌倒跨識馬、踢飜丙丁童行。

神野氏雙月慧晃居士下火　預請

不生不滅涅槃門、門外青山月一痕、舜若多神驚吐舌、火蛇呑卻鐵崑崙、夫惟、神野氏雙月慧晃居士、承南嶽祖、稱東海孫、道家蓬萊、縮弱水三萬里、神野種草、詠出雲八重垣、擘倒維摩居

士、罵呵大覺世尊、放行則虎穴魔宮一喝喝散、把住則鶴樓鸚洲一踢踢飜、淨躶躶亦洒洒、離窠臼、絕籠樊、更有向上宗乘事、吾不惜齒牙餘論、拋火把、聞麼、杜鵑啼破落花村、錯錯、

宗靖居士百年後下火

火把打圓相、第一達磨陶靖節、不修蓮社不參禪、人人本有圓成佛、秋菊春蘭易地然、夫惟、宗靖居士、騎射兩得、文武兼全、竺土黃面老、說一卷兵書、運籌決勝、林際白拈賊、施三玄戈甲、執銳被堅、意氣奔雷霆、眼睛輝坤乾、世緣淺分道根深、黃太史稱五祖、天魔降分波旬伏、韓京兆參大顛、超菩薩第十地、入居士不二門、有餘涅槃、無餘涅槃、作活計於鬼窟、半字知識、滿字知識、試妙手於龍泉、鐵圍圖百雜碎、華甲子萬斯年、別有轉身處、山僧欲重宣、拋火把、倒鞭鐵馬春風裏、抹過須彌最上巔、喝一喝、

玉麟宗仁居士下火　預請

能仁元是大醫王、壽域萬年開八荒、試看五千貝多葉、願神換骨一靈方、夫惟、玉麟宗仁居士、烏豆啄吻、狼毒肝腸、佐使君臣、諳本草經於佛日、焙乾生熟、學炮炙論於滿堂、點四味平胃散、名一念相應湯、能除邪氣、忽治顛狂、面染瘴煙、瞞木瓜之呆風子、力拯良社、欺人參之司馬光、或時用八火、而煉般若波羅蜜、或時除三熱、而抹知見解脫香、瀉實補虛、味和脾胃、沈空滯寂、病入膏肓、幻生幻滅、無病著艾、持齋持律、禁物絕粮、能殺能活、任吾愚老、患聾患盲、還他謝郎、菩提果熟、安心藥良、雖然與麼、至聖命脈、不屬陰陽、仁居士仁居士、冬來事如何商量、拋火把、疎山作略將軍令、依舊京師出大黃、

心源宗徹居士下火　預請

西江吸盡徹心源、葬倒龐蘊居士門、到得歸來底時節、杜鵑啼過落花村、夫惟、心源宗徹居士、武門閥閱、法社藩垣、此郞託迹於蓬島、其先賜姓於菅原、振丈夫威雄、則溟鵬展九萬里名翼、參大善知識、則野狐離五百生精魂、碧岩集昔燒卻、黃石書今尙存、有餘涅槃無餘涅槃、水枯雪盡、棒下正覺喝下正覺、電卷雷奔、不求諸聖解脫、豈借閻王平反、淨躶躶赤洒洒、明杲杲晴昏昏、更有眞般若、無說又無言、會麼、拋炬、入得火光三昧看、黃金鑄出鐵崑崙、喝一喝。

前豐州太守和智氏太成宗功居士下火　預請

此郞今代一英雄、未上麒麟先識功、無所從來無所去、夕陽長在我西紅、夫惟、前豐州太守、具棟梁質、抱葵藿忠、威振十方、譬如漢隆準公起於沛邑、名喧四海、恰似宋執拗夫出于元豐、忽遇家國興盛、永誓山河始終、或時截生死流、提臨濟三尺劍、或時築威音梁、拄石鞏一張弓、箭鋒相拄、毒氣以攻、白的的兮淸寥寥、不隔娑婆華藏、淨躶躶兮赤洒洒、莫管地獄天宮、千佛一數、廣額兒拋刀子、萬法不侶、龐居士叫心空、有末後句、更爲君通、拋火把、泥牛吼月、木馬嘶風、喝一喝。

江州建部左典厩鐵船宗堅居士下火　預請

法身堅固鐵團圝、觸著吾鉗鎚下看、百雜碎兮百雜碎、凉風吹月上欄干、共惟、某名、折衝筆陣、拜將詩壇、騰茂飛英、置朝廷上、則三槐九棘、深根固蔕、在山林中、則十蕙一蘭、將謂江州白司馬、由來宛陵梅都官、天女散花惟新、毘耶老居士假示病、宗師落草且爾、瑞岩主人公何受瞞、

或時能武能文、雲門紅旗風偃、或時殺佛殺祖、林際金剛霜寒、踢飜泥洹一路、莫渉生死兩端、雖然與麼、更有顚神妙術、爲君報平安去、拋火把、倒把一枝笛、吹起萬年歡、喝一喝。

寂知宗空居士預請百年後秉炬語

向太虛空駕鐵船、須彌頂上浪滔天、大唐載得歸來看、紅海棠開秋日西、夫惟、寂知宗空居士、才華銷俗、釣築收賢、法法圓融、裴相國傳心於黃檗、塵塵解脫、陶醉漢皺眉於白蓮、將謂、先天地有物、元來離淨土無禪、或時峭峻孤危、禪板蒲團、用不得、或時遊戲三昧、舞衫歌扇、舊因緣、雖羨回也稱儒門知識、卻笑軾乎作人間謫仙、楓葉落兮荻花乾、萬機休則全歸方寸、松風吹兮蘿月照、一念起則早隔大千、拗折涅槃四柱、莫渉生死兩邊、錯錯錯、都是錯、玄玄玄、須呵玄、雖然與麼、更有宗乘向上事、試聽山僧敷宣、拋火把、雨中看杲日、火裏酌清泉。

義翁宗高居士下火　預請

日照高山遍界明、一人無復暗中行、網珠垂範雜華藏、開眼看來乾闥城、夫惟、義翁宗高居士、韜光鏟彩、覃思研精、邪正難分、天魔外道、了八萬劫因果不昧、野狐精魅、脫五百生、撞着崑崙鼻孔、突出金剛眼睛、兜率權設三關、擘開華嶽連天色、瞿曇不說一字、放出黃河徹底清、轉身自在、受用縱橫、欲識端的、莫渉多程、雖然與麼、更有末後句、聽山僧施呈、拋火把、滄浪之水濁兮、可以濯吾足、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、喝一喝。

天眞宗守信男預請秉炬語

眞如自性守天眞、元是金剛不壞身、一夢百年三萬日、花開桃李火中春、夫惟、天眞宗守信男、

預懼苦果、逆修良因、起居動靜、六時念佛、綸詞燕嘗、四序賽神、唐朝白文殊、參鳥窠師、蒲牢夜吼、宋家黃達磨、見晦堂老、桂花露匀、證涅槃不住涅槃、清風拂殺明月、示生死不染生死、溪水截斷紅塵、不通凡聖、把定要津、木人高奏長壽曲、燈籠開口笑閭閭、雖然恁麼、更有向上宗乘、試聽取山僧指陳、擲火把、色色只仍舊、青山雨後新、喝一喝。

寶隣宗善信男預請百年後秉炬語

善惡都來莫思量、阿爺面目露堂堂、百年壽盡後消息、火裏蓮華遍界香、夫惟、某名、維時丁大法之季運、其家保積善之餘慶、捐釋迦於東土、念彌陀於西方、打破涅槃城、直觸梅陽竹篦子、截斷生死縛、倒提林際金剛王、淨躶躶赤洒洒、離窠臼絕承當、雖然恁麼、若要向上轉去、試聽眞正擧揚、擲火把、三足金烏飛入海、曉天依舊照扶桑、喝一喝。

春岳宗英信男下火　預請

蝸牛角上一英雄、心地收來汗馬功、吹作紅爐焔中雪、刀山劍樹落花風、夫惟、某名、才兼文武、節克始終、豎五位槍旗、其先昔傳洞山顯訣、用三玄戈甲、此老今與臨濟正宗、架龜毛箭、張兎角弓、或時殺佛殺祖、寶劍光寒、塵塵解脫、或時鍊凡鍊聖、金鎚影動、物物圓融、出涅槃窠窟、脫生死羅籠、本來圓成、麻矢直蓬矢曲、當陽直指、李花白桃花紅、恁麼不恁麼、一口吸盡西江水、不恁麼恁麼、一棒打破太虛空、雖然如是、保祐後昆底一句、試問取丙丁童子去、拋火把、而陳王霸龍庭上、手抜乾坤虎口中。

泰岳宗韓信男百年後秉炬語

一韓摧佛佛何摧、端的捨邪歸正來、劫火洞然毫末盡、泰山依舊碧崔嵬、夫惟、泰岳宗韓信男、繼箕裘業、負棟梁材、截生死流、風塵三尺劍、學文武道、丹心一寸灰、法爾如然、鶴脛長鴨脛短、無常迅速、牛頭沒馬頭回、掀翻阿鼻獄、踢倒涅槃臺、赤洒洒離窠臼、淸寥寥絕纖埃、雖然與麼、保祐後昆底活句、元亨利貞德大哉、拋火把、倒把少林無孔笛、和風吹落一枝梅、咄一咄、

春澤宗光禪定門下火　預請

靈臺不昧發靈光、映徹乾坤絕覆藏、喚醒閻浮百年夢、曉鐘月落一聲霜、夫惟、春澤宗光禪定門、備陽華族藤家棟梁、全假全眞、晦堂接黃太史、而示月中桂子、如夢如幻、南泉召陸大夫、而指庭前花王、穿鼻換眼、倒腹傾腸、無明卽明、鑊湯爐炭、眞如地諸相非相、劍樹刀山古道場、赤洒洒全沒窠臼、淨躶躶何守封疆、燈籠吞盡露柱、泥人搊倒金剛、雖然恁麼、向上宗乘事、只要重商量、拋火把、安禪未必須山水、滅卻身心火自涼。

義江光忠信男下火　預請

白髮丹心畎畝忠、金湯法社立全功、呵呵拍手好歸去、失脚蹈翻都率宮、夫惟、義江光忠信男、在家菩薩、亂世英雄、苦樂逆順、道在其中、生死涅槃、芭蕉葉上無愁雨、擒縱與奪、電光影中斬春風、不入佛界魔界、頓了人空法空、淨躶躶赤洒洒、離窠臼絕羅籠、此是光忠禪定門行履處、猶有梅花路未通、拋火把、門外金剛白汗出、丙丁童子面皮紅、喝一喝。

但州太守大用宗碩信男下火　預請

百年一枕黑甜餘、索索凉風秋入墟、大用現前無軌則、龍泉射斗犯淸虛、共惟、但州太守大用

宗碩信男、世緣雖淺、俗氣未除、是故香至季子、求大乘器於赤縣東、暗失隻履、竺乾猛將、構涅槃城於金河側、徒說兵書、依俙用松源黑豆法、彷彿畫輞川雪芭蕉、無滅無生、證得火光三昧、卽空卽假、會盡物我一如、恁麼轉去、莫敢蹦跳、拋火把、呑卻乾坤鐵眼魚、喝一喝。

覺林宗圓信男下火　預請

光呑萬象月孤圓、心外求心錯果然、生死涅槃無別路、等閑踢倒率陀天、夫惟、覺林宗圓信男、時節因緣、莫待柏樹成佛、當陽直指、頻掃落葉單傳、正覺喝下、寂滅現前、說甚七顚八倒、論甚五蓋十纏、雖然恁麼、保祐後昆底活句、試聽火把子敷宣、拋火把、擧頭殘照在、元是住居西、喝一喝。

績芳宗繼信男下火　預請

武門閥閱繼箕裘、亂世英雄獨拔尤、生死涅槃是常事、一刀兩段截凡流、夫惟、績芳宗繼信男、調羹補袞、跨竈衝樓、眞如隨緣、二乘聲聞沈空寂、邪見卽正、五逆調達結寃讎、燈籠開口、露柱點頭、更有末後句、汝聽取、我焉廋、拋火把、碧眼黃頭會不得、野梅風定暗香浮、咄。

荊叟宗玉信男下火　預請

玉本圓成絕緇磷、求之轉遠不求臻、形山信手劈開了、萬里無雲月一輪、夫惟、荊叟宗玉信男、承村上帝稱源朝臣、法社金湯、跨臨濟大龍、拗折頭角、武門梁棟、觸洋嶼黑蚖、脫卻凡鱗、殺佛殺祖、全俗全眞、了了了時、干甚溪聲廣長舌、妙妙妙處、莫認山色淸淨身、畢竟從門入者、不是家珍、敎我如何說、無物堪比倫、拋火把、錯、春草池塘夢、昨花今日塵、錯錯。

希道宗弘信男下火　預請

截斷生死、寶劍光寒、閃電擊石、不移多端、夫惟、某名、文韜武略、義膽忠肝、輔佐人主、立孤爲難、京師復舊、置世泰安、魯直穿鼻、認著蟾桂、王老說夢、指示牡丹、露電泡影作如是觀、預修冥福、懼報應殫、是故五逆達多、頓出地獄、千佛廣額、直證涅槃、鬼畜人天、同歸一致、迷悟凡聖、全無兩般、須彌崩倒、大海枯乾、希道希道、一期願後如何相看、秋風索索葉落歸根、聞麼、木人把笛奏萬年歡、咄一咄。

道本禪門下火　預請

人人本有圓成佛、輝古騰今、放大光、觸惡鉗鎚出爐鞴、黃金色上更添黃、道本禪門、耳邊看麼、山色清淨眼處聽麼、溪聲廣長、打破虛空、奪芭蕉拄杖子、截斷生死、提林際金剛王、正與麼時節、說甚麼無明煩惱、論甚麼地獄天堂、赤洒洒無寘臼、淨躶躶絕承當、別有宗乘向上事、來吾與汝商量、拋火把、鳥啼人不見、花落木猶香、喝一喝。

石窓秀堅大姉預請秉炬

堅固法身無變遷、鍼鋒頭上定坤乾、打開末後牢關子、月落金雞一拍天、夫惟、石窓秀堅大姉、欺河陽新婦子、瞞濟北老風顛、金沙灘頭約馬郎、上菩提樹上無明樹、靈山會上接龍女、說當體蓮說譬喩蓮、休休休、百年壽盡後、妙妙妙、一漏未發先、或時放去收來、泥牛耕破瑠璃地、或時出生入死、玉兎挨開碧落門、須彌翻筋斗、虛空翻鐵船、更有眞歸處、聽山僧敷宣、拋火把、擧頭殘照在、本是住居西、咄一咄。

聞溪宗音大姉下火　預請

此方眞敎在音聞、傾倒心腸說與君、諸佛出身那一路、靑靑脩竹送南薰、夫惟、聞溪宗音大姉、始終一節、末後慇懃、尼摠持得吾肉、仙陀婆出其群、隨緣眞如、不變眞如、有水皆含月、觀照般若、實相般若、無山不帶雲、拗折拄杖七八尺、脫卻鐵枷三百斤、正與麼時、還覺寒毛卓豎麼、紅爐焰裏雪紛紛、

江甫秀淸大姉下火　預請

法身淸淨本然體、大地山河活眼睛、金鴨香消人不見、頻呼小玉是何聲、夫惟、江甫秀淸大姉、受老瞿曇遺敎、慕尼摠持芳名、恁麼不恁麼、分成六和合、不恁麼恁麼、本是一精明、生也佛界魔宮紅爐雪、死也地獄天堂乾闥城、左轉右轉、逆行順行、看看、毘盧頂上月白風淸、咄一咄、

天慶元祐大姉預請百年後秉炬語

百年幾許保天祐、生死涅槃春夢中、打破虛空無一事、鷓鴣啼亂落花風、夫惟、天慶元祐大姉、胸鑒映徹、戒珠玲瓏、少林門下尼摠持、意氣相齊、法華會上大愛道、記莂全同、八識七情、風來波浪起、三從五障、日出乾坤融、眞如不變、豈有始終、正與麼時、無明煩惱非他物、正法眼藏在汝躬、赤洒洒沒窠臼、淨躶躶絕羅籠、此是元祐大姉、平常受用底、即今鍼鋒頭上翻筋斗、火焰裏現神通、看看、拋火把、妙處欲言言不及、海棠雨過夕陽紅、喝一喝

惟淸了圭大姉下火　預請

白圭無玷本來圓、祕在形山一百年、拈得分明與人看、華鯨吼破夕陽天、夫惟、惟淸了圭大姉、

內持晚節、外謝塵緣、穿玉線金針、笑口種氏說鴛鴦敎、把藥爐經卷、瞞秦國太參蚌蛤禪、丈夫意氣、捏聚大千、幻化空身即法身、花猶風雨後、無明實性即佛性、松只雪霜先、正與麼時、認什麼泥洹一路、涉甚麼生死兩邊、舉火把、會麼、龍女變成男子處、枝頭露重火中蓮、喝一喝。

古梅妙林大姉下火　預請

蹈飜地獄與天宮、死路通時活路通、此是少林眞一曲、三千剎界落梅風、夫惟、古梅妙林大姉戒乘俱急、心境混融、菩提坊裏病維摩、□□□□金沙灘頭鎖子骨、誦經玲瓏、三賢十聖如電拂、四大五蘊本來空、空非空色非色、始無始終無終、上透霄漢下絕己躬、正與麼時、說什麼冥官鬼主、論什麼黃頭碧眼、雖然妙林大姉、畢竟如何研窮去、拋炬、劫火洞然毫末盡、青山依舊白雲中。

蘭室理秀大姉下火　預請

蘭有秀兮菊有芳、法身邊事露堂堂、夜來吹送涅槃雨、不滅心頭火自凉、夫惟、蘭室理秀大姉、能學緇禮、掃除彩糚點出三心、笑臭婆子接德嶠、消得五障瞞尼長老住戒香、平生作略意氣難當、是故寂然不動、如春在花、了了無分曉、眞如隨緣、似月印水、玄玄玄、沒商量、透關萬重、或擒縱或與奪、還鄉一曲非角徵非宮商、正好著力打破黑漆桶、直得臨行拋擲金剛王、這箇理秀大姉平生開伎倆、舉火把、別看勝熱婆羅門放大光、咄、紅日照扶桑。

心田永安大姉下火　預請

眼界平時心地安、三更紅日黑漫漫、豈爲倒著孃生袴、火裏梅花吹雪寒、夫惟、心田永安大姉、

越裳翡翠、摩利栴檀、五障本空、脫卻項上枷鎖、百年如夢、指示庭前牡丹、寄迹於洛汭、假道於邯鄲、加之、或時在龍女宮中、聽是文殊說法、聽非文殊說法、或時入蟭螟國裏、與善知識相看、與惡知識相看、易易、轉凡成聖易、難難、轉聖成凡難、生也、鐵壁迸開雲片片、死也、黑山輥出月團團、永安大姉驀直去、太無端、若要向上事、應作如是觀、擲火把、一把柳絲收不得、和風搭在玉欄干。

陽甫玄春大姉下火　預請

不待威音空劫春、無根樹子著花新、毘嵐昨夜忽吹倒、大地茫茫愁殺人、夫惟、陽甫玄春大姉、名珪無類、樵鏡絕塵、生也、蝴蝶夢中家萬里、死也、翡翠簾前月一輪、不通凡聖、把定要津、玄春大姉、正與麼時、向何處著渾身去、拋火把、須彌跨跳鉞鋒上、丙丁童子笑誾誾、喝一喝。

穩庵芳春禪定尼下火　預請

喚起一場春夢婆、落花啼鳥百年過、無端吹滅心頭火、月白風淸安樂窩、夫惟、穩庵芳春禪定尼、腳踏實地、心澄劫波、開甘露門、採菽拯青提女、設楞嚴會、甘蔗度摩登伽、不施寸刃、殺盡魔佛、不隔毫端、忘了自他、說甚麼生死涅槃、驪珠光燦爛、論什麼無明煩惱、蟾桂影婆娑、更有向上那一路、試進得一步麼、拋火把、石女舞成長壽山、木人唱起太平歌、喝一喝。

雪溪宗春信女下火　預請

風驚雨過百年强、心火滅時心自凉、啼鳥落花人不見、一場春夢覺猶香、夫惟、雪溪宗春信女、錦心繡口、鐵肝石腸、如水有源、賜姓稱淸和之苗裔、似禪歸海、擇師得鄧林之棟梁、黃河誓帶

岷江濫觴、或時截生死流、赤洒洒沒窠臼、或時超如來地、淨躶躶絕承當、到這裏說甚麼無明煩惱、論什麼地獄天堂、不通線路、把定封疆、雖然恁麼、保祐後昆底一句、試聽山僧舉揚去、拋火把、自家頻掃門前雪、莫管他人屋上霜、喝一喝。

全室宗盛信女下火　預請

百年三萬六千霜、盛者必衰人不常、漏盡鐘鳴底時節、泥犂兜率黑甜鄉、夫惟、全室宗盛信女、懐胎兎子、擇乳鵝王、具截流機、秦國夫人參洋嶼、起救世願、鎖骨菩薩嫁馬郎、見性不隔羅縠、試我莫以革囊、煩惱卽菩提、水自竹邊流出冷、娑婆卽華藏、風從花裏過來香、向上宗乘事、直下承當去、喝一喝、拋火把、安禪未必須山水、滅卻心頭火自涼。

壽岳宗永信女下火　預請

王母蟠桃祝永年、神仙祕訣錯流傳、崑崙核子果何物、今日看來火裏蓮、夫惟、壽岳宗永信女、奕葉競秀、貞節彌堅、靈山會上龍女、號華鮮如來、捨邪歸正、金沙灘頭馬婦、化鎖骨菩薩、赴感隨緣、入眞如界不住眞如、花猶風雨後、在生死中不染生死、松只雪霜先、虛空裂落地、須彌跳上天、雖然恁麼、與後昆底一句、試聽山僧敷宣、拋火把、臨濟命根元不斷、一條紅線手中牽、喝一喝。

梅屋妙薫信女下火　預請

諸佛出身活路開、薫風昨夜自南來、無端吹作紅爐雪、六月炎天一朶梅、夫惟、梅屋妙薫信女、掃除五障、消得三災、說法度生、應身如來、鶴林唱滅、拔苦與樂、積行菩薩、龍門曝顋、見性猶隔

羅縠、遺骨強撥冷灰、了了了時乾坤窄星辰黑、玄玄玄處虛空消鐵山摧、妙薰妙薰、是甚麼時節、抛火把、石女舞成長壽曲、燈籠露柱笑哈哈、喝一喝。

春榮壽椿信女下火　預請

莊椿閱世八千歲、胡蝶園中一刹那、無說無聞眞般若、燈籠開口念摩訶、夫惟、春榮壽椿信女、拜神少門受草袈裟、盛者必衰、雖示鶴樹滅於甘蔗氏、熾然常說、不待龍華會於迦葉波、物物全眞、無數飛花圓通境、塵塵解脫、兩三脩竹安樂窩、從前閒絡索且置、向上宗乘如何、抛火把、白鷗不受人間暑、江上淸風吹雨過、喝一喝。

松溪宗貞信女下火　預請

貞節彌堅克始終、眞如佛性絕如同、丙丁童子呵呵笑、三十三天活火紅、夫惟、松溪宗貞信女、本然淸淨、內外玲瓏、諸佛出興、水浮天、天浮水、世尊入滅、風拂月、月拂風、生死去來、全無住處、苦樂逆順、道在其中、正與麼時節、說甚麼千生萬劫、論什麼五障三從、轉身自在八達七通、雖然恁麼、欲知向上事、須參教外宗、抛火把、看看、一棒打破太虛空、喝一喝。

景雲壽慶信女百年後秉炬語

地獄天堂一夢中、掃除五障絕三從、凡鱗脫盡底時節、其面華鮮婆竭龍、夫以、景雲壽慶信女、觀世間相、歸敎外宗、隨緣眞如、不變眞如、煙鎖翠竹、觀照般若、實相般若、風吹幽松、了了了時是何物、玄玄玄處莫留蹤、雖然恁麼、聲前一句君聽取、抛火把、靑山不改舊時容、咄一咄。

宗光信女下火　預請

萬機休不住無心、一段靈光亘古今、向上鉗鎚纔下手、都盧大地變黃金、宗光宗光、還消得萬兩黃金麽、煩惱卽菩提、截蜂房作獅子窟、婆婆卽華藏、變荊棘成栴檀林、木人暗穿玉線、石女密度金針、抛火把、要聽無生那一曲、三千里外絕知音。

芳室宗繼信女下火　預請

截斷手中絲線長、繡成端的兩鴛鴦、涅槃生死春宵夢、枕破斜紅覺尚香、夫惟、芳室宗繼信女、露芽蘭秀、晚節菊芳、本是一精明、華鮮如來現龍女、分作六和合、鎖骨菩薩嫁馬郎、天無蓋地無載、昔不生今不亡、淨躶躶出窠臼、赤洒洒絕覆藏、燈籠跳入露柱、泥人撈倒金剛、要識向上宗乘事麽、打破鏡來、與爾商量、抛火把、少林媆桂久昌昌、喝一喝。

桂雲昌慶信女預請百年後秉炬語

火把打圓相、獻珠龍女太顢頇、不信一鎚鎚碎看、鐵壁迸開雲片片、黑山輥出月團團、昌慶信女、還會麽、當陽直指、不涉多端、昔甘蔗先生出西方、而布法華於一由旬、袈裟下藏毒藥、後香至大士、入東海而泛慈航於十萬里、平地上起波瀾、說甚麽三車火宅、認什麽隻履空棺、三世心不可得、將心來爲汝安、雖然恁麽、百年壽盡後、應作如是觀、知見立知、卽無明本、知見無見斯卽涅槃、抛火把、喝一喝。

花溪宗春信女預請秉炬語

驚起一場春夢婆、百年光景鳥飛過、虛空昨夜叫希有、火裏花開優鉢羅、夫惟、花溪宗春信女、燕爾[illegible]淡、溫然氣和、三萬猊牀、維摩臥病於毘耶室、五千貝葉、瞿曇示滅於尼連河、作衆生母、

降煩惱魔、本來面目露堂堂、梅瘦占春少、金剛眼睛烏律律、庭寬得月多、當陽直指端的會麼、拋火把、石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌、喝一喝。

瑞甫清珍信女下火　預請

從門入者不家珍、龍女寶珠磨不磷、直下出頭天外看、淨雲散處月光新、清珍清珍、是甚麼是甚麼、溪聲廣長舌、山色清淨身、不立迷悟、把定要津、正與麼時、三世諸佛、向火焰裏轉大法輪、雖然如是、更有歸處、試聽山僧指陳、咄咄咄咄、白灰撥出玉麒麟。

梅窻理清信女下火　預請

直得純清絕點時、機輪轉處電光遲、丙丁童子叫希有、火裏優曇和雪吹、夫惟、梅窻理清信女、愛物無黨、莅民有慈、法華會中、倒跨五臺獅子、無垢世界、忽化八歲龍兒、直入涅槃一路、何涉生死兩岐、公案現成、荷葉團團團似鏡、當陽直指、菱角尖尖尖如錐、淨躶躶地、不挂寸絲、雖然恁麼、向上還有事、山僧說向誰、拋火把、欲問花來處、東君亦不知、咄一咄。

心源宗清信女下火　預請

放出心源徹底清、清寥寥地太分明、一條界破轉身路、直蹈毘盧頂上行、夫惟、心源宗清信女、山川鍾秀、閭里向榮、露柱懷胎、鹿足感般若之說、明珠在掌、龍女受菲鮮之名、直證佛果、豈墮凡情、弄花香滿衣、遊戲神通、解脫國土、步岳風吹面、剎那滅卻、阿鼻火坑、正與麼時、說甚三從五障、論甚萬劫千生、雖然恁麼、末後那一句、如何施呈去、拋火把、頻呼小玉元無事、只要檀郎認得聲。

天章宗清信女下火　預請

火把打圓相、直得浮雲絕點時、一輪明月自清奇、不離當處南方界、龍女寶珠還我來、夫惟、天章宗清信女、掃除五障、化育二儀、隨緣眞如、不變眞如、荷盡巳無擎雨蓋、觀照般若、實相般若、菊殘猶有傲霜枝、到這裏、說甚菩提煩惱、論甚兜率泥犂、雖然恁地、要聞向上那一句麼、拋火把、針眼魚呑卻須彌、咄一咄。

和仲妙春信女下火　預請

生死涅槃春夢婆、天堂地獄亦南柯、當陽直指君聽取、風攪楓林一雨過、夫惟、和仲妙春信女、燒香禮佛、挂鏡降魔、苦海慈航、濡首化度五障龍女、昏衢慧炬、慶喜逢著四果登伽、單傳霜寒、流蓬落葉、大法秋晚、折葦枯荷、誰家不春、塵塵隨身兜率、有水含月、物物唯心彌陀、無佛處不得住、玄玄玄窟須呵、從前閑絡索且措、向上宗乘事如何、拋火把、驪珠光燦爛、蟾桂影婆娑、喝一喝。

大有宗豐信女下火　預請

從二神開豐葦原、至今天地是同根、泥犂兜率春閨夢、醒後簾前月一痕、夫惟、大有宗豐信女、精神雪潔、笑語春溫、畫混沌眉、拈臘岳生苔蒂、滅正法眼、鼓密庵破沙盆、暗穿祖師鼻孔、明徹諸佛心源、無餘涅槃、泥牛耕破瑠璃地、不昧因果、玉兎挨開碧落門、百丈山一拳拳倒、四大海一踢踢飜、那箇眞底倩女離魂、拋火把、紅爐一點雪、鑄出鐵崑崙、

保天慶祐信女預請下火語

火把打圓相、坤德至哉天祐之、始終一節不曾移、隨行唱起還鄉曲、莫向風前歌竹枝、夫惟、保天慶祐信女、掃除五障、化育二儀、其人如金如玉、短褐不磷不緇、生也、春風桃李花開夜、死也、秋雨梧桐葉落時、淨躶躶赤洒洒、離生死絕去來、恁麼不恁麼、毛呑巨海、不恁麼恁麼、芥納須彌、驀直轉去、莫涉兩岐、雖然如是、山僧向痛處重下鍼錐、擲火把、力囫希、咄咄咄、紅爐放出鐵烏龜。

海雲宗龍信女百年後秉炬語

火把打圓相、出生死海脫龍鱗、元是如如淨法身、一陣清風掃明月、從門入者不家珍、夫惟、海雲宗龍信女、胸中不芥、眼裏無塵、其德也如金如玉、其行也不緇不磷、四大本空、紅英掃地風驚曉、五蘊非有、綠葉成陰雨洗春、鍼眼魚呑石佛、丙丁童笑誾誾、更有向上宗乘事、試聽休上座指陳、拋火把、千峯萬岳雲收後、翡翠簾前月一輪、喝一喝。

德陰妙性信女下火　預請

成佛還他見性人、無陰陽地絕纖塵、夜來月入半江去、龍女寶珠磨不磷、夫惟、德陰妙性信女、茲蒭草種、桃花色民、慕大慧禪、際臨濟中興之日、會永明旨、値彌勒下生之辰、允矣、則天皇后化迹記否、秦國夫人舊因、彩鳳舞丹霄、打破涅槃古鏡、清風拂明月、脫卻生死苦輪、轉凡作聖、弄假像眞、淨躶躶絕承當、針鋒頭翹足、火焰裏藏身、喝一喝、雖然恁麼、穫蔭後昆底活句、試聽休上座指陳、拋火把、揭諦波羅僧揭諦、故家喬木又逢春。

覺林妙等信女下火　預請

平等一如如法門、百千妙德接心源、須彌跨跳入鍼眼、八角磨盤空裏奔、夫惟、覺林妙等信女、移風換俗、抱子弄孫、其芳隣也、左以花右以竹、其貞節也、兄有梅弟有礬、理智圓融、說甚麼始覺本覺、與奪自在、管什麼上根下根、端的雙收雙放、畢竟非亡非存、和黃鶴樓一拳拳倒、把鴛鴦湖一踢踢飜、此是妙等信女、眞履實踐處、百年壽盡後消息、聽取火把子重論、拋火把、拾得紅爐一點雪、黃金鑄出鐵崑崙、喝一喝。

花屋周林信女下火　預請

鶴林示滅二千年、山色如灰花似烟、元是圓成那一佛、木人石女叫蒼天、夫惟、花屋周林信女、觀有情世間事、了無生一大緣、七賢女問死屍於尸陀林、有時盡矣、八歲龍唱正覺於無垢界、易地皆然、虛空裏飜筋斗、須彌頂駕鐵船、洛陽是兜率、風吹南岸柳、娑婆卽華藏、雨打北池蓮、峭巍巍孤迥迥、離窠臼出蓋纏、上件底且措、達磨爲甚不會禪、喝一喝。

月溪妙秋信女下火　預請

秋風昨夜動乾坤、葉落樹凋歸本根、和卻心空那一火、黃金鑄出鐵崑崙、夫惟、月溪妙秋信女、美玉無價、赤繩定婚、摩耶爲千佛之母、則天稱三會之尊、生死涅槃、翡翠蹈飜荷葉雨、眞如實相、玉兎挨開碧落門、拋火把、喝一喝。

宗眞信女下火　預請

試看孃生面目眞、窻中眉黛遠山新、無端打破曹溪鏡、放出天邊月一輪、夫惟、宗眞信女、唱南無佛、效西子顰、隨緣眞如、不變眞如、翠竹風冷、觀照般若、實相般若、黃花露匂、如金如玉、不緇

不磷、雖然恁麼、從門入者不是、那箇是自家珍、抛火把、鋮鋒頭翹足、火焔裏藏身、喝一喝。

宗龜信女下火　預請

紅爐放出鐵烏龜、皮裏骨那骨裏皮、不屑當時大隋老、草鞵生猴上天來、夫惟、宗龜信女、鋮鋒翹足、苕帚閪眉、徹自性源、則攪黃河成酥酪、滅心頭火、則變鑊湯作寶池、意氣堂堂、一踢踢飜四大海眼、光爛爛、一拳拳倒五須彌、到這裏、無菩提可證、無生死可離、石火不及、閃電猶遲、向上轉去、莫涉多岐、咄一咄、抛火把、欲問花來處、東君亦不知。

春芳妙榮信女下火　預請

朝榮暮辱共成空、今日顏非昨日紅、生死涅槃一場夢、天堂地獄大槐宮、夫惟、春芳妙榮信女、無偏無黨、克始克終、接總持尼、達磨分張皮髓、逢登伽女、慶喜撫摩蛭躬、眞如佛性、顢頇儱侗、縱放般若光、蚌蛤含天上明月、雖得定慧力、蚊虻弄空裏猛風、淨躶躶赤洒洒、不受諸方維籠、掃除三從五障、直得八達七通、透金剛圈、吞栗棘蓬、雖然如是、要識轉身處、問取丙丁童、抛火把、喝一喝。

妙蓮信女百年後下火語

夢幻空花一百年、風驚雨過刹那遷、回光返照自看取、露滴清香火裏蓮、夫惟、妙蓮信女、消滅五障、脫離十纏、將謂、金沙灘頭鎖骨、元來無垢世界華鮮、鋮鋒頭上五須彌、石女起作舞、地獄門前鬼脫卯、扇子跳上天、恁直轉去、莫涉言詮、會麼、抛火把、向上一路、千聖不傳、咄咄咄。

宗祐信女下火　預請

半熟黃粱夢蝶牀、回頭三萬六千場、明明說與西來意、紅槿花前欲夕陽、夫以、宗祐信女、精神雪潔、貞節菊芳、五障本空、文殊代佛度龍女、兩願成就、觀音作婦約馬郎、蕩滌罪垢、經卷流水、截斷生死、慧劍秋霜、亦洒洒沒窠臼、淨裸裸絕承當、雖然如是、向上還有事、我爲汝擧揚、擲火把、安禪未必須山水、滅卻心頭火自凉、喝一喝。

心月妙性信女預修三十三白忌冥福之次、更請百年後秉炬語

佛性元來無變遷、不論時節與因緣、請君離卻指頭看、月在靑天夜夜圓、夫惟、心月妙性信女、劫波雖濁、晩節彌堅、翠袖佳人、竹動疎壁、畫眉京兆、花滿細川、夫與留美名於身後、不如修冥福於生前、赤豆兩車、唱無量壽百萬、玉函七軸、轉妙法華一千、愼終追遠、三十三年、無明卽明、對普廣王說鴛鴦敎、諸相非相、接秦國太露蚌蛤禪、出涅槃窠窟脫生死蓋纏、燈籠入露柱、虛空駕鐵船、雖然恁麼、更有向上宗乘事、試聽山僧敷宣、拋火把、雨中看杲日、火裏酌淸泉。

西夕明慶信女預請百年後下火語

元是徐慶積善家、光明照徹盡河沙、試看大用現前處、火裏優曇一朶花、夫惟、西夕明慶信女、神潔氷雪、語帶煙霞、栽松嗣根、五祖之兒託周氏、甘蔗惡孽、千佛之母稱摩耶、心生種種法生、淡閨洞房、枕上化蝶、心滅種種法滅、地獄天堂、杯中假蛇、頓出三界火宅、直駕一乘大車、雖江月照、被曉風遮、亦洒洒沒拘束、淨裸裸絕諦訛、要知末後句、聽金口吧吧、拋火把、會麼、夕陽長在我西斜、咄一咄。

希西唯心信女下火　預請

卽心卽佛一精明、吹滅阿毘大火坑、若認檀郎千萬錯、頻呼小玉杜鵑聲、夫惟、希西唯心信女、出群拔萃、騰茂飛英、龍女號華鮮如來、改頭換面、馬婦化鎖骨菩薩、接物利生、轉身自在、遊戲縱橫、生死涅槃、落花三片五片、眞如實相、脩竹一莖兩莖、塵塵解脫、箇箇圓成、露堂堂月白、淨躶躶風淸、雖然恁麼、向上卻有事、端的爲君呈、拋火把、本一心常樂我淨、始一氣元亨利貞喝一喝。

渭川宗淸信女下火　預請

昔日種氏四十九年、三說鹿野賓始鶴林示終、爾來、乘地藏願輪、則外現聲聞、內祕菩薩、揮彌陀利劍、則上無攀仰、下絕己躬、出無明窠窟、破生死羅籠、木人太平歌、長樂鐘響花外、石女長壽曲、關山笛揚月中、塵塵解脫、法法圓融、雖然如是、向上還有事、一偈爲君通去、火把打圓、淸容獨秀內家叢、粉黛三千爭淡濃、無去無來無所住、夕陽長在我西紅、拋火把、喝一喝。

眞如妙性信女下火　預請

眞如妙性不曾移、昨夜虛空落地時、無所從來無所去、蟭螟呑卻五須彌、夫惟、眞如妙性信女、火中木母、泥裏摩尼、百媚千嬌、金沙灘頭馬婦、現鎖骨菩薩、三從五障、靈山會上龍女、稱華鮮如來、甚希有甚希有、也太奇也太奇、淨躶躶絕承當、說甚鑊湯爐炭、赤洒洒沒窠臼、論甚兜率泥犂、喝一喝、拋火把、杜鵑啼在落花枝。

古梅妙意信女下火　預請

祖師無意不西來、吹裂虛空鐵笛哀、休道少林消息斷、送行唯有一枝梅、夫惟、古梅妙意信女、

正因信淨、世相心灰、瞿曇三界之師、燈籠合掌、摩耶千佛之母、露柱懷胎、敎外別傳、葵花無レ眼隨レ日轉、喝下正覺、芭蕉無レ耳聽レ雷開、希有希有、奇哉奇哉、曹家女現二寶鏡臺一看看、本來無一物、何處惹二塵埃一拋二火把一咄一咄。

春芳妙榮信女下火　預請

百年富貴一場榮、風攪二落花一春夢驚、歸便可レ歸兜率路、杜鵑枝上月三更、夫惟、春芳妙榮信女、錦心繡口、玉振金聲、堅固法身、磨而不レ磷、涅而不レ緇、眞如自性、溷レ之不レ濁、澄レ之不レ淸、倩女離魂、那箇眞底、龐婆團圝共說二無生一、瀉二瑜伽法水一、滅二阿鼻火坑一、要レ知二敎外宗旨一、山僧爲レ汝施呈去、拋二火把一、誰家別館池塘裏、一對鴛鴦畫不レ成、喝一喝。

維馨宗苾信女下火　預請

無常迅速太無レ端、假二示雙林般涅槃一、此是孃生本來面月移二梅影上一欄干、夫惟、維馨宗苾信女、珠簾玉案、禪板蒲團、效二少林釁一則西施淡粧、除二非興化一持二首楞咒一、則摩登愛纏、逼二殺阿難一手携二壙中隻履一、脚倒二門前刹竿一、加之、初頓華嚴、後分華嚴、南詢善財成二正覺一、實相般若、觀照般若、東請常啼賣二心肝一、眞箇若未穩在、將レ心來與レ汝安、拋二火把一喝一喝。

渭川宗清信女下火　預請

鑊湯爐炭淸涼界、熱鐵洋銅安樂窩、佛法南方梅一點、驚レ人春色不レ須レ多、夫惟、渭川宗清信女、如二竹保一レ節、似二花養一レ和、無二山不一レ帶レ雲、則天下生彌勒、有レ水皆含レ月、豐干上品彌陀、入レ淨入レ穢、入レ佛入レ魔、天女散レ花、判二維摩憑於芻室一、古人題レ菊、示二涅槃相於金河一、了了了時無レ可レ了、玄玄玄處亦

須呵、雖然恁麽、末後事如何、抛火把、石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌、喝一喝。

芳園妙椿信女下火　預請

這一株無根大椿、花開花落幾回春、毘嵐昨夜忽吹倒、驚起南華夢裏人、夫惟、芳園妙椿信女、截髮陶母、斷機軻親、預懼未來兩果、逆修現在三因、聞麽、溪聲廣長舌、見麽、山色淸淨身、龐老登心空第、龍女獻無價珍、吾這裏密密密處不通凡聖、了了了時何分主賓、雖然恁麽、向上一句如何指陳、抛火把、只將補衮調羹手、撥轉如來正法輪、喝一喝。

玉浦妙珍信女下火　預請

火把打圓云、價直三千衣裏珍、靈光不昧絕緇磷、百年夢覺後消息、翡翠簾前月一輪、夫惟、玉浦妙珍信女、佛見忽盡、凡情已泯、繡彌勒前、入吾室受八齋戒、珠羅漢後、證聖位超二乘倫、鶴算龜齡、王母蟠桃結實、烏飛兎走、姮娥靈藥頤神、聞麽、溪聲廣長舌、見麽、山色淸淨身、雖然漝麽、倩女離魂、那箇是眞、若復不會、我指陳去、擲火把、冷灰撥出玉麒麟。

賢屋利養大姉下火　預請

長養功成不記年、浩然一氣自完全、眼光落地底時節、朶朶新開臘月蓮。

附　錄

後平城帝宸翰

朕、參禪年尙矣、祖師許多話頭古則、一一參究、一一證明、擧本有圓成話、而獲聞未聞焉、後一日在別峯、直與德雲比丘相見了也、從前參得底悟得底、一時瓦解氷消、洒洒地落落地、從是不受佛祖瞞、受用確乎得大安樂、此恩甚深、何日報謝盡、縷縷不宣、

天文壬寅五月十三日

大休上人禪室

大休和尙上

後平城帝法語

世尊付正法眼藏於摩訶大迦葉以來、不移易一絲毫、東西諸祖、的的相承、直至山僧也、恭以、日出處國、百六代　聖天子、參吾禪年尙矣、一日召再三請益、奏以本有圓成話、　陛下答處、百了千當、如珠走盤相似、山僧抵掌奏曰、徹矣、蓋冷笑蕭梁武帝、熱瞞李唐肅宗者、非　陛下其誰乎哉、願保寶祚萬安、永爲佛法檀越、珍重。

天文十一龍集壬寅迎佛會辰　奉詔住妙心臣僧宗休謹書

後平城帝圓滿本光國師徽號宸翰

朕曩時聞大燈正傳挑在師之室下詔迎師入内密參垂語受其示誨有年于玆矣得師印證之後欲以國師稱之未遂其志遺道風於北闕輯德化於西京本體如然靈光寔大人妙用也蓋例在日之旨以特賜之號稱之爲

圓滿本光國師云爾

天文十九年二月七日　御押

大休國師門徒等

後平城帝本有圓成國師徽號宸翰

朕召本光國師而參得關山祖拈得底本有圓成之公案得大機大用而今當祖忌二百年勅謚本有圓成國師以酬恩報德云爾

弘治三年三月十二日

徽笑塔下

大休號

宗休首座需別稱命之曰大休仍頌以爲證云

千峯勢到嶽邊止、萬派聲歸海上收、林下何曾換朝市、縱經塵劫不回頭。

永正元年十一月日　前大德特芳叟

住正法山妙心禪寺山門疏　東山雪嶺和尚製

正法山妙心禪寺山門、欽奉北闕綸旨、敦請前第一座大休禪師、住持本寺、爲國開堂演法、

祝贊皇圖萬安者、右伏以、法社擇師、海棠多甘棠少、學徒克己、初節易晩節難、久厭見膺浮圖、忽欣逢佳衲子、共惟、新命堂上大休大禪師、舌走霹靂、眼空乾坤、虛堂稱慧海航、心涵千古、洋嶼爲法門鼎、名重諸方、迺祖行道、獅擲象旋、後昆興家、鳳毛麟角、敎釁禪府、蚤檢永明百卷書、棒雨喝雷、晩佩臨濟三要印、疑慈氏之下兜率、類輪王之化閻浮、張蒼佐漢、呂尙相周、來赴勝會、皐陶歌虞、奚斯頌魯、仰祈丕圖、謹疏。　今月　日疏、　知事比丘、　頭首比丘、　勤舊比丘、西堂比丘。

同門疏　　慧峯湖月和尙製

同門玆審、正法山妙心禪寺、適虛主席、特降綸命、起大休禪師於德雲精舍、以補處、於是、昆季乎法系者、聞此盛擧、不堪忻抃、胥率製疏、從臾厥駕云、德雲相見別峯、有水皆月、虛堂徧歷諸老、誰家不春、寧曰知識難逢、其奈學者多惑、共惟、新命妙心大休大禪師、精神矍鑠、手段輕頑、面壁得髓、達磨拈華接大乘於赤縣、頌古垂示、雪竇落草評百則於碧巖、窺孔韋之玄、觸衡瘴之毒、牀角七八尺藤杖、寒時闍梨、熱時闍梨、擔頭一兩枝梅花、者箇行李、那箇行李、商量南方佛法、勃興東海兒孫、未墜先宗、是謂本色、住烏寺一巡罵祖、宜急度生、到鵞山連聲叫兄、莫如同志。

永正龍集丙子春三月　日疏

前大德宗恕　前妙心眞樹

前妙心宗繕　前妙心玄訥

前廣嚴永盉　　知慶　宗誌

前大德宗棟

住駿州大龍山臨濟禪寺山門疏

駿州路大龍山臨濟禪寺山門、欽奉大檀越源府君嚴命、敦請靈雲大休大禪師、住持本寺、爲國開堂演法、祝贊　皇圖萬安者、右伏以、虎丘振臨濟之正宗、聲西華山五千似駿河出圓通於安倍、冠東海道十四州、人待境境待人、聖希天天希聖、共惟、新命堂上大休和尚大禪師、名喧宇宙、語帶煙霞、吾師三門開堂、説法第一、智慧第一、曾祖四月入寺、住山八十、行脚八十、紫伽梨涵影禁池、烏跋華現瑞濁世、靈雲山頭古月、仰之彌高、洛陽城裏秋風、思不能忘、美哉牽陀、五鳳修造宜也、方丈大龍蟠居、邦君負弩而前驅、府主作疏以敦請、文至歐蘇、禪至妙喜、得百世師、俗若成康、壽若高宗、祝萬乘主、謹疏、　今月　日疏、　知事比丘、　頭首比丘、　勸舊比丘。

臨濟寺殿用山玄公大禪定門十三年忌拈香　就駿州臨濟寺修忌

前臨川江心西堂　天龍寺三秀院

這箇於過去、則號沈水佛度生、梅早而白、分身之身、法報應化、於現在、則稱香春佛、出世杏晩而紅、無説之説、刹塵熾然、凡同凡、聖同聖、方自方、圓自圓、栴檀世界栴檀、如來煒煒煌煌于東國土、薝蔔叢林、薝蔔圍繞、鬱鬱葱葱于西竺乾、本來無染至理絶詮、爇卻之酬師恩者、供養春日知識、秋日知識、插向之祝聖壽者、逢著、香山大仙、雪山大仙、江南螺甲、以爲淺俗、呉中鴎斑、

猶是腥羶、法從空處起、人向鼻端參、或時轉大法於九衢紅塵裏、材收佛宮餘、工有子來助、或時取沈材於一燧黃雲邊、功德具足八百、芬芳遍滿大千、薰籠字字相凝、寫出鷲嶺文龍宮藏、滿爐縷縷不絕、織成鷄足禰熊耳棉、冷笑趙宋善神几上現九代祖、泥視匡廬法師社中集十八賢、一雨普霑、大根大莖大枝大葉、諸漏已盡、非木非空非火非烟、將謂趙州柏樹、元來崑崙蘭茎、看看、用山大禪定門、憑這一炷薰力、脫卻三界蓋纒、直處與密敎敎主拔苦王同、坐斷華臺寶蓮、擧香云、信手拈來無別物、大龍山裏大龍涎、娑婆世界、南瞻部洲、大日本國駿河州居住、大功德主源朝臣義元、天文十有七年三月十有七日、伏値臨濟寺殿用山玄公大禪定門一十三白遠忌之辰、預就于大龍山、集緇流修白業、彫刻大日覺王尊像者一軀、法華妙典頓寫漸寫印寫若干部、水陸妙供圓通妙懺各一會、英檀自書壽量一品、且演出十如是於十首和歌、以筆墨成佛事者可尙矣、自餘作善、詳于僧官宣讀、今當散筵、嚴備香華・燈燭・茶菓・珍饈、謹命現前清衆、同音諷演究竟堅固無上神咒之次、拜請靈雲堂上大和尙、陞座說法、兼副命小比丘承董、焚這乾陀羅耶、供養本師釋迦牟尼大覺世尊、東方藥師醫王善逝、西方無量壽佛、今日敎主大日如來、當來下生彌勒尊佛、文殊普賢二菩薩、現座道場觀音大士、六道能化地藏願王、西天東土歷代傳法諸祖、開山七朝國師、日本國內大小神祇、天界地界冥府冥官、各各駢駢等、所集殊勛、奉爲大禪定門、莊嚴報地、滅除往愆、茲承、大禪定門、年未而立、易簀之日、讓國於英檀賢弟、維時禍難起蕭牆、一日之中、一戰而覇、措國家於泰山安、於是乎、營仁祠而山號大龍、寺扁臨濟、夜禪晝誦、淨侶之勤修者、不知其員、昔破庵與松源同出密庵門、爲一

門二甘露、破庵一傳至圓照、三傳至佛國國師、四傳至正覺國師、松源道至正法師祖五世、其昌、爾來、此兩派濫觴于大唐、彌綸于大倭、建法幢施法霈者不遑枚擧、蓋英檀創建當寺之始、勸請吾先國師、爲開山祖、以其先定光寺殿慕佛國道風、而師其迹者也、有所以哉、加之、大禪定門、與正法師祖異代同諱、僉曰、甚奇甚特、且復大原禪師爲龍山山主、晨鐘暮鼓、禮樂一新、月斧雲斤、輪奐盡美、頃日山門佛殿落成、施修鳳手、修造住持、說法住持、二難相并、今日適際此忌辰、而禪師傳英檀嚴命、拜靈雲老師陞座普說、山野亦附驥尾作蛙鳴、累世通家、左右逢源、了先師未了因緣者乎、桃花餘上巳風景於今朝、宜也說法使靈雲和尚師子吼後、木犀吐雙徑塢天香於三月、尀耐亂道令圓照遠孫野干鳴先、慚赧慚赧、共惟臨濟寺殿用山大禪定門、才色兼麗、忠孝兩全、今川之出源氏嫡流也、殑伽河・信度河・縛芻河・徙多河之衆水、不足窺其涯涘、用山之承清和後裔也、普賢山・仙人山・白墡山・負重山之奇峯、何敢望厥層巓、澄之不清、淆之不濁、仰之彌高、鑽之彌堅、子房是英、淮陰是雄、可輔金卯赤帝、趙昌之花、邊鸞之雀、不屑畫工黃筌、高枕者遠江州水聲近聽、凭欄則浮島原、山色遙連、善御乘夜白逸群、盡爲王良閭國好駿馬、平生臂海靑猛捷、常笑景升登臺呼鷹鶻、事美一時、語流千載、道光九野、德載八埏、談兵合吳合孫、孫子孟子、吳子論語、與家有文有武、武王春王、文王元年、華冑燁燁、瓜瓞綿綿、牡丹海棠不名、馳溫國年少譽、芝蘭玉樹鍾秀、擬謝家風流煽、難兄難弟成行、鴻鴈曰朋曰友、盈座貂蟬、地連三河之魏、景移八境之虔、振起泰範・範政之先緒、熟讀定家・家隆之遺編、曼卿豪於歌、歐陽豪於文、太白豪於詩、歌詞妙絕、芳聲藉藉、胡照得其骨、韋誕得其筋、索靖得其

肉、骨格超越、筆勢翩翩、遊藝則効薛嵩蹴鞠、學射則勝羿氏控弦、匪啻整三代禮樂、剏又執一世威權、獻治安策、著勳業鞭、河南河北從者無南無北、關東關西歸者自東自西、淸見潟台星照臨、雕輪咿軋、宇度濱天人降下、羽衣翩躚、駐之無叫、莫要去莫要去之鷓鴣、勸之有呼、不如歸不如歸之杜鵑、烟光凝淺間之嶽頂、橋聲報安倍之市鄽、草木禽獸借恩光、草木之主也、禽獸之主也、芻蕘雉兎沐寵渥、芻蕘者往焉、雉兎者行焉、偉哉臧孫有後乎魯、晉矣昭王致士於燕、胸中自有丘嶽、公餘多愛林泉、五郎易之六郎、昌宗望淸標於玉座、一人道安、半人鑿齒、引緇徒於門扇、修隣好而以投木李、以報瓊玖、貴淳風之不剪茅茨不斲采椽、雖云比蓋世成功之項羽、可惜似不幸短命之顏淵、去後木枯之森、深秋寂寞、至今田籠之浦佳月、嬋娟三城帳、厲昇平夢、一曲鈴關悵望心、因懷公居幕府、萬里春從逐客來、十年花送佳人老、不圖吾赴齋筵、願言居易歸兜率、胡爲裴休生于闐、何處深林覓鷓、倭國富士入金華學士之句、者風顚漢捋虎、臨濟老師倡黃蘗先師之禪、與其觀夢幻泡影、曷若挑廣續普聯、此山接本色住持、揭示妙門、流通正法、當處呵歷代諸祖、掃蕩直指、拂散單傳、論什麼默時說說時默、談什麼偏中正正中偏、向陰陽不到處、會父母未生前、了理上工夫事上工夫、依俙陸亙見普願、成棒下正覺喝下正覺、睥睨韓愈參大顚、頓消衆罪霜露、直領自己山川、也太奇也太奇、蹈倒鑊湯爐炭、不動一步、勿可把勿可把、打破地獄天堂、不勞一拳、濁世現烏鉢、虛空駕鐵船、正與麼時、香嚴童子出來、妙語芳鮮、曰、如上所說、不如棄捐之、大禪定門受用三昧底、不可以言宣、洒洒落落離本分歸田、卽今感英檀孝心、向此法會、象馭回旋、繇之無量化菩薩、挹袂拍肩、山野瞻仰旃讚

數旈、以₂小祇夜一篇₁。

景川和尚三十三回忌香語　松岳和尚

木人涙落暮春天、光景雖₂遷物不₁遷、聽麼燒香無譜曲、松風聲度十三絃。

和₂松岳和尚韻₁　相國寺恕西堂

那伽三十有三年、舌上龍泉衝₂斗躔₁、莫₂道先師無₁此語₁、黃鸝啼破綠楊煙。

伊陽隔₂洛幾多年、仰見德星今聚₂躔₁、一雨過時百花發、春風吹起鷓鴣煙。

圓滿本光國師見桃錄卷之四　終

國譯永源寂室和尚語錄

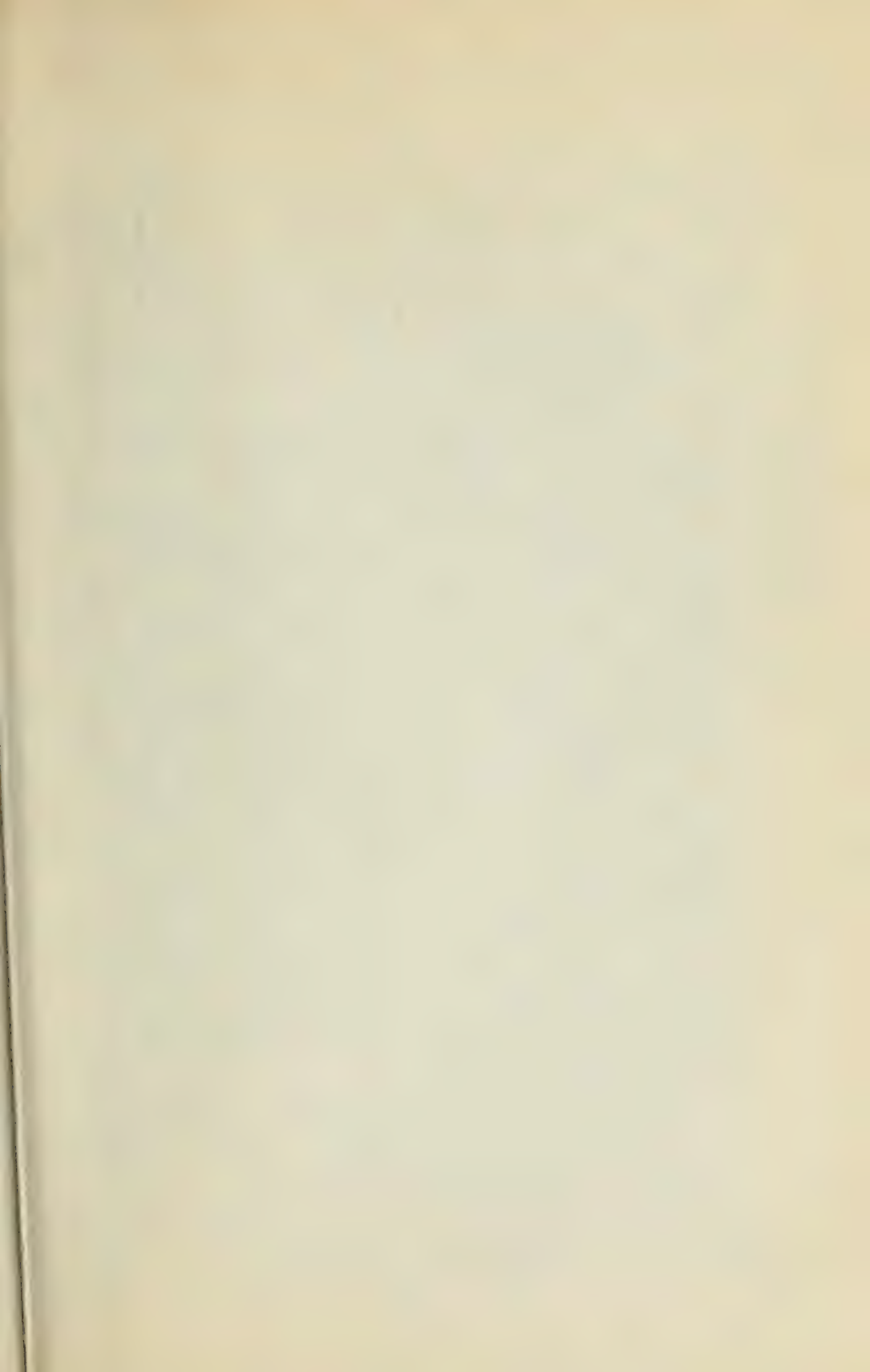
解題

寂室和尚語錄四卷は、近江國瑞石山永源禪寺の開山、勅諡圓應禪師寂室和尚一代の語要を輯錄したるものにして、卷之一及び卷之二には偈頌二百六十九首、佛祖贊八十四首及び自贊三十二首を收錄し、卷之三には小佛事三十四篇、說十九章及び書簡十五篇を錄し、卷之四には法語五十八篇、本錄刊行者性均の跋、增補一篇及び一絲文守和尚の筆に成る禪師の行狀記一篇を載せたり。編者は不明なれども、恐らくは師の侍者等の手に成りしものならん。師は天性超邁、特偉の資を以て殊に文辭に長じ、其の作る處の偈頌、法語等に到つては、咸、遊戲三昧の然らしむる所のものなり。今其の一二を採つて之を點檢するに、本錄第一卷の偈頌に、『重陽』と題して曰く、『凌レ晨掃レ葉立二庭際一、籬落西風露濕レ裳、時有二山童來採一レ菊、報言今日是重陽』と、又『書二金藏山壁一』の一首に曰く、『風攪二飛泉一送二冷聲一、前峯月上竹窓明、老來殊覺山中好、死在二巖根一骨也淸』と。何ぞ其れ措辭の絕妙、境界の自在なるや、恐らくは專門の詩家も猶ほ遠くこれに及ばざるべし。是を以て本邦禪林の語錄多しと雖も、本書の如く弘く世に流傳して、僧俗の間に愛讀せらるゝものは尠し。是れは皆其の宗旨を擧揚す

ると共に、文學的價値の甚だ優秀卓越せるが爲なり。

師の傳を案ずるに、諱は元光、字は寂室、俗姓は藤原氏、伏見天皇の正應三年五月十五日、美作國高田鄕に生る。天稟超慧、早歲にして父母の命に從つて京に上り、東福寺の無爲昭元に就いて出世の法を學ぶ。十五歲にして落髮受具し、後、近江の田上鄕に寓す。幾もなくして去つて關東に赴き、鎌倉禪興寺の約翁德儉(佛燈國師)に參ず。其の到るの日、儉曰く、「昨夜、夢みらく諸聖の降現して、光明山河を照燭す」と。卽ち名づくるに元光を以てす。德治二年、約翁、公命に膺つて建仁寺に移るや、師相從うて湯藥に侍す。一日、約翁不安なり、師問うて曰く、「如何なるか是れ末後の一句」と、翁、驀面に一掌す。師忽然として領悟す。時に十八歲なり。

延慶二年、約翁、鎌倉に歸る、乃ち師をして金澤の慧雲律師に就いて毘尼を學ばしむ。纔か三月にして其の梗概を盡す。また東里會、寧一山、東明日の三大老に謁して益々薰灼を承く。元應二年、師年三十一、支那天目山の中峯和尙の道價を聞いて、可翁然、鈍庵俊等と海を渡りて元に入り、直ちに天目山に登りて中峯和尙に謁し、尋で徑山の元叟端、保寧の古林茂、鷄足の淸拙澄、靈隱の靈石芝、般若の絕學誠、華頂の無見覩、天目の斷崖機等の諸大老に歷參し、皆其の推奬を蒙る。元の泰定三年(我が嘉曆元年)、船を發して長門の濱に歸著し、暫く三角に寓す。建武元年、備後國吉津の平居士、永德寺を創して師を招く。觀應元年七月、長勝寺の命あれども辭して就かず、歸朝以來、二十五年の間、俗喧を厭

ちて美作、三備の間に韜晦す。越えて同じく二年、攝津の福嚴寺に僑居し、又江州の往生院、美濃の東禪寺、甲斐の棲雲寺などに歷遷す。延文五年、師年七十一、江州の大守佐々木賴氏(雪江居士)、師の高德を欽慕し、奥島、雷谿の二境を獻ず。師、雷谿の幽邃なるを愛し、梵宇を締營す。山下の吏民、競ひ至りて役を執り、幾もなくして殿堂、樓閣、林際に聳立す、名づけて瑞石山永源寺と號す。是の時に當つて、四來の龍象來り從ふもの二萬餘人、皆巖に依り茅を結んで安居す。光明帝、屢々手詔を賜ふて其の德を旌す。又幕府、師をして建長、萬壽の席を董さしめんと欲すれども、辭して赴かず。帝、詔して天龍寺に住せしむ、當時、春屋妙葩、中巖圓月等、書を寄せて其の出世を趣がす。師固く辭して就かず。帝復た詔を下して法要を問ふ、師復た奏するに「法常禪師、馬大師に問ふ」の因緣を以てす、帝之を見て忻然たり。師嘗て僧に示すの偈あり、曰く、「箇事明々呈ニ似君一、不レ須特地策ニ功勳一、風和日暖黃鸝囀、春在ニ花梢一已十分」と。その詞藻の婉雅なること概ね此の如し。貞治六年、化緣應に終らんとして、弟子彌天、靈仲に命じて豫め祭文を作らしめ、九月一日、諸子を含空臺に集め、遺誡し紇つて、偈を書して曰く、「屋後靑山、檻前流水、鶴林雙趺、熊耳隻履。又是空華結ニ空子一」と、筆を投じて寂す。壽七十八、法臘六十六、勅して圓應禪師といふ。遺稿は本錄四卷の外、寂室法語一卷あり、附法の弟子は彌天永釋、松嶺道秀、靈仲禪英、越谿秀格、知庵元周等あり。猶ほ詳しくは本錄卷末の禪師の行狀を參看せられよ。

國譯永源寂室和尙語錄卷之一

偈頌（合計二百六十九首）

偶作。

無(イ)業一生莫妄想、瑞(ロ)巖只だ喚ぶ主人公、空山白日蘿窓の下、松風を聽き罷んで午睡濃かなり。

金(ハ)藏山の壁に書す。

此の閑房を借つて恰も一年、嶺雲溪月枯(ニ)禪に伴ふ、明朝下らんと欲す巖前の路、又何れの山の石上に向つてか眠らん。

風飛泉を攪(ホ)て冷聲を送る、前峯月上つて竹窓明かなり。老來殊に覺ふ山中の好きことを、死して巖根にあらば(ヘ)骨もまた淸し。

九月十三日、田原村に遊んで、茆舍に投宿す、同來の諸弟は、皆肱を曲げて寢に就く、獨り窓を開いて、月を觀て、聊か老懷を寫す。

(イ)無業は大達國師なり、馬祖の法嗣、學者問を致せば、莫妄想と云ふ。

(ロ)瑞巖、巖頭に嗣法す、常に石上に坐禪し、自から呼んで曰く、主人公、又自から應諾す、乃ち曰く、惺々著、他後人の謾を受くるなかれ。

(ハ)金藏山、但馬太田の莊にあり、俗に金のくらと云ふ。

(ニ)枯禪、立て枯れ禪なり、一點の生氣も亦無き也。

戊[ト]子の季秋まさに半ばならんとするの日、田原の村裡烟蘿に宿す、看來れば五十餘霜の月、幽興は今夜の多きに如かず。

長州の逸上人、袖より塊石を出す、兩峽對峙して、恰も青玉を劈くが如く、中に條[チ]白を夾んで、直下すること飛泉を懸るが如し、凡そ寒巖空洞幽趣餘態は、人をして、殊に丘壑の志を增さしむ、仍つて一絕を賦して、之に贈ると云ふ。

故舊懷を探つて奇物を示す、[リ]巑岏たる流瀑勢千尋、[ヌ]因つて思ふ疇昔廬嶽に遊び、雙劒峰前に[ル]獨り自ら吟ぜしことを。

關西の龍侍者は、高標清致にして、眞に叢林の[ヲ]頭角なるものなり、山中に道聚して、共に枯淡を守りしが、遽爾として告別するに偈を以てす、仍つてために韻を次し、其の行色を壯んにすと云ふ。

雪後の諸峰翠嵐を潑ぐ、寒梅初めて綻ぶ野村の南、岐に臨むの一句只だ這れ是れ、[ワ]三喚機前に眼を著けて參ぜよ。

春日[カ]吉備の中山に遊ぶの韻。

[ホ]攪、攪拌とも使用して、手をもつて、かきまわすことなり。

[ヘ]骨もまた清し、唐人の詩に、詩思清人骨の句あり。

[ト]戊子、貞和四年、禪師五十九歲。

[チ]條白、一條の白線。

[リ]巑岏、山の鋭き貌、又高也。

[ヌ]因思、塊石と廬山の瀑布と、相似たるより、思ひ起せしなり。

[ル]獨り自ら云々、獨字味ふべし、異鄕異客、花にも淚を濺ぐの懷ありしなり。雙劒峰は香爐峰と對す、廬山にあり。

[ヲ]頭角は傑出の義、嶄然頭角を露すの語あり。

[ワ]三喚の故事は、傳燈第五に出づ、忠國師侍者を喚ぶの因緣なり。

[カ]吉備中山の詩は、實翁和尚の作に和する也、故に才拙云々の句あり。

勝地千年の寺、房々竹樹の間、落花は古徑を埋め、幽鳥は空山に叫ぶ、遊客晨を淩いで至り、歸程に月を踏んで還る、(ヨ)留題誰か壁を燿さん、才拙にして追攀を愧づ。

(タ)長勝の專使謹禪者に贈る。

使なるかな使なるかな命を辱しめず、佳聲は須らく是れ叢林に播すべし、情を盡して話して(レ)吾が師の席に到れば、月下の寒蛩夜深に咽ぶ。

蘆鴈二首。（飛鳴宿食し、一隻は翹立す）

(ソ)湘岸雙宿に慣れ、胡天幾行をか成す、平沙寒日の暮、獨り立つて恨み何ぞ長きや。

(ツ)霜風秋を吹いて老い、楚甸稻粱稀なり、切に眠を呼び起すことなかれ、夢に飛んで北に歸るべし。

密叟侍者、遠く都下の建仁より特に山中に來つて(ネ)相探る、夜話して旦に達す、甚だ十年の傾想を慰す、今や長州に歸つて、師を省せんとす、二偈を留めて別る、韻によつて奉謝すと云ふ。

林下老來誰と與にか期せん、夢魂幾度か京師に到る、今宵安禪の榻を閑卻して、燈盞油を添へて舊

(ヨ)留題云々、題詩を壁上に留て、光輝あらしむるは誰ぞ。追攀は和韻する也。

(タ)長勝、鎌倉の長勝寺、禪師の師、佛燈を開山とす。專使は論語子路の篇に出づ、蓋し禪師を拜請に來りしならん。

(レ)吾師は佛燈を指す、月下の寒蛩云々は悽慘嘆息。

(ソ)此の詩翹立を詠す、湘岸は南方瀟湘の岸也、胡天は北地。

(ツ)此の詩飛鳴宿食を詠ず、楚甸は楚國の郊外、卽ち湘水の邊り也。

(ネ)相探は、人を訪問するを探水と云ふ、此處も亦此の意。

時を話す。

利門名路の塵を踏むに懶く、千峰影裡に獨り神を凝す、故人俄に柴扉を把つて扣く、又聽く叢林㊉事々新たなることを。

椿上人の遊方に賜る。

禪人來つて贈行の篇を討む、暗に枯腸を把つて苦に搜索す、渾て一句の君に呈すべきなし、月は空山を照して秋寂寞たり。

中秋雨に値ふ。

㋙指話以前正に好し看よ、覺天滓なく影團々たり、頂門に沙門の眼を具せずんば、郤つて中秋の夜雨に瞞せられん。

㋰靈叟和尚に寄す。

五更起坐して松風を聽く、故人を箅へ來れば半は空となる、識らず何れの時か臭骨を埋めて。㋒兄の閑夢を煩はして荒叢に入らしめん。

韻を賡いで雄藏主に酬ゆ。

交談と寄書とにあらず、同參の句子舉して餘りなし、年來老弟懶僻多し、區々として起居を問ふことを休罷す。

㊉事々新は、古風日に凋落。
㋙指話、傳燈十八、玄沙の示衆也、正法眼藏大迦葉に付囑すと云ふは、月を話するが如く、拂子を竪起するは、月を指すが如しと。
㋰靈叟は佛燈の法嗣。
㋒兄の閑夢云々、沒後の辨香を托すが如し。

東南月皎として海天晴る、惹動す高人萬古の情、(ヰ)沒絃の琴を把つて彈ずること一曲、風前誰か是れ(ノ)希聲を聽かん。

靈叟和尚に寄す。（兵庫の福嚴に在つて作る）

我が此の門頭市鄽に接す、那ぞ日々事の紛然たるに堪へん、百錢一柄の钁を買ひ得去つて、靑山を劚いて暮年を安んぜん。(オ)

(ク)重陽。

晨を凌ぎ葉を掃ひて庭際に立つ、籬落の西風露裳を濕す、時に山童の來つて菊を採るあり、報じ言ふ今日是れ重陽と。(ヤ)

成親の墓の(マ)韻。

身は(ケ)王事に亡じて只名のみ存す、悲み看る荒墳の蘚痕を長ずるを、千古(フ)中山春寂寞たり、(コ)岩花の香は幽魂を返すなるべし。

(エ)室山に花を看る韻。

野興人を催して靑晝長し、行いては看る岩院滿庭の芳しきを、僧は玉樹陰中より過ぎ、鶯は瑤葩の重き處にあつて藏る、(テ)砌を擁しては應に山月の色を添ふべく、窓に(ア)飄つては又瓦爐の香を助けん、老來好景多く過ひ

(ヰ)沒絃琴、陶淵明無絃琴一張あり、酒あれば則ち弄撫す、人其の意を問ふ、答へて曰く、若し琴中の趣を知らば、何ぞ絃上の聲を弄せん。

(ノ)希聲、老子に「大器は晩成、大音は希聲」とあり。

(オ)詩意、市近くで、うろさくて仕樣がない、山の中へでもはいつて百姓でもせうと。

(ク)重陽、九月九日。

(ヤ)物さびた詩なり、重陽の氣分横溢す。

(マ)他人の作に和韻せし也。

(ケ)王事に亡すは、藤原成親、後白河院の命を奉じて、平氏を滅さんとす、而も事終に成らず。

(フ)中山は吉備の中山也、淸盛、成親を此地に謫し、終に之を在木の別所に殺す。

(コ)岩花の香云々、岩花の香馥郁

難し、眼風光に醉うて心狂せんと欲す。

㋚八塔寺に遊ぶ。

一嶽三府を壓し、白雲碧巔を覆ふ、峯高うして萬仭に踰え、寺古うして千年に近し、僧は坐す虛堂の月、猿は吟ず老樹の烟、言を寄す浮世の士、此に來つて塵緣を脫せよ。

㋖神根の道中。

怪石奇巖碧澗の流、白雲紅樹夕陽の秋、㋴吳山楚水曾て行き徧し、淸興は何ぞ此の勝遊に如かん。

佛涅槃。

三界の導師涅槃せり、人天等しく是れ苦に傷悲す、溪㋱山二月花錦の如し、錯つて秋風紅葉の時かと認む。

㋯調上人の京に行くを送る。

八月九月風月好し、一聲兩聲鴈聲寒し、公㋛驗は分明なり須らく步を進むべし、元來大道長安に透る。

再び大和寺に遊ぶ。

たるは、彼れの幽魂の化現なるべしと、一說、古註に十洲記を引いて、死人返魂香を聞けば、即ち活す、今岩花香ばし、此の返魂香を以て、幽魂を呼び返すべしと。

㋓室山は播州揖西郡にあり。

㋢砌を擁して云々、庭のあなたをかこうてゐるのは、山月に化粧をするであらう。

㋐窓に飄つて云々、窓先きに咲き亂れたるは、爐邊の香を助けんと。

㋚八塔寺は播磨美作備前三州の界にあり。

㋖神根は備後國藤野の保にあり。(舊註)

㋴吳山楚水、吾曾て南遊して、支那の名勝に遊ぶ、而も此の淸興に如かずと。

㋱三四の句、杜牧之の詩句「霜葉は二月の花よりも紅なり」を踏案す。背なかに冷水を流

此の地重遊を得たり、春殘つて院落幽なり、花(テ)は樹上に歸し難く、雪は人頭に點じ易し、竹を鳴しては風夢を吹き、茶を烹ては客自ら留まる、明朝又杖を携へて、去つて林丘に臥せんと要す。

壽聖の養直和尚の來諭に酬い、兼て同門の諸法兄に簡して、(ヒ)長勝の命を辭す。

嘉音兩度まで林巒に到り、午眠を驚起して竹關を開かしむ、語を(モ)龍峰下の頭角に寄す、一生我を放して安閑を得せしめよ。

大澤庵主に寄す。

(セ)大士峰前に大澤を思ひ、安心山下に獨り安禪す、君今疾を抱き吾れ還た老ゆ、來往は知らず能く幾年ぞ。

(ス)曆應辛巳、七月六日の曉、偶々夢に將に死せんとして、偈を寫す、覺めて之を記すと云ふ。

錯つて(イ)黃金を把つて鐵牛を鑄る、草肥え烟暖かにして林丘に臥す、今年五十有二歲、且喜すらくは(ロ)耕さずして還つて秋を見ることを。

(ハ)建武丁丑、六月廿五夜、夢中に(ニ)兩句を得、覺めて之を續ぐと

した樣な感じがすると。

(ミ)此の詩最も流暢、誦すべし。

(シ)公驗は、身元保證の手形也、此處關所の番人に示すもの、此の公驗は、釋迦達磨の親しく授與せし手形なり。

(テ)花は樹上云々、上の句は、落花枝に上らず、下の句は白髮是れ公道と云ふが如し、花のちら／＼散つて、人の頭に降りそゝぐ處。

(ヒ)長勝の命、觀應元年、禪師六十一歲、足利基氏、親しく帖を書し、師を請して長勝に住せしめんとす、師辭して赴かず。

(モ)龍峰下の頭角、佛燈下の尊宿なり、龍峰は佛燈塔所の額。

(セ)大士峰は、備前慈廣寺の山號。

(ス)曆應辛巳、禪師五十二歲。

(イ)黃金、百錬の黃金を以て、鐵牛を鑄る。

(ロ)耕さず云々、耕さずして、取入

云ふ。

人生倏忽として露電に同じ、計較何ぞ曾て徒に自ら瞞せんや、萬事緣に隨つて(ホ)胡亂に過ぐ、飽くまで白飯を餐して青山を見る。

(ヘ)椎村山庵の壁に書す。

澗水人間に下り。巖雲別山に過ぐ、聊か幽鳥の語を聽けば、野僧の閑を喜ぶに似たり。

和韻夜話。

(ト)三祇劫外の舊寃讐、一夜山庵に頭を聚むるを得たり、瞋(チ)恨怨言傾倒し了る、錢を纏ひ鶴に騎つて楊州に下る。

訥堂和尚の過訪を謝す。

索寞たる春光巖下の寺、高人の金錫烟霞を拂ふ、空山日は永し何をもつて待せん、唯だ庭前一樹の花のみあり。

(リ)西禪寺に宿す。

火後の西禪寺、門庭灰よりも冷かなり、井河は聲寂寞、嵐嶠は碧崔嵬、唯だ山雲の宿するあつて、渾て俗駕の來るなし、上方の(ヌ)老禪伯、古格復

時に逢ふたと、借金なしの時が來たと云ふことか、何分に夢のことであるから分らぬ。

(ハ)建武丁丑は延元二年のこと、禪師四十八歲。

(ニ)兩句、蓋し三四の句ならん。

(ホ)胡亂は不實也「ごまかし」と云ふが如し。

(ヘ)椎村は備前國にあり。

(ト)三祇劫外云々、昔しなじみの喧嘩相手。

(チ)三四句、太平廣記に云ふ、數人あり、各其志を謂ふ、一人曰く、我れ腰に十萬貫を纏はん、一人曰く、我れは鶴に乘つて遊ばん、一人曰く、揚州の太守とならん、終りの一人曰く、腰に十萬貫を纏うて鶴に乘つて揚州に下らんと、是に原づく。

(リ)西禪寺、天龍寺の南にあり、開山石庵明禪師、明は宏辨訥

た追回す。

友人を憶ふ。

山院春深うして客來らず、空庭花落ちて蒼苔を沒す、流景を留めんと欲すれども策なきを怕る、猶は佳人を等つて念未だ灰せず、身老いて尤も世外に居るに宜しく、雲閑にして只だ合に巖隈に臥すべし、午眠一覺茶三椀、千峰を望斷して闥を推して開く。

茶を摘む。

枝頭葉底精神を著く、限りなきの芬芳遠く人に襲く、體用㋸の中收不得、一藍漏泄す十分の春。

㋾庚寅の冬、備前の金山に登つて、功上人の幽居を訪ひ、毫を援つて山中の四威儀を賦し、壁上に書すと云ふ。

山中の行、烟霞遠近歸程を失す、溪邊失脚して指頭破る、流水の聲は㋻忍痛の聲に和す。
山中の住、草衣藜食朝暮を閱す、千峰盡日雙眸に入る、記せず㋕青黄の能く幾度なるを。
山中の坐、石榻跏趺す惟だ一箇、全く寂を樂むと喧を嫌ふとにあらず、獨り閑雲のみあつて相許可す。

に嗣ぐ、訥は大覺に嗣ぐ。
㋦老禪伯は蓋し石庵ならん。
㋸體用、潙山茶を摘む序で、仰山に謂つて曰く、終日茶を摘む、たゞ子が聲を聞いて、子が形を見ず、仰山茶樹を搖かす、潙山曰く、子たゞ其用を得て、其體を得ず、仰山曰く、未審し、和尚如何、潙山良久す、仰曰く、和尚たゞ其體を得て、其用を得ず、云々。
㋾庚寅、觀應元年、禪師年六十一歲、功上人由良法燈下の人。
㋻忍痛聲、あいた………。
㋕青黄は春秋也。

山中の臥、高く蘿窻に枕して怠惰を縱にす、天風吹き折る老松の枝、耐へがたし吾を驚して、濃睡の破るゝを。

倫上人に寄す。

交を英俊に締んで自ら年を忘る、一夜情を馳せて困じて拳を枕とす、夢裡分明に相見し了る、爐邊雪を聽いて禪を對談す。

淨(ヨ)妙の實翁和尚に寄す。

日に聲光の高く天を耀かすを聽く、衰殘は舊に依つて巖烟に臥す、(タ)西來三世の重擔子、獨り(レ)荷山のみあつて雙肩を勞す。

雪中に東隆長老に寄す。

庵外には雪深く積み、庵中には僧獨り禪す、同(ソ)人若し此に到らば、共に普通の年を話せん。

戊(ツ)子姑洗之末、出遊して歸る、忽ち北巖侍者の寄せらるゝ佳什を視て、韻によつて懷を寫すとしか云ふ。

青鞋踏み徧し幾春山、病翼飛ぶに倦んで今已に還る、宿(ネ)雲の半榻を分つを待つに慣れて、日昏れて猶ほ未だ柴關を掩はず。

(ヨ)淨妙は鎌倉五山の一、實翁諱は妙秀、葦航然に嗣ぐ、然は蘭溪に嗣ぐ。

(タ)西來は大覺の塔所也。

(レ)荷山、淨妙寺の山號を稲荷山と云ふ。

(ソ)同人は斷金の友也、普通は二祖雪に立つて、法を求めし年也。

(ツ)戊子は貞和四年、禪師年五十九、姑洗は三月也。

(ネ)宿雲の半榻云々、宿を借りに來る雲に、腰掛半分借すことが、常になつて居るから、まだ門を鎖ぢずと。

㋤驪珠は求むること易かるべきも、心友は得ること尤も難し、獨り閑中の味を弄して、白頭にして碧山に對す。

北巖の濟侍者は、天資英拔にして、㋶蘊藉淳素、頗る古衲の風あり、愚に從つて游ぶこと最も久し、實に忘年の友㋰于たり、丁亥の冬、事を慈光に謝して、缾錫を西祖明禪の間に止めんと欲す、此の計未だ決せざるに、俄かに來つて辭を告げ、復た養愚庵に歸つて、清高の節を全くせんと要す、得て留遏すべからず、其の志亦嘉すべきに足れり、聊か拙辭を摛べて、之に贈ると云ふ。

多載頭を聚むる誠に因あり、枯を拾ひ瀑を煮る寂寥の濱、口に甜く心に苦きは眞の相識、義㋒斷え情忘じて道親み易し、高く松關を掩うて舊隱に歸り、俯して看る人世の浮塵に等しきを、竹房留め得たり老禪衲、獨り喜ぶ青山の爲めに隣を作すことを。

鶯を聞く。

鶴㋼唳は那ぞ曾て比況するに堪へんや、深花影裡に幽簧を弄す、人の聲前の旨を會得するなし、又春風を逐うて短牆を過ぐ。

㋤驪珠、驪龍頷下の珠、莊子に出づ。

㋶蘊藉は寬厚、淳素はまじりけなき也。

㋰友于は友だちなり、惟孝友于兄弟より出づ、書經にあり。丁亥、貞和三年、禪師五十八歲、慈光、西祖、明禪は、皆備作の間にあり。

㋒義は義理なり、情は人情なり。

㋼鶴唳云々、鶴の鳴き聲を以て、鶯に比す、語頗る奇なり、是れ傳燈錄元安禪師の語に原づく。

韻を次して提藏主に酬ゆ。

是れ君によつて祖風を振ふべし、曾て聞く宗㋨説兩つながら倶に通ずと、言ふなかれ千載知心少なりと。且喜すらくは今朝同志の逢ふことを、㋔藏裡の摩尼は標字を照し、金㋗剛の寶劍は機鋒を快くす、徹宵傾倒す無㋳生の話、月は上る遙峯古澗の東。

忍副寺の庵居を訪ふ。

何事ぞ衣を拂つて深く退藏す、亂峯影裡に禪房を卜す、雲居の廡下に華㋮姪あり、終に楊岐六世の芳を續ぐ。

震巖和尚、前日三偈を惠まる、韻によつて謝し奉る、切に人に示すなかれ、羞らくは羅㋘公の誚を招かんことを、一笑。

白㋫雲の關捩を撥轉し了つて、人天の眼目價聲増す、龍龍子を生ずるは尋常の事、且喜すらくは吾兄の佛燈を熾にするを。

深く愛す襟懷の月よりも明かなるを、又添ふ志氣の霜よりも烈じきを浙の㋙東西と湖の南北と、共に話して還つて秋夜の長きを忘る。

宗眼高明にして道自ら尊し、任敎我空門に表㋓卒たるを、今朝坐

㋨宗説云々、宗通は自分の修行、説通は未悟に示す、現今は多く宗旨と經論とに分つが如し。

㋔藏裡摩尼、如來藏裡の摩尼寶珠。（證道歌）

㋗金剛寶劍、或時の一喝は、金剛王寶劍の如し。（臨濟錄）

㋳無生の話、龐居士の偈に、「有レ男不レ婚、有レ女不レ嫁、大家團欒頭、共説無生話」とありて、幹も根も葉もなき話なり。

㋮華姪は大慧より、應安を呼びし語也、應安曾て開悟に雲居に參す、故に雲居の廡下に華姪ありと云ふ、蓋し忍副寺は禪師の法姪ならん。（舊注）

㋘羅公の誚は、羅公在鏡とは、醜拙を露出するの方語。

斷す青峰の頂、先師不報の恩を報ずるに堪へたり。

　再び震巖和尙の韻を用ふ。㋢

一たび人間を出でゝ百㋐不能、衰窮疎懶日に相增す、餘生贏得たり丘壑に安ずることを、青㋚眼にして佗の祖燈を續ぐを看る。

一別今に到りて三十㋖白、蒼顏鶴髮風霜に老ゆ、秋窓雨夜靑燈の下、同じく葛藤を打して許の如く長し。

末法の僧中誰をか尊ぶべき、紛々として多くは利聲の門に走る、淸高獨り雲㋓峰の在るあり。志を奮つて須らく佛祖の恩に酬ゆべし。

　夜千光寺に宿す。

十有年前故人を問ふ、相看て手を把つて語春の如し、爭か知らん此夜ひ陳㋫跡に眠らんとは、月は寒窓を射て風篁を撼す。

　寒夜卽事

風寒林を攪して霜月明かなり、客來つて淸話三更を過ぐ、爐邊に筋を閣いて煨芋を忘れ、靜かに聽く窓を敲く葉㋯雨の聲。

　曇淡の相陽に之くを送る。

㋫白雲は龍翠寺の山號、濃州にあり、同翁和尙の遺跡なり、震巖は月翁に嗣ぐ、故に白雲の關捩を撥轉す云々、關捩はからくり也、れぢなり。

㋙浙の東西、湖の南北、浙東浙西、湖南湖北、則禪師會遊の地。

㋓表率は指導の意、青峰は佛燈の塔所。

㋢前三首は敵を計る也、猶ほ己れを計るの一著を殘す、故に此の續あり。

㋐百不能、何一つ出來ないと云ふ事也、然し疎懶を增し、丘壑に安し、靑眼をなすでは、充分な働きと云ふべし。

㋚靑眼、支那の阮籍と云ふ人は、氣に合つた人來れば、靑眼をなし、いやな客來れば、白眼をなす。（晉書）

㋖白、一年のことを一白と云ふ、天竺の方語。

心は龍(シ)峰に到つて身到らず、餘生已に近し鬼と隣を爲す、如今喜び得たり子が前去するを、我に替つて能く塔下の塵を除け。

　會禪人の遊方を送る。

臨濟曾て參ず黃檗の禪、烏藤六十蒿枝拂ふ、今君が(エ)行の爲に此の言を贈る。春山雨後碧きこと潑ぐが如し。

　春日山行。

滿頭の疎髮銀絲を撚る、來歲の逢春は未だ知るべからず、竹杖芒鞋野興多し、山花看て(ヒ)幾株の枝にか到る。

　夜龍(モ)聖寺に宿す。（月翁の遺席）

白雲峰下青松の塢、一夜空房坐して明に到る、露は秋旻を洗つて月初めて上る、郞(セ)忙として問訊す老師兄。

　俊鈍庵を訪ひ、夜話旦に達して、贈らるゝに偈を以てす、韻によつて之を謝すと云ふ。

一夕清談して襟宇披く、這回且喜すらくは玄扉を扣くを、身を翻して重淵の底に跳下して、驪(ス)珠念八を奪得し歸る。

(ユ)雲峯は白雲峯。

(メ)陳跡は其人既に死して、只陳跡のみ存す。

(ミ)葉雨は、「聽㆑雨寒更盡、開㆑門落葉多」より來る、又風枝雨葉颯として秋を帶ぶの句あり。

(シ)龍峰は佛燈の塔所、前出。

(エ)行は送行也。

(ヒ)山花看て云々、是れで何本目かしらぬと。

(モ)龍聖前出、美濃の白雲山龍聖寺。

(セ)郞忙は忽忙の意ならん、老師兄は、月翁。

(ス)驪珠念八云々、念八は二十八也、珠を聯ぬる廿八字の詩を贏ち得たりと、鈍庵の原作に曰く、「閑徑荒蕪菊未㆑披、忽驚象駕顧㆓林扉㆒、兩朝舊事話猶在、寶杖凌㆑晨莫㆑促㆑歸。」

(イ)袖裡の金槌、百丈清規に、鉢を開き佛を念し、衆に白すには、皆槌を鳴す、維那の職也、

關西の素維那、淨智の實翁老兄の會中より來つて、巖居を相訪ふ、而して翁の惠む所の偈を出し示す、老拙輙ち其の韻によつて贈ると云ふ。

袖㋑裡の金槌影動く時、桃花笑を含み柳眉を舒ぶ、㋺克賓は負かず老興化、又寶山山下に向つて歸る。

翡㋩翠。

何の年か鬱林を離る、彩羽清泚を照す、身㊁は枯葦の危に居て、心は深潭の底に在り。

鶺鴒

管せず弟兄の㋭難、獨り原上の石に翹つ、胡蝶の㋬飛ぶを貪り看て、其の幽寂を破るに似たり。

三月盡㋣

限りなき風光已に索然、殘花尙は自ら庭前に舞ふ、春歸りて定めて重ね來る日あらん、人老いて何ぞ曾て復た少年ならん、幻跡多くは留む青嶂の裡、幽懷常に在り白雲の邊、閑窓晝永うして歲を經るが如し、楞嚴を課し

白椎とも、金槌とも云ふ、大凡槌は聲室を出でずとありて、高聲にすべからず、故に影を認むるのみ、今素公維那の職にあり故に此句あり。

㋺克賓云々、傳燈興化の章に出づ、克賓亦維那の職にあり、故に引用せしなり、寶山は金寶山、淨智寺の山號也、昔の克賓は、追出されて仕舞ふたが、今の克賓は、老興に負かない。

㋩翡翠は鬱林に生す、泚は水の淸きなり。

㊁輕わざ使が、竹棹の絕頂で、藝を仕ながら、見物の懐具合を考へて居る樣なものじや。

㋭弟兄の難、詩經常棣の篇に、脊令原にあり、兄弟急難とあり。

㋬蝶が一疋書いてあつたと見ゆ。

㋣よき詩なり。

罷んで几に隱れて眠る。

宏上人に贈る。

白雲深きところ茅茨を掩ふ、(チ)慚愧す禪人の舊知を問ふことを、相送つて門を出でゝ兩つながら無語、長松影下に立つこと多時

淸公上人の西禪和尚を歸省するに贈る。

鳥啼き花笑つて興悠なるかな、(リ)知識門庭の破草鞵、(ヌ)百衲君が如くなるは半箇も無し、孤筇我を過る已に三回、道情は應に是れ秋水よりも淸かるべし、世慮は何ぞ其れ死灰よりも冷かなる、(ル)一雙窮相の手を袖にすることなかれ、師の背上に光を放ち來らしめよ。

(ヲ)戊午の仲春、榻を東禪の客檐に借つて、涉旬の留をなす、偶偶花嶽庵に遊んで、心公法兄を訪ふ、其の(ワ)韜鏟の韻致を視るに、幾んど(カ)瓚亮の高風を追配す、愚謾に江湖に遊んで、二十載に垂とす、未だ歸休の計を獲ざるを以て愧となす、紫栗青鞵、他日重ねて來つて、公に水邊林下に從はんもの、愚にあらずして誰ぞや、因つて俚語を述べて、其の志を紀すと云ふ耳。

(チ)慚愧云々、依然たる東呉の舊阿蒙か。

(リ)知識門庭の破草鞋、上の句は破れわらぢの境界なり。

(ヌ)百衲は大勢の坊さん。

(ル)窮相の手は、貧乏くさい手なり、腕の太きこと三尺、指の短きこと一寸、昔し白雲和尚は、此手ぶりで容易に三鑿を舞はぬと云はれたが、まあさう大切にしなさるな、御師匠さんの背中の痒い處を搔いて、あゝ心地よいと叫ばしめよと。

(ヲ)戊午は文保二年、和尚二十九歲也、舊注に師六十三歲の時、濃州に往いて東禪に居る、(紀年錄)、然らば此干支は誤るが如しと、下に江湖に遊んで二十歲の語あり、此干支の誤れること必せり。

(ワ)韜鏟、韜はつゝむ、鏟はけづるにて、光をつゝみ、彩をけ

寥々たる清夜幽情に適す、蘿月松風誰と共にか爭はん、覺えず欄を敲いて舒ろに一嘯す、知音は只だ曉鐘の聲のみあり。

春は燒痕に入つて紫蕨肥えたり、籃を携へ杖を拽いて禪扉を出づ、袖中の辣手未だ拈出せざるに、㋵輪與す拳を竪つる那一機。

此の生隱約して㋟寒巖による、流涕收め難く口緘むに似たり、幽鳥は知らず頻りに㋹話墮するを、亂峯影の裡語呢喃。

澗水旋や添ふ茶鼎の湯、山花時に助く石樓の香、破蒲團上に餘事なし、又見る林巔に夕陽を掛るを。

㋞入定の猿。

盤陀石上に禪す、應に是れ攀緣を息むるなるべし、孤影㋡巫峽に沈み、三聲㋧冷泉に斷ふ。

龍を炙して、㋤日峰和尚に酬ゆ。

一生贏ち得たり一身の閑、此の樂み自ら知る言及すること難し、物外の高人趣味を同じうす、杖藜時に復た林間に到る。

忠侍者の韻を借りて、幻居庵主に寄す、二首。（筑前春日藏山の徒弟）

づるなり。

㋕積亮は、芋燒爛積と西山亮なり、瀨積の事は人皆之を知る、西山亮は廣く理論を究めて、天下無敵の稱ありしも、馬祖の一拶に遇ふて、一時に破家散宅し、西山に隱れて火種刀耕す。

㋵早蕨がにぎりこぶしを振りあげて、山の橫づらはろかぜぞふく。

㋟寒巖、寒山は寒巖に隱る、流涕はみづばな。

㋹話墮、雲門因みに僧問ふ「光明寂照遍河沙、」一句未だ絕えざるに、門遽かに曰く「是れ張拙秀才の語にあらずや、」僧云く、「是、」門云く、「話墮せり、」此話墮と云ふことは大層面白い、斯く云ふも早や話墮して居る。

㋞入定猿、終南山に禪僧あり、時に袈裟を失ふ、猿あり之を

(ラ)心字須ひず門上に書するを、(ム)一拳頭上に親疎なし、他時慧日と春日と、乾坤を照爍して光餘りあり。

等閑に相見して倶に傾倒す、卻つて恨む平生心跡の疎なるを、(ウ)道聚の情懷は唯だ一日、尋常の交舊十年餘。

(ヰ)清見の方崖和尚、一偈を寄せらる、拆いて四絶となして之に酧ゆ。

(ノ)龍壽山中の老古錐、人間得難し箇の頑痴、今朝自ら笑ふ籃を携へ去つて、栗を拾つて餐する時皮を剝ぐことを忘る。

松風白を吹く鬢邊の絲、應に是れ秋深うして(オ)蒲柳衰ふるなるべし、忽ち同參叢席の盛なるを聽いて、園を鉏くの手を停めて喜で眉を舒ぶ。

言を寄す此の千金の重きを(ク)保せよ、(ヤ)巨鰲背上に三山聳ゆ、大敎を播揚す海潮音、那處の叢林か悚動せざらん。

(マ)祥雲零落の時を扶起することは、須らく鰲嶠の老宗師に還すべし、關門鎖さず家風大なり、去々來々誰をか礙塞せんや。

材翁侍者(ケ)野部の新居を訪及す、終宵爐を擁して清話す、別に臨

披して岩上に坐禪す、他の群小猿亦之に倣ふて坐禪す、(東山外集注)。

(ツ)巫峽、荊州記に「巴東三峽巫峽長し、猿鳴いて三聲涙裳を沾す」蜀は山國にして猿多し。

(ネ)冷泉、靈隱天竺寺にあり、三聲鳴いたら、泉の響も一時にとまる。

(ナ)日峰和尙、佛燈錄に、長勝寺に出世すと出づ。(鑑注)

(ラ)心字云々、了心錄に、一老宿あり、住庵す、門上に一の心の字を書し、窓上に一の心の字を書し、壁上に一の心の字を書す。

(ム)一拳頭上云々、趙州二庵主の因緣、以上二句庵主の二字より來る。

(ウ)君が一日の恩の爲めに、妾が百年の身を誤る。

(ヰ)清見の方崖、駿河の淸見寺方

んで、聊か小詩を成して、謝を致すと云ふ。

茅を誅して新に卜す空山の塢、遠く幽閑を問うて意輕からず、枯柴を燒き盡して言も亦盡く、共に聽く(フ)寒雨の窓を打つ聲。

(コ)龜峰の(エ)悦山首座、山中を垂訪して、留まること兩月、歎話傾倒、益々道義の厚きを見る、別に臨んで、聊か拙章五十六言を寫して、以て之に贈ると云ふ。

龜谷山中の悦山叟、(テ)軒昂の英氣(ア)常流に出づ、(サ)南泉の位を攙く老黃檗、(キ)古寺の門を掩ふ陳睦州、衆衲服膺す眞の表率、佳聲耳を驚かす來由あり、這回歸り去つて(ユ)峻擢に遭はゞ、宗風蕭索の秋を扶起せよ。

(メ)賢姪繁茂林、當初備前の安國に來つて老拙に依止す、時に歲未だ志學に登らず、後十有二年、遠江野部の山中に邂逅す、手を執つて舊を話し、相得て甚だ懽ぶ、庵を同じうして住せずと雖も、數々として來り訪ひ、風雨にも渝らず、旣に亦(ミ)涼燠を更ふ、益益其の道義の篤きを見る、老拙衰暮の極、又遠方に去つて、幽棲の地を求めんと謀る、今日一別せば、夢中にあらざるよりは、復

崖元圭禪師は、佛燈に嗣ぐ、禪師の兄弟なり。

(ノ)龍壽山、遠州永安寺の山號。

(オ)寂室和尚は、餘り達者で無かりしと見え、錄中處々に蒲柳の語あり、かよわき體を蒲柳の質と云ふ。

(ク)保は、保嗇。

(ヤ)巨鰲山は、清見寺の山號なり、莊子に巨鰲背上に一山ありと、三山は、蓬萊、方丈、瀛州の三神山なり。

(マ)祥雲、佛燈塔所の門額也、佛燈の宗旨今零落。

(カ)遠州野部。

(フ)此境を識らんと欲せば、鏡清の雨滴聲に參ずべし。

(コ)龜峰、鎌倉の龜谷山壽福寺。

(エ)悦山首座、悦山文怡禪師は大覺の曾孫。

(テ)軒昂、軒は車の列を拔いて高き貌、昻は下より上に揚ろの義にて、高しと訓す。

た會見の期なし、之が爲めに悽然たるを免れず、仍つて四十字を寫し與ふ、後來若し想念せば、宜しく之を取つて見るべき㋛者耶、一笑。

幻影深隱を圖り、秋風袂分たんと欲す、㋽法多淸夜の月、龍壽暮天の雲、去つて後誰か我を思はん、憐むべし獨り君あるを、精勤志節を持して、歲晚に㋪斯文を振へ。

海印庵扁榜の後に書す。

㋲吾佛當年輕しく指を按す、指頭放出す大光明、庵中の主は此の三昧を得たり、㋝月は珊瑚枝上より撑ふ。

僧に示す、二首。

箇の事明々に君に呈似す、須ひず特地に㋜功勳を策つることを、風和ぎ日暖かにして黃鸝囀

㋢常流、尋常の流輩、乃ち有り觸れたる人物なり。

㋚南泉云々、黃檗の運和尙、南泉に在つて首座たりし時、一日鉢を持して堂に入り、王老師の位に向つて座せんとす(會元)、是れを南泉の位を攙すと云ひし也、攙は攙奪、俗語の「ひつたくる」なり。

㋖古寺云々、睦州は黃檗に嗣法して、晚年門を閉ぢ、蒲鞋を織つて母を養ふ(會元)、南泉の句は機鋒を語り、睦州の句は孝心を賦す。

㋴峻擢は、高位に拔擢せらるゝ也。

㋱志學、十五歲。

㋯涼燠云々、一年程たちしと云ふ也、寒暑は夏と冬、涼燠は春と秋也。

㋛者耶の二字は、別後に之を見て、想ひ出にせよと、云ふべきを擽して、疑辭とせしなり。

㋽法多寺の淸夜の月は、誰れと倶に影を照して寒き、龍壽山頂の雲は、冉々として岫を出づ、別るゝ時の景也。

㋪斯文、論語の子罕の篇に出づる文字にて、孔子は斯文我に在りと、自ら慰められた、然し禪僧の斯文は、不立文字の活文字也、「此叢社零落の時に、宗風を扶起せよと。

㋲起承の二句は、楞嚴經の「我れ指を按すれば、海印光を發す、汝心を擧すれば、塵勞先づ起る」に本づく、海印は海水澄んで、萬象を印する也、三昧は正定の梵語。

㋝巴陵和尙は「如何なるか吹毛劍」と問ひしに、「珊瑚枝上月を撑著す」と働かれた、今寂室禪師は、五本の指から海印三昧を發するを、月は珊瑚枝上より撑くと頌せられた。

㋜功勳はいさをしなり、禪僧の

ず。春は花梢に在つて已に十分。

㋑參禪は實に大丈夫の事、一片の身心鐵打成す、儞看よ從前の諸佛祖、阿那箇か是れ ㋺閑情を弄す。

賢姪石澗、㋩特々として來り訪ひ、相陪すること旬餘、爐を擁して欵話、甚だ道義の厚きを感ず、今又偈を留めて別る、免れず韻によつて之を謝するを、敢て望むらくは輾爾。

閴寂たる空巖霜夜の月、薜羅庵裡老夫が情、明朝子又山を下り去らば、何れの日か重ねて戸を敲くの聲を聽かん。

實翁和尚 ㋥復庵和尚を悼むの韻。

古佛光を攝めて聊か ㋭徒を誡む。言ふことを休めよ今日無餘に入ると、禪は幻住に參じて人皆委す、㋬義は空巖に在つて我虚しからず、塵は積る風に趨く群衲の榻、篋には殘る道を問ふ搢紳の書、年來宗社寥落を増す、只蒼々に向つて幾 ㋣噓を打す。

老弟特に來つて瞻拜す、偶々師兄暫く出づ、便ち歸去せんと欲す、而も日既に夕なり、一夜西軒の下に獨坐し、聊か五十六言を述べ、

功勳は、拈槌竪拂、棒を行じ、喝を下すなり、是れを功勳邊の事と云ふ。

㋑參禪は是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて卽ち判すと、李遵勗は頌じた。

㋺閑情綺思で、のらり、くらりとして出來るものは、我慢放逸と、地獄の業である、閑情とは閑居して不善を爲す、閑事の爲めに無明を長ずとありて、性根にすきの出來る也。

㋩特々は得々、輾爾は口を開いて大笑する也、空巖は古注に不明とあり、蓋し空生巖畔より來りし語ならん、薜蘿はつたかづら。

㋥復庵諱は宗己、中峰明本に嗣ぐ、常陸の法雲寺の開山也、延文三年九月二十六日示寂す、實翁の悼詩頌る巧也、今は省略す。

㋭徒を誡むとは、執著心や常住

以て所懷を攄ぶと云ふ、伏して希はくは輾爾、玉磵師兄和尙几下。

老龍隱は是れ我が知心、特に幽栖を問ふて邃林に入る、寶杖晨を凌いで何の處にか去る、空房に宿を投じて更の深きを覺ゆ、(チ)人を照すの山月は顏色全く、耳を洗ふの松風は語音正し、謂つべし這回眞の會見と、明朝(リ)眷々として靑岑を下らん。

臘八雪に因つて。

(ヌ)黃面今朝成道し了る、卻つて禍事を將て人天を惱す、我儂は星兒の火を求め得て、爛枯柴を燒いて雪を看て眠る。

(ル)康安辛丑の春、余茆を江州飯高山下(ヲ)越溪の上に誅す、時に松侍者なるものあり、余が舊識空室老師の高弟なり、(ワ)百濟の僧舍に寓す、數々として孤寂を訪はる、相對して時を移すと雖も、多くは是れ一詞を交へずして去る、然れども其の英邁の標、粹美の韻、靄然として眉宇の間に溢る、竊に喜ぶ、衰暮偶々忘年の友于を得ることを、一日別を告げて、東受業に歸る、余も亦之が爲め

頑々の迷徒を警醒するなり。

(ヘ)義は空巖云々は、復庵は三たび天子の命を辭し、二たび總山の請を卻け、寂寥たる空巖に禪す、之を我虛しからずと云ふ。

(ト)嘘の字實翁の原詩に嗟嘘と用ふ、故に巳むを得ず斯くの如く文せし也、嘘とは吹也、氣をはくなり、天を仰いで幾たびか嘆聲をもらすなり。

(チ)人を照す云々、二句、皓々たる空中の孤月輪、是は師兄眞の面目なり、微風幽松を吹いて、近く聽けば聲愈々好きは、師兄眞の語言なり。

(リ)師兄の明誠を眷々服膺して、靑山を下らん。

(ヌ)黃面は釋迦、禍事は厄介な荷物なり。

(ル)康安辛丑、和尙時に七十二歲。

(ヲ)越溪、越智川也。

(ワ)百濟寺、飯高の西里許にあり、

に黯然を增すを免れざるのみ。袖より紙を出して語を需め、將に再會の記と爲さんとす。因つて卒に二十八言を搆べて、以て贈ると云ふ。

老來生鐵心肝となす、一句何ぞ曾て舌端に上らん、今日君が爲めに線路を通ず、㋕西風霜葉溪山に滿つ。

余が忘年の㋵端友、悅雲峯、一別二十有餘載、夢寐にも想念して已まず、一日忽ち巖扉を叩く、手を執りて舊を話し、相得て甚だ懽ぶ、而して亦妙偈を惠まる、唱歎の餘、韻によつて謝し奉る。

蒼顏白髮㋟經年別る、㋹彼此昔人昔人にあらず、今夜肝腸傾け盡さざるに、曉牕の霜月氷輪を落す。

周姪に與ふ。

當に信ずべし吾宗に語句なきことを、爾來つて得々として何をか求めんと欲す、草鞋跟底西風急なり、八月依然として是れ仲秋。

夜㋡向陽寺に宿す。

夜向陽山裡の寺に宿す、開基の尊者は我が知心、壁間の遺像を參拜して立てば、春禽啼き斷ふ綠松

聖德太子の開基、天台宗。

㋕西風霜葉溪山に滿つ、是れが一線路か。

㋵端友、孟子離婁下に、「尹公他は端人なり、其友を取る必ず端し」と、端は正也。

㋟經年別るとは、別れてより幾年を經過すの意。

㋹昔人云々は、肇法師の不遷論に出づ、おまいさんも變つたが、おいらも變つたよ。

㋡向陽寺は伊勢にあり、江州より伊勢に遊び、此作ありしなり。

の陰。

幾人か東に去り又西に還る、潮は沙頭に滿ちて行路難む、㋧截流の那一句を會得せば、何ぞ妨げん海門關を抹過することを。

㋡鳴海の浦。

偶作。

即心即佛は鏡裡の像、非心非佛は火中の氷、雨過雲開いて闌に依つて眺めば、遠山無數碧層々。

平生渾て玄談を愛せず、多懶須ふるところは唯だ㋤黑甜、老鼠偸かに牀脚を咬んで響く、日は疎竹を穿つて西簷を照す。

知足禪者に與ふ。

如何なるか是れ㋶佛即心是、梅山の梅子熟すること多時、苦風酸雨村烟斷ふ、日暮れて行人路岐に迷ふ。

㋰圭巖方書記に寄す。（時に圓林寺に住す）

吾兄歸隱す舊園林、衰朽猶ほ居す雲壑の深きに、又是れ天寒歲こゝに暮る、爐を擁し雪を聽いて知心を憶ふ。

相陽の瑞侍者、山中を迂訪して、款話すること一宵、厥の志嘉

㋡鳴海、尾州。
㋧截流、雲門に三句あり、截斷衆流の句、函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句。
㋤黑甜、支那の北方の人は、晝寢を黑甜と云ふ。
㋶二句大梅禪師の因緣、入梅時分の作也。
㋰舊注、永安彌天和尚に圭巖方庵主の話下火あり、云ふ、松源の遠裔、大應の的傳云々、想ふに此人ならんと。

すべし、且つ曰く、「故里に還つて、先師の靈塔を省覲せんと欲す、庶はくは一偈を得て、以て途中の警策とせんのみ」と、余老いたり、平仄を辨ぜざること久し、然れども懇求して已まず、卒に筆を迅らして之に贈ると云ふ。

㋻潭北湘南客夢驚く、一筇千里歸程を問ふ、誰か知らん綠水青山の外、限りなきの風光畫けども成らず。

㋖西明寺の壁に書す。

去春此の地に花を尋ねて到る、今日又看る黃葉の秋、㋷嶺上の白雲凝つて動かず、自ら慚づ衰朽の閑遊を好むを。

休耕庵。

閑田一片山前にあり、來耜拋ち來る三十年、只だ松花を採つて午飯に充つ、煙蘿深きところ扉を掩うて眠る。

村上人に示す。

道人來つて我が柴門を叩く、參禪の旨要を把つて論せんと欲す、怪むなかれ山僧が口を開くに懶きを、老鶯啼斷す落花の村。

㋔辛卯の歲口占。

㋻潭北は琶湖の北、湘南は相陽を寓す、忠國師偈に、湘の南、潭の北、中に黃金あり、一國に充つとあり。
㋖大慈山西明寺は、永源を去ること二里にあり。
㋷白雲の沈靜を以て、自己の忽忙に影帶す。
㋔辛卯、觀應二年、師六十二歲、楠正行南部に勤王し、尊氏直義と相爭ひ、天下寧日なし。

四海の煙塵は幾日か收まらん、山林朝市盡く戈矛、昨宵の一夢金にも換へがたし、聊か㋗無何郷裡に入つて遊ぶ。

古靈山に遊ぶ。

㋳爛却す靈山の古蘭若、春來倘ほ自ら遊人あり、二千年遠岩前の樹、花は頭㋮陀を引いて笑轉た新たなり。

達禪者の少林に之いて、祖を禮するに贈る。

大道本通達、心をもつて安を覓むるをやめよ、老㋘胡肉猶は暖かなり、嵩嶽天に倚つて寒し。

㋫謙侍者蠟燭を惠まるゝを謝するの韻。

白雲青嶂石溪の邊、惜むべし長年戸を掩うて禪するを、㋙文武の火光高きこと萬丈、君に憑つて一燈の傳はるを看んと要す。

光知客の韻に和す。

客來つて我が爲めに花偈を投ず、字々珠の如くにして宗眼高し、萬別千差供に截斷、且つ驚く句裡に㋓吹毛あるを。

㋢戊戌の秋、初めて㋐馬郡の如意寺に投宿す、擅那明海、一見故の如く、

㋗無何、無何有郷なり、有無を離れて有無に打乘つた場合斯かる境界も何ぞある無からんやである、禪師除夜にぐつすり寐込まれしと見ゆ。

㋳古靈山の寺は敗毀せり。

㋮世尊靈山會上にあつて、花を指して衆に示す、是の時衆皆默然たり、唯迦葉尊者破顏微笑す。

㋘老胡は達磨、老胡肉猶暖かなりは、達禪者に譏す。

㋫謙侍者、夢窓下の人。

㋙文武の火、無準開爐上堂に、「初冬の時節又相催す、浩々たる諸方爐鞴開く、獨り徑山文武の火あり、知らず幾人か煆却す」と、義堂曰く「無準徑

掌を拍つて清談す、秋宵猶ほ短し、仍つて一偈を留めて去る、他日之を取つて見ば、則ち余に對すると同じからん。

馬村の信士明海と號す、家中にありと雖も出家に勝れり、㋚只だ道情を堅密にし去らしめば、那ぞ憂へん鐵樹の花を開かざるを。

翼姪の㋖石塔の客居を訪ふに與ふ。

道人雪を踏んで寓舍を問ふ、月は寒窓を照して坐して牀に對す、瓦鼎に茶を養て春一盞、㋴豈政老の橘皮湯に同じからんや。

定巖の一侍者、余に於て宗黨の㋔瓜葛なり、遠く山中に來つて、相共に苦を攻め淡を食つて、屢々㋯居諸を閱す、酷だ道義の篤きを見る、今朝忽ち告辭して、㋛覺雄師翁の舊隱に歸る、余が殘齡既に桑楡に迫る、恐らくは復た會見の日なからん、老懷之が爲めに悽愴するのみ、因つて俚語を攄べて、以て其の行を壯にすと云ふ。

三年首を聚む空巖の下、未だ腸を傾け亦肝を瀝るに暇あらず、此の地須らく留むべし㋽末後の句、歸り來つて爲めに問へ屋頭の山。

山に住する十八年、兩たび同錄に遭ふ、故に文武の火と云ふ。」

㋓吹毛、刄上に毛を吹きかくれば、其毛自ら斷つ、之を吹毛劍と云ふ、衲僧の一言は、人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬る、光侍者の光より吹毛劍を呼ぶ。

㋢戊戌、延文三年にして、和尙六十九歲。

㋐馬郡、上野の群馬郡。

㋚是れ一番寒骨に徹せずんば、爭でか梅花徹骨の淸きを知らん。

㋖石塔客居、紀年錄に、延文四年師七十歲、江州に來つて石塔敎寺に寓止すと、蓋し當時の作。

㋴政老の橘皮湯、餘杭の政禪師、好んで月を翫ぶ、九峰の韶門下に客とし、常に之を笑ふ、韶一夕將に臥せんとす、禪師

㋪天關老兄、山中に來つて、一夏道聚して、日夕相共に逍遙す、時あつて懷を論じて、㋲結角羅紋の處に至つて、彼此手を擧げて搖曳するのみ、今秋涼を趁ふて舊隱に歸るを告げて、佳什一篇を示さる、韻に依つて以て贈ると云ふ。

天涯海角を踏遍して還る、茅を誅して偶々此の幽閑を得たり、白雲は實に是れ無心の友、因つて憶ふ古人㋝半間を分ちしことを。

老拙一生幻影を山色水聲の中に寄す、邇來古江の飯高山下を經由す、林溪幽邃にして頗る野情に愜ふ、因つて室數椽を築いて、安眠燕坐す、只だ此に居て殘喘の盡るを俟つを圖るのみ、旋ゝ空閑を愛樂するの道流あつて、憧々として沓臻し、松根石上に茅を誅して散處す、蓋し物は類を以て聚る、理の然らしむる所以か、關西の薰聞叟も亦其の一也、夫人となり、爽拔精敏、㋜孜々として道の爲にす、眞に佳衲子なり、ある時從容として語げて曰く、「昔し親を辭し鄕を離るゝの日、自ら謂へらく、吾れ早に大方に徂いて撥草瞻風し、良道善友に依栖して晨夕咨參し、己事を究

人をして韶を召さしむ、韶思へらく、又月を見せしむるかと、肇頷して至る、禪師曰く、明月皓々たり、幾人か之に對せん、韶唯々するのみ、時に韶飢ゑて切に藥石を思ふ、而も久しうて楊皮湯一盃あるのみ、韶大に困す。（林間錄）

㋱瓜葛は姻戚と云ふが如し、瓜葛は蔓延相及ぶ、故に云爾。

㋯居諸は日月なり、無理な故事にして、詩經の柏舟に日居月諸の句あり、居諸の二字は語助にて、日や月やと讀む。

㋛覺雄、大覺の法嗣、無隱圓範の諡號。桑楡、日の入る處に桑楡の二木あり、故に日沒を桑楡と云ふ。

㋻末後句、寂室和尙の末後句ならん。

㋪天關老兄、濃州多藝の莊、安久の鄕、庄福の開山。（古抄）

㋲結角羅紋、應庵錄に、「結角羅

明して、父母劬勞の恩に報じ、佛祖覆蔭の徳に酬ひんとす、幸に名藍に掛錫するを獲て、荏苒として玆に十霜なり、同じく㋑伏臘を閲するもの五七百衆に下らず、其の一人を擇んで、將て言行の師となさんと要するに屆つては、何ぞ止だ波を撥つて火を求るが若きのみならんや、凡そ見聞に屬するものは、唯だ菩提の種子を焦敗するのみにあらず、殆んど輪囘の業根を滋潤すべし、深く知る、今時一日も出でゝ衆に隨はゞ、萬劫にも利を己に失せんこと必せり、因つて憶ふ、古人法席全盛の時すら、尙ほ名跡の累を逃れて、茆茨石室果食澗飮し、終身世と邈如たり、嘗て㋺僧となつては須らく是れ巖谷に居すべしと聞く、又㋩榔標横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去ると云ふ、吾れ今忝く隱哲の勝軌を攀ぢ、衣を拂つて遠引し、永く雲山の深うして更に深き處に歸せんとす、乃ち竊に自ら誓ふ、寧ろ身をもつて火坑に投ず可くとも、復び脚叢林の閫に跨らず、寧ろ荒藪の下に窮死すべくとも、搢紳豪富の門に謁せず、寧ろ枉げて斷舌の災に遭ふべくとも、

紋に至つて游刄磅礴、大自在を得」とあり、按ずるに、結角は牛の角と角とを結び合はすの意ならん、羅紋は綾羅の紋にて、極めて微細のものなり。搖曳は、左右前後に搖かすなり。

㋝半間、鷹山芝庵主の偈に、「千峰頂上一間の屋、老僧半間雲半間。」言は一間の家を分つて、半分は雲のやどり場、半分は自分のねどころとす。

㋜孜々、汲々として勤めてやまざるなり。

㋑伏臘は、冬夏なり。

㋺僧となつては云々、政黄牛の詩なり「昨日曾て今日を將て期す、門を出でて杖に倚つて又思惟す、僧となつては須らく巖石に居すべし、國士筵中太だ宜しからず」と。

㋩榔標横に擔云々、趙州の法嗣、嚴陽尊者の頌なり。

未だ悟らずんば妄りに般若を談ぜじ」と。予其の詞の(ニ)至當痛的なるを聽いて、覺えず涕下つて、嘉嘆すること之を久しうす、仍つて筆を迅せて記取し、系るに二十八言を以て贈ると云ふ。

(ホ)西山亮去つて唯だ幽谷、南嶽の瓚亡じて空しく白雲、清標高格を追慕するもの、又巖下に來つて獨り君を尋ねん。

康安辛丑に、余老を江の飯高山下に投ず、時に(ヘ)霜林の果侍者、京師より來り、同じく枯淡を守つて春を經て冬に抵る、余他の天資絶倫にして聰明のために惑されず、孜孜兀々として斯の道斯れ勤めて、敢て斯(ト)須少間も、虚しく捨つる底の工夫なきことを愛す、一夜爐を擁して閑談の次で、語げて曰く、「吾、衆に陪するの日、古書を嗜好し、幾んど寢を廢し餐を忘す、忽ちに自ら省することあり、學解機智は、動もすれば、即ち無明を長じ、我見を增し、殆んど聲利を求むるの基本となる、寧ろ生死の根株に非ざらんや。如かず、(チ)元字腳を以て心上に留めず、甘じて(リ)百不會不知底の漢となつて、歩を退けて己に就き、悟を以て期と爲さんに

(ニ)南北朝時代は、丁度漢籍の後漢時代と同じで、禪宗の全盛期なり、而も此嘆あり、時に感ずる杜老は花にも涙を濺ぐとは、是れなり。

(ホ)西山亮南嶽の瓚、前に出たり。

(ヘ)霜林、下に說あり。

(ト)斯須はしばらくなり。

(チ)元字腳古くより、用ふる語なれども、明解なし、趙州和尚も、若し一箇の元字腳を記して心におかば、永劫に野狐精とならん、一休和尚も晝夜胸におく元字腳、是非人我一生喧びすしと頌せらる、蓋し元の字の腳は几にして、机なり、塞なり、物を載するものなり。文字の葛藤を云ふ。

(リ)百不會百不知、眞言の慈雲尊者も、斯れが氣に入たと見えて、百不知童子と號せられた。

(ヌ)溪に菜葉を流す、潭州の龍山和尚也。(會元三)

は、亦思ふ、古人大法既に明かなるの後すら、尙ほ物迹の累を逃れ、或は一たび西山に入つて、永く復た返らず、或は(ヌ)溪に菜葉を流して、始めて人の爲めに知られ、或は(ル)世事悠々たり、山丘に如かず、藤蘿の下に臥して塊石を、頭に枕す等の句あり、吾が儕何人ぞや、只麼に首を聚めて打(ヲ)閧して、徒に裘葛を閲せんや、今より後、誓つて復た衆に入らず、(ワ)隱哲の芳躅を追踐して、此の生を斷送せんのみ」と、余益〻其の機見高妙にして、實に碌々たる餘子の逮ぶところにあらざるを嘆ず、偈を爲つて以て贈ると云ふ。

我れ江山深き處を擇んで住す、溪頭の石徑雲の臻るを看る、稚龍雛鳳は英靈の子、殘月(カ)長庚は衰暮の身、共に茆茨を掩うて庭雪を積み、旋や(ヨ)榾柮を燒いて室春を生ず、言ふことなかれ法社今岑寂と、異日林丘自ら人あらん。

鏡庵主に贈る。

卽心卽佛太だ(タ)郎當、非心非佛絕商量、芒鞋踏破す關山の雪、處々の寒

(ル)世事悠々、南嶽懶瓚和尙の歌なり。

(ヲ)打閧は、無駄言ふて日を送るなり、裘葛を閲すとは、年を過すなり、夏葛冬裘。

(ワ)隱哲、西山亮、龍山和尙、懶瓚禪師等、斯くして此一生を終へんと。

(カ)長庚は遲暮の身に喩ふ、金星に兩名あり、朝は日に先つて出で、晩は日に後れて入る、朝の時は啓明と呼び、晩の時は長庚と名く、英靈の子は果侍者、衰暮の身は寂室禪師。

(ヨ)榾柮はそだ、木頭と訓す。

(タ)郎當は俗語の零落の意、玄宗、祿山の亂に蜀に幸す、黃幡綽に問うて曰く「車上の鈴聲頗る人の言語に似たり」と。對へて曰く「三郎郎當、三郎郎當と言ふに似たり」と。黃幡綽は滑稽の士なり、玄宗の弄臣。郎當又老倒にも、潦倒に

梅鼻を撲つて香し。

　靈叟和尚の韻に和す。

丘嶽の襟懷氷雪の面、庸流は世に滿ちて斯の賢少なり、憐むべし虛しく光陰を度り了ることを、高標を見ざること又十年。

　芝巖書記、累に山中に枉顧せらる、道義を忘れざるを見るに足れり、況んや亦惠むに佳什を以てするをや、唱歎已まず、其の(レ)續貂を愧ぢて、敢て韻尾を攀ぢず、別に小偈を寫して奉酧す、切に人に出し示すなかれ、只だ前頭に將ち去つて、窓に糊し、或は是れ(ソ)額を覆はゞ、方に老拙が用心の勸めたるを知らん。

年老身窮して人に棄てらる、吾兄何事ぞ庵居を問ふ、行に臨んで語を求む說くべきなし、强ひて筆頭を竪てゝ瞎車に當つ。

　牧書記を送る。

(ツ)夫子文章の印を掃除して、如來藏裡の珠を擊碎す、一策の春風(ネ)阿剌々、此の行那ぞ敢て脩途に渉らん。

　　水車。

も作る。

(レ)續貂は佳篇に次ぐに惡詩を以てする也、貂足らず狗尾續くは、西晋時代の故事なり。

(ソ)額を覆ふは、酒がめのめばりなり。

(ツ)夫子の文章、論語公冶長篇に出づ、學問も修行も、擊碎掃蕩。

(ネ)阿剌々、方語に急速也。

奔流光裡に機關立す、便ち曹溪の大法輪を轉ず、㊉器々相傳へて異味なし、群生一洗す㋷渴心の塵。

㋰淸居軒。

靑山一抹紅塵を隔つ、蘿月松風能く隣をトす、機境都來高く坐斷す、寥寥として見ず門に到るの人。

成親の墓。

忠を含んで命を殞す最も憐むに堪へたり、恨を蒼苔に掩ふ二百年、無事來ることを休めよ㋒平氏の客、恐らくは泉下永宵の眠を驚かさん。

中秋偶作。

中庭人無くして月自ら明かなり、索々たる金風(卄)衣裓に入る、旋落英の地に盈ちて香しきを拾ふ。冥鴻聲は遠し情何ぞ極まらん。

月は中秋に到つて最も㋨利害、人をして特地に閑情を惱さしむ、一年三百六十夜、輸卻す今宵半刻の明に。

山居。

名利を求めず貧を憂へず、隱處山深うして俗塵に遠ざかる、歲晚天寒うして誰れか是れ友、梅花月を帶びて一枝新なり。

㊉器々相傳、是れは、田舍にて言ふ「餓鬼の喉」と云ふ水車ならん。

㋷渴心塵は、枯渴の病と云ふが如きか。

㋰淸居軒、龍峰庵禮の間の額也。（舊注）

㋒平氏の客、肥馬輕裘せる、平家のきんだち也。

(卄)裓、古得の切、衣前の襟也（舊注）、旋拾は拾ひまはる也、落英は倒れたる菊の花、落の字、說多し。

㋨利害、相反する字を、偏用して、利の字を取りしものならん、漢籍に此例多し、治亂を亂ると用ふるが如し、利は易の乾は大いに亨る、貞に利しの利の義にて、中秋月最も宜

丙午歲の試筆。㋔

山中の氣象卽辰新なり、㋨盡く是れ明心見性の人、添へ得たり滿空に瑞雲を飄すを、梅は開く五葉一花の春。

一毫頭上に春容を發す、徧界藹然として和氣濃かなり、管するなかれ山僧が頭已に白きことを、曉來の雪は萬年の松を覆ふ。

金㋳剛寺に宿す。

隣寺屢來遊す、通宵談未だ了ぜず、山村更鼓なし、窓白うして天の曉くるを覺ゆ。

耕月。㋮

鐵牛を趂ひ起して頻に鞭を著く、山前何れの處か是れ閑田、一犂雨は過ぐ千峰の外、玉兎輪を推して曉天を下る。㋘

無參。

㋾當處に非を知つて放下して休す、何の箇の事の馳求すべきかあらん、南方丫角の小童子、空しく㋵百城の煙水に向つて遊ぶ。

江月。

し と云ふ意。

㋔貞治五年、和尙七十七歲。

㋨盡く是れ明心見性の人、新年の御慶千里同風、明心見性の人とは不盡の妙味あり。

㋳金剛寺、蒲生郡日野の金剛寺、絶海中津の寺也。（舊註）

㋮號頌合計壹百一首。

㋘上の二句は耕を頌し、下の二句は月を頌す。

㋾二句參の字を反說す、丫角は稚兒まげ也、丫角の小童子は善財を指す。

㋵華嚴會上に、「善財童子、一百十城を歷て、五十三の善知識に參じて、無上菩提を得」と、宋の佛國禪師五十三頌を賦して之を勸す、文殊指南圖贊是也、續藏中に收む。

㋓渺茫たる楚水空を拍つて流る、潮は錢塘を撼して夜收まらず、玉鑑光は寒し萬波の底、依前たり天上一輪の秋。

　遁巖。

塵世蹤を逃れて㋢秦を避くるが如し、碧松崖下に孤貧を寄す、寥々として鳥の花を含んで落すなし、許さず㋐空生の來つて隣を卜するを。㋚

　竹隱。

貞節と虛心とを憐むが爲めに、㋖特地に茆を移して更に深きに入る、㋴片瓶を擲つて輕く一擊するを休めよ、閑聲恐らくは是れ叢林に落ちん。

　竹堂。

憶ふ昔香嚴の一擊し來ることを、㋱六門長へに遠峯に對して開く、茫々として葉を摘み枝を尋ぬる底、多くは是れ空しく閫外より回る。

　孤雲。

一片羈すこと無うして自在に飛ぶ、卷舒開合更に何にか依らん、笑ふ他の多くは是れ龍に從つて去ることを、㋯獨り舊山の深き處に向つて歸る。

　雪樵。

㋓上二句は江、下二句は江月。

㋢秦を避く云々、武陵桃源の人は、皆秦の無道を避くるの人也、(陶潛の桃花源記)。

㋐上二句は遁巖、下二句は興也。

㋚空生、須菩提也、岩中に燕坐するとき、諸天花を雨らし贊嘆す、雪竇之を拈じて「空生巖畔花狼藉」と頌せらる、今遁巖には、其樣な騷々しき男は寄せ付けぬと。

㋖第二句隱。

㋴片瓶云々、香嚴擊竹を襲ふ也、閑聲云々の句、冷俊なり。

㋱六門、六根門境に對して開く、即堂の字。

㋯一片と云ひ、獨りと云ふ、是れ孤の字。

風空花を攪いて片々飛ぶ、㋛老盧斧を提げて柴扉を出づ、自ら知る徹骨寒來つて重きことを、無根樹子を擔取して歸る。

要翁。

三玄を把つて排列し去ることを休めよ、寧ろ至徳を以て家風に比せんや、是れ佗親切爲人の處、老いんたり矣西を指して還つて東となす。

別宗。

月を標す指頭邊を離ると雖も、是れ拈花微笑の禪にはあらず、聞くならく泥牛木馬に參じて、迦文の法派更に流傳すと。

悟山。

㋓礙膺の物を除卻してより、地を拔く高風萬仞寒し、一點の迷雲飛び到らす、峰頭夜々月團々。

慧海。

一點の靈知定によつて發す、無邊の㋪香水衆流を納る、㋲泥牛鬪つて洪波の裡に入り、高く吼ゆ珊瑚明月の秋。

堪叟。

㋛老盧、六祖俗姓は盧氏、家貧にして樵採以て給す、宋の朱文公は破佛家であつたが、晩年に目を病んで盲となり、六祖の法寶壇經を聞き、嘆じて曰く「六祖は眞の聖人なり」と。

㋓第一句は悟、第二句は山。

㋪香水は海の名、華嚴經に華藏界中に大蓮華あり、其蓮華の中に香水海あり。

㋲泥牛云々、洞山と密師伯と、

面上の唾痕は雨點の如く、耳邊の惡語は雷轟に似たり、長年㋝一種平懷し去る、添へ得たり眉毛の霜幾莖ぞ。

月翁。

廣寒宮殿の高に坐斷して、㋜天風鬢を吹いて半は霜毛、光萬象を呑んで㋑邊表なし、烱々たる雙眸老いて益々豪なり。

柏翁。

千年の貞操松根に㋺伴ふ、蒼老の勢は龍の屈蟠するが如し、今日叢林梁棟の漢、看來れば盡く是れ㋩我が兒孫。

本閑。

㋥深く萬法を窮めて靈源に徹す、豈末流と日を同じうして論ぜんや、物外寥々として常に獨坐す、任他地覆ひ復た天翻るを。

㋭敬庵。

動靜常に居す愼肅の中、何人か這の家風を仰がざらんや、低頭獨坐す茆簷の下、百鳥蹤を潛めて春晝空し。

雲叟。

倶に、龍山和尚を問ふ、和尚曰く、「兩箇の泥牛闘うて海に入る、眞に今に至るまで消息を絶す」と。

㋝一種平懷、信心銘に出づ、一種とは一粒種なり、平懷は坦蕩々と同じ、動靜寒温是非善惡のでこぼこの泯した處を一種平懷と云ふ。

㋜第二句翁の字。

㋑邊表、邊は中邊の邊、表は表裡の表、儒敎には邊幅の語あり。

㋺松根に伴ふ、孔子曰く、「松柏の後凋を知る。」是れ松の伴侶なり。

㋩「如何なるか是れ祖師西來意」、趙州曰く、「庭前柏樹子、」後來の兒孫、葉を摘み芽を摘み、天下を覆蔭す。

㋥上二句本、下二句閑。

㋭敬庵、是れは宋儒の學に淵源す、寂室和尚なども、既に宋學

㋬舒卷無心にして轉た淡然、千峯萬壑幾か年を經たる、既に雨となつて龍に從ひ去ることを休む、自ら兒孫の垂れて天に布くあり。

鑒翁。

揩磨淨盡す ㋣一靈臺、曠劫の古菱花正に開く、未生前の面目を照破して、㋠雪眉掀卻して笑哈々たり。

通叟。

萬法の根源都て達し了る、さもあらばあれ年老亦身閑なるを、卻つて千聖流傳底をもつて、兒孫に分付して高く關を掩ふ。

友山。

茫々たる塵世知己少なり、眼界蕭條として秋よりも冷じ、渠儂が眞の伴侶を見んと要せば、千峰萬岳碧眸を凝す。

西峰。

㋷五天獨り聳えて勢魏然たり、高く壓す ㋦東方の萬八千、寸步移さず窮めて頂に到る、衲僧脚下是れ ㋸通玄。

悅堂。

に染指せられしは明かなり、宋代理學の先生は、多く禪僧と議論を上下す、當時の語錄紀談に多く其事を載す、故に禪籍を讀むものゝ、宋學を兼學するは勢の然らしむる處、故に日本宋學の最初を論ずれば、禪の渡來と同時と云ふも不可なきなり、玄惠桂庵は抑も末也。

㋬第一句雲第二句叟。

㋣一靈臺、唯一の眞心、莊子に出づ、古菱は鏡。

㋠第四句翁。

㋷五天は西の字。

㋦東方萬八千、法華の序品に、爾時佛眉間の白毫相光を放つて、東方萬八千界を照す。

㋸通玄、天台韶國師、通玄峰に住す、頌あり、「通玄峰頂是れ人間にあらず」云々。

平生を慶快するは等閑にあらず、燈籠露柱笑つて顔を開く、誰か知る千古分明の意、大坐當軒風月寒し。

怡雲。

我が此の山中心悦適す、清奇冷淡舊相依る、欄に倚つて盡日㋑目を縱にするに堪へたり、卻つて怕る龍に從つて雨となつて飛ぶを。

懶庵。

獨り疎慵を逞しうして萬緣を謝す、柴門深く掩うて殘年を度る、人に對して猶ほ自ら口を開くことを忘る、怪むなかれ強ひて㋺拳を竪つるに無心なるを。

喝巖。

忽雷轟破す太虛空、㋩嶮布き危分る幾萬重ぞ、千里に風を聞いて驚いて舌を吐く、啼猿は尙ほ月明の中に在り。

月窓。

氷輪高く輾る碧天の秋、光虛檻に透つて㋥灝氣流る、內外玲瓏として常に不夜、如何ぞ㋭睡獮猴を著得せん。

月屋。

㋑欄に倚つて、雲の徂徠を見る。
㋺趙州一庵主に到り、問ふ「有りや、有りや」庵主拳頭を竪起す、なまくらな和尙よ。
㋩忽雷轟破す大虛空、どつしりした句なり、嶮布危分幾萬重は、巖の字、嶮危な幾千萬重に分布するなり。
㋥灝氣は白色の氣、秋の色なり。
㋭睡獮猴、猿も目醒むれば、六

圓未圓の前眼豁開す、茆茨變じて玉樓臺となる、縱ひ物外に超ゆる (レ)南泉老も、許さず門を敲き戶を推し來ることを。

(ソ)玉斧修し成す幾度の秋、瓊樓金殿類侔しうしがたし、直饒光境俱に亡ずる底も、爭でか似かん且く門外に居して休せんには。(ツ)

石室。

嶄巖たる (ネ)函丈誰か能く入らん、戶牖堅頑にして蘚痕鎖す、(ナ)碧眼嵩山に寒壁に面ひ、(ラ)黃頭摩竭に空門を掩ふ。

無塵。

(ム)倒に生鐵の禿苕帚を拈じて、驀忽に身を飜して一掃し來る、諸人を普請して脚下を看せしむ、閑々地上に纖埃を絕す。

月山。

つの窓から頭をひよこ〳〵出すが、睡て仕舞へば森としたものぢや、而し此月下の窓には睡れる猿も寄せつけないと、睡彌猴は傳燈六、中邑恩禪師の章に出づ。

(レ)南泉老、馬大師が、西堂百丈南泉と、月見をせられた、馬祖曰く、「正與麼の時如何ん、」堂曰く、「正好供養、」丈曰く、「正好修業、」泉は拂袖して去る、馬祖曰く、「經は藏に入り、禪は海に歸す、唯だ普願のみあつて物外に超ゆ」と。

(ソ)玉斧修成、月の中に八萬三千の樓臺あり、之を修繕するに玉斧を用ふ（酉陽雜俎）、此の酉陽雜俎と云ふ本は、唐の段成式の著で、斯樣の奇怪の事が多く書いてある。

(ツ)是れは、一人に二偈を與へられしにあらず、二人に月屋を用ひられしなり、編集の時、一處に合せし迄也。

(ネ)函丈、函は容也、丈を容るとは、四方一丈也、曲禮に出づ、蘚痕鎖すとは巧なり。

(ナ)碧眼嵩山、達磨は之に向つてにらみあひをしてゐる。

(ラ)黃頭摩竭、釋迦はこの中でしやちこばつて居る。

(ム)是れは、いかな輕わざ使でも出來ぬ藝當、衲僧の掃地の仕方なり。

(ウ)那邊より見ば、こちらからあなたを見て居る樣ではの意。

(ヰ)叫落、孤猿一聲月痕空し。

圓と未圓の前須らく眼を著くべし、屋頭の青山廣寒宮、若し光影㊆那邊より看ば、雲鎖し煙籠む千萬峰。

桂輪高く掛つて碧天寛し、萬朶の峯巒玉一團、巖下の空生腸斷たんと欲す、孤猿㊉叫び落として五更寒し。

國譯永源寂室和尙語錄卷之一　終

國譯永源寂室和尚語錄卷之二

大林。

森々として植立す閻浮樹、枝葉交加して歳月長し、恒河沙數の客を覆蔭して、炎天日として清涼ならざるはなし。

字山。

毫端を拈起して義炳然たり、孤峰峭峻にして勢天を凌ぐ、更に一點已前より看れば、未だ必ずしも㋑須彌半邊に到らず。

順叟。

㋺物と相逢ふて未だ曾て逆はず、流に隨ふを得る處且つ流に隨ふ、滿頭の白髪三千丈、餘算今年八十秋。

古巖。

㋩今時に落ちず高く眼を著けよ、玲瓏八面碧崔嵬、空劫以前の事を知らんと欲せば、且く懸崖に向つて手を撒し來れ。

㋑高き須彌山も、字山の半分迄届かぬ。

㋺第一第二順、第三第四叟、流に隨ふ云々、臨濟錄に、流に隨つて性を認得すれば、喜も無く又憂もなし。

㋩第一古、第二巖、第三古、第四巖、

竺雲。

靈鷲峯頭㋥膚寸より興る、五天便ち見る影層々たるを、幾たびか雨となつて沙界を霑す、歸つて㋭半間屋を分つの僧に伴ふ。

空極。

諸法は何を以て座とするや、十方立せず一微塵、是の心窮めて無心の地に至る、選㋬佛場中及第の人。

竹澗。

一兩莖は斜に三四は曲る、當頭直に永く根源を截る、後來末學枝葉を論ず、昨夜前溪に月痕を撈す。

樵屋。

榮枯直下に一刀に斫る、擔取し歸り來る溪畔の家、買人に賣與するに人見えず、柴門高く掩うて煙霞に臥す。

斧を腰にして擔ひ歸る枯欄柴、茅廬只だ是れ溪に傍ふて棲む、㋣盧郎常に入る新州の市、門は寒雲に掩うて日又西なり。

石澗。

㋥膚寸、手のひらの厚さを膚と云ひ、指を按ずるを寸と云ふ。(公羊傳注)。

㋭半間、衲僧半間雲半間の語あり、一間の腰掛を、半分は自分に半分は雲に掛けさすと云ふことなり。

㋬選佛場、禪堂なり。

㋣六祖、其の先は范陽の人、其の父新州に左遷せられて、玆に住す、新州は今の廣東に近く、當時は實に邊鄙にて、中國の人は猿の棲家かと思ふ程の處也、故に五祖、六祖を拶するに、嶺南の人に佛法なしと申さる。

最も(チ)磽确の處平かにして砥の如し、下に寒溪あつて徹底淸し、大小山中の閑佛法、流傳し將ち去つて(リ)大忙生。

傑堂。

門風挺出す(ヌ)萬人頭、寂寞たり庭前(ル)丈草の秋、正に是れ衆中の(ヲ)尊貴墮、燈籠露柱笑休み難し。

隱溪。

光を韜み彩を鏟る幾春秋、澗底に茆を誅して頭を蓋却す、恐くは是れ世人の住處を知らんことを、柴葉をして放に流に隨はしむるなかれ。

默耕。

口未だ開かざる前に不二を談ず、山河大地怒雷轟く、鐵牛鞭起す一犂の雨、祖父の田園秋已に成る。

玉巖。

一片瑕無うして萬山を耀かす、玲瓏八面又高寒、連城の至寶得難きにあらず、便ち請ふ懸崖に手を撒して看よ。

愚隱。

才を棄て智を泯じて癡頑に返る、拙跡留むるに懶し塵世の間、常祖茅を移して深處に去り、亮公杖

(チ)磽确、石地なり、五穀の出來ない處のでこぼこ地。
(リ)大忙生、掛かつては瀧となり、瀦みては淵となり、せいては急流となる。
(ヌ)萬人、千人に勝るを俊と云ひ、萬人に過ぐるを傑と云ふ。
(ル)丈草、十丈の草、蟒々然たり、淅瀝乎たり。
(ヲ)尊貴墮、稠布衲、曹山に問ふ、「不受食は何の墮ぞ、」山云く、「尊貴墮」。

を拽いて西山に入る。

徹叟。

百帀千重列祖の關、一時拶透は難しとせず、而今年老ひて餘事なし、(ワ)素髪垂々として心自ら閑なり。

茂林。

深沈鬱密として影敷榮、梁棟の奇材集めて大成す、因つて憶ふ(カ)雄峯に叢席を剏めしことを、偏界を蔭涼して古風清し。

月舟。

桂輪高く拄つて碧天清し、萬頃の煙波一葉横ふ、光境倶に忘じて忘も亦立せず、蓬窓靜かに坐す夜三更。

休庵。

古德茅を縛す泉石の邊、僧を見て尚ほ自ら(ヨ)空拳を竪つ、如かじ一歇に一切歇し、門煙蘿に掩うて盡日眠らんには。

西溪。

萬里の(タ)岷峨碧流を夾む、急なることは劈箭の如くにして源由あり、回巖亂石攔れども住らず、

(ワ)素、給事素に從すの素、白也。
(カ)雄峰、大雄峰なり、百丈和尚茲に住す、百丈叢規を定めて禪道完し、白雲端和尚此功績を感謝し、達磨に配祭す。
(ヨ)趙州の二庵主、即庵の字。
(タ)岷峨は蜀にあり、支那の西方にあり、又峨眉山と云ふ。

直に東溟に到つて方に始めて休す。

大年。

試に壽域を將つて乾坤に配す、無始無終寧ろ元を紀せんや、算へて威音より彌勒に至るまで、聖凡は是れ我が小兒孫。

一澗。

源脈何ぞ嘗て二三に落ちん、支派を將つて多談に渉ること莫れ、誰か知らん常流に混ぜざる底、涓滴全く無うして湛へて藍に似たり。

一叟。

湖海に横行して孤風を逞しうす、今古應に無かるべし第二翁、試に生來年幾許ぞと問へば、眸を擡げて笑つて指す太虚空。

松嶽。

蒼翠豈惟だ千萬年ならんや、風濤激起す㋹祝融巓、大夫の名は貞操を汚さず、諸峯を壓斷して高く天に挿む。

不立。

誰か論せん是句と非句とを、一切剗除して當處に空ず、㋧鴈字行を成す秋日の暮れ、端なく玷辱す

㋹祝融巓、祝融は、峰の名、衡岳にあり、其嶺に萬年松あり、貞操を汚さず、皆が汚した汚したと云ふ。

㋧鴈が四つ飛んで居る、不立文字と讀むは謬れ。

我が宗風。

祖庭。

少室門前平坦の地、千年徒に自ら莓苔を長ず、一方の明月光雪の如し、斷臂の師僧殊に未だ來らず。

華嶺。

五葉開く時萬木香し、此の山嶺し得たり幾春光、誰か能く拈起し誰か微笑す、絶頂寥々として又夕陽。

靜中。

一室寥々として常に獨坐す、渾て外事の閑情を動ずるなし、有る時は截らんと欲す窓前の竹。㋡耳は亂る風枝雨葉の聲。

直翁。

人を指して性を見せしむるも還つて迂曲、特地に如何が父の㋧羊を證す。爭でか似かん三家村裡の漢、垂々たる霜鬢耕桑を事とせんには。

愚默。

百不能の時心已に灰す、飢飡渴飮癡獃を放にす、然も㋤娘生の口を杜絶すと雖も、誰か聽かん

㋡耳は亂る云々、金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳となる。

㋧葉公子高が、孔子に自分の郷里には、正直者あり、父が羊をぬすみしを、子が訴へ出たと話した。

㋤娘生、娘は母なり。

其の聲怒雷を轟かすを。

歸海。

須らく知るべし㋶格物本無功なるを、衆水は皆奔る渤海の中、㋰當日馬師聊か月を翫ぶ、大雄峰頂浪空に飜る。

曉山。

玉兎已に過ぐ西嶺の外、金烏初めて上る最高峰、霜天曙けなんと欲して唯だ寒色、萬嶽千巖一目の中。

實堂。

㋒餘の二は眞にあらず唯だ一事のみ、滿軒の風月意分明、擧揚已に得たり虚僞なきことを、管せず庭前荒草の生ずるを。

覺海。

大圓滿の果沽として無邊、自ら金波の湧いて天を拍つあり、㋼始本雙び忘して忘も立せず、珊瑚枝上月嬋娟。

藏叟。

恰も似たり摩尼の寶光を韜むに、身を退けて深く隱る幾青黃ぞ、教佗魔佛の窺ひ見難きを、白髮

㋶格物本無功、格物の一物一物に就いて、其理を極むるなり、其れは勞して功なしと、朱注の大學でも讀んで居られたらしい。

㋰馬師月を翫ぶ、禪は海に歸すの語あり、此海から大雄峯と呼び起せるなり、大雄峰は惠海禪師の住所、此處禪歸レ海の三字を識らずんば殆んど通じ難し。

㋒餘の二は眞にあらず、法華に出づ。

㋼始本、始覺本覺、本覺は體、始覺は用。

を吹いて夕陽に坐す。

雲澗。

溪邊に歸り去つて幽石を抱く、當初岫を出でゝ行きしを悔ゆるに似たり、此より凝然として㋭閑不徹、さもあらばあれ流水の太忙生。

日峰。

金烏飛び上る碧層巓、㋔暘谷咸池曙けなんと欲するの天、刹々塵々照臨の下、孤高峭峻是れ通玄。塵沙刹界照臨圓かなり、屹立す㋗扶桑暘谷の邊、㋳脚下何人か黒うして漆の如くなる、且く來つて此の最高巓に登れ。

梅山。

昨夜一枝雪を凌いで開く、千巖萬岳春の回るを見る、心卽是佛の旨に參ぜんと欲せば、最高峯に向つて歩を進め來れ。

竹叟。

㋮心虛に體勁うして直くして還た淸し、叢林に獨立して老成と稱す、且喜すらくは此君の氣節を增すことを、㋘龍孫龍子歲を逐うて生ず。

㋭閑不徹、閑の極なり。
㋔暘谷咸池、淮南子に「日は暘谷に出でゝ咸池に浴す。」
㋗扶桑、暘谷の中にあり。
㋳暗くて困まれば、夜明をまて。
㋮第一句竹、第二句叟。
㋘龍子龍孫、筍子を龍に喩ふるは、筍の尖の方の房の下る處は龍の頭なり、勢よくのびた處は龍の體に似たり。

霜山。

靑冥露結んで寒威を布く、千林を染め盡して錦機を曬す、唯り孤峰のみあつて白うして雪の如し、曉天雲靜かにして峭巍々。

春谷。

雲は桃花をこめて洞口に橫はる、呼ぶがごとく答ふるがごとし亂鶯の聲、㋑風光長く是れ二三月、却つて笑ふ廬山錦繡の名。

旨庵。

宗訣を得て後便ち歸り去る、石室茅茨三十年、此の意人の來つて問取するなし、寥々として戶を掩ふ綠蘿煙。

萬山。

等閑に指を倒して算へ來つて看ば、疊嶂重巒㋺十千に歸す、數量に涉らず高く眼を著くれば、通玄峰頂靑天を挿む。

方外。

本色の衲僧眞の住處、上下四維の間を遠離す、憐むに堪へたり歷代傳燈の祖、西天東土を出得すること難し。

㋑風光長く是れ二三月、是れは武陵桃源の時候也、廬山錦繡、廬山に錦繡谷あり。
㋺十千、萬なり、萬は數の終りなり。

釣月。

垂絲千尺扁舟を泛ぶ、意は金鱗にあり幾度の秋ぞ、今夜把竿の手を空しうせず、玉蟾影動いて鈎頭に上る。

桃隱。

煙霞鎖斷して洞中空し、獨り愛す花開いて爛熳として紅なることを、許さず㊀秦を避る人の此に到ることを、夕陽流水幾春風ぞ。

㊀避秦の人云々、あちらへ遁け、こちらへ逃げまはる樣な漢は、來ることならぬ、寄せつけぬぞ。

松峰。

風千年の蒼翠を攪いて動かす、山頭日夜驚濤を激す、凡木の枝葉を交ふるを嫌ふに似て、立處に雲を凌いで萬仭高し。

自聞。

是れ他によつて方に現成するにあらず、從來己事太だ分明、山堂夜靜にして聊か聽を傾く、雨後の前溪聲を添へ得たり。

徹叟。

身を翻して透得す祖師の關、百帀千重也是れ閑なり、老去つて渾て些子の力なし、笻によりて獨立して青山を看る。

無冝。

佛語猶ほ嫌ふ耳邊に到るを、等閑に㋢眇視す祖師の禪、渾て一法の吾意に投ずるなし、只青山に對して枕を高うして眠る。

石叟。

人に對して㋐點頭の心あるに似たり、苔髮霜を垂れて歲月深し、㋚歷劫應に消する日なかるべし、兒孫大小山林に滿つ。

端堂。

門庭徑直にして恰も弦の如し、本是れ梁方又棟圓、古意分明なり人㋖薦めず、滿軒の風月轉た蕭然。

仙巖。

閑名留め得たり㋴赤松子、陳跡徒に存す㋱黃石公、猿蒼崖に叫んで秋夜半ばなり、解空は須らく坐すべし月明の中。

明海。

心月孤圓にして影流れんと欲す、金波自ら湧いて幾時か休せん、さもあらばあれ靈源を昧まさざる底、直に見る珊瑚枝上の秋。

㋢眇視、さげすむなり、孟子に出づ。

㋐道生法師、石に對して涅槃經を講ず、石皆點頭。(佛祖通載七)

㋚歷劫云々、四十里四方の石も、一劫たてば、仙人の羽で磨り消える。

㋖薦は薦得なり。

㋴赤松子、黃初平、松苓を服すること五萬日、遂に仙を得て赤松子と號す。

㋱黃石公、濟北穀城山下の黃石となりし仙人張良に三略を與へし人也。

絕照。（盲者）

工夫日用光㊀影を弄せば、歷劫何ぞ曾て道の成ずるを得ん、臺に當る閑古鏡を打破して、本來の面目自ら分明。

高庵。

我が箇の茆を誅するの地を知らんと欲せば、三十三天も下方にあり、佛祖仰望するに由なき處、如何ぞ百鳥去つて忙忙たる。

月峰。

靈山㊁の話と曹溪の指と、只だ平常光影邊に在り、峭々巍々高く眼を著くれば、通玄孤頂一輪圓かなり。

瑞巖。

靈芝生ずる處玉玲瓏、絕壁懸崖半空を壓す、昨夜孤猿明月に叫ぶ、聲々都て呼ぶ㊂主人公。

聞翁。

聲を宇宙に飛ばして雷の奔るに似たり、耳を側つる人皆膽魂を喪す、雙鬢霜寒うして秋已に老ふ、盡閻浮界是れ兒孫。

㊀光影は、かげぼうしなり。

㊁玄沙曰く、「靈山の付囑は、月を話するが如く、曹溪の竪拂は、月を指すが如し。」（傳燈十八）

㊂瑞岩和尚日々主人公と呼び、又自ら應諾す、故に此處瑞巖の號に主人公を使用す。

太原。

昔年箇の（と）師僧の在るあり、法身を講じ罷んで我が家に歸る、畫角風前唯だ一曲、寒梅落盡す幾枝の花。

信庵。

（モ）諸の善法を養ふ道の源、此に居して長年獨り門を掩ふ、春過ぎて空山人到らず、紫藤花落ちて離根を擁す。

默齋。

（セ）毗耶口を杜ぢて古風存す、盡日寥々として獨り門を掩ふ、箇の事未だ曾て輕しく漏洩せず、溪山簷外已に多言。

天叟。

碧霄漢は是れ我が生緣、俯しては看る三千と大千と、（ス）烏兎輪を推して脚下を過ぐ、眉毛白盡して年を知らず。

鐵面。

堅頑露出す（イ）六州の邊、妙密の鉗鎚打得して全し、鼻孔眼睛本來具す、口を開いて笑はんと擬せば驢年を待て。

（と）太原孚上座、光孝寺に在つて、涅槃經を講じ、法身の妙理を談ず、一禪者あり、覺えず失笑す、孚講了の後、發奮死坐、五更に至り、鼓角の聲を聞いて、忽然契悟す。（會元七）

（モ）諸云々、信と云ふものは、疑惑を除いて、諸の善法を養ひ、又大道の根源となるもの、（華嚴經）信は道源功德の母なり。

（セ）毗耶、維摩詰の住所。

（ス）烏兎、日月也。

（イ）六州の邊、羅紹威、魏博の牙兵の驕甚だしきを以て、盡く之を殺し、遂に朱溫の爲めに制せらる、乃ち嘆じて曰く「六

重賓。

百千萬片一片となる、那ぞ得ん輕々に岫を出でゝ飛ぶことを、牛峰を鎖斷して閑不徹、(ロ)老融は須らく半間の扉を掩ふべし。

潭月。

古今誰か(ハ)蒼龍の窟に下る、湛々として藍の如く萬丈深し、唯だ寒蟾のみあつて光皎潔、夜來舊によつて波心に落つ。

昨は防州の騰上人のために、所居の廬に扁して、幽棲と云ふ、復た來つて別稱を安せんと請ふ、仍つて高庵と號す、乃ち偈を作つて贈ると云ふ。

萬象森羅の上に獨居して、下視す諸方門戶の低きを、拳頭を竪起して春又過ぐ、人の此に來つて幽棲を問ふなし。

布(ニ)衲。

曹溪の屈(ホ)眴は是れ爭の端、鷲嶺の金襴(ヘ)傳ふること卻つて難し、我が箇の麻衣些(ト)子に較れり、年々補綴して寒を遮るを得たり。

世(チ)に布衲と謂ふは、乃ち直綴なり、內衣の(リ)稱のごとくにして、全く

州四十三縣の鐵を聚めて、一箇の錯を鑄る。」

(ロ)老融、牛頭山の法融禪師、半間、前に出づ。

(ハ)君が爲めに幾たびか蒼龍窟に下る。雪竇。

(ニ)布衲、是れ亦號頌ならん、然れども一種の號頌なり。

(ホ)屈眴、達磨より傳ふ處の法衣の名、兒孫の者の爭ひの端とは五祖傳法の時の事也。

(ヘ)金襴、靈山にて釋迦より迦葉に傳ふる處、是れは傳ふこと中々困難じや。

(ト)些子に較れりとは、少しばかりましと云ふ事なり、食へもせぬ鐵の餡ころ餅より、馬鈴薯めしの方がよいぞ。

(チ)此解は布衲の題にて袈裟を詠じたが世間では布衲は衣の事じやと難ずるであらうが、さうでない、古人も袈裟の事を麻衲と使ふて居ると、辯ぜら

袈裟の類に非ざるなり、余が偈意、大いに差誤するに似たり、但し予大元至治辛酉の春、南嶽に游ぶの次、草衣寺にいたる、寺の後に岩洞ありて、極めて幽邃なり、寺記を讀むに、云く、「蜀の僧字は奉初、馬祖に嗣ぐ、嘗て草を編んで衣となし、是に隱る、因つて草衣岩と號す、今は寺となりて、草衣寺と名く、云々。」余廊廡に經行して、壁間を回觀するに、古今の名賢宿衲の留題甚だ多し、獨り張(ヌ)無盡の一聯、絕唱と稱す、云く、「古人一悟して便ち心安し、計較何ぞ曾て萬百般ならん、草衣(ル)衣下の事を識得せば、任他麻衲と金襴と。」余此の詩を引いて、以て證となすのみ。

(ヲ)高巖。

巖あり巖あり青霄を摩す、玲瓏八面轉た岧(ワ)嶢、煙霞猶ほ自ら飛で到らず。烏兎還つて疑ふ半腰を遶るかと。古今仰觀するに堪へたり、若何ぞ躋攀を容さん、佛祖も崖を望んで退き、空(カ)生も坐を得ること難し、道人素より衝天の志を具す、我れ斯の巖を取つて以て字となす、名や實や正に抗衡し、乾や坤や隣比すること少なり、世を擧つて都て高尙の情なく、區

れし也。

(ノ)稱は猶ほ名の如し。

(ヌ)張無盡は儒者では、姦賊の如く罵る先生もあれども、宗眼明白の人であつた、當時のおつさん方が、無茶におだて上げたから、よい氣になつて、雲居の羅漢な氣取つた樣子がある、もちとぶんなぐつてやると、よかつたのじや。

(ル)是れは成程最な事が歌ふてある、印可證明にしろ、傳法衣にしろ、唯だ信を表するまでゝ眼目は草衣衣下の一著子なり、して見れば、外のものは麻袈裟でも金襴でも、どちでもよし。

(ヲ)是亦號頌の古槪也。

(ワ)岧嶢は山の高き貌也、烏兎は日月也。

(カ)空生は、須菩提尊者なり、空生岩畔に坐すれば、天花亂墜す。

々として日に下流を逐うて行く、早晩か歸つて幽鳥の花を含んで落すを看ん、誰と與に同じく孤猿月に叫ぶの聲を聽かん。

　星攀山の僧舍に遊ぶ。

千峰嶒㋵崪として一目に收む、臂を引いて戯に斗牛を攀ぢて立つ、徐歩す煙嵐紫翠の間、迤㋟邐として石磴零葉を蹈む、老屋空山秋日寒く、土堦の積雨苔錢疊む、因つて思ふ佛㋹を呑んで雲霄を視ることを、誰か復た筇を移して深處に入らん、此の道今人渾て蔑如たり、風松吟じ罷んで草露泣く、歲晩幽棲意自ら容㋞す、且つ猿鳥を呼んで爲めに相揖す。

　獨り東谷の知足庵に遊ぶ、時に㋡濟北巖病を下庵に養ふ、遂に其の壁間に題して去る。

榛を披き來つて禪扉を扣き、煙㋧霞の痼疾を問はんと欲す、孤㋤雲は岫を出でゝ歸らず、只だ松風のみあつて瑟々たり。

　愍侍者、山庵に來つて道聚し、同じく枯淡を守る、夏罷んで別を告げ、鶴峰の㋶桂光庵に歸る、岐に臨んで偈を求む、卒に長句を成し、以て贈ると云ふ。

㋵嶒崪は高峻の貌、第一句は、星攀山の眺望。
㋟迤邐はそろそろ行くこと也。
㋹佛を呑云々、寶誌公、南岳思禪師に傳語して曰く、何ぞ山を下つて、衆生を敎化せざる、目に雲漢を視て、何をかなすと、思曰く、三世の諸佛、我に一口に呑盡せらる、更に何の處にか、衆生の化すべきあらん、(會元)此處言は我れは南岳思公の高蹈を思ひ應化に意なしと。
㋞容は、容擁の意、のんびりするなり、猿鳥に揖するは、交際を願ふ也。
㋡濟北巖、上卷に出づ、天資英拔にして、古衲の風あり、實に忘年の友于云々。
㋧煙霞痼疾とは、山水に放浪するを云ふ、又之に對して泉石の膏肓の語あり、言は北巖の風流を訪訊せんと思ひしと。

僻居窮谷を卜し、石をもつて牀脚を支ふ、道人何より來る、且喜すらくは幽獨に伴ふことを、三尺茅簷の下、首を聚めて一夏を度る、柴を討ぬると蔬を挑ぐると、安禪何の暇かあらん、氣質群ならず又妙年、它時九層の天に平歩し、於㋰菟の頭上に麟角を戴かん、俄然として我れに別れて巖烟を下る、布㋒毛吹起する處、侍者便ち悟り去る、一㋼等に業識を弄して、茫々として本據なし、此の事若爲んか論ぜん、笑倒す㋨鐵崑崙、爭でか如かん送つて松門の外に出で、山を看水を看て兩つながら忘㋔言せんには、草鞋跟底清風生ず、行け行け臂を掉つて等㋗閑に行け、行いて中秋三五の夕に到らば、龜峰の孤頂桂光明かならん。

珍上人の常州に之いて、復庵和尚に見ゆるを送る。

巖㋳桂清香飄る、西飈吹いて颯々たり、江天雁聲寒く、關山古月耀く、臨㋮濟德山も頭を縮むるに堪へたり、釋迦彌勒も且く舌㋘を結ぶ、描すれども就らず畫けども成らず。知んぬ他は畢竟是れ何物ぞ　之に迷ふものは徒らに石上に蓮花を覓むるに勞し、之を悟るものは也た是れ眼中に金㋫屑を著く、全く巴鼻なく甚だ怪奇なり、古往今來委悉し難し、珍禪や珍禪や、

㋤孤雲、亦北巖に比す。
㋶龜山は、鎌倉の壽福寺。
㋰於菟云々、虎のあたまに角が生えると云ふとで、虎は爪だけでも恐ろしいに、まして角を持たせては、倚ほ手に合はぬ、於菟は虎也、左傳に出づ。
㋒布毛云々、鳥巣と布毛侍者の因緣。上に座禪に暇なしと云ふことあり、故に此二句切なり。
㋼一等、諸方、禪と說き、道と說くもの、……。
㋨笑倒す云々、奈良の大佛さんが腹をかゝへて笑ふと。
㋔忘言、言はうとしたが、はや忘れた。(莊子に出づ)。
㋗等閑、そろり〳〵と、足なみそろへて、御出なさい、他と稍用法別也。
㋳初の四句、現成底、途中の受用也。
㋮臨濟云々、上の四句を承けて

道の爲めにすること專切なり、我は蒲㋙柳の衰翳を憐み、汝は松筠の貞節を守る、九登㋓三到早く心を留め、千山萬水暫く相別る、一㋢千七百の爛葛藤を掃はんと欲せば、先づ去つて常州の老活佛に參見せよ。

僧の復庵和尙に謁するに贈る。（此の僧五臺に遊んで、放㋐光落髮の二石を得て歸る、亦曾て高麗に遊ぶ、云々）

上人袖裡に五臺あり、放光落髮太だ奇なるかな、惟だ親しく文殊に見え去るのみにあらず、㋚南方の知識に參じ遍うして來る、吳雲楚水は草鞋底、又三韓に向つて走ること一回す、常州の古佛今說法す、行け行け切に忌む此に徘徊することを。

古播の言侍者、首を山中に聚め、孜々として道㋖に在るの佳衲子なり、一日來つて告辭す、乃ち古風一篇を贈ると云ふ。

言㋴前に旨を領ずるも早く是れ遲し、句外に宗を明むるも猶ほ未だ徹せず、三㋱呼譏に討ぬ犀牛兒、爭でか識らん七㋯華又八裂なるを、倒に鐵馬に乘つて崑崙を過ぎ、空に和して踏破す水中の月、德山手を拱して高く棒を閣き、臨濟首を抵れて且く喝を收む、且く喝を收むも卻つて切㋪怛、雨霽れて亂峯靑く、春禽花裡に聒し。

言ふ。

㋘舌を結ぶとは、言ふ能はざるなり、描は線に屬し、畫は彩色と見るべし、書くことも、ゑどることも出來ぬと。

㋻金屑は黃金のかけ、貴くはあれども、目へはいつては、目つぶしなり、委悉は吟味なり。

㋙蒲柳の衰翳は禪師自ら自己の病身を憐むなり、松筠は松竹なり。

㋓九登三到は、三たび投子に至り、九たび洞山に登る也、雪峯和尙の故事。

㋢一千七百、大藏經は、五千四十八卷、古則公案は一千七百則と云ふが、此一千七百と云ふ數は、傳燈に載せたる和尙の數じや、別にこれ〳〵の一千七百と云ふ公案はない。

㋐放光落髮とは、石の形によつて名けしならん、五臺山の文殊を禮するは、入唐僧の行事

釋（ヱ）侍者に贈る。

凝滯頓に（ヒ）釋け、灑々落々たり、電卷き星飛び、龍驤り虎踊る、疎慵の老頭陀、一生丘壑に投ず、同志遠方より來る、慚愧す氷（モ）蘗を嘗むることを、酷だ愛す茆を移して深に入ることを、糞（セ）火煨芋の標格、古風振はざること久し、林下年々蕭索たり、千（ス）峯玉立して秋旻を掃ひ、冷翠たる岩屛飛瀑を挂く、今朝君已に岩嶢を下らば、誰と共にか同じく山月の白きを看ん。

松（イ）嶺秀侍者の東歸に贈る。

侍者侍者禪に參得す、草鞋踍跳して飛んで天に上る、虛空口を開いて笑不（ロ）徹、須彌顚倒して走つて烟の如し、一條の拄杖活して龍に似たり、等閑に呑卻す十方空、威音王佛は驚いて舌を吐き、二（ハ）三四七は盡く蹤を潛む、誰か管せん氷蘗を嘗むることを、步々淸風を起す、千里の江山晴日照し、白雲漠々として遠峰に生ず、偉才豈是れ討ね易からんや、穎れんと欲するの法幢を扶取せよ、葛藤の舊枝蔓を截斷して、金剛劍を把つて磨礱を加へよ、將に謂へり叢林已に凋落すと、且つ看よ冬嶺に孤（ニ）松秀づることを。

の一に成つて居る、成尋の日記や、慈覺の巡禮記に、道往きの具合が、精しく書いて居る。

（サ）南方の知識云々、善財の南詢に擬す。

（キ）在道、念々參究にあり。

（ユ）言前云々、言侍者の名を打す、以下の詩多く此消息あり。

（メ）三呼、「忠國師因緣。」犀牛兒、「鹽官の因緣。」

（ミ）七華八裂「らりこつぱい。」扇子破れ畢んぬより來る。

（シ）忉怛は、勞心なりと解す、此處は親切の推し寶りと云ふ程なり、雨露云々、只此上に會取せよと、現成を指示す。

（ヱ）彌天の永釋禪師は和尙の法子なり。

（ヒ）釋の字を拈弄す、贊語賸語等に、多く其名字を打するは、大いに子細のあることなり。

（モ）氷蘗、白樂天の詩に、「三年刺

英（ホ）侍者の歸省に贈る。

侍者禪に參得し了んぬ、倒に鐵馬に騎つて空裡に走る、唯だ崑崙兒を笑殺するのみにあらず。須彌を驚起して筋（ヘ）斗を打せしむ、八十の衰翁百不能、寧ろ期せんや英（ト）俊の聊か首を聚めんことを、祖庭箇の長松樹あるを喜ぶ、當に晩節を霜後に持すべし、珍重す楊岐の栗（チ）棘蓬、如今既に是れ君が手に入る、他時放出して人に與へて呑ましめよ、四七二三も口を下し難し、風那（リ）ぞ堪へん我に別れて層巒を下らんとは、前杖に倚つて獨立すること久し、蒲（ヌ）鞋を織り罷んで留連することなかれ、再び柴扉を扣いて暮年を問へ。

照禪人の故郷に歸るに贈る。

百花爛熳、幽鳥關（ル）々、春水千澗、春雲萬

史となり、氷を飲み復藥を食ふ」とあり、藥は苦きものなり、千辛萬苦を、氷蘖を嘗むと云ふ、釋侍者に譏す。

（セ）糞火云々、懶瓚禪師は南山に隱れて、牛糞火中に芋を煨れり、之を糞火煨芋の標格と云ふ、此句上を承く。

（ス）千峰云々、二句俊逸なり、別時の光景。

（イ）松嶺は、和尚の法嗣、諱は道秀、武州河越の人。

（ロ）笑不徹は、雲の凝然として、落ちつきし處を、雲は嶺頭にあつて閑不徹と云ふ、是れより轉ぜしならん、蓋し笑つてやまざるなり。

（ハ）西天の四七東土の二三。

（ニ）秀孤松、秀抜衝天の孤松なり、陶淵明の四時の詩の句也、秀侍者に擬す。

（ホ）英侍者は靈仲禪英禪師なり、又和尚の法嗣。

（ヘ）筋斗を打すとは、「さかとんぼりかへろ」なり、事苑七に文字の解あり。百不能は藝なし猿と云ふこと也。

（ト）英の字を打す。

（チ）栗棘蓬、會元十九に、楊岐僧に問うて曰く、「栗棘蓬你作麼生か呑まん。」栗棘蓬は「くりのいが」也。

（リ）那ぞ堪へん、二句、何等の情調。

（ヌ）陸州和尚蒲鞋を織りて母を養ふ、留連とは「なま川で」、遊び暮すと云ふこと。（孟子に出づ）。

（ル）關々、和鳴なり。

（ヲ）搊瞎、搊は刺す也、搊瞎とは眼玉を突きつぶす也。

（ワ）好正觀は、好し正に觀ると云ふ文字で「如何にも見ごたへあり」とでも釋するか。

（カ）攔不住は、止めても止まらぬ也、觀世音の千本の手で、留

山、衲僧の頂門眼を擉㋾瞎して、照用同時也た是れ閑なり、太奇絶、好㋻正觀、大悲千手も攔㋕不住、歩々親しく舊路㋵より還る。

　備前の要侍者、予と偕に、但の金藏山に寓すること、冬より春に迄る、忽ち一日辭して京師に往く、俚語以て賮別に代ふと云ふ。

子病夫に伴ふ、金峯索寞たり、雪に對して爐を擁し、口㋟邊に醭を生ず、三玄三要商量するに懶し、四㋹句百非渾て剗卻す、今朝又春風を逐うて帝郷に歸る、何の日か相逢うて共に山月の白きを看ん。

　㋞龍岩の汕藏主に贈る。

貞治㋡癸卯仲秋の月夕、余が忘年の友于、光德の龍岩老兄、特々として遠く來つて岩居を訪はる、相得て懽ぶこと甚だし、同じく錦㋧藍亭上に下つて月を翫ぶ、余龍岩に謂つて曰く、「靈山の指、曹溪の話等は、且く置いて論ぜざるなり、寒山子の云ふ、『吾が心秋月に似たり、』云々。』正に是れ秋月、今夜目に溢れて最も好し、只㋤だ吾が心實に未だ其の所在を知らざるなり」と。然して龍岩將に箇の語に酬いんとするのころ、時に山童あり、旁に侍す、松根を敲いて歌つて曰く、「心心心、何の所に向つてか尋ねん、

めてもとまらぬと。

㋵舊路より還るは、本分の舊跡によつて、歸家穩坐することなり。

㋟口邊に醭を生ず、會元十三に、雲居膺上堂に云く、「體得底の人は、心臘月の扇子の如く、口邊に醭出づ」と、醭は「かび」なり、「はくそ」なり、兩人無言、故にはくそがたまる。

㋹四句百非、有の句、無の句、亦有亦無の句、非有非無の句、之を四句と云ふ、之を開いて百非となす、楞嚴長水疏に詳かなり。

㋞此文は入れ處なきにより、茲に收めしと見ゆ、是れより前の作と體別なり。

㋡貞治癸卯、和尚七十四歲也。

㋧錦藍亭、永源の山門の前に遺跡あり。

㋤只だ吾心實に未だ所在を知らず、白拈賊。

山中閑寂たり、良霄深からんと欲す、皓(ヲ)月高く懸つて、虚籟林に滿ち、溪聲潺々として、玉に漱ぎ琴を鳴す、石女木人起つて鼓舞し、虚空口を開いて笑吟々たり。」余勵聲訶して曰く、「休ね休ね、小子多口なり」と、二人手を携へて庵に歸り、寢に就く、翌旦毫を援つて記し、以て龍岩公に贈ると云ふ。(ム)

佛祖の賛（合計八十四首）

釋迦三尊。

三界獨り尊と稱し、十方等匹なし、普賢は乃ち左輔、文殊は是れ右弼、象王回旋を休め、師子嚬呻を忘る、元來金剛座を起たず、萬德の金容刹塵に應ず。

菩提樹下の金剛座、滿口縱橫大(ウ)脫空、此れより二千三百載、依(ヰ)然として明月清風に伴ふ。

出山の相。

任(ノ)佗流水の人間に下ることを、怪むなかれ浮雲の故山に歸るを、六載の艱辛柴骨露る、這回果して改む舊時の觀。

(ヲ)皓月、虚籟、溪聲、岩石、林木、天籟等は是れ心の所在か、「あはゝゝゝ」ぢやと。
(ム)以上合計十四首。
(ウ)脫空、虚言、或は法螺と云ふ如し、俗語也。
(ヰ)依然とし明月清風に伴ふ、是れが寂室和尚の宗旨じや。
(ノ)石は流れて、木の葉は沈む。

氷㋔を嘗め蘗を嚼んで何事をかなす、通身を討得すれば痩せて柴に似たり、四十九年三百會、夢中に夢を說いて癡獃を誑す。

雪嶺に故坐して、箇の甚麼をか成ず、勉强して出で來る、人天の殃禍、等㋗閑に放過す二千年、今日相逢ふて親しく勘破す。

杜陀の釋迦（鉢盂を擎げ錫杖を持し岩瀑の下に立つ）

雪嶺の沙門、枉げて人間に出づ、鉢盂底なく金錫光寒し、岩泉は應に倒流の日あるべきも、滿㋭面の慚惶は洗ふこと卻つて難し。

彌陀佛。

塵念頓に除き、明鏡の面の如くなれば、安養の三尊卽時に示現す、區々として若し是れ西方を望めば、華池寶樹恐らくは見難し。

紫㋮金光聚、慈容炟㋘赫、區々たる迷徒は外に向つて求覓す、閑思念をとつて暫㋫時に忘ぜば、樂邦は果して西方にあらず。

聞くならく、此の無量壽佛の尊像、一夕回祿の災に罹る、而も後に之を熱灰堆中より得たり、空絹皆燼して、像は壞するところなし、遐邇奔趨して驚駭嗟嘆す、逆め知る、劫火洞然として大千倶に壞するも、敢て他に隨

㋔千辛萬苦。

㋗等閑の二句、出山佛を、面白く言ひふせられた、此佛は二千年も、どこの山へ隱れてゐられたか、一見瞥見見てとつた。

㋭滿面の慚惶云々、金輪の寶位を去つて、乞食坊主となる、あなはづかし、風無きに波を起すじや。

㋮紫磨黃金の光りのかたまり。

㋘炟赫、舊注に、炟は烜に作るべし、烜赫は照耀なり。

㋫暫時、一時の意、蹈踏せざるなり、用法尋常と別也、二句、唯心の淨土、己身の彌陀なり、何ぞ西方にあらん。

ひ去らざるを、神異宦に測るべからず、因つて香を焚き、稽首して、聊か賛詞を述ぶと云ふ。當初甚に因つてか安養を離る、今日端なく火坑に入る、幸に是れ幻身焼けども爛れず、且く玆の土に居して群生を度せよ。

觀音大士。

手に念珠を掐り、足に蓮萼を蹋む、流㊁を入して所を亡じ、聞㊂を返して覺を遣る、衆生界空しうして、我が願方に極まらん、刹々塵々、靈光赫々たり、首を回らして水中の月を貪り觀て、眼裡に金屑を著くるを知らず、別別別、無量劫來一橛を得たり。

瀑布石を透り、松崖空を撑ふ、碧草を座となし、瓶柳の春風、眼處に聞き耳處に見る、知らず何の劫にか㊃圓通を悟らん。

聞思修より、三㊄摩地に入る、一身分化す三十有二、衆生の心に應ずるは月の水に印するが如し、大智の光明處として至らざるなし、苦海に涉を算へ念珠指を輪る、迷㊅途歸ることを忘れて寶蓮趾に襯す、春は百花に透り、鶯千里に啼く、南無觀音、圓通大士。

那伽定に入つて、圓通を示現す、悲心一點衆生界空ず、巖㊆泉何事ぞ響玲瓏たる。

㊁流を入して所を亡すとは、前塵に隨ひ、流轉起滅するを取つて返して、回光すれば、所緣の境自ら泯滅するなり。
㊂聞を返して覺を遣るとは、聞の自性を返聞すれば、無上菩提現前する也。
㊃知らず云々、耳根圓通は是れ何の乾屎橛ぞ。
㊄三摩地とは、禪定を以て心を攝するなり。

妙相巍々たり、梵音落々たり、擬議不㋴來、鐵圍懸かに隔る、㋱白花巖上千尋の瀑。

盤陀石上と、古瀑岩邊と、悲願海潤く、妙智光圓かなり、聞は聞性を空じ、見は見緣を離る、圓通の三昧、隨所に現前す、塵々刹々法雨を澍ぐ、手裡の春風柳色鮮かなり。

圓通三昧、塵刹に現成す、耳裡の山色、眼中の水聲、劫外の春風瓶柳青し。

滄溟千尋、悲心甚だ深し、崖瀑聲無うして、聞塵自ら淸し、大士圓通三昧力、世間那ぞ苦衆生あらん。

塵沙の刹土、人の患難を救ふ、將㋯に謂へり一たび去つて萬劫にも還らずと、咦、補㋛陀巖上自ら安閑。

十方一華座、徧界大圓光、何ぞ止だ分身三十二のみならん、春來つて萬國百花香し。（圓相の中に坐す）

塵々圓成す水月の場、刹々渾て是れ空花の座、歷劫にも人の入得し來るなし、普門元自ら曾て鎖さず。

百千の三昧は水中の月、四八の應身は空裡の花、歸り去つて補陀岩上に坐す、青山㋓老卻す幾烟霞ぞ。

㋚迷途云々、足に寶蓮と云ふは、迷枷がくつゝいて居るから、迷途を去ることが出來ぬと。

㋖巖泉云々、是れは和尚の耳が鳴つてゐるのじや。

㋴不來は來也、來らざらんやと云ふ反語を用ひしもの、ちらりと横矢がはいれば、白雲萬里ぞ。

㋱白衣觀音。

㋯將に謂へり云々、本分の家山へ歸つて、二度と娑婆へ還らないと。

㋛此結句氣に入つた。

㋓靑山老卻云々、穩坐堆々、幾千年の意、以て衆生の機に應ずる也。

圓通の門戸等閑に開く、龍㋪天を惹き得て特地に來らしむ、終日寂寥として岩瀑に對す、流を入し所を亡じて坐堆々。

淸淨の光圓かに、弘誓の海潤し、楊柳春靑く、頻㋲伽水活す、寥々として獨坐人の來るなし、惜むべし普門の徒に自ら開くことを。

三有の苦海、一葉の慈舟、普く群類を度して、彼の岸頭に到らしむ、壺中春は滴る楊柳の露、塵刹圓通法雨流る。

寶㋝華王の座坐して巍々たり、湛然として深く三摩地に入る、刹々塵々應現の身、豈惟に四八のみならん矣。

古㋜皇の天下無爲を樂むも、化跡猶ほ存す丘索の類、爭でか如かん慈容を瞻仰するの人、過を悔い邪を捐てゝ妙理に伏せんには、舷㋑を燒き水を背にするも籌策に勞す、竈㋺を減じ兵を添ふるも又多事のみ、大士未だ聲氣を動ずるによらざるも、生死の魔軍自ら逃避す、普門歷劫關鑰を缺く、願海何ぞ嘗て涯涘あらん、聞を返して聞盡き見は見に非ず、鳥啼き花笑む只だ這れ是れ。

盡く謂ふ龍天來つて耳を側つと、慈を垂るゝことは何ぞ必ずしも普聞に

㋪龍天、畫中の景也。
㋲頻伽は、水瓶なり、形頻伽鳥に似たり。
㋝寶華、七寶蓮華なり。
㋜古皇の天下云々、五帝三皇堯舜の世、無爲にして化すと云ふも、矢張り化と云ふものがある、又八索九丘と云ふ書物も殘つて居る。
㋑舷を燒くとは、周瑜、曹操を赤壁に燒打ちせし也、水を背にするは、韓信背水の陣を張つて、陳餘を破りし也。
㋺竈を減すは、孫臏、龐涓の軍を破りし時の事也、兵を添ふは虞詡强兵を示して、羌寇を破りし也、此四皆衲僧分上の事也。

在らん、人の三摩地に入得することなし、海畔の青山空しく白雲。

大圓滿の光、妙相堂々たり、昏夜の星月、苦海の舟航、如今深く三摩地に入る、瓶裡の芙蕖定㈧香を吐く。

瀑泉石を穿ち、岩樹雲を凝す、天眞の明妙、見を泯し聞を亡ず、終㈠日頤を支へて坐す、眼は瓶柳と青し、人の三摩地に入得するなし、爭でか識らん普門元扃さゞることを。

如意輪観音

終日頤を拄へて坐して思惟す、善哉深く悲願海に入る、群生を度し了つて已に多時、珍重す如意觀自在。

長州の逸禪者、舊印本の普門品一卷を收む、首に補陀大士の像あり、嘗て回祿に罹る、然して後に之を灰中に得たり、空㈥紙少しき燔すと雖も、像と經字とは敢て壞する所なきものなり、予に從つて賛を需む、乃ち稽首拜手して、謹んで其の上に書すと云ふ。

眞空の妙相、圓通の三昧、劫火光中、巍々如是、咦、黑底は墨白底は紙。

文殊大士

覺城㈧の東際に、童兒を敎壞す、謾に師子を把つて卻つて馬と作して

㈧定香とは、五分法身香の一也。
㈠終日云々は、聞を亡するなり、眼は瓶柳と青きは見を泯するなり。
㈥空紙は文字なき處。

騎る、祇だ方寸吹(ト)毛の利なるに緣つて、自ら肯ふ七佛の師となるに堪へたりと。

沒(チ)字の殘經看ること未だ了せず、亡鋒の古劍只だ空しく持す、長年癡坐す金毛の背、誰か信ぜん曾て七(リ)佛の師と爲ることを。

地藏。

忉(ヌ)利天宮、佛の遺付を受く、苦に沈む者あれば、誓つて我れ救度す、度生甚の慈氏に到るとか説かん、虛空は盡くると雖も窮(ル)已なけん。

忉利天宮、親しく佛勅を受く、虛空は盡くることありとも、悲願は極りなし、寶(ヲ)珠掌に在つて世間の困窮を救拔し、金錫威を振つて地下の牢獄を擊摧す。

六(ワ)環の金錫、一顆の摩尼、物を雨らして乏しきを救ひ、苦を拔いて慈を垂る、虛空地に墜つるの日ありと雖も、應に濟度人を棄るの時なかるべし。

達磨三首。（渡江二、半身一）

梁王相對して相識らず、夜半扶桑杲日紅なり、大(カ)江を蹈斷して一滴なし、蘆葦葉は冷かなり幾秋風ぞ。（右杲侍者の請）

(ヘ)覺城は、事苑に福城に作るべしと云へり、童子は、善財童子也、敎壞とは、人を敎へてめくらにすること、是は大切の事であつて、主人は丁稚を敎壞する、敎師は生徒を敎壞する、師家は學者を敎壞する。

(ト)吹毛は、利劍なり、毫毛刄を渡れば悉斷々壞す、方寸は心なり、心中の利劍。

(チ)沒字の殘經とは、無字の經卷なり、蓋し智慧を指せしならん、普賢とまぎれ易し。

(リ)七佛の師、普超三昧經に「過去無數の佛は、皆其の弟子」とあり。

(ヌ)忉利に遺付を受くるは、地藏本願經に詳なり。

(ル)窮已なけんは、誓願力に打切りなき也。

(ヲ)寶珠、如意寶珠。

(ワ)六環の金錫、錫杖經に、「二股

剛て道ふ廓然無聖と、乃ち是れ觀體現成す、元來自救不了、若何ぞ迷情を度し得ん、長江は萬古東流し去る、脚下依然として蘆一莖。

六(ヨ)宗邪は破る一言の下、五葉華は開く萬國の春、普(タ)通の年より今日に到るまで、是れ誰か箇の全身を見ることを得ん。

寒(レ)山。

家は五(ソ)臺に在つて歸ること得ず、路頭忘(ツ)卻して已に多時、毫を援つて側立す寒岩の下、想ふに亦應に落(ネ)韻の詩を題するならん。

強ひて謂ふ吾が心秋月に似たりと、爭でか知らん肚裡暗昏々なることを、須ひず合(ナ)掌して人事を勞することを、五臺に歸り去つて且く門を掩へ。

(ラ)拾得。

峨嵋の好風月を拋卻して、赤(ム)城の山水に且く逍遙す、人(ウ)の字を寫すを看て墨を研ぐことを忘る、首を囘らして那ぞ知らん劫石の消するを。

峨嵋の銀(ヰ)世界を閑卻して、國淸寺裡に佯狂を恣にす、數行の貝葉看て未だ了せざるに、枯木岩前又夕陽。

(ノ)布袋。

六環は迦葉佛の製、四股十二環は釋迦佛の製」とあり。

(カ)大江を踏斷、徐ろに行いて踏斷す流水の聲。

(ヨ)六宗とは、有相宗、無相宗、定慧宗、戒行宗、無得宗、寂靜宗也、達磨大師は此六宗を說破せられしなり。

(タ)普通云々、半身達磨の贊として、申分なき働きなり。

(レ)寒山は、文殊の化身、台州始豐縣の西七十里に寒明の二岩あり、其寒岩の中に居止するを以て、寒山と呼びし也。

(ソ)五臺山は、文殊應現の靈場。

(ツ)十年歸ること得ずんば、來時の路を忘卻す。

(ネ)落韻とは、韻脚支離の意也。

(ナ)是れは、寒山の合掌せし圖ならん。

(ラ)拾得は、普賢の化身なり、蜀の峨嵋山は普賢應現の處。

(ム)赤城、豐干禪師經行の序で、

率陀天上、幾時か還るを得ん、灰頭土面、且つ癡頑を放にす、箇(オ)の人の來るを等つて渾て見ず、長汀の風月誰が爲めにか寒き。

誰か信ぜん化身千百億と、獨遊獨處す四(ノ)明の鄽、卻つて天上長年の樂を將つて、人間の一覺眠に換へ得たり。

跡を四明閣(ヤ)閣の外に寄せて、灰頭土面人の憎を得たり、自ら(マ)謂ふ化身千百億と、我れは言ふ天地の一閑僧。

頭を回らし腦を轉じて何事をか笑ふ、終日茫々として市鄽に走る、長汀風景の好きを愛するが爲めに、多時忘卻す率陀天。

政(ケ)黃牛。

盆(フ)を浮べて聊か翫ぶ清池の月、偈(コ)を留めて還つて辭す國士の筵、白鷺鷥の邊り黃(エ)犢の角、眼中老卻す幾風煙。

郁(テ)山主。

一擲當頭に三際斷ず、卻つて魚(ア)目を將つて明珠となす、安んぞ知らん今日溪橋の上り、又(サ)蹇驢に跨つて畫圖に歸せんとは。

大覺(キ)禪師鏡中に觀音の像を現ず。

赤城の道側に拾ひ得たり、故に拾得と名く。

(ウ)人の字を寫す云々　舊注に、「此圖は寒山字を寫し、拾得墨を磨するを畫く」と。

(ヰ)銀世界、普賢は六牙四足の白象に騎る、故に然か云ふか。

(ノ)四首、布袋は、傳燈廿七に傳あり、又定應大師別傳あり、甚詳なり、普賢の化身、名は契此、又長汀子と號す。

(オ)箇人の來るをまつ云々、布袋嘗て街衢にあり、僧問ふ、「和尙玆にあつて什麼をかなす、」袋曰く、「箇の人の來るを俟つ、」僧曰く、「來れり來れり、」袋曰く、「汝は是れ箇の人にあらず、」僧曰く、「如何んか是れ這の人、」袋曰く、「我に一文錢を與へよ。」

(ク)四明、布袋は明州の奉化に放浪す、四明はもと山の名なり、鄽は市鄽也、雜沓の地。

之を大覺と謂ふも全く不是なり。喚んで圓通となすも眼(マ)に瞞せらる、二大士の眞體を知らんと欲せば、手を東(メ)平に借て鏡を破つて看よ。

大覺禪師。

金錫巫(ミ)峽を出で、楚水吳雲を蹈遍す、泥牛窓櫺を過ぎて、清風明月を吼破す、方に隨ひ感に赴いて祠(シ)山の靈神化權を助け、物に應じ形を分つて鏡裡の圓通醜拙を呈す、端的人を驗む、老手親しく眼活す、邪禪の輩氣を飲み聲を吞む、老(エ)贖翁の遺風餘烈、特々として西來す何の所爲ぞ、箇れは是れ本朝最初敎外別傳の師、間世の英哲蜀川の權奇、松源の的派(ヒ)無明の光輝、初めて本朝に來たつて別(モ)傳の師に同じ、邪徒(セ)妬害して百の流支を累す、回瀾の砥柱は屹然として高く崎つ、迷情を啓迪して深慈痛悲なり、天

(ヤ)闤闠は市門なり。

(マ)自ら謂ふ化身云々、「彌勒眞彌勒、分身千百億、時々示二時人一、時人不二自識一。」是れ布袋の作也、布袋の偈多し、然れども此の偈最も人口に膾炙す。

(ケ)政黃牛は千古の逸人なり、僧寶傳十九に傳あり、又羅湖野錄にも逸話を載す。

(フ)盃を浮云々、大だらひに乘つて、月を見し也。

(コ)偈を留むは、「坊主が在家に突ろは面白からず、矢張り殿谷がよし」と云ふ名偈あり。

(エ)黃犢、惟政禪師は常に黃犢に乘りしなり、双眼風烟を見て老ゆ。

(テ)郁山主、會元六に傳あり、驢馬に乘つて溪橋を過ぎ、まつさかさまに水にはまつて、豁然大悟す、玆に於て我に明珠一顆ありの偈を賦す。

(ア)魚目をもつて明珠となすとは、用ひ樣、頗る面白し。

(サ)恨めしやと迷ふて出たのか、これでは、悟らぬ前と同じことなり。

(キ)大覺禪師、元亨釋書六に傳あり、此の鏡の事又載す、蓋し斯様の細工せし鏡を所持せられしと見ゆ、さりながら其の當時は之を神秘視せるなり。

(マ)眼に瞞せらるとは、目にだまされるなり、大抵のものは目にだまされるものじや。

(メ)東平云々、仰山東平に住する時、潙山鏡を送らしむ、仰山提起して曰く「是れ潙山の鏡か、是れ東平の鏡か、道ひ得ずんば打破せん。」衆無語、仰山則ち打破す。

(ミ)巫峽は、蜀にあり、大覺は四蜀の人、楚水吳雲云々は、楚の諸禪知識に參ぜられし也。

(シ)祠山の靈神云々、鶴岡の八幡祠の神來つて斯道を商量せし

下の建長雄基を開捌し、千古萬古福山巍々たり。（廸長老の請）

奇なるかな大覺と圓㋜覺と、同德同風道も亦同じ、震旦扶桑に鼻祖となり、分身揚化して宗風を振ふ。

　中㋑峯和尚。

若し這の老和尙の面前を論ぜば、則ち山河大地も也た是れ㋺幻、色空明暗も也た是れ幻、三世の諸佛も也た是れ幻、歷代の祖師も也た是れ幻、乃至菩提涅槃眞如實相等一々幻にあらずといふものあることなし、掩光の後三十年、箇の幻にあらざる底を留め得て、麈尾の拂を握つて曲彔床に踞す、煒㋩々煌々たり、堂々巍々たり、勢は西天目山と其の高寒を爭ふ、偏く盡大地の人をして瞻仰肅恭せしむるのみ。

萬德莊嚴圓滿の身、虛空を舌となすも若何が申べん、我れ今免れず強ひて道取することを、佛より已來唯だ一人。

　南浦㋥和尚。

息㋭耕の眞印を佩びて、先聖の途徹を離る、舊横㋬岳の雲に眠り、晚に巨峯の月を翫ぶ、手に麈尾を握つて坐して來機に趣く、崖崩れ石裂く、電卷き

を云ふ。

㋓老瞶翁は、松源也、松源は晚年耳聾す。

㋪無明は大覺の師也。

㋲別傳師は、達磨大師也。

㋝邪徒妬害云々、大覺讒によつて甲州に流さる。

㋜圓覺は達磨圓覺大師。

㋑中峯諱は明本、傳は增集續傳六に出づ、著に中峰廣錄あり、家藏戶誦す。

㋺中峰は幻住と稱す、故に幻の字を拈弄す。

㋩煒々は光明也、煌々は炫燿の貌。

㋥南浦は大應國師なり、大應錄の下に、塔銘あり、續群書類從の史傳部にも載す、日本二十四流の禪、今日存するものは南浦の一流あるのみ、兒孫浩々地法幡蹴々たり、嗚呼偉なるかな。

㋭息耕は虛堂和尚なり、大應は

星飛ぶ、夫れ之を天(ト)子の詔に應じ松源の道を唱ふる大應國師と謂ふ者を耶。

佛燈國師。

道德の光輝日月を揚げ、眼裏宇を空す僧中の傑、宏に玄風を振ふ何ぞ凜冽たる、全(チ)機別なり、舌霹靂を轟かして邪說を摧き、魔外僅かに聞いて肝膽裂く、如今林下(リ)饕餮多し、大法千鈞一髮を懸く、愁殺するを休めよ、龍峯萬古寥(ヌ)泬に蟠まる。

咄者の老和尚、萬(ル)般會てせざるに似たり、機に當つて雷奔り電激し、卽時に天靜に水澄む、殺人刀活人劍、少處を減じて多處に増す、佛(ヲ)も也た形跡を覓めがたかるべし、閻浮界に此の僧なし、夫れ之を碩大光明今昔を照映する松源の的派天下の佛燈と謂ふ。(白絹を寄せて請ふ)

超然たる標格、大眼目を具す、衲僧の寃家、叢林の軌則、語默才かに離(ワ)微に涉れば、聖凡共に罵辱せらる、有る時は平地の波瀾を激起し、有る時は參天の荊棘を剗除す、中(カ)流の一壺昏衢の明燭、千古萬古高風を仰ぐ、巍峩突兀たり老龍峯。

虛堂に喝石岩下に參ず、印可に紹既に明白、諸宗を失はずの語あり。

(ヘ)横岳は筑前横岳山崇福寺、巨峰は巨福山建長寺也。

(ト)天子は後宇多天皇なり、天皇歸依の篤き、「朕百年の後、國師の塔側に瘞埋すべし」と遺詔せらる、故に京都安井の御陵は、國師の塔と並び立てり。

(チ)全機別、全體の機用諸方と別なり。

(リ)饕餮、左傳に財を貪るを饕と云ひ、食を貪るを餮と云ふ、蓋し飽食安眠の飯袋子を罵るなり。

(ヌ)寥泬、虛空なり、龍峰國師の面目は大虛に滂沛たり。

(ル)萬般云々、所謂無作の作。

(ヲ)佛も也た云々、白絹の贊、故に然か言ふ。

(ワ)離微、體を離と云ひ、用を微と云ふ、佛見法見と見ればよ

復庵和尚。

この老漢忒殺だ人情に近かず、釋迦の腦蓋を揭卻し、達磨の眼睛を(ヨ)摑瞎す、還つて千七百の公案を將つて、一箇の鐵團圝を打成し、當頭に人に與へて咬ましむ、從敎口を下すことの難きことを、扶桑半夜金烏翥る、(タ)笑倒す摩霄の天目山。

(レ)空岩の空を空盡し、幻住の幻を幻視す、神機妙用並び馳せ、露(ソ)布葛藤等しく鏟る、端的人を驗む、手(ツ)親しく眼辨ず、假使通身鐵打成するも、擬議せば它に穿一串せらる、象龍遠く風に趁る、稻(ネ)麻算ふるに足らず、如今五彩大虛に施す、焉ぞ知らん當下に自ら欺(ナ)謾することを、白雲は長に是れ青山に臥す、流(ラ)水は從敎寒澗に出づることを。

再來の小(ム)釋迦、三世的傳の家、魔佛俱に空盡す、眼中爭でか華を著けん、幾度か人天推せども出でず、法身爛卻して煙霞に老ゆ。

陳年の爛葛藤を拈出して、人をして蘗(ウ)を嘗め寒氷を嚼ましむ、半輪天目山頭の月、萬世扶桑國裡の燈。(半身)

寶翁和尚。

し、肇法師の寶藏論に出づ。
(カ)中流の一壺、河の中流にて船を失すれば、一壺千金に直す。(歇冠子)
(ヨ)摑瞎、つきつぶす也、再出。
(タ)笑倒云々、金烏は日なり、天の目じやなど云ふても、金烏の前では、三文きなかよ。
(レ)空岩、復庵の授業師ならん、幻住は中峰明本。
(ソ)露布、戰功を立つると、勳を書し、竿の先に掛けて、衆に誇示するを露布と云ふ。
(ツ)手親眼辨す、垂手親切、眼目分明。
(ネ)稻麻、法華方便品「法を說くもの稻麻竹葦の如し、」物の多き喩。
(ナ)自ら欺謾、虛空に描きし像は似せ者なり。
(ラ)白雲と流水と同か別か。
(ム)再來の小釋迦、復庵より上三世、雪岩欽禪師なり、禪師は

眉㋻間の寶劍、當初雲岩に挂け、塗毒鼓の聲、晩年巨福に鳴る、毫端に拈起すれば鳳舞ひ龍翔る、一句全提すれば神號び鬼哭す、從敎西來の正宗、灼然として我が掌中に歸するを、叢林謂ふなかれ今寂寞と、萬古の眞風海東に振ふ。

高㋨山和尚。

己を行ふことは精嚴にして、氷淸霜烈、人の爲めにすることは痛快にして、電奔雷驚、誰か知る靈洞高風の別なるを、百億の須彌も爭ふに足らず。

明㋔窻和尚。

寒猿枯樹に嘯き、老鶴喬松に立つ、物外乾坤窄く、眼中今古空し、調高うして賞音少なり、越格亦超宗、西㋗來的傳の傑、明覺大禪翁。

㋳虎關和尚。

人は言ふ再生の音㋮尊者と、當年の遠錄公に孰れぞや、誰か識らん東山の左㋘邊底、光前絕後宗風を振ふ。宗風を振ふこと何の窮かあらん、龍淵の支派天下に遍し、一々收めて海藏の中に歸す。

一路和尚。

仰山小釋迦の再來と稱す。

㋒蘗は苦きもの、氷は寒きもの、半輪の月は、半身を標す。

㋻眉間の寶劍、双眉の間に、しやんと突立ちし寶劍なり、雲岩は、下野那須の雲岩寺なり、弘安四年九月二十六日に瑞世す。

㋨高山は、法燈國師の法嗣、名は慈照、建仁に住す、靈洞院は其塔所なり。

㋔明窓、大覺の法嗣、名は宗鑑、建仁十八世。

㋗西來、大覺なり。

㋳虎關、東山の法嗣、名は師錬。

㋮音尊者、甘露寂音は眞淨に嗣ぐ、林間錄、石門文字禪、冷齋野話、禪林僧寶傳等の著あり、遠錄公は、浮山遠禪師、偈頌の能手也。

㋘左邊底、南堂靜禪師なり、見地越格にして、師兄圜悟佛眼の徒を凌蹊す、故に虎關に擬

萬㋻年名山の主盟となり得て、千聖頂顯の一著を提起す、桑㋕田の家法を蕩盪して、松源の正脈を流通す、喝下に崖崩れ石裂け、機前に電激し雷奔る、三尺の黑蚍長に握にあり、擬議すれば它に一口に吞まる。夜㋵深けて落月寒泉に印し、日暮れて歸禽翠烟を破る、眞如の籠罩を脫得し去つて、四㋟稜塌地に安眠を打す、安眠を打して氣天を衝く、誰か知らん淵默雷轟の處、通㋹玄未了の緣を了卻することを。

石天和尙。

敎海を漉㋞乾し、禪關を拶透す、棲雲庵裡、凝寂幽閑、萬古潛溪流れ竭きず、龍淵處々に波瀾を起す。

足㋡庵和尙。

是れ眞に陸㋧地に舟を行る底、三たび名藍によつて法雷を振ふ、迷徒を度し盡す知んぬ幾許ぞ、夢㋤中の記莂太だ奇なるかな、太だ奇なるかな疑猜を絕す、本通㋶玄峰頂より來る。

月㋰江和尙。（獨照遍照の兩寺に住す）

神宇爽拔にして、眉宇古㋒尨なり、宗通說通や、履は戶外に歸す、獨照

す、蓋し風彩的切ならざるも、虎關の東山照公に嗣法せるより使用せし也。

㋾龍淵、聖一國師の師無準禪師なり、海藏は東福にあり、虎關の開基也。

㋻萬年名山、眞如寺也。

㋕桑田、淨智に住す、名は道海、蓋し一路の師なり。

㋵夜深云々二句、一路沒後の追懷より來る。

㋟四稜塌地、四角の木材の地に墮在する也、安定不動の意あり、稜は角、塌は墮也。

㋹通玄、通玄庵は桑田の塔所也。

㋞漉乾は、したゝらし、かわかす也、棲雲庵は蓋し石天の寺、潛溪は聖一國師の法嗣、龍淵は徑山方丈の額、無準派を指す。

㋡大覺、桑田、靈巖、足庵祖麟。

㋧陸地に舟を行るは、絕大の力

遍照や、籌は室㋲中に滿つ、慈を興し悲を運らして老幼悅服し、邪を擊ち異を摧いて魔外蹤を潛む、夫れ之を曹源的派の遠孫、㋝大雲入室の眞子、月江大禪翁と謂ふものか。

一㋜月僅かに出でゝ、千江影寒し、是れ佗の面目、天上人間、叵耐なり曹㋑源の一滴水、端なく平地に波爛を起す。

昔し典㋺牛、策禪師の福慧に逮ばざるを以てして憂ふ、策曰く、「學者は惟だ己眼の明かならざるを恐る、己眼若し明かなれば、獨㋩り聖僧に對して飯を喫すと雖も、又何ぞ慊たらん」と、あゝ策公の一言、我が師兄柏巖公の痒處を抓著す、然りと雖も、惜むらくは、當初叢林に、好一箇の主盟に闕御することを、如今遺像を拜瞻して、之が爲めに歎息す、其の高弟儼侍者、贊を請ふ、贊に曰く。

神采爽拔にして、面孔儼然たり、已に佛燈の密印を佩ぶ、寧ろ大覺の正傳を忝めんや、胸中毫末を掃除して、量外大千を包裹す、東㋥寺折牀の鬧熱を冷笑し、法㋭昌泥像の因緣を仰慕す、道聲の區域に喧しきあつ

量なり。(論語)

㋯夢中の記莂、峯翁和尙の夢に大覺禪師、桑田と麟沙彌を載せて、陸地に舟を行る、桑田大覺に言ふて曰く「伏して乞ふ、此沙彌に住山せしめよ」大覺曰く「諾」云々。」

㋛通玄前田。

㋽一山の法嗣。

㋪庬は眉の太きなり、人老年に至れば、眉甚だ庬也。

㋲籌室中に滿つ、優婆毱多、一人を度する每に、一籌を石室に留く、後に籌石室に滿つ。(傳燈一)

㋝大雲、寧一山なり。

㋜一月千江、月江の名を打せるなり。

㋑曹源、名は道生月江五世の祖なり。

㋺典牛、寶庫裡の典牛と云はれし人なり、九十餘にして法嗣、淦毒の鎚禪師を得。(普燈下)

て出でゝ人天に應ずるに心なし、萬機泯絕す華(ハ)藏界、一室高く眠る竹澗の邊り。

大(ト)虛和尚。

江上の千山雪晴れて後、樓頭午夜月明かなるの初、吾が兄(チ)の面目只だ這れ是れ、何事ぞ丹青太(リ)虛を繪く。

(ヌ)義堂和尚

面目嚴冷にして、神宇玲瓏たり、學海枯竭し、智境掃空す、金剛王寶劍を提起して、是れ魔是れ佛、踪を潛むべし、夫れ之を東(ル)山下の左邊底、跳(ヲ)籠跨釜的骨の孫、義堂老禪翁と謂ふ。

無(ワ)住和尚。（雄書記の請）

簪纓の雄族、宗門の英靈、將に謂へり光を韜み復た彩を鏟ると、胡爲ぞ增々法燈の明を發する、似て(カ)は即ち不住、住は即ち寺ならず、鷲(ヨ)峯の眞規、少室の妙旨、箇の老漢の全(タ)身を看んと要せば、且つ華の鐵樹に開くる春を待て。

一口に平呑す三世佛、(レ)妙高孤頂月明の天、應無所住而常住、大法燈

(ハ)獨り、會下に、一人の參徒なきなり。

(ニ)東寺折牀、湖南東寺の如會禪師、學徒蝟集して僧堂內の牀榻爲めに折る。故に江湖稱して折牀會と云ふ。（傳燈五）

(ホ)法昌泥像、洪州の法昌猗遇禪師、行脚の僧一箇もなし、十八羅漢の泥像に說法す。（會元十六）

(ヘ)華藏、莊嚴世界は華嚴八に出づ。

(ト)大虛、名は元壽、佛燈の法嗣、下の寶翁に答ふる書に、壽兄は先師最も鍾愛の子、海外に孟浪すること二十一年」とあるもの是也。

(チ)吾が兄、大虛。

(リ)丹青太虛を繪く、赤やら青やらで大ぞらを汚して何にする、七竅鑿つて渾沌死すじや。

(ヌ)聖一國師、鐵牛圓心、義堂知

の光萬古に傳ふ。(妙高に住す)

仲㋞聞和尚

松源の遠裔、桑田の的孫、逵㋡天の閑鼻孔、鐵崑崙を笑殺す、靈虎山頭に高く坐斷す、凜々たる威風乾坤に振ふ。

無㋥極和尚。

皇室の玉葉金枝、叢林の砒霜鴆毒、㋤學海の波瀾𣶂瀰たり、何ぞ曾て元字脚を留めん、天㋶龍に嗣いで天龍を肎はず、果然として超宗亦越格、靈㋰龜孤頂太だ嵯峨たり、須彌を壓斷して碧落を衝く、夫れ之を高峯直下、的骨の孫、佛慈禪師眞の面目と謂ふ。

頂㋒山和尚。

最㋼軟頑の時、堅うして鐵に似たり、譊訛の處に到つて、坦かなること砥の如し、巍々として坐斷す士㋨峯の頂、衆山を下視して眼轉々靑し、自ら甘んじて敢て人の爲めに出でず、出づれば佗の魔外をして驚かしむ、一榻翛然として久しく淵默す、誰か聞かん徧界怒雷の轟くを。

俊㋔翁和尚。

信。

㋸東山下の左邊底、東福寺也。

㋾跳竈跨釜、親まさりの子と云ふこと也、竈の上に釜あり、釜と父と音同じ、又跨竈兒とも用ふ、意同じ。

㋻無住和尚、華山院家忠の裔也、綺綺を捨て、毛衣に從ひ、由良の法燈に法嗣す。(本朝高僧傳)

㋕似は即ち不住云々、是れは船子夾山の答話也、船子問ふ「何れの寺にか住す」夾山曰く、「似は即ち住ならず、住は即ち寺にあらず、云々、」蓋し寂室禪師は、住するに似ば、住とは云へぬ、(無住の住なればなり)、住したならば、寺ではない、(無寺の寺なり)の意に用ひられしなり。

㋵鷲峰、法燈國師の住處。

㋟全身云々、蓋し半身の像なり、故に然か云ふ。

俊翁老子は吾が端友、談笑懐を忘じて歳月深し、別去追慕に堪へざる處、忽ち遺像を瞻て益々心を傷ましむ、心を傷ましむるを休めよ、玉峰(ク)萬古翠千尋。

靈(ヤ)叟和尙。(蔣山に住す)

面目巉岩、器材瑰瑋、一句全提半提、惡聲千里萬里、無明の種草新に生じ、佛燈の光焰將に熾ならんとす、人は言ふ寶(マ)公再び蔣山に現ずと、我は道ふ活龍誤つて死水に下ると、禹(ケ)門雷轟を欠き、叢社公議を喪す、枉げて丹靑を把つて太虛に畫く、孤(フ)風凜々として來つて未だ已まず。

孤峰の德長老。

松(コ)老い竹癯せ、氷枯れ霜烈し、胸中の古今、脚底の吳越、列祖の重關、七通八達、玄機

(レ)妙高、無住洛西の妙高寺に住す。

(ソ)仲聞は、桑田の孫、甲州靈虎山に住せしなり。

(ツ)遼天、鼻孔遼天は、鼻のあなが、天迄とほる。

(ネ)無極、順德天皇四世の裔、夢窓國師に嗣法す、夢窓は高峰顯日の法嗣。

(ナ)學海の波瀾、宗鏡錄抄三十卷無極錄の著あり。

(ラ)天龍云々、師夢窓に嗣ひで、而も嗣法の香を燒かず。

(ム)靈龜、天龍寺の山號、嵯峨にあり。

(ウ)頂山、桑田の孫、靈巖の子。(古抄)

(ヰ)柔和の中、峻辣の機鋒あり。

(ノ)士峰、富士山に擬す、大士山は備前にあり、寺を慈廣寺と云ふ、卽ち頂山の開創に係る。

(オ)俊翁、江州河井の高福寺の開祖。

(ク)玉峰、高福の近くにある、山の名ならん。

(ヤ)靈叟、佛燈法嗣、蔣山は豐後の萬壽寺の山號。

(マ)寶公云々、寶誌公、七歲にして鍾山の僧儉によりて得度す、蓋し蔣鍾通ずるを以て、寶公の再現とす。

(ケ)禹門云々、靈叟の如き大德を、蔣山の如き小刹に放置するは、龍門の瀑の音なきが如く、全く公論にあらずと。

(フ)孤風凜々靈闕より來る、已まずは不斷に吹き來るなり。

(コ)松老い竹癯せは、容貌也、氷枯れ霜烈しは、禪心也、胸中に古今の典墳を藏し、脚底には吳越の雲を踏破す、蓋し孤峯は入唐せし人。

(エ)崔嵬、山高き貌。

(テ)圓機、溫州の人、永嘉大師の女弟。

を收拾して、退いて密に藏る、烟雲は唯だ半腰を沒すべし、天外の孤峯轉脊㊄崒たり。(半身)

南光の開山觀長老。(尼なり)

氣は丈夫を壓し、眼寰宇を空ず、手に黑蛇を握つて、風を打し雨を罵る、圓㊅機無㊆著も也た低頭す、山は瑞㊇雲を帶ぶ千萬古。

昌快大德。

天龍直指の玄に參得して、寥々として盡日自ら安禪す、遺芳餘烈何の極かあらん、桂㊈子蘭孫億萬年。

前備中の太守佐々㊉木の西公禪閤。

⑪皇家一十四葉の龍⑫胄、武門百萬軍中の羽儀、欽すべく畏すべし、惟れ德惟れ威、忠義の精は日月を貫き、英雄の氣は虹霓を吐く、況や是れ圓顱亦方服、佛魔も須らく一頭を放⑬つて低るべし。

妙喜禪尼。

夙に信根を植ゑて、心空門に遊ぶ、功德の母となり、桂子蘭孫あり、慈容影は現す鏡中の人、虛幻華は開く劫外の春。

㊆無着、年三十にして得度、諸方に參じ、後大悲に嗣法す。
㊇瑞雲、蓋し南光の山號ならん。
㊈桂子蘭は芳香を放つ、好兒孫の標語。
㊉佐々木禪閤、江州觀音寺城佐々木賴綱也、法名崇西、崇光寺殿と號す、永源寺の開基檀越氏賴の祖父。
⑪皇家十四葉、佐々木源氏は宇多天皇より出づ。
⑫龍胄は王孫、羽儀は天子の羽翼となつて、威儀を助くるなり、欽は恭敬なり。
⑬頭を放つて低る、一手をゆるして、低頭すべしと、放は容許也。

自賛（合計三十二首）

秀格禪人請。

大廈高堂は我れ分なし、松根石上に家風を逞しうす、茫々たる塵世誰か知己、西山に去つて亮(ユ)公を問はんと欲す。

聖濟大(ヒ)師請。

水中の月影、華裡の春容、虎を畫いて狸と成し、蛇を喚んで龍と做す、甜瓜棚上の苦胡蘆　德山臨濟も鶻(モ)盧都。

莊福の天關長老請。（圓相中の半身）

幻身全からず、神光虛圓、一生甘じて自ら林泉に韜晦す、誰(セ)か是れ吾に替つて靈談を發して、佛燈再び人天を照すを得ん。

道安侍者請。

心光不昧轉團(ス)圞、且喜すらくは安を覓めて能く安を得ることを、箇は是れ本來眞の面目、夜深けて山月秋を照して寒し。

(ユ)亮公、西山の亮公は馬祖下の人禪中の逸隱、又宋代にも西山亮あり。

(ヒ)大姉大師、通用。

(モ)鶻盧都は、古人往々使用する處、方語也、口を閉ぢて言はざるを云ふ。

(セ)誰れか是れ吾に替ふ云々、斯の如き人は、天關長老に非らずして、誰ぞや、天關は佛燈の法孫。

(ス)團圞、蓋し圓相中の像、安た

曇心庵主請。

㋑心や心や心や、夜來古月霜林を照す、禪や禪や禪や、無角の鐵牛飛んで天に上る、是なるときは眞我鏡像たり、非なるときは闍梨全く老僧、㋺黑蛇三尺閑に手にあり、乾坤を呑卻して曾てせざるに似たり。

元奇禪門請。

淸奇閑淡たり嶺頭の雲、奔激潺湲たり澗底の水、㋩老夫全身を隱すところなし、五彩空に畫いて還つて似ず。

㋥慈源大師請。

誰か麗妙の紫金襴を將つて、愚夫が赤肉團を包裹す、恐らくは傍人に看て便ち笑はれん、㋭如かじ逆つて舊靑山に在かんには。

日進禪人請。

退いて進むことを忘じ、默爾として玄を泯す、寥々終日、孤榻儵然たり、生平誓つて人世に游ばず、只だ白雲峰下に在つて眠る。

宗仁禪門請。

丹靑虛空を繪く、㋬全く似て全く似ず、身に華袈裟を披し、手に竹篦子

覓めて安を得ば、二祖安心の意を取つて、道安侍者の安を打す。

㋑心心心は、曇心の心を打する也。

㋺黑蛇三尺、竹篦を持てる像。

㋩老夫全身を隱すなし、上の二句は、寂室禪師の眞面目、露堂々の處、故に全身を隱すなしと。

㋥慈源、一絲の行狀に、除饉女慈源、岸本村の肥沃の田を施して齋粥の資に充つ、即ち此人なり。

㋭此樣に、金襴掛けて、人前へ出づるのは、いやじやはづかしい、早くもとの古巢へ還しておくれ。

㋬飾らず、誇らず、天眞爛熳。

㋣破家、身代を、棒にふると云ふことなり。

㋠傑秀、秀侍者の秀を打す、其樣の人は、わしではない、秀

を握る、好一箇の長老、來機に赴かんと欲する底、林下の癡頑叟、幾時か敢て爾るを得ん、這般の大模樣、我れらの深く恥づるところなり、汝今收ち去つて人に示すことなかれ、是れ乃ち余が爲めに道義を存するなり。

松嶺秀侍者請。

咄この衰翁、禪も也た參を缺き、道も也た學を絕す、目を雲霄に縱にして身を林壑に寄す、咸く言ふ大覺(ル)破家の孫、寔に是れ佛燈跨竈の子なりと、若何ぞ箇の(チ)傑秀の人を得て、吾が宗の已に煙墜するを扶起せん。

翼(リ)姪請。

似たることは則ち固に似たり、是なることは則ち未だ是ならず、相を離れ名を離れ、彼にあらず此れにあらず、歷劫にだも何ぞ曾て全(ヌ)體を現ぜん。

月庵居士請。

全身半身、日面月面、鏡上の幻塵、空裡の閃電、而今老いて奕圖畫に歸す、依然として早く是れ新羅の箭、退藏癡憨を放にす、誰か言ふ住院を拒むと、雲に眠ることは知んぬ幾年ぞ、山を看て長へに倦むことを忘る、我れらの活業は只だ恁麼、一生擔板自(ル)便を愛す。

淨仁禪門請。

と和尚と打つて一丸。

(リ)前に、翼姪雪を踏んで、石塔寺の寓居を訪ふの作あり。

(ヌ)半身の像。

(ル)自便、打ちくつろぐなり。

林泉を家となし、猿玃を伴となす、眼中に烟霞あり、胸次に涯岸なし、從來智體全く具らず、宜(ヨ)なるかな幻影も亦半を缺くことを、咦、渠は是れ誰ぞや、天地の間只だ一箇疎慵癡頑の寂翁老漢。

慧鏡禪者請。

幻化の空身、鏡像水月、百年は一夢、終に變滅に歸す、儞儂我をして畫圖に入らしめて、久しく烟霞山水の窟に住せしむ。

聖玖大師請。

利を視ることは塵埃にひとしく、名を懼るることは桎梏に同じ、殘月は遙峯に落ち、孤雲は空谷に老ゆ、諸方浩々として高禪を説く、渠(ワ)儂が脚を伸べて眠るに孰れ。

元杲禪人請。

杲日天に麗き、清風地を帀る、徧界藏さず、面目現在す、若し眼を頂門に具する人にあらずんば、如何ぞ箇の全(カ)體を見得せん。

元綸侍者請。

這の擔板漢、甘んじて岩叢に老ゆ、一榻默坐、萬縁皆空ず、住院を勸むるの言を聞いては、耳を洗

(ヨ)半身の像だ、生かして働いてある。
(ワ)渠儂は彼等と讀むべき文字なり、然れども此處は我等と用ひらる、又一説に渠儂は、畫裡の身を指すと、此方長ぜり。
(カ)半身の像。

ふにちかきも、猶は宗教の替るを見て、之が爲めに㋵胸を搥つ、有時江湖夢に入り、夜寒ふして月短篷を照す、意に稱ふ金㋟鱗直鈎に上る、絲綸擊き斷ふ白蘋の風。

超曇大德請。

參横り㋹月落つ湖山の曉、全く本來の淸淨身を露す、丹靑汚卻す虛空の面、冷㋞地從教人を笑倒するを、人を笑倒す誰か眞を識らん、試に威音劫前より看よ、曇㋡華方に綻ぶ一枝の春。

養侍者請。(尼、松下石に坐す)

靑松を屋廬となし、苔石を牀㋥迋となす、但佳山水を得て、居を求めて幻軀を養ふ、平生深く恥づ人に識らるるを、豈料らんや今朝畫圖に入らんとは。

守顯禪人請。

幻眞は眞にあらず、夢境は何の境ぞ、一彈指頃、百年の流景、盡十方空の諸賢聖、吾と同じく現ず鏡中の影。

彌天釋㋤侍者請。

身に釋服を披し、手に蜿心を搦す、方外に獨步し、叢林を眇視す、只だ

㋵胸を搥つは、手をもつて胸を搥つて嘆ずる也、支那人は泣くことも上手故、斯かる樣子をすると見ゆ。

㋟金鱗絲綸は、元綸に響く、釣糸を擊くと、白蘋の風を兩方へ吹きちぎる、英靈底の作用也。

㋹參は、二十八宿の一也、星の名。

㋞冷地云々、冷地はこかげなり、人知れず窺ひ見ると、誠におかしなものじや、おへその皮よ。

㋡曇華、千年に一度咲く、優曇華なり、超曇のつらか、いや和尙の姿なり。

㋥迋、牀也。

㋤已下の三偈皆釋の字を用ふ。

風高く月の皎きを貪つて、都て水寒く雲の深きを忘る、這般一箇の贋浮圖、古往今來覓むるに也た無し。

無相㋑を眞相となし、無門を釋門となす、蹤跡を尋ねんと擬欲せば、水中に月痕を探る、畫けども成らざる時正に好し看るに、全身逼塞す蓋乾坤。（預め生絹を寄せて請ふ）

高く釋迦を揖して、彌勒を拜せず、流行も也た得たり、坎㋺止も也た得たり、一生獨り自ら娛む、水色と山色と、嫌ふことなかれ幻質の完全ならざるを、且つ愛す眉は横たはり還た鼻は直なることを。

定巖の一侍者請。

畫工我がために腰を沒し了る、恰も似たり當初立雪の僧に、只だ是れ曾て心法を覓めず、㋩安閑終老して人の憎を得たり。

列岫の科侍者請。

胸㋥に雲夢を呑んで還た吐却す、選佛場中に甲科を占む、一句機先に曾て會得す、國師の三喚更に如何、笑ふに堪へたり山前の老農父、他に描畫せられて凌㋭烟に上るを、枯木花開くは是れ今日、任敎空體の完全ならざることを。

堅卓禪人請。

㋑白絹の賛なれば斯くの如し。

㋺坎止、坎は八卦の一、一陽二陰の間に陷る、坎険の相、凡そ人、坎険に遇うては止まるべし、之を坎止と云ふ、流行は放行、坎止は把住なり。

㋩安閑無事、無用の長物。

㋥胸に雲夢の句は、岫の字を響かす、選佛場の句は、列の字を隱す、雲夢は湖の名、今は平地となる、揚子江の西にあり。

㋭凌烟は、閣の名、唐の太宗、功臣の像を閣上に畫く、之を凌烟の功臣と云ふ。

瀑（オ）泉の飛ぶを貪り觀て、盤陀の石に獨坐す、絶えて人の往還するなし、幸に今昔を話するを免る、一片の雲は百（ノ）衲の衣を添へ、萬重の山は雙眸の碧に點ず。

（ヤ）龍巖の汕長老請。

香を焚いて默坐す古岩の陰、最も愛す青山の深うして更に深きことを、同參の木上座を除却して、誰か知る這老此の時の心を。

英顏侍者請。（半身）

古道の顏色、今時の遺民、一法不存、若何んが爲人せん、憐むべし石鞏の閑弓箭、三平（マ）半箇の身に射中することを。

霜林の果侍者請。

甚の眞常體全からざるを管せん、誰（ケ）か知る鼻孔遼天を恣にすることとを、祖庭將に謂へり秋已に晩ると、且喜すらくは霜林結果の圓かなるを。

靈仲の英侍者、雋彥絶倫、江湖に譽を播く、忽ち平生嗜むところの奇知妙解を棄て、而も山中に來つて、單々に只だ自己を洞明せんことを圖る、厥の志良に以て嘉すべきなり、一日余が衰質を繪いて贊を求む、余謂つて曰く、「我が箇の幻化の空身を顧みるに、百醜千拙なり、何の一件の贊すべき底の事あらんや」と、然も尙ほ懇に請うて

（オ）二句、畫像の模樣。
（ノ）百衲衣、鶉衣百結の意、百遍も綴つた衣。
（ヤ）禪師七十四歳の、貞治癸卯の中秋に、龍岩瑞石を訪問す、前に詩を載す。
（マ）三平義忠禪師、石鞏に參ず、石鞏曰く「三十年弓を張り、箭を架して、只半箇の漢を射得たり。」（傳燈）半身の像。
（ケ）誰れか知る云々、畫像は半分缺けて居ても、鼻の孔は天に遼つて居る。

已まず、之を奈何ともするなし、聊か二十八の閑言を綴つて、之に還すと云ふ。

衆肉叢中に一鱗を得たり、岩に隈㋫する老衲孤貧を慰す、因つて思ふ
歳晩天寒の日、少㋙室峯前立雪の人。

隣㋓松長老請。

咄者の老漢、漆㋢桶不快、人となり百醜千拙、渾て一智半解なし、只だ飽餐安眠を圖る、白雲の邊り青山の外、是れ什麼の報緣ぞ、幻身完全ならす、完全ならざるも卻つて㋐周圓、月は中秋に到つて光天に滿つ。（月夕）

荊隱璵侍者請。

咄箇の老寂、全く準㋚的なし、貴に逢ふても旨て璠㋖璵を重んせず、賤に遇うても奚んぞ亦死石を輕んせん、少きを得て多きを失し、寸を進めて尺を退く、天壤に獨立し、今昔を眇視す、兩鬢霜は寒し八十の秋、三衣染め盡す千峯の碧、何㋴れの時か手裡の黑蛇兒、白日に龍となつて霹靂を轟かさん。

了達禪人請。（位牌）

閑㋱名幻質を離れ、汝に隨つて丹山に入る、壁㋯間に掛在して看よ、同居渾て一般。

㋫隈は倚なり。
㋙二祖雪に立つて腰を沒す、蓋し又半身の像。
㋓隣松は、備後永澤寺の山號、知庵元周禪師ならん。
㋢漆桶不快、不快不會と同じ、同音也、物の道理の分らぬを漆桶不快と云ふ、福州の鄕談。
㋐周圓、元周の周の字を打す。
㋚準的なし、氣まぐれて平準とれぬ。
㋖璠璵、美玉の名、二句準的なき處。
㋴二句、活潑々地、寂翁寂ならす。
㋱閑名、牌紙に書せし名なり、丹山は丹波。
㋯壁間に掛在すは、古人の牌は紙に書して壁間に掛く。

國譯永源寂室和尚語錄卷之二 終

國譯永源寂室和尚語錄卷之三

小佛事（合計三十四篇）

㋑飯高山に觀音像を塑す點眼幷に安座。

㋺聞を返し聞盡きて盡も亦空ず、所以に根門一々無功、㋩塵々三昧、刹々圓通、㋥千江の月影、萬卉の春容、惟れ㋭道人久、機巧妙にして爛泥團裡に逸想を寄す、唯だ手の翻覆の際にあつて、端嚴殊特の相を出現す、但だ人天の瞻仰を增すのみにあらず、也た魔外をして退いて㋬咨嗟せしむ、將に㋣紫金山を回さんとす、盡ぞ青蓮華を瞬かざる、我れ大地の諸衆生を見るに、本來誰か㋠寶目を具せざらんや、錯つて色空明

㋑飯高山は永源寺の山號也。

㋺聞を返す云々、觀音修業成熟の處を云ふ。

㋩塵々三昧、雲門云く「鉢裏飯桶裏水」と。

㋥千江の月、古句に曰く「千江水有あり千江の月、萬里雲無し萬里の天」と。

㋭道人久、頂山和尚の弟子久庵主なり、古抄人冠注本には、此の久は悟都官のことゝしてあるが、是れは多分誤りであらふ、一絲和尚の行狀に、舊安置の觀音像と新作（悟都官の作）の觀音の像ありて、倶に師の供養の語ありとしてある、此佛事篇の中に成程觀音の點眼二篇あり、是れより推せば、古き方は久庵主の作、新しきは悟都官の作なるが如し、悟都官は、元より歸化せし佛工と傳ふ、冠注は、此點眼を悟都官作の像と見しより悟都官頂山に投じて僧となり、名を久と改むと云ふ如き、强說を生ず。

暗等を把つて、妄りに自ら一翳に翳卻す、願はくは大士の正法眼に同じく、頓に㋷眞觀淸淨觀を得ん、縱ひ虛空消殞の日あるも、巍々として坐斷せん飯高山。

中峯㋦業海兩和尙の點眼㋸入塔。

㋾多子塔前、天目山巓、㋻錯をもつて錯につき、傳なきを傳となす、這般の沒面目底、卽今分座儼然たり、旣に是れ狹路に相逢ふ、免れず佗の頂門に向つて、㋕金剛の眼睛を點出することを、普く盡十方法界の情と無情と、同じく㋵大光明を放ち去らん、大衆を召して云く、「㋟好生觀。」筆を以て左邊に點じて云く「金烏啄破す瑠璃の殼。」右邊に點じて云く、「㋹玉兎挨開す㋞碧落の天。」

永源寺觀音の㋡點眼安座。

㋬杳嗟、痛惜又歎也。

㋣紫金山、楞嚴義疏九に曰く、「如來將に法座を罷めんとす、師子牀に於て七寶の几を攬り紫金山を廻り、再び來つて凭倚し普く大衆に告ぐ」と。

㋠寶目、同上義疏六に曰く、「二目、三目、四目、九目乃至千目萬目、八萬四千の淸淨の寶目」と。

㋷眞觀淸淨觀、法華普門品に見ゆ、眞は空觀、淸淨は假觀也。

㋦業海は中峯の子なり、甲州天目山棲雲寺の開山也。

㋸入塔、百丈淸規に、全身入塔及び靈骨入塔あり、蓋し塔廟に入るの義なるべし。

㋾多子塔、辟支佛論に云ふ、「王舍城の大長者男女各三十人を生む、適一林間を過ぐ、人の大樹を斫るを見る、枝柯條葉繁美盛茂、多衆をして引かしむるも出す能はず、次に小樹を斫る、枝柯少くして引くに容易なり、之れより悟入す、入滅の時眷屬多子塔を立つ」と。

㋻將錯云々、世尊多子塔前に至り、摩訶迦葉に座を分けて座せしむ、僧伽利をして之れを圍ましめ、遂に告げて曰く、「我正法眼藏を以て汝を密付す、汝當に護持して將來に傳付すべし」と。

㋕金剛の眼睛、大慧武庫に曰く、「師湛堂和尙示寂により、無盡居士に謁して塔銘を求む（中略）、師曰く、何の眼睛と問ふ、無盡の曰く、金剛眼睛と、答へて曰く、若是れ金剛眼睛ならば、相公筆頭上にあり、云々。」

㋵左眼は黃金の色を放ち、右眼は白玉の光を放つ、是れ本來具底の眞面目也、是れでこそ、眞の點眼供養がすんだ。

㋧補陀の圓通大士來や、梵相端嚴にして人天敬畏す、新に淸淨の寶目を開いて、靈光處として至らざるなし、甚の㋤冥府幽都とか說かん、法界皆煌々煒々たり、之を正法眼藏と云ひ、亦㋶大圓鏡智と名く、夫れ吾か大聖薩埵は、昔し久遠劫の前に在つて、聞思修より三摩地に入つて、百千甚深微妙の諸大三昧を證す、所謂㋰大解脫三昧、㋒大寂靜三昧、㋼大智惠三昧、大慈悲三昧、大施無畏三昧等是れなり、只だ盡大地の衆生、此の如きの三昧を具足すと雖も、迷妄に蔽はれて、現成受用するに由なきを愍むが爲の故に、已むを獲ざるに迫つて、區々として起ち、箇の晨鐘暮鼓㋨鴉鳴鵲噪と、鶯頭の㋔雨滴と、澗下の水聲を把つて、腸を傾け膽を瀝らして、激揚揭示す、汝等諸人、甚麼として、

㋟好生觀、天晴れ能き見もの也と云ふが如し。

㋹玉兎、月の異名。

㋞碧落、あをぞらに同じ、度人經の碧落の註に「東方第一の天に碧霞遍滿せるあり、之れを碧落と云ふ」と。蓋し好箇の眼睛を云ふ。

㋡是れは、僧都官作の像の點眼ならん、此像新に成りて、久應主作の觀音像は龕背に收藏す。

㋧補陀の圓通大士、觀音大士也。

㋤冥府幽都、書の堯典に出づ、今云ふ地獄也。

㋶大圓鏡智、萬德圓滿闕くる所なき佛智也。

㋰應身也。

㋒法身也。

㋼報身也。

㋨江湖集に「金剛の正體、是非の外、鴉鳴鵲噪子時なし」と。

㋔會元、順德禪師章に「師問ふ門外何の聲ぞ、曰く、雨滴の聲と、師云ふ、衆生顚倒己に迷ひ物を逐ふ」とあり。

㋗父母所生の耳根と云ふに同じ。

㋳あゝ、歎聲也。

㋮諸國土云々、法華普門品に、「十方諸國土無刹不現身」と。

㋘二首あり、何れを使用せらしやを知らず、前篇は居士の作略を露すに適し、後篇は送行の時節に切なり、蓋し使用は一にして足れり、而も餘の一篇も捨て難く、倶に集中に載せしものならん。

㋫拈香、人として信なければ其可なる所をしらず、拈香は信を現す所以なり。

㋙龐翁、馬祖大師の法嗣、衡陽縣の人也、摩詰は佛在世の人、維摩詰、維摩羅詰といふ。在家にして具く菩薩の行を修す。

恰も娘（ク）生の耳根を塞斷するが如くに相似たるや、（ヤ）於戲、今朝瑞雲溪山に滿つ、限りなき風光、正に好し看るに、十方の（マ）諸國土に遊び徧きよりは如かじ歸り去つて、永く安閑ならんには。

（ケ）當麻禪門の（フ）拈香。

塵に處して全く絕塵の作あり、無髮の（コ）龐翁摩詰の流、（エ）臺樹寥々として歲云に暮る、木人石女も也た愁を生ず、丈夫猛烈の漢、全機自ら同じからす、生死の（テ）控勒を受けす、寧ろ涅槃に（ア）羅籠せられんや、便ち與麼に承當するも、兎子何ぞ曾て窟を離れ得ん、任ひ不與麼にし去るも、徒だに死蛆を弄して活龍となす、畢竟作麼生、昨夜須彌頭倒卓す、天明に踍跳す太虛空。

又。（佛成道の日）

夫れ以みれば、（サ）正覺山中に星の燦然たるを見る、歷劫未明の事、忽爾として現前するを得たり、（キ）海印三昧を以て、一印に印定して、大地の群生をして頓に（ユ）蓋纏を出でしむ、（メ）四生九類を論せず、甚の（ミ）十聖三賢とか說かん、一味平等にして、密に中邊なく、幻生幻滅して、一來一去す、

（エ）臺樹、土高きを臺といひ、木あるを樹といふ。

（テ）控勒、束縛又は羈絆などに同じ。

（ア）羅籠、二字魚鳥の捕へられて拘束を受くること、學者の小見に囚はれ偏局に陷つて自在ならざるの意に用ひらる。

（サ）正覺山中云々、大慧普說下に「佛初め正覺山前に定より起きて明星を見るに、因つて忽然として悟道し便自己本來の面目を見る」とあり。

（キ）海印三昧、性海心印の三昧と云ふ意にして、人々箇々具足の心印にして、海印三昧の獨露眞常なり、譬へば如來全身の如し、諸佛諸祖一毛を損せず、海印三昧片滴を讓らず、汝と吾と亦かくの如し、即ち此法滅する時吾滅と云はず、前念後念、念々相待せず、前法後法、法々相對せず、是れ

月は寒水に沈み、雲は青天に掛る、是の如く領略し將ち去らば、親恩佛德酬報周圓ならん、其も或は未だ然らずんば、雪㋛を帶ぶる梅華初めて玉を破り、淸香透過す竹籬の煙。

拈香。

大日本國、備前の州、藤野の㋓保の居住、菩薩戒の弟子、某、今亡室某七周の忌辰に値うて、預め七箇日を卜して、㋪大士山慈廣禪寺に就いて、滿堂の淸衆を拜屈して、㋲大乘の眞詮を取つて、且つ繙閱し、且つ繕寫す、帑を啓き金を揮つて㋝供儭を營辦す。加以、㋜冠を裂き緇を披し、方に三寶の數に預る、追嚴の誠至、焉より大なるはなし、仍つて某に命じて、香を焚いて諸聖に獻じ、偈を說いて證明をなさしむる者なり、一たび㋑芙蓉城内に向つて遊び、光陰倏忽たり七周の秋、從敎地を動かして悲風の起るを、山は自ら安閑、水は自ら流る、㋺寂滅現前して觸目眞なり、迷情猶ほ自ら㋩重津を隔つ、㋥崑崙昨夜滄海に奔り、撲碎す珊瑚の月一輪、此より遠離す男女の相、煌々煒々たり、亦堂々たり、慚愧す㋭德生と有德とに、飮光は㋬熱瞞す㋣紫金光、者回は千聖の轍に墮せず、身

を即ち名づけて海印三昧と云ふ。

㋴蓋纏、行者淸淨善心を覆蓋して開發せしめず、故に名づく。

㋱四生九類、卵生、胎生、化生、濕生を四生といひ、卵、胎、濕、化、有色、無色、有想、無想、非有、非無想を九類と云ふ。

㋯十聖三賢、十住、十行、十回向を賢となす。十地を聖となす、妙覺を佛となす。

㋛二句現成底雪中の梅花玉を破り、淸香一抹竹籬の煙は拈香の語として不盡の味あり。

㋓保、郡邑の城を保と云ふ。

㋪大士山、頂山和尚開基也。

㋲大乘の眞詮云々、法華眞實の妙詮を云ふ。

㋝供云々、供養達儭也。儭はほどこすと訓す。

㋜冠を裂き云々、入道也。

㋑芙蓉城、石曼卿死して仙とな

なし那畔に揚げて行履別なり、面皮を捩轉してかへんなんいざ、塵々刹々皆超脫。

道浩禪門の拈香。

㋠去來集無うして恒に儼然、追求せんと擬欲せば大千を隔つ、幾たびか㋷清風明月の夜、㋦黃梅の石女脊天に哭す、欽んで一瓣の㋸兜樓を焚いて、三寶の勝位に供養し、某禪門の爲めに、㋾報地を莊嚴したてまつるものなり、恭しく惟みれば、靈鑑胸に懸つて生死の窠窟を照破し、智刃掌に在つて凡聖の蓋纏を裂開す、丈夫は須らく丈夫の事を辨ずべし、妙は神機未だ兆さざるの前にあり、轉轆々たり、活潑々たり、切に忌む㋻劍去つて舷に刻するを、雪千山の頂を覆うて、孤峯碧巔を聳かす、今日㋕風に臨んで聊か信を表す、無根の樹子香煙を起す。

㋵脫叟和尚の拈香。(俗弟の請)

恭しく惟れば、某人、靈岩を父視し、智覺を祖とす、魔佛を平欺して來由あり、生涯を蕩盡して折合なく、當頭に坐斷して自ら甘じて休す、三十餘年㋟孤硬を打し、眞機妙用取次に收む、㋹輪奐たる㋞寶坊幻出するが如

り、芙蓉城の主となる（書言故事）、婦人に芙蓉城の故事甚だ切なり。

㋺寂滅現前、無性の眞理、寂當の妙性、了然として明に現前す、故に云ふ。

㋩重津、重疊たる要津也。

㋥崑崙以下二句生死關を透破し、凡を轉じて聖に入る。

㋭德生有德、是れは善財の參ぜし五十三員の善智識中の德生童子と、有德童女也、此男女の童子は男女を遠離せる男女なり。

㋬熱瞞は甚だ慚づる貌なり。

㋣紫金光は、迦葉在家の時の家內也、迦葉は紫金光女を娶著した、然し後に何れも無生忍を得、千聖、德生有德欽光紫金光。

㋠去來、生死去來の本分也。

㋷清風明月云々、此所言外に不生不滅の當體を顯はす。

く、住山の氣象古を傳となす、遙かに（ツ）鉏斧を拋つて（ネ）筋斗を翻し、鶺鴒原は冷かなり幾回の秋ぞ、（ナ）天倫の義は重うして山嶽に逾え、深恩厚德如何が酬いん、法中復た（ラ）昆弟たるを得、（ム）雪峯請益す老巖頭、年々斯の日追憶を增す、（ウ）白雲流水空しく悠々たり。

頂山和尚の拈香。

此の香は（ヰ）實際理地に栽培し、大覺海中に浸爛す、然も（ノ）銖兩なしと雖も、價直は娑婆に踰えたり、之に觸るれば則ち闍梨の（オ）鐵面門を燎卻し、嗅著すれば則ち衲僧の閑鼻孔を塞斷す、直に得たり、盡虛空徧法界の森羅萬象、（ク）四聖六凡、情と無情とより、以て從上の佛祖、出世度生し、般涅槃を唱ふるものに至るまで、渠れが資薰の力を稟けざることあることなし、今

（ヌ）黃梅云々、禪月集に曰く、「無角の鐵牛少室に眠り、生兒石女黃梅に老ゆ」と、又雲門錄に、問ふ、「如何か四恩三有を報じ得ん」と、師曰く、「頭を拋いて蒼天に哭す」と。

（ル）兜樓、鬼人國に產する香草なりと云ふ、或は白茅香といふ。

（ヲ）報地、當來の果報地也。

（ワ）劍去刻舷、呂氏春秋に、「楚人劍を舟中より水に墜す、遽に其舟を契つて曰く、是れ我劍の從墜せる所なり、舟已に行きて劍ゆかず、亦惑へるにあらずや。」

（カ）風に臨んでとは時に臨んでと云ふが如し。

（ヨ）曹溪の法嗣、智發禪師の法孫也。

（タ）孤硬、禪門寶訓に曰く、「投子和尚水庵の像を圖して贊を求む、顯清禪人孤硬にして敵なし」と。

（レ）輪奐、輪は廣大、奐は衆多を云ふ、又禮記に曰く、「晉、文子に室を成すを獻す、張老が曰く、美哉輪焉、美哉奐焉、註に輪を以て其周圍を美にし、奐を以て其散明を美にす」と。

（ソ）寶坊は寺院なり。

（ツ）鉏斧は木を斫る具、般若の智劍に譬ふ。

（ネ）筋斗を翻へすは逆さまにひつくり返ること、大智偈頌偈作に「脫殼烏龜倒上レ天、須彌山頂翻二筋斗一」とあり、煩惱が卽菩提、生死卽涅槃と轉翻する意に喩ふ。

（ナ）天倫、穀梁傳に、「兄弟は天倫也。」

（ラ）昆弟は猶ほ兄弟の如し。

（ム）雪峰請益、雪峰、石頭和尚に益を請ふ段、會元七に見ゆ、兄弟を此二師に比する也。

（ウ）白雲流水、唐の崔顥黃鶴樓詩に「黃鶴一去不二復返一、白雲千

日伏して頂山和尚小祥の辰に値うて、佗の入室の眞子感鼎の諸兄に代つて、手に信せて拈じ來つて、一(ヤ)爇に爇卻して、(マ)聊か眞法供養を伸ぶ、是れを報恩謝德とせんか、抑も又讎を復し屈を雪ぐとせんか、道ふことを見ずや、(ケ)己より出づるものは己に歸ると也。

全戒禪尼の拈香。

夫れ以みれば、(フ)芙蓉城内(コ)優遊に慣れ、(エ)眞淨界中に歸り去つて休す、(テ)滿院の落花春過ぎて後、さもあらばあれ(ア)霧慘又雲愁することを、(サ)生住異滅は恰も鏡像と水月とに同じく、愛別離苦は(キ)舜若多神涙雨を墮す、(ユ)五障(ミ)三從一掃に空するを勞せず、(ヨ)八解(シ)六通(ヱ)懷中に寓物を取る、所以に(ヒ)龍女早く無垢の正覺を唱へ、(モ)喜見終に靈山の記莂を受く、若し是れ

盡空悠々。」即ち追憶に限りなきの情也。

(ヰ)實際理地、潙山祐章に曰く、「實際理一塵を受けず、萬行門中一法をすてず」と、即ち眞如實相也。

(ノ)銖兩、黃鍾の一龠千二百黍を容るゝ重きこと十二銖、二十四銖を兩となすと、只量目を云ふのみ。

(オ)鐵面門、南院顒禪師、風穴に問ふ「如何か是奪塵、奪境。」曰く「新に紅爐に出づ、金彈子、闍梨鐵面門を鑿破す」と。

(ク)四聖、六凡、聲聞、緣覺、菩薩、佛を四聖、六凡は即ち六通に同じ。

(ヤ)爇、燒に同じ。

(マ)眞法供養、科註法華七に「我神力を以て佛に供養すと雖も、身を以て供養するに如かず、即ち諸香を服し香油を呑み、日月淨明德佛の前に於て、天衣を身にまとひ、神通力の願を以て、自ら身を燃して光明普く八十億恒河沙世界を照らす、諸佛同時に是れ眞の精進これ眞法を以て供養すと名く」と見ゆ。

(ケ)己より出づるものは己に返る　孟子、梁惠王篇に曰く「曾子曰く、之れを戒む、爾より出づるものは爾に返る」と。

(フ)芙蓉城内、本分の田地なり。

(コ)優遊、詩の白駒に曰く「汝が優遊を愼み、爾が遁思を勉めよ」と。

(エ)眞淨界は眞如淸淨法界也。

(テ)滿院の落花云々、死去の時節を述ぶ。

(ア)霧慘雲愁、會元八「福州林陽志瑞禪師滅するの日、齋罷上堂辭衆、時に圓應長老出でゝ問ふ、雲愁霧慘して大衆嗚呼す、請ふ師一言未だ別れを告ぐる在らずして、師一足を垂

與麽に荷負し去らば、之を女流にして丈夫の事業を成就すと云ふ、其れ脫し未だ然らずんば、㋝大洋海底の火一星、徧界の曇華香㋜拂々。

蓮阿禪尼の拈香。

夫れ以みれば、一靈の眞性、虛徹㋑精明、脫體現成の時、㋺動靜形なく、去來跡を絕す、纖毫も存せざる處、三際に彌綸し十虛に充塞す、了々然として常に鑑覺の先にあり、㋩玄々乎として迥かに思議の外に出づ、强ひて本地の風光本來の面目と名け、亦正法眼藏涅槃妙心と云ふ、背くときは則ち曠劫に漂沈し、合ふときは則ち㋥刹那に超越す、是の故に㋭愛道先づ記莂を靈山會上に受け、龍女始めて正覺を無垢界中に成ず、㋬彼れ既に丈夫、吾れ寧ろしからざらんや、直下に領略せよ、切に遲疑すること勿れ、五障

る」と。

㋚生住異滅は、生老病死に同じ。

㋖舜若とは虛空神なり。

㋴五障、一には梵天王たるを得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪王、五には佛身、是れを五障と云ふ。

㋱三從、禮記にも智度論にも出づ、幼にしては父母に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふ。

㋯八解は、八解脫なり、八觀を修して羅漢果を證するなり、八觀今は略す。

㋛六通は天眼、天耳、知他心、宿命、如意、漏盡也。

㋾懷中に寶物を取る、事の易きを云ふ。

㋪龍女男子と變成して、南方無垢世界に往いて正覺を成す。（法華經）

㋲喜見、佛、憍曇彌に告げて曰く「汝漸々に菩薩の道を具して、當に作佛を得、一切衆生喜見如來乃至天人師佛世尊と號すべし」と。

㋝大洋海底云々、海の底の螢火から、優曇華がずつと咲いて來る。

㋜拂、當さに芾に作るべし、芬香の貌也。

㋑精明楞嚴義疏に曰く「世の巧幻師の諸男女を幻作して諸根の動を見ると雖も、要らず一機を以て抽す、機息すれば寂然に歸す、諸幻無性となるが如し、六根も亦かくの如し、元一精明によりて分れて六和合となる」と。

㋺動靜去來、去來象を以てせず、虛空を搬轉す、動靜心を以てせず、當軒大坐と云ふ意也。

㋩玄玄、老子に曰く、「玄之又玄」と、幽玄微妙の義なり、又、寶藏論に曰く「中に一寶あり、形山に秘在す、識物靈

三從は喩へば昨夢の如し、愛別離苦を脱出して、(ト)娉婷たる芙蓉新に泥裡に綻び、生住異滅を照破して、清涼の(チ)寶月高く秋空に懸る、(リ)正因を昧まさずして頓に(ヌ)種智を圓かにし、塵々刹々に大用現前す、只だ(ル)沈水一爐の烟をもつて、十方の諸聖賢に奉獻す、即今(ヲ)神足を運らすを惜むなかれ、請ふ爲めに證明して法筵に臨みたまへ。

東禪の(ワ)巨舟和尚。

遠く鯨波に駕して(カ)大方を歴、魔宮虎穴(ヨ)行藏に任す、一棹東に歸つて(タ)三十白、聲名藉々として扶桑に滿つ、某人、(レ)象骨峯前に轉身の句子を得、(ソ)三喚聲裡に(ツ)藏珠の自ら彰るゝを見る、海嶽を掀翻して空しく索々、賞音獨り箇の(ネ)曾郎のみあり、人天に眼目たる時龍象辨じ易く、湖海を睥睨する處氣宇量り難し、寧ろ法幢の倒れて復た立する無からんや、當に佛燈をして滅して重ねて光さしむべし、惜むらくは兩び鍤斧を提ぐと雖も、大いに鋒鋩を試むるに由なし、應世の縁云に終つて忽爾として一周霜、徧界大人の相巍々亦煌々たり、明月(ナ)芝嶠に上り、清風松岡を撼す、木人掌を拊つて歌笑し、石女眉を攢めて悲傷す、(ラ)光や不佞にして忝なく

照空然寂莫として見難し、其れを玄玄と號す」と。

(ニ)刹那に超越す、妙覺の境涯にいたるを云ふ。

(ホ)愛道は憍曇彌也、後に喜見佛となるべき記莂を受く。

(ヘ)彼れ既に丈夫とは、彼の女人共が皆丈夫であると。

(ト)娉婷は美好の貌。

(チ)證道歌に、「淨瑠璃寶月を含むが如し」と。

(リ)正因は正因佛性也、正は中正なり、邊邪を離れ三諦具足するもの。

(ヌ)種知は一切種智なり、一を以て一切を知るの智也。

(ル)沈水、名義集、阿伽嚧、或は亞揭嚕、即ち沈香也、又蓮華藏と名く、其木心堅くして水に沈む、故に沈水と名く。

(ヲ)神足、神通妙足也。

(ワ)巨舟和尚、佛燈國師の法嗣。

(カ)大方を歴、大元の叢林を歷る

遺芳を嗣ぐ、昔日兄呼び弟應じ、今朝義斷え情忘ず、(ム)驀籬跳竈は知んぬ多少ぞ、彼に替つて聊か一炷の香を供す。

又。

此の香は萬化の(ウ)大本、群有の靈根、威音劫前に鬱然として、實際理地に卓爾たり、名を離れ、相を離れ、榮を絶し枯を絶し、倒に(ヰ)不萠の枝を抽いて、强ひて無影の樹と號す、華藏海中に浸爛して、涅槃岸上に突出す、(ノ)孟八郎の漢に遭うて截つて三段となし來る、一點芬馥の氣息なしと雖も、還つて(オ)五分法身の薫聞に逾えたり、今朝風に臨んで一爇に爇卻す、獨り諸聖の鼻孔を驗過するのみにあらず、專ら用つて吾が巨舟師兄に奉獻す、切に冀くは、是の眞法供養を享けよ、挿香して云く、「(ク)咦、」道ふことと

意也。

(ヨ)行藏、論語述而篇、「子、顏淵に謂ふて曰く、之れを用ゐる時は則ち行ひ、之を舍くときは則ち藏る、惟我と爾と之れ有るか矣」と、所謂君子の素位、釋氏の隨縁也。

(タ)三十白は三十年と云ふに同じ。

(レ)象骨峯は雪峰なり、巨舟入宋の際、雪峰逸樵隱椎下にて一句子を得たり。

(ソ)三喚聲裡、樵隱下侍者職にあり、故にしか云ふ。

(ツ)藏珠、如來藏裡の摩尼珠也。

(ネ)曾郎、雪峯義存禪師、師は泉州南安曾氏の子、故に云ふ。

(ナ)芝嶠、松岡、共に東禪寺にあり、境致也。

(ラ)光や不佞より以下、師の自叙也。

(ム)驀籬跳竈は神足の弟子を云ふ。

(ウ)大本、中庸に曰く、「中は天下の大本也」と、此所人々具足の妙法をいふ。

(ヰ)不萠の枝云々、續傳悅堂希顏の章に、「鳥は棲む無影樹、花は綻ぶ不萠枝」と、元來無色無臭の一法也。

(ノ)孟八郎、輕重生死を知らぬ愚人也。

(オ)五分法身、分は即ち分齊、法は戒定慧の諸法、身は聚なり、諸法を集聚して以て其身を成す、一に戒身、二に定身、三に慧身、四は解脫身、五解脫智見身。

(ク)咦、喚ぶ、又大呼也。

(ヤ)伴あれば即ち來る、洞山首め南泉に謁す、馬祖の諱辰に値ふ、齋を修する次、南泉衆僧に垂問して曰く、「來日馬祖の齋を設く、未審かし、馬祖還り來るや否や、」衆皆對ふるなし、師即ち出で〻對へて曰

を見ずや、㊉伴あれば卽ち來ると。

㋮預脩。

日本國、遠州路、河村の莊の居住、寶心禪尼、今月十三日、謹んで誠心を發して、龍壽山永安禪院に就いて、淨財を施し、精饍を設けて、預め歿後の冥福を脩す、其の志頗る以て嘉すべきなり、竊かに念ふに、三毒熖熾にして三途の苦報招き易く、㋘五欲海深うして五障の淪溺免れ難し、大凡多劫の罪累、未だ懺除するに由あらず、徒らに慚惶を懷くと雖も、哀悃陳ぶるに處なし、仰ぎ願くは、三世十方の諸佛菩薩諸賢聖等、慈悲を惜まず、道場に降臨して、且つ證明をなし、且つ加被を賜へ、專ら冀くは、寶心禪尼 ㋻壽報百年の後、世緣を厭はん時、復た女流に墮せず、常に淨海に生ずることを得、菩提心然も退かず、般若の智以て現前し、河沙の含靈を提挈して、同じく無上の妙果を證せんものなり。

一たび眞性に惑ふてより、荏苒として各々幻業に繫がる、㋙蠢々たる六趣と四生と、㋓昇沈疲極す百千劫、偉なるかな猛烈の女道人、誓つて今生に向つて此の身を度す、一日佗の淸淨衆に命じて、㋢靈山九會の文を頓

「伴あらんを待つて卽ち來らん」と。

㋮預脩、當時預修の佛事流行す、德川時代には甚だ稀也、足利義政の如きは三年、七年、十三年、二十五年、五十年と、約一年に渡りて逆修の佛事を修し、當時橫川月翁の徒長廣舌を振へり。

㋘五欲、財欲、色欲、飮食欲、名欲、睡眠欲の五也。

㋻壽報は世壽果報也。

㋙仁王經に云く「衆生蠢々都て幻居の如し」と。

㋓昇沈云々、汲井輪の如く轉々するを云ふ。

㋢靈山九會の文、林間錄下に曰く「衡嶽楚雲上人嘗て血を刺して法經一部を寫す、皇祐の間貴人あり、山に遊んで之れを見る、其妄を疑つて人をして鉗を以て之を發かしむ、血あり、綫の如く出で、須臾に

寫せしむ、須らく信ずべし㋐經王勝妙の德、來報㋚七分に全得を獲ることを、㋖華鮮は本是れ海龍の兒、無垢界中に正覺を成ず、將に謂へり途を同じうして轍を同じうせずと、元來㋴無二亦無別なり、㋱菡萏華は開く三四枝、遍法界中香拂々たり。

見公禪門の拈香。

一度悲を㋯風樹の邊に興してより、既に三十有三年となる、知らず今日は是れ何の日ぞ、鐵眼銅睛も涙潸然たり、某人、歷劫より今に到るまで、迷に隨ひ妄を逐ひ、㋛頭を改め面を換へて、諸趣に輪轉す、而乃㋾爺孃は形生の本、三際に彌綸し、十方に充塞す、假使微塵刹土に分身し、恒沙の善因を嚴修するも、安んぞ劬勞の萬分の一を報答するを獲んや、惟だ心源に廓

して風雷山谷に震ふ。貫人卽ち懺悔す」と、貫休が此事を詠める詩に曰く、「皮を剝り血を刺して誠に何の苦ぞ、爲めに寫す靈山九會の文、十指瀝乾して七軸を終ふ、後來の、求法更に君無し。」

㋐經王、法華經藥王品に曰、「帝釋の三十三天中に於けるが如く、此經も亦諸經の中の王たり」と、法經一に純圓獨妙王經と云ふ、故に勝妙の德を云ふ。

㋚七分云々、命終の後、眷族小大爲めに福利を造らんと一切の聖事をなす、七分の中一分卽ち亡者獲、六分の功德を生者自利すと、故にしか云ふのみ。

㋖華鮮、童女成佛の名は華鮮如來卽ちもと靈山會上にありし一龍女なり。

㋴無二亦無別、大般若經に、「善現色清淨なれば果清淨、果清淨なれば卽色清淨、何以故に是れ色清淨と果清淨と、二無なく二分なく別なく斷なし」とあり。

㋱菡萏、卽ち荷華なり、此段蓮華花開くを以て眞個の法經となして拈香佛事を說くなり。

㋯風樹の悲、楚國の相虞丘子死に臨んで曰く、「夫れ樹靜ならんとして風止まず、子養はんとして親待たず、往いて返らざるものは年なり、再び見るべからざるものは親なり」と。

㋛頭を改め面を換へ、牛となり馬となり、天となり人となるを云ふ。

㋾爺孃、爺は父、孃は母なり、又爺娘とも耶孃とも書く、杜甫の詩に「耶孃妻子走りて相送る」と、又古樂府に「不ㇾ聞爺孃子を哭するの聲」と。

㋪風を繫ぐ、前漢書に「風を繫いで景を捕ふるに、終に得べからざるが如し。」

徹し、當念消融し、脚痕下の一著、卒地に折れ、曝地に斷じて、生死の相を見ることは、猶ほ空裡に(ヒ)風を繫ぐが如く、涅槃の心に住することは、水中に月を捉ふるに同じきを除く、是の故に寧ろ一法の情に當つるあらんや、本三界の出づべきなし、(モ)初中後善徒に設け、(セ)羊鹿牛車空しく馳す、便ち輿座に承當し去らば、罔極の深恩一時に酬畢せん、其れ或は未だ然らずんば、未だ曾て筆を點ぜざる前に看取せよ、菡萏花開いて徧界香し。

中峰和尚。

(ス)天目の名山に頭を倒卓し、佛魔も驚怖し鬼神も愁ふ、刹那に(イ)三十有三白、師子巖前に月秋を照す、恭しく惟みれば、某人、(ロ)亞聖の大人、季世に間出す、慈を運らし物を利して、勉めて願輪に乘ず、(ハ)生知現前して全機活脫身を翻して乃師の(ニ)死關を拶透す、(ホ)方寸の內に、夫の須彌のごとく、渤澥のごとくなるもの、八九を平呑し、(ヘ)一毫頭上に、恒河沙數の甚深微妙の、義門を掲開す、宗通說通法界を該盡し、道富德富乾坤に充塞す、佛祖より已來、古今の下、當に此を(ト)無業。(チ)永明。(リ)大珠。(ヌ)忠國

(モ)初中後善は即ち初善、中善、後善を云ふなり。

(セ)羊鹿牛車、法華譬喩品に、「種々の羊車鹿車牛馬今門外に在り以て遊戲すべし」と。

(ス)天目云々、中峰和尚入滅を云ふ也。

(イ)三十三白は三十三年と云ふに同じ、白は梵語にして、傳燈錄に、「我林間に止ること已に九白を經たり」と。

(ロ)亞聖、孟子序に、「顏子は聖人を去ること只毫髮の間、孟子は大賢にして聖に亞ぐの次なり」とあり、然れば此所唯賢者と云ふ程の意なり。

(ハ)生知、中庸に、「或は生れながらにして之れを知り、或は學んで之を知る」と。

(ニ)死關を拶透す、中峰廣錄塔銘序に曰く、「天目の山師子巖あり、高峰妙禪師之れに居る、死關を設けて參學の士を辨決

師伯仲の間に求むべきか、縱使ひ萬象を借つて舌となし、今より去つて稽首贊揚して、連綿として絕えず、劫より劫に到るとも、猶恐らくは百千億分の其の一分にだも敢及せず、於戲已んぬるかな、㋸香烟一縷、淚千絲、大法の㋾主盟は其れ復た誰ぞ。

道善禪門の拈香。

於戲虛空を夾截して兩片となす、森羅萬象哭聲連る、中に就いて去來の跡を覓めんと擬せば、獨脚の烏鵲飛んで天に上る、某人㋻志氣虹蜺を貫き、操履氷雪より潔し、㋕鄕黨に處つては則ち淳く和睦の誠を輸し、君家に事ふれば則ち固に至忠の節を持す、居を移して㋵蘭若に近づいて、鐘梵を樂聞し、以て絲竹の聲を鄙しんず。僧に隨ひ禪床に陪して、素饌を耽嗜して、而も

す、崖を望んで退くもの多し、一人を得本公と曰ふ、是れ中峰和尚となす、死關に入るに及んで、密に心要を扣いて金剛經を誦す、荷擔如來阿耨多羅三藐三菩提の處に至つて、恍然として開解す、流泉を見るに及んで大に發明す」と。

㋭方寸は心と云ふが如し。

㋬一毫頭上、會元に曰く、「洪州水潦和尚初め馬祖に參ず、問ふて曰く、如何か是西來的々の意、祖曰く、禮拜著せよ、師纔に禮拜す、祖卽ち當胷に踢倒す、師大悟、起來りて掌を拊つて呵々大笑、曰く、也大奇、也大奇、百千三昧無量の妙義、一毫頭上に向つて根源を識得し去る、」と。

㋣無業は馬祖の法子也。

㋠永明、天台韶國師の法嗣、杭州慧日永明延壽智覺禪師也。

㋷大珠は馬祖大師の法嗣、越州大珠海禪師なり。

㋦忠國師は六祖大師の法嗣也。

㋸香烟、東坡詩集に、「但見る香煙の碧縷を横ふることを。」

㋾主盟、盟は血を歃つて信を結ぶ也、此語左傳に出づ、卽ち大法を共につぐものを云ふ也。

㋻志氣虹蜺を貫く、蓋し志氣の高きを云ふのみ。

㋕鄕黨、父兄、宗族の居る所也。

㋵蘭若、具には阿蘭若、又阿練若、阿蘭那、單に練若とも云ふ、梵音「アーラヌヤ」、遠離所、閑靜所、寂靜所、意樂所等の譯あり、比丘の住所、精舍寺院庵等を云ふ。

㋟芻豢、草食を芻と云ひ、穀食を豢と云ふ、牛馬は前者に屬し、犬豕は後者に屬す。

㋹芙蓉、是に云ふ芙蓉は皆蓮の異名也、木の芙蓉とは別也。

㋞嗟嘘す、嘆聲を漏らすこと。

㋟芻豢の味を忘る、塵中を出でずして、出塵の事を辨ずること、譬へば㋹芙蓉の淤泥の裡に開くが如し、濁世安んぞ能く久しく住するに忍びんや、眉を攢めて常に自ら暗に㋞嗟嘘す、浮世五十有二年、只一夢を將つて㋡華胥に寄す、此の夢俄然として驚起す、手を撒し浩歌して歸らんか、遮莫雲愁霧慘することを、青山舊によつて體如々たり。

㋧特峯和尙の拈香。

恭しく惟れば、某人、㋤佛通的傳の英裔、大福中興の主盟、宗乘を提唱するや、雷馳せ電激し、崖崩れ石裂く、居常の懷抱や、氷枯れ霜烈しく、雲閑に水淸し、咸く謂ふ㋶龍淵復た波浪を起し、㋰惠日重ねて高明を增すと、一回假りに生死の相を示してより、今に至るまで、雲愁ひ霧慘み、鬼哭し神驚く、老拙昔年倶に巨福山中に在つて、㋒肩摩し衫屬し、風前月下に同坐同行す、悔ゆらくは佗のために末後の句を道著せざることを、今日狹路に相逢ふ、水を借つて花を獻じ去るを免れず、香を插んで云く、沈水一爐茶一盞、黃梅の時節㋼雨晴を慳む。

川庵濟禪門の拈香。

㋡列子黄帝に、「夢に華胥の國に遊ぶ、華胥氏の國は弇州の西、台州の北、齊國を去ること幾千萬里なることを知らず」と、蓋し舟車足力の及ばざる所、神遊のみ。

㋧東福凝兀の孫也。

㋤佛通、佛通禪師諱は大慧、字凝兀、自ら平等房と號す、瑞雲山に寺を創め、大福と曰ふ。

㋶龍淵、徑山方丈の額也、無準の法流を嗣ぐ、故に爾か云ふ。

㋰惠日、惠日山東福寺。

㋒肩摩衫屬は肩と肩と相すれ、衣と衣とすれ合ふ。

㋼雨晴を慳むは、涙漣々として乾くひまなしか。

㋨湫を傾け云々、天地一時に崩壞す、即ち是れ寂滅現前する也。

㋔了道禪門、播州の人也。

㋗擾々役々、東西へ奔走し自ら苦む底なり。

風樹葉飛んで三たび秋を見る、忽ち驚く光景の流よりも疾きを、法身眠熟して呼べども起たず、江上の靑山也た愁を著く、夫れ以みれば、幻妄境中には生あり死あるも、實際理地には去なく來なし、只だ一念頓に空了するを得ば、枯髏頂門に活眼開く、便ち見る(ヰ)湫を傾け嶽を倒し、地轉じ天旋り、全機瞥脫し、寂滅現前することを、只だ與麼に信得及するを要す、大家用ひず蒼天に哭するを。

(ネ)了道禪門の拈香。

世間の人は生死あるを知ると雖も、生死を懼るゝもの鮮し矣、終日(ノ)擾擾役々として塵網に繫る、空しく歲月を度つて、全く前程大いに事の在るを顧みず、忽爾として臘月三十日到來するときは、則ち方に始めて(ヤ)驚窘慞惶して手脚を頓くに處なし、宛も生死あるを知らざる者と、以て少も異なるなきなり、憐愍すべき者かな、播州の道公禪門は、獨り生死を懼るゝの人なり、何を以て之を知るや、其の平生(マ)區々として志を究むること至誠、預め歿後の善因を修す、昨は已に信を寄せ、(ケ)老僧に命じて、(ク)卒哭の佛事を營辨す、今又請じて(コ)小祥の功德をなさしむ、老僧嘉嘆す

(ヤ)驚窘慞惶は驚困狼狽に同じ。

(マ)區々、文選の注に勤々と、又齷齪也。

(ケ)老僧は即ち寂室なり。

(ク)卒哭、禪門死後百ヶ日の佛事は卒哭忌なり。

(コ)小祥、一週忌也、禮記喪禮に、「期にして大祥し、又期にして小祥す、」皆祭の名也、凶を去り、吉に從ふの義也。

(エ)伽陀、偈頌、又單に偈と云ふに同じ、梵(Gāthā)諷誦、或は單に頌と譯す、德を頌する詩の一體にして韻文也、經文の內に漢譯せらるゝ偈は四言、五言、七言、句の字數を一定するのみにして散文に同じ、宗門古來の禪詩、禪偈、頌、頌古と稱するものは押韻平仄必らず詩の體に倣つて作る。

(テ)婆伽梵、世尊と譯す、佛の尊稱、衆德を總攝し、之れを有する至尊の義なり、此外或は有

ることと之を久しうす、仍つて㋙伽陀を唱へて、以て聊か讃揚を加ふ、云く、
若し一念をして三際を空せしめば、便ち是れ吾が門の活脱の人、昔日生せず今死せず、金剛の正體本來の身。

淨露大師の拈香。

日本國、遠州路、濱松の莊の居住、菩薩戒の弟子、義俊、今月二十日、茲に亡女比丘尼淨露小祥の忌辰に遇うて、得々遠く來つて、永源精舍に就いて金を揮ひ供を辨じ、闔山の淸衆を拜命し、蓮華經一部を繕寫し奉り、尋いで山野に命じて、此の寶香を焚いて、十方の㋢婆伽梵、法界の賢聖衆に供養す、鳩むる所の善因は、專ら冀はくは淨露の頓に多劫輪囘の苦因を脫して、速かに諸佛淸淨の妙果を證せん者なり。

夫れ以みれば、人生世に處するや、其の親在ますときは、則ち晨夕左右を離れず、勞苦を憚るなく、其の侍奉の誠を罄す、其の亡するに及ぶや、則ち或は㋭墓畔に廬して、服を持すること三年、若し是れ出家の士は、固く心喪を守り、勤苦煉行して、歲月を限らずして冥福を薦む、之を孝の終と謂ふものなり、於戲㋚幽靈、落髮披衣、㋖遊方の日多く、顏を承くるの

德、又は名聲、或は能く淫慾を破るに名く、如斯多義ある故、五種不飜の一也。

㋭墓畔に廬して云々、孔子世家に「孔子魯城の北、泗上に葬る、弟子皆服すること三年、唯子貢冢上に廬すること六年」と。

㋚幽靈は亡者淨露尼なり。

㋖遊方、四方に遊歷すること也。

㋙劬勞、骨を折り疲ること、詩經に「哀々父母、生レ我劬勞。」

㋕蘊志、宿志、宿望などに同じ。

㋥尼總持、一日達磨遽かに其徒にいふて曰く「吾西に歸るの時は至れり、各々其詣る所をいふべし」と、(中略)尼總持曰く「我今の解する所は慶喜の阿閦佛國を見るが如く、一見更に再見せず」と、達磨の曰く「汝我肉を得たり」と。

㋛鈍庵和尚は曾て寂室和尚及然可翁と共に、元に入るの同行

時は少し、素より參禪學道見性明心を念として、(ユ)劬勞の恩に報酬せんことを庶幾ふ、爭奈せん志願大なりと雖も、力用未だ充たざるを、一旦無常遽かに至つて、(メ)蘊志永く逝く、悲しいかな、重ねて願はくは、惟れ靈、生々(ミ)尼總持の達磨の印證を得るが如く、世々大愛道の世尊の記莂を受くるに同じからんことを、幻妄境內に生滅あり、眞淨界中に去來なし、萬古秋空一輪の月、淸光夜々高臺を照す。

(シ)鈍庵和尙。

(ヱ)休歇の地に到得してより、世外の(ヒ)棲遲四十年、祖道さもあらばあれ都て爛卻するを、臥雲深き處に安眠を打す、某人、玄關の旨を透つて、早く(モ)覺雄聲前の三呼に應じ、(セ)大鑑の門に遊んで、(ス)眞淨堂中の一衆を首領す、險崖の句胸襟より流出し、撥天の名海上に(イ)雷鳴す、衰拙昔年杖屨に追陪し、吳頭楚尾江西湖南、(ロ)伊予倦遊して(ハ)桑梓に歸隱す、殘山剩水茆屋石田、邇來(ニ)隣壁に光を分ち、共に歲晚の佳會を嘆ず、遽爾として我れを棄てて長に逝く、奈んともするなし老淚の收め難きを、然も與麼なりと雖も、涅槃の後に大人の相あり、(ホ)澤山巍々として蒼々を摩す、義斷え

也。

(ヱ)休歇、一切貪瞋癡の結縛を放下するを小休歇といひ、一切の佛法知見利生の念を放下するを大休歇といふ。

(ヒ)棲遲、詩の衡門に、「衡門の下以て棲遲すべし」とあり、遊息の意なり。

(モ)覺雄、建長無範、大覺に嗣ぐ、元に入るの人也。

(セ)大鑑、禪師諱は正澄、淸拙と號す、福州連江劉氏の子也、伯父月谿圓和尙に依つて薙髮す。

(ス)眞淨は眞淨寺大鑑所住の寺也

(イ)雷鳴、韓文、孟東野を送る序、「雷を以て夏に鳴る」と。

(ロ)伊予は伊れ鈍庵、予れ寂室。

(ハ)桑梓、鄉里を稱して梓里といふ、即ち日本を云ふ也。

(ニ)隣壁、師米田島龍璽寺にあり、鈍庵は强澤の眞淨寺に住す、相近きを以て光を分つと云ふ

情忘するに堪へざる處、挿む此の兜樓一片の香。

洞禪人の爲めの㋬下火。

㋣洞然として明白なるは、是れ箇の何物ぞ、擬議不來ならば、七華八裂、畢竟如何ん、火中の紙馬生鐵を嚙む。

密庵主の下火。

拳を竪つる㋠消息人の會するなし、門煙羅に掩ふ幾度の秋ぞ、㋷一夜虚空消殞し了る、須彌頂上に㋦華球を榥ず、草露㋸浥々たり風蕉片々たり、唯一堅密の身、一切塵中に現ず、向上更に轉身の一路の在るあり、火把を以て圓相を打して云く、石火電光、一見便見。

西祖頂山和尚。

㋾西祖已に葱嶺を踰えて行く、虚空消殞して須彌倒る、山河大地悲風を起し、夜半扶桑日㋻杲々たり、某人、玄機妙用佛祖も窺覰するに門なく、㋕潛德の幽光魔外も伏膺するに分あり、一生の㋵擔板、三處の住山、㋟通玄の㋹正傳を滅卻し、㋞瑞龍の活計を掃蕩す、門庭孤峻にして具に古格の叢林を瞻る、規矩森嚴にして今時の途轍を革むるに堪へたり、一周事畢つ

のみ。梅堯臣が隣居の詩に、「壁隙燈光を透し、籬根井口を別つ。」

㋭澤山、眞淨寺の山號、强澤山也。

㋬下火、黃檗運禪師母のために炬を秉る、又普燈の四に、「寶覺心入滅す、茶毘の日隣峰ために炬を秉る」と。

㋣信心銘に「但憎愛なくんば洞然明白」と。

㋠消息、易、豐卦象に、「天地盈虚消息す、而して況んや人においてをや」と、又消息を音信なりと、其推移又は様子などの意にも用ふ。

㋷一夜云々、卽ち死を云ふ。

㋦華球、綿柳絮などにて作る手毬を云ふ。

㋸浥々、すつぼりぬるるをいふ、詩經に「厭浥行露」と、此所不生不滅の體を明す也。

㋾西祖云々、達磨入滅後、之れ

て瞥爾として翻身す、涅槃城を擧倒し、生死の窟を踢翻す、更に末後の一句あり諸人に分付す、還つて會すや、看よ看よ、紅爐片雪を飛ばす、㋡丙丁童子面門寒し。

蘊上座の下火。

五蘊有にあらず、四大本空なり、㋧泥牛夜吼ゆ澄潭の月、木馬時に嘶く碧落の風、只だ㋤亡僧面前觸目菩提と云ふが如きは、且く作麼生か和會せん、火把を以て圓相を打して云く、其れ或は未だ委悉せずんば、㋶大家問取せよ丙丁童。

㋰省院主。

幻境忽ち省して、大夢俄かに寤む、葉落ちて根に歸し、金風體露、既に是れ初秋夏末、須らく萬里無寸草の處に向つて、別に活路を求むべし、然も與麼なりと雖も、㋨院主眉毛を惜

を熊耳山に葬る、後三歳魏の宋雲使を西域に奉じて回る、師に葱嶺に遇ふ、手に隻履を携へて翩々として獨り逝くとあり、西祖によりて之れを踪出するのみ。

㋻杲々、日の輝く樣をいふ。

㋕潜德の幽光、韓文公、崔立之に答ふる文に曰く、「猶ほ將に寬閑の野に耕し、寂莫の濱に釣し、國家の遺事を求め、賢人哲士の始終を考へ、唐の一經を作り、之れを無窮に垂れ、姦諛を既死に誅する、之が潜德の幽光を發せんとす」と。

㋵擔板、一方向きの融通のきかぬ者。

㋟通玄は通玄庵建長寺にあり、桑田塔也。

㋹正傳は正法眼藏也。

㋞瑞龍庵は淨妙寺にあり、靈岩塔なり。

㋡丙丁童子は火の神也、法眼禪師の語に、「丙丁童子來つて火を求む」と、卽ち有にして有ならず、無にして無ならざるを云ふ。

㋧風穴延沼章に、「問ふ、如何か是れ佛、」師曰く、「風に嘶く木馬絆しなきに緣る、角を背ふ泥牛痛く鞭を下す」と。

㋤亡僧面前云々、傳燈十八に玄沙宗一章、「我尋常道ふ、亡僧面前正に是れ觸目菩提、萬里神光頂後の相、若し人覷得せば、妨げず陰界を出得し、汝髑髏前の意相を脱せん」と。

㋶大家は全家、又は諸人を云ふ。

㋰省院は、監寺也。

㋒大夢、莊子齊物篇に、「大覺ありて然る後此大夢を知る」と。

㋼金風體露、古語に曰く、「水落ち石出て、天地自然の眞如を知る」と、又雲門錄に曰く、「問ふ、樹凋落葉の時如何、」師曰く、「體露金風」と。

取せば好し、何が故ぞ、木佛火を渡らず。

道善禪門。

不思善、不思惡、面目分明、瞥地に去り、瞥地に來る、全機獨脫、偉なるかな猛烈の大丈夫、生死の牢關當下に拔く、既に眞俗の羅籠を出づ、寧ろ凡聖の途轍に墮せんや、正與麼の時、那裡か是れ㋔佗の眞歸の處、紅爐焔上に片雪を飛ばす。

伊大師。（㋗燈節の日）

一夜須彌筋斗を打す、虛空を驚かし起して雙眉を皺めしむ、從教れ明月海嶠を照す、爭奈せん悲風地を動じて吹くを、某人四十六年、路を人間に借る、惟れ道惟れ勉めて、蘗苦氷寒、㋳末山の不露頂を坐斷す、寧ろ㋮鐵磨の牸牛欄に居らんや、甚の㋘伊字の三點とか說かん、向上の一關を撥透す、是は則ち是、火把を竪起して云く、更に末後の句子あり、切に須らく理會して始めて得べし、其れ或は未だ然らずんば、㋻燈王古佛に問取して看よ。

明應大師。

㋷院主眉毛云々、會元丹霞天然章『師慧林寺に於て天の大寒に逢ひ、木佛を取つて火に燒いて問ふ、院主呵して曰く、「何ぞ我木佛を燒くことを得ん、」師杖子を以て灰を撥ひて曰く、「吾燒いて舍利を取る」と、主曰く「木佛何の舍利かあらん、」師曰く、「舍利なければ更に兩尊を取つて燒かん」と、主その後眉鬚墮落す』とあり。

㋔佗は卽ち道善を指す也。

㋗燈節の日は正月拾五日、卽ち燒燈節なり。

㋳尼末山了然禪師は高安大愚の法嗣也、僧問ふ「如何なるか是れ末山、」然曰く「不露頂。」（會元四）

㋮劉鐵磨亦尼僧也、潙山に參す、山來るを見て卽ち曰く、「老牸牛來や、」磨曰く、「來。」（會元九）牸牛は牝牛なり。

一念道と相應ずる時、吾が家眞の種草となるに堪へたり、潙山門下の老牸牛、法華會上の㋙大愛道、當頭に拔卻す生死の關、直下に掀翻す涅槃の窟、末後の句子又如何、烈焔堆中一片の雪。

　鏘侍者。

㋓三呼三應、金石㋢鏗鏘たり、末後の一句、徧界藏さず、只だ㋐聖制を毀犯して破夏行腳するが如くんば、果して出生入死超宗越格の分ありや也た無きや、火把を擧して大衆を召して云く、看よ看よ、火中の菡萏馨香を吐く。

　慈慶禪尼。（預請）

風前の㋚薤露は晞墜し易く、㋖岸樹井藤良に險なる哉、五十六年惟だ一夢、任敎れ殘月の西臺を照すことを、某人、受生業繫、暫く女士の蠶流に處するも、是れ其の天資、甚だ丈夫の志

㋘伊字、涅槃經哀歎品に「何なるか名けて秘密の藏となす、猶ほ伊字の三點の如し、若し並ぶれば則ち伊とならず、縱しならざるも亦摩醯首羅面上の三目の如し、乃ち伊となす事を得、三點若し別なるも亦成ることを得ず、我も亦かくの如し、解脫の法も亦涅槃にあらず、如來法身も亦涅槃にあらず、摩訶般若も亦涅槃にあらず、三法各異も亦涅槃にあらず、我今如斯三法に安住して、衆生の爲め故に涅槃に入ると名く、世の伊字の如し」、即ち之れによる也。因みに梵字の伊の古字は∴の如く三點よりなり、其位竪横ならず縱ならず、故に三即一、一即三の意味を表はす例語として用ふ。

㋫燈王は燈光を指せるなり。

㋙大愛道、憍曇彌、又は大生主なるふ。

㋓三呼三應は侍者故に之れを云ふのみ。

㋢鏗鏘、西征賦に曰く、「鏗鏘として耳に遺響を想ふに、鏗鏘として耳にあるが如し」、即ち金石の聲を云ふ、又禮記に曰く、「君子の音を聞く、其鏗鏘を聽くのみにあらざるなり」と、又鏗侍者の鏗に應ず。

㋐聖制、天下の僧侶四月十五日禪刹に就いて挂搭す、之れを結夏と云ふ、蓋し長養の節外にありて、行けば則ち恐らくは草木蟲類を傷く、故に九十日安居、七月十五日に至る、之れを聖制と云ふ。同日挂搭の僧尼悉く去る、之れを解夏と云ふ、又解制とも云ふ。

㋚薤露、漢の田橫死す、門人之れを傷んで遂に悲歌を爲りて言く「人命薤上の露の如し、晞き易く滅し易し」、又曰く、

氣に踰えたり、舊三從を守つて服勤に勞す、忽ち驚く五際の迴避し難きに、形を毀つて既に ㋙六和の衆に厠り、踵を旋らして須らく諸聖の位に昇るべし、疾に染んで歳こゝに深く、奄息時將に至らんとす、四大の空身去あり來あるも、一靈の眞性は不變不異なり、火把を拈起して云く、大衆還つて見得するや、金剛正體鎭長に存す、劫火幾回か海底を燒く。

楞猛庵主。（結夏の日）

捨俗歸眞の志に辜かず、猛烈の工夫已に十成、失脚踢翻す生死の窟、放身靠倒す涅槃城、某人、夙生に箇事あることを知つて、頂門に活眼睛を具す、百千の法門即時に蕩盡し、七十六歳幻夢忽ちに驚く、萬里渾て無し雲一點、參州は只だ是れ ㋱月孤明、火把を以て圓相を打す、諸人高く眼を著けて看よ、安居禁足の ㋯蠟人冰、卻つて紅爐焔上を踏んで行く。

㋛靈叟和尚の爲め入塔。

佛燈滅卻す ㋓瞎驢の邊、知る是れ無明的傳を得ることを、慚愧す頂門の正法眼、空しく夜月を除して ㋪青天を照す、恭しく惟みれば、某人、誤つて長勝の籌室に入つて ㋲痛棒を喫著す、此れより命根を喪盡して此の風

「蓮上の露、何ぞ晞き易き、明朝更に落あり」と。

㋖岸樹、場所の危きを云ふ。

㋙六和の衆、一同戒和敬、二同見和敬、三同行和敬、四身慈和敬、五口慈和敬、六意慈和敬以上の六和敬を云ふ。

㋱月孤明、所謂心月孤圓光萬象を呑むの底也。

㋯蠟人冰、蠟當に臘に作るべし、年臘を云ふ、天竺に臘人を以て驗をなすは、其人臘に長幼あり、其行に染淨あればなり、冰とは其行の冰潔を云ふ也。

㋛靈叟和尚、佛燈國師の法嗣なり。

㋓瞎驢、正法眼藏以心傳心を說く、語臨濟末期三聖に垂示するに、「我正法を瞎驢邊に向つて滅卻することを」と云ふに出づ。

㋪青天を照す、正法眼藏の露堂

骨を露す、言を出し氣を吐くの處、越格超宗、揚眉瞬目の時、㋝釘を截り鐵を斬る、㋑南詢歷盡すること二十年、勘過す諸方の老古錐、便ち見る大唐國裡只だ是れ禪あつて師なきことを、還つて㋺巨福山中に向つて風月を平分し、宏いに㋩萬壽の爐鞴を開いて聖凡を鍛錬す、橫拈倒用星飛び電卷き、眞操實行氷潔く霜嚴し、太古の正音和するもの寡く、調べ無生に轉じて七たび春を見る、末後の一句㋥淵默雷轟、直に如今に至るまで幾人をか疑殺す、一義同心山は高きを缺き海は深きを缺く、兄弟十字限りなき淸風來つて未だ已まず、者箇は是れ某人平生受用不盡底の三昧なり、卽今歸つて眞歸の處を知らんと要するや、免れず重ねて箇の消息を通じ去ることを、流水潺々たり一溪の曲、白雲長に鎖す碧層巒、湘南潭北黃金國、自家田地の閑にはしかず。

心庵主の入塔。（舊㋭明禪の檀那たり）

正因を昧まさず、㋬心華開發し、㋣大基業を立して、法の檀越たり、拳を竪起する處、生死の牢關を打破し、低頭して歸る時、㋠故家の風月を領略す、釋迦の腦蓋達磨の眼睛、畢竟是れ箇の什麼の閑鬼骨ぞ、空しく三尺の

々たるを謂ふ。

㋲痛棒を云々、即ち佛燈の義なり。

㋝釘を截り云々、銀山鐵壁も喝すれば摧け、打てば破る。

㋑南詢、南方諸國に道を詢ふの意、善財童子、南方五十三人の善智識を訪問したる故事に依る、語行脚の意に用ふ。

㋺巨福山云々、首座として半座を分つ義也。

㋩萬壽、豐後府內蔣山興聖萬壽禪寺也。

㋥淵默雷轟、維摩の一默雷の如しと、蓋し之れより來るなり。

㋭明禪寺は、備前州番にあり。

㋬心華、正因佛心の種子より開く也。

㋣大基業は、明禪寺を云ふなり。

㋠故家、風月、衲僧本分の田地なり。

㋷浮屠兒を留む、千古萬古峭巍々たり。

覺眞禪門の入塔。

出生入死、兩ながら空名、眞を離れ妄を除くも、也た是れ何物ぞ、浮屠三尺須彌を礙へ、虛空𢷬出す㋦黄金の骨。

㋸頂山和尚の入塔。

千聖の㋾頂顙骨氣別なり、當陽に突出す好生觀、大士峰前全體現じ、㋻層々落々影團々たり、正與麼の時、是れ㋕本寺開山頂山和尚の還家穩坐底の消息なるなからんや、依稀たり㋵華藏の甚深海、髣髴たり㋟妙高の不動山。

説（合計十九章）

松巖の㋹説。

作陽の操禪人、予に從つて遊ぶこと久し、一日別稱を安ぜんことを需む、故に松巖を取つて號となす、渠れ又其の説を聞かんと請ふ、且くため

㋷浮屠、浮圖、又は窣堵波、又偸婆と曰ふ。又私偸簸とも書す、皆訛なり、梵名は（Budaha）なり、佛或は佛寺をも指す。

㋦黄金の骨、古句に「骨頭節々是れ黄金」と。

㋸頂山和尚は桑田海の孫靈巖昭の子也。

㋾頂顙、大凡名字を打す妙なり。

㋻碧巖二の頌に、「無縫塔見ること還た難し、澄潭には許さず蒼龍の蟠ることを、層々落々影團々。」

㋕本寺、大士山慈廣寺也。

㋵華藏云々、華嚴四法界の廣大海なり。

㋟妙高、南方國あり、勝樂と云ふ、又妙高峰といふと。

㋹説は解なり、述なり、義理を解釋して己が意を以て之を述ぶる也、論と大差なし。

㋡鳥道玄路、禪林類聚に曰く、

に之に語げて曰く、「從上參學の士は、先づ信根を固うして深く道本を究め、志氣高く霄漢を衝いて、時人の意に入らざるを憂へず、霜雪の苦を嘗め盡すと雖も、終に歲寒の姿を改めがたし、然る後、立處孤危、八面玲瓏たり、㋨鳥道玄路、假使佛祖も只だ斫額して仰望するのみ、其の一機を垂れ一境を示すに當つては、或は濟北の巨樹、後世に㋨榜樣して、限りなき蔭涼淸風已まず、或は㋧雙峰山前、鈍钁頭邊に、忽爾として筋斗を打飜す、再來㋤半錢にあたらず、或は㋶鳥花を含み落して、㋰錯つて名言を下し、人をして境の會をなさしめ、二十年を閑過す、或は振威一喝すれば、㋒崖崩れ石裂け、靑天の迅雷身を掩ふも及ばず、汝勉勵力行して遠く先哲の勝躅を攀ぢば、乃ち顏を希ふものは顏の徒なり、正に宜しく予が子に命ずる所以の旨に負かざるべし、庶幾はくは名實相當らんか、」時に㋼管城翁あり、旁に在つて起つて歌つて曰く。

「鶴は喬枝に唳り、猿は落月に叫び、山は夜濤を撼かし、瀑は晴雪を飛ばす、名か實か、天風瑟々たり。」

材翁の說。

「夾山會禪師、因に路を修する次で、雪峰問ふて曰く、世路普請して修す、玄路怎生か修せん、師曰く、瞪目して同じく迷ふ、爾が鋤を下ろす所なし。」洞山玄中の銘に「擧足下足、鳥道無殊坐臥經行、玄路にあらざるなし。又鳥道は飛鳥の道路空中にあり、玄路は世途にあらず、三脚の驢馬此道による。

㋨榜樣は手本也。

㋧雙峯山前云々、宋高僧、弘忍大師の傳に、雙峯に至つて、僧業を習ふ、艱辛を憚らず、又雙峰山中栽松道者あり、再生して五祖大師となり、四祖に法を次ぐと、栽松によりて之れを飜出するなり、又鈍钁頭と云ふ也。

㋤半錢にあたらず、會元十九、白雲端禪師章「若し衲僧秤子上に上り、秤らば一箇は重さ

夫れ良木に非ざれば、大厦を締構するに由なし、是れ美器にして、庸つて先修を庶幾すべし、昔し臨濟、黃檗に在つて㋷寸靑を栽培す、漸く巨樹となつて、宇宙を蔭凉し、叢林に標榜たり、爾よりこのかた、苗を分ち、根を連ねて、殆んど其の幾千萬章なるを知らず、繩墨を施さず斧斤を勞せざるも、長短方圓自然に度にあたる、是こを以て競うて㋔洪基を搬め、宏いに戶牖を開いて、天壤の間に充塞す、後來獨り㋗石霜の慈明老人あつて、頗る㋳破家散宅の手段を具して數々院事を領じて一椽を動ぜず、然る後㋮勃然として臨濟の將に仆れんとするを興す、其の十有二世、不肖の遠孫、我が佛燈先師は、是れ法門の梁棟、天下の宗匠なり、只だ㋘平生佛を罵り祖を呵するを以て、口業の招くところ、如

八兩、一ケは重さ半斤、一ケは半分錢に直らず」と。

㋶烏含花落、會元夾山章、「問ふ、如何か是れ夾山の境」と、師曰く「猿子を抱いて靑嶂の裏に歸り、鳥花を含んで碧巖前に落つ」と。

㋰錯下名言、會元七、巖頭全奯章、一日德山に參ず、方に門に跨つて便問ふ「是れ凡か是れ聖か、」山便喝す、師禮拜す、人ありて洞山に擧似す、山曰く「若し是れ奯公ならずんば大に承當し難し、」師曰く「洞山老人好惡を知らず、錯つて名言を下す、我當時、一手は擡げ一手は搦む」と。

㋒崖崩れ石裂け「俱胝初め徑山國一禪師に侍す、山中俄かに殿宇を創む、岩下石突出して平治する能はず、胝、俱胝菩薩の呪を誦し、乃ち聲を震はして喝すれば、岩之れがために

平ぐ」と。

㋼管城翁は筆の異名也。

㋷寸靑、古人の句に「靑々一寸の松、中に棟梁の姿あり。」

㋔洪基、大叢林也。

㋗石霜の慈明、石霜楚圓慈明禪師也、汾陽の道望によつて太悟徹底す。

㋳破家散宅云々、家屋敷も庫も什寶もたゝきつぶされば、微妙莊厳の寶樓閣には安坐できない。

㋮孟子に、「雨沛然として下れば、苗勃然として興る」と。

㋘平生原本處々に一平生に作る、譯者寡聞にして一平生の語に接せず、故に或は一を省し、或は平を省して一生或は平生と改む。

㋻駿陽は駿河を云ふなり。陽といふは非なり、洛陽、汾陽などは皆洛水、汾水の陽にある故に云ふ也。

今門庭冷かなることは死灰の如し、悲しひかな、㋫駿陽の㋙梁姪、天資英敏にして亦老成なり、薄に起家の才あり、宜なるかな、㋓足庵材翁の二字を取つて之が別稱となすこと、唯だ望むらくは業を勤め行を勵しうし、㋢保社を扶立せんことを、其の實をして其の名に愧ぢざらしめんと要するなり、旃を勉めよ、旃を勉めよ。

無住の說。

關西の本姪、來つて別稱を需む、爲めに無住の二字を寫して之を還す、渠れ亦其の說を聞かんと欲す、予之に謂つて曰く、「是れ無住の本より一切の法を立するなきや、是れ應に㋐所住無うして其の心を生ずるなきや、是れ有佛の處留まるを得ず、無佛の處急に走過するなきや、摠に者般底の道理にあらず、儞而今只だ父母未生前に向つて、猛く精彩を著けて、體究することを久しうして、名相雙泯、人法兩空、三際平沈し、十虚消殞せば、那の時方に見ん無住の義忽爾として現前するを、之を思へ。」

道山の說。

一㋚日客あり、余に謂つて曰く、「吾れ參道の志を抱くこと玆に年あり、而も復た賦性山を愛す、㋖棲遲地を易ふると雖も、皆山を離れず、所以に目を縱にして觀るときは、則ち疊嶂・屛を連ね、

㋙梁は材翁の諱名也。

㋓足庵、祖麟靈岩の子也。

㋢保社、山谷の詩に、「本江湖と保社を成す」と、即ち保伍、同社を云ふ、叢林をいふ也。

㋐所住無し、其實體なきをいふ。

㋚一日云々、來客を設けて寓言して自ら說くなり。

㋖棲遲、悠々自適なり、ゆつくり休む也。

層巒・黛を潑ひ、白雲は幽石を抱き、㋴赤日は高岩に下る、全く是れ道なり、耳を側てゝ聽くときは、則ち溪流玉を漱ぎ、松籟濤を翻し、寒猿深崖に嘯き、老樵空谷に歌ふ、也た是れ道なり、今既に頗る㋱境智冥合し、㋯物我雙忘するを覺ゆ、方に知る道は本山に在らざるを、山亦何ぞ道を離れんや、追思するに、古人云ふ、『平常心是れ道』、又云く、『無心是れ道』、或は云ふ、『牆外底、及び、㋛長安に透る』と、豈止だに外邊に㋓之遶を打する者ならんや」時に古濃河邊の大昌主翁信公、余に從つて偈を道山の雅號に需む、余耄せり、平仄を辨ぜざること久し、客の語を借つて寫し、以て其の請を塞ぐと云ふ。

別禪の說。

正燈庵主、一日予に從つて道號を安かんことを需む、因つて別禪の二字を寫して其の請に酬ゆ、時に一㋪驅烏あり、旁に侍して墨を研ぐ、乃ち問うて曰く、「既に是れ別禪、想ふに四七二三稟承し將ち來る底の不立文字等の禪にはあらじ、未審し甚麼の禪ぞ」と、余笑つて曰く、㋲「今日は是れ延文巳亥臘月二十五。」

授庵の說。

相陽の傳姪、一夏余が爲めに庫務を飯高の山庵に掌る、執爨負舂、㋝

㋴赤日云々、東坡詩集に、「高岩赤日を下す、深谷悲風を來たす」と。

㋱境智は、所緣の境、能緣の智也。

㋯古人の句に、「竹樹扶疏乳燕鳴鳩の時序を送るに任せ、物我二つながら相忘る」と。

㋛長安云々、大道長安に透ると。

㋓之遶、遶路也、迂曲也。

㋪驅烏、十二三位迄の小僧也、

區々として賤役し、事として辨ぜざるなし、甚だ斯の道に志あるを感ず、解制の後、且く辭して參方せんとし、亦別稱を需む、仍つて授庵と號す、儞此去つて、(ス)看山翫水游州獵縣の時、自己の大事因緣を忘するなかれ、切に眼を著けて看よ、佛々授手し祖々相傳する底は是れ什麼邊の事ぞと、忽爾として蹉脚踏得して、底に到らば、方に是れ名實厮當らん(イ)至屬々々。

及庵の說。

古播の(ロ)信姪、余を近江石塔の客居に訪ひ、別稱を安かんことを需むるの次で、(ハ)從容として語げて曰く、「我が師(ニ)大虛既に沒して、慘怛未だ已まざるに、尋いで亦母を喪し、忽ち省す、無始より以來、業繫身に受け、展轉昇沈して、(ホ)三有界内に無量の艱辛を喫盡す、若し今日生死の根源を截斷せずんば、則ち未來際を極めて超脫の日あるなけん、況んや我れ空門に(ヘ)濫厠すること十有餘年、而も此の道に於て全く些子入頭の處なし、唯だ是れ(ト)波波挈々として徒らに涼燠を閱す、實に自ら慚ぢ自ら愧づるのみ、乃ち故里に歸つて(チ)樹に就いて屋を縛し、終日關を掩うて萬機を休罷し、

皆驅烏沙彌と名く。
(モ)今日は臘月廿五日なれば、廿五日までなり、何の殊勝奇特もこれなし、是れ即ち別禪也。
(セ)區々、此所では勤貌、即ち矻々などと同じ意なり。
(ス)看山云々、行脚の間を云ふ。
(イ)至屬、至慇、汝に付屬す、忘るゝなかれと云ふ程の意也。
(ロ)信の諱に迷られて信得及を得及庵と名つけられし也。
(ハ)從容、舒緩の貌、中庸に、「從容として道に中る」と。
(ニ)大虛、福巖大虛元壽禪師也。
(ホ)三有は三界なり。
(ヘ)濫厠し、潙山警策に曰く、「濫りに僧倫に厠る」と。
(ト)波々挈々、又波々吒々、波々劫々に作る、波々は奔波已まざる也、挈々は休まざる貌。
(チ)樹に就いて屋を縛し、中峰山居の詩に、「看レ山渾不レ厭居レ山、就レ樹誅レ茅縛二半間一」と。

把つて一件となし、一則(リ)無義味の話頭を拈取して、默々として參究すれば、舊に依つて肚裡の疑團黑漫々地にして、之を奈何ともするなし、云々、」予謂つて云く、「汝今此の如く信得及せば、(ヌ)眞箇得がたきなり、斯の志久遠にして不退ならば、安んぞ己事を辨明するを獲ざるを患へんや、古人旨を得るの後、猶ほ衣を拂つて遠引し、岩谷に韜晦して一生世と邈如たり、纔かに人に參扣せられて、卻つて已むを獲ずして、或は空拳を竪起し、或は門上に字を書し、或は云ふ、(ル)溪深うして杓柄長しと、這般の高風逸韻、皆最初の信得及の上より流出し將ち來つて、今に至るまで天壤の間を照映す、予汝を及庵と號す、意豈玆に在るに非ずや。」

劍關の說。

演祖趙州の(ヲ)無字を頌して曰く、「趙州の露刃劍、寒霜光焰々、更に如何と問はんと擬すれば、身を分つて兩段となす、」性禪者別號を安ぜんことを求む、因て劍關と號す、汝今よりして後、諸緣を放捨し、把つて一件となして、孜々兀々として箇の無字に參ぜよ、一旦知解忘じ、能所泯じ、伎倆盡きて、關棙子を撞翻せば、惟だ生死の魔網を割斷するのみにあらず、亦

(リ)無義味云々、中峯雜錄、結夏順心庵の衆に示す語中に曰く「單々に無義味の話頭を提起し、最初一日より、脚頭を立定して、分毫も移動することを得ざれ、之れが與めに做して向前に去れ」と。

(ヌ)眞箇得がたしとは、斯くの如く精進する漢は容易に得難しの意。

(ル)會元、雪峯存章、「一僧あり、山下にあり、庵を卓して多年頭を剃らず、一長柄杓を畜へて溪邊水を汲む、時に僧あり、問ふ、如何か是れ祖師西來の意、主曰く、溪深して柄杓長しと、師聞き得て、乃ち曰く、也た奇怪なり、一日剃刀を以て侍者と同じく去つて訪ふ、纔に相見前話を擧す、問ふ、是れ庵主の語なりや否や、主曰く是、師曰く、若し道得ば即ち儞が頭を剃らず、主便ち

須らく佛祖の命根を㋻勦絕すべし、之を干戈を動かさずして、坐ながら太平を致すと謂ふとしか云ふ。」

㋕直前の說。

㋵少林は直指人心見性成佛と云ひ、淨名も亦直心是れ道場と云ふ、皆俯して時宜に應じ、枉げて人情に順ふ、豈翅に七曲八曲のみならんや、縱令有佛の處住するを得ず、無佛の處急に走過し、奔流刃を度し、疾焰風を過し、㋟遼鶴三千、㋹溟鵬九萬、杳かに羅籠を出で、窠臼を超脫し、身を那畔に揚げ、別に生涯を立するも、若し衲僧門下に約せば、正に是れ癡獃の漢なり、儞若し這裡に在つて一隻頂門の眼を著得せば、須らく㋞鐵磨總持の輩をして背後に叉手せしむべきのみ、大抵如今學道の人は、一往直前して違得して手に入る能はず、多くは一機一境の上に在つて途路の活計をなす、是のごとく㋡躁跟し、是のごとく躊躇す、所以に未だ肯て歸家穩坐せず、實に憐愍すべきものなるかな、㋧鏡邸の接待庵主端大師、別稱を求む、因つて直前と號す、此を寫して以て其の說となすと云ふ。

定巖の說。

頭を洗つて胡跪す、師卽ち與めに剃卻す」と。

㋾演祖、會元十九、五祖法演十五にして始めて家を棄てゝ祝髮す、今の頌、五祖演語錄下に出づ。

㋻勦絕、尙書に「天用つて其命を勦絕す」きりたつ也。

㋕直前は尼僧也。

㋵小林、淨名、小林は達磨、淨名は維摩也。

㋟遼鶴三千、遼東城門に華表柱あり、白鶴あり其上に集る、詩を言うて曰く「鳥あり、鳥あり、丁令威、家を去ること千年、今來り去り歸る、城郭は故の如くして人民は非なり、何ぞ仙を學ばざらんや、塚累々。」又詩經鶴鳴に「鶴九皋に鳴く、聲天に聞ゆ」と。

㋹溟鵬九萬、莊子逍遙遊に「北溟に魚あり、其名を鯤となす、之が大いさ其幾千里なるを知

古人跡を岩間に晦まして、世と邈如たり、只だ專ら禪寂を以て、將樂となす、所以に(ラ)孤猿月に叫ぶも、耳を亂るの聲を聞くなく、(ム)幽鳥華を銜むも、眼を遮るの色を見ず、斯の如きこと三二十年、一旦厥の道顯著して、(ウ)紫詔雲に入り、出でゝ(ヰ)人天の導師となるもの之れあり、或は亦誓つて(ノ)石室を下らず、芋を煨つて饑に充て、草を編んで衣となして、樵汲の外、宴坐靜默、泯々として終を待つもの之れあり、然も其の高風逸韻、尙ほ(オ)韶濩を百世の下に鳴らすは、咸く是れ(ク)那伽定の中より得來らざるものあるなし、予が賢姪字は一、予と林下の遊をなすこと久し、別稱を求む、因つて定巖と號す、略其の說を示すのみ。

南雲の說。

予昔し(ヤ)豫章に游んで、舟滕王閣の下に泊す、一少年(マ)梢工の舷を扣いて(ケ)王勃の記詞を朗誦するものあり、予篷窻に起坐して、終宵聽を側て、私に感激を增す、良に以て(フ)騷人墨客の幽致雅韻を想見するに足るのみ、嗟乎俛仰の頃、既に(コ)三紀を逾ゆ、今鈍庵老兄、神足棟禪の爲めに、大いに南雲の二字を書して其の別稱と爲すを視て、乃ち覺ゆ、西山南浦歷爾と

らず、化して鳥となる、其の名を鵬と云ふ、鵬の南溟に徙る時、水に擊つこと三千里、扶搖に搏して上るもの九萬里。」

(ソ)凝獃「ちがい」、おろかもの也。

(ツ)鐵磨、總持、初祖下の尼僧也。

鐵磨、潙山下の尼僧。

(ネ)跺跟、又跺根に作る、行いて進まざるを云ふ。

(オ)鏡邸は江州の鏡が驛なり。

(ラ)孤猿云々、巴峽猿啼いて三聲人の腸を斷つ。

(ム)幽鳥云々、會元二、四祖大醫禪師傍出の法嗣、牛頭山法融禪師章に「牛頭山幽棲寺北巖の石室に入る、百鳥の花を銜むの異あり」と。

(ウ)紫詔、詔を紫泥の書といふ、李白が句に「鳳凰丹禁の裏、銜出紫泥書」と。

(ヰ)人天の導師、唐の南陽の慧忠禪師、白崖山黨子谷に居ること四十余年、唐の肅宗に召さ

して毫端に聚り、朝雲暮雨宛然として眼底にあることを。

高原の說。

㋓大元至治壬戌の春、袁の南源に游んで、方丈の扁榜を見るに、曰く、「水出㆓高原㆒」（水は高原より出づ）と、蓋し慈明禪師此の山に住するの日、僧あり、問ふ、「如何なるか是れ佛、」答へて云く、「水は高原より出づ」といふの意を取るか、備陽長福の妙老、跋涉を憚らず、來つて飯高の巖居を訪ひ、留まること㋢信宿して去る、其の志嘉すべし、別に臨んで別稱を需む、之を高原と號す、切に希はくは慈明垂示の旨を參究して、其の源底に徹せば、恐らくは是れ名實厮當らん。

彌天の說。

東晉の㋐安公は僧中の龍なり、德名倶に高うして、其の右に出づるものあるなし、故に自ら彌天釋の道安と稱す、良に以あるなり、如今釋侍者、彌天を樹て丶用て別號となす、吾が門復た㋚希顏慕藺の徒を獲たるを且喜するなり。

雪懷の說。

れて師の禮なうく、機に應じて光宅積薫に說法すること十有六載と。

㋷石室云々は、善導和尙の類、草芋を煨るは懶瓚禪師の類、草を編むは奉初禪師の類之れなり。

㋔韶濩は幽妙の樂なり、舜の樂を韶と云ひ、湯王の樂を濩と云ふ。

㋗那伽は龍なり、長時蟠屈し禪定の機を得、卽ち大禪定、佛定等の意に用ふ。

㋳豫章、楊州に屬す。

㋮梢工は篙師、舟師と云ふが如し。

㋘王勃字は子安、絳州龍門の人也、六歲にして文を能くすと、滕王閣王勃の詩に「畫棟朝に飛ぶ南浦の雲、朱簾暮に捲く西山の雨」の句あり。

㋫騷人、楚の屈原離騷を作る、離騷は憂に遭ふ也、今時詩人

昔し(キ)王子猷雪中舟に乘じて戴安道の幽居を訪ひ、未だ其の處に到らずして乃ち棹を囘らす、人其の故を問ふ、云く「興に乘じて來り、興盡きて歸る」と、蓋し參禪行脚も亦復た是の如し、若し途中忽爾として洗面して鼻孔を摸著する底の時節あらば、何ぞ必ず宗師面前に、言を承け氣を接して、(ユ)如之若何と問ふことを用ひんや、猷侍者別稱を求む、因つて號して雪懷と云ひ、迅筆亂道して之に贈ると云ふ。

霜林の說。

果侍者の別稱は霜林、蓋し霜は(ヌ)靑冥露結んで積むこと久しうして凝白濃淸なり、林は衆木叢生して年を歷て蔭涼高大なり、人は德足り、道優にして、而る後必ず名器を成ず、一朝霜露果熟し、(ミ)人天推轂して、叢林凋殘の秋を扶起せば、方に始めて余が爾を霜林と號する所以の旨に孤かざるなり。

快翁の說。

若し此の事を論ぜば、則ち棒頭に旨を明むるも、早く是れ(シ)鈍鳥蘆に棲む、喝下に機を轉ずるも、困魚濼に止まるを免れず、所以に(ヒ)高亭江を隔

を云ふ。

(コ)三紀は三十年也、十二年を一紀とす。

(エ)元の至治二年也、本朝の元亨二年にして、和尙卅三歲、南源は慈明の曾て住持する處。

(テ)信宿、一宿を宿といひ、再宿を信といふ、三日以上を次といふ。

(ア)安公は釋の道安なり、年十二にして出家し、神性聰敏にして形貌甚だ醜と。

(サ)希顏慕藺、顏を希ふは顏の徒なり、司馬相如、藺相如を慕ふて其名を以て己が名とすと。

(キ)王子猷、右軍義之の子也、嘗て山陰に居し、夜雪の初めて霽れて月色淸朗、四望皓然、獨酒を酌む、左思招隱の詩を詠ず、忽ち戴逵を憶ふ、時に逵剡にあり、便ち夜小舟に乘じて之れに詣る、宿を經て方

て丶横に趍り、(七)南泉拂袖して便ち行るも、其の遲きこと豈翅に七刻八刻のみならんや、且く快翁禪伯に問ふ、作麽生か是れ伶俐の衲僧分上の事、汝未だ口を開かざる已前に向つて、一轉語を下し得ば、名浪りに得るにあらざるなり。

石磵の說。

余が性山水に遊ぶを喜ぶ、一日飯罷んで、同志兩三輩を拉へて、屋後の山に入り、樵徑によりて行くこと數里に殆し、松風耳を吹き、(八)空翠衣を濕す、忽ち一洞壑を見る、幽邃(九)嵁岈、陰風凜々たり、老木枝を交へ、古藤蔓を垂れ、兩崖對峙して翠屛を側つるが如し、中に巨石あり、高きこと丈餘許り、屹然として特立して青鐵を削るが如く、(十)硉矹磈礧として怪奇觀るべし、潤澤物に被らしめ、草木花滋く、溪山明媚なり、蓋し疑ふ、内に美玉を含んで、乃ち然るを致すか、下に磵泉ありて色藍を挼むに似たり、泓然瀲灔として(十一)雲根を浸爛す、瞪目して俯して臨めば、人をして心寒く股慄せしむるのみ、亦恐らくは靈物あつて玆に蜿蜒するか、余聊か懷に感あり、卽ち同志に謂つて曰く、「坐れ吾れ汝に語げん、古の隱士は夐かに塵世

に至る、造」門前まずして返る、人其故を問ふ、曰く、本興に乘じて行く、興盡きて反る、何ぞ必ずしも安道を見んやと。

(五)如之若何、如之は「かくのごとく」にて、斯樣斯樣に見ました、若何は「いかん」にて如何がで御座いませうと尋ぬるなり。

(六)靑冥は蒼天也。

(七)人天推戳は世の中に引張り出すこと。

(八)鈍鳥云々、寶藏論に「夫れ道に進むの由、中に萬途あり、困魚は濼に止まり、病鳥は蘆に棲む、其二者大海を識らず、叢林を知らず、人小道に趣くも又然り」と。

(九)高亭の簡禪師德山に參ず、江を隔て丶纔かに見て便ち曰く「不審」と、山乃ち扇を搖して之を招く、亭忽ち開悟、乃

を揖し、遠く雲山を尋ねて、空谷の中に棲遲し、寒溪の上に(ロ)考槃す、志を守ること堅確にして、天飜り地覆るも、移らず、轉ぜず、心源淵深にして、歳積み月累ねて、彌々清く彌々澄む、唯だ世人の住所を知らんことを羞ぢ、亦聲名の江湖に流らんことを恐る、而今石㵎を回觀するに、古隱士の道貌と頗る相逼似するなり、汝が意謂ふに如何、」同志袂を拂つて起ち、笑つて曰く、「老夫實に耄せるか、若し但だ酷だ彼の石㵎の天生清絶の佳致を愛すと謂はゞ則ち良に以て可なり、古の隱逸を引き、偸かに以て比倫せば、何ぞ其の言の(ハ)骫骳是の如くなる、豈復た事を好む者にあらずや、」余對ふるところを失し、赧面して休す、夕陽已に木末に懸れり、相呼んで歸る、翌旦泉姪來つて相訪ふ、茗を(ニ)淪て同じく啜る次、話その事に及ぶ、泉云く、「或人吾を石㵎と號す、由るところを識るなし、來つて老夫に從つて其の説を聞かんと欲す、幸に希はくは山中に見るところ語るところを記して、石㵎の字の尾に在け」と、余が曰く、「前に言ふところのものは、是れ同志の捨つるところなり、汝之を用ゐてなにかせん、」泉云く、「(ホ)彼れ已に我にあらず、我また彼にあらず、彼我各々異なり、用捨寧ろ同じからん

ち横に趨つて去り、回顧せず。（會元七）

(ヒ)南泉拂袖は馬祖月を見るの因緣也。

(モ)空翠、王摩詰山中の詩に「山路元と雨なし空翠人衣を濕はす」と山氣又露也。

(セ)崟岈は大なる貌又豁開なり、

(ス)硉矹は石轉動の形、磈礧は石のごろ／＼分布する貌也。

(イ)雲根は石也、石は雲の根なり、故に爾か云ふ、石の事を書いた書に雲根志あり。

(ロ)考槃、詩之衞風に、「盤（たのしみ）を考（いた）して㵎に在り、」即ち淵明の「古松を撫して盤桓し」の盤桓などに同じ。

(ハ)骫骳、骫は委也、骫骳は屈曲と云ふが如し、蓋し骨の屈曲連鎖する貌。

(ニ)淪て、煮てに同じ。

(ホ)彼れ已に我にあらず云々、莊子に曰く、「鯈魚出遊從容す、

や、」余已むを獲ず、毫を援き、書して贈ると云ふ。

(ヘ)可庭の說。

老拙疇昔元朝に遊んで、夏を姑蘇の(ト)虎丘に度る、一夕竊かに堂外に出でゝ、千人石上に經行す、時に一方の(チ)明月白うして秋霜の如し、忽爾として(リ)古人獨り腰に齊しき雪に立ち、法を覓むる艱難の至なるを追憶す、嗚呼倒指すれば今既に三紀を逾ゆ、荏苒たる光景、惟だ一日の如し、尾陽の方侍者來つて別稱を需む、爲めに可庭と號す、聊か舊事を記して以て厥の尾に書すと云ふ。

越溪の說。

吾が子秀格、未だ志學を甫めざるに、來つて余が室に入つて、身を忘れて服勤し、須臾も左右を離れず、已に一紀を逾ゆ、余が住庵の所在、動もすれば三十餘輩に下らず、渠れ醇く(ヌ)卒歳の計を以て懷となすのみ、所以に(ル)幹蠱周旋、功として辨ぜざるなし、然も面に矜伐の色なく、口に勞苦の言を絕す、只だ世情の爛れて泥に似るを疾んで、吾が道貌の淸くして氷の如くならんことを圖るのみ、一日紙を袖にして別稱を需む、因つて

是れ魚の樂也、惠子の曰く、子、魚に非らず、安んぞ魚の樂みを知らん、莊子曰く、子、我に非らず、安んぞ我の魚の樂みを知らざることを知らん、惠子曰く、我、子に非らず、固より子を知らず、子固より魚に非らず、子の魚の樂みを知らざること全しと。」抱腹絕倒、盤上の玉の如し、而して事理明白、有にあらず無にあらず。

(ヘ)可庭、劉禹錫の詩に、「一方の明月中庭に可なり」と云ふより來るとも云ふ。

(ト)虎丘千人石、大明一統に、「平江府虎丘山は府城の西北九里にあり、一に海湧山と名く、中に劍池千人坐石あり。」越絕書に、「吳王闔閭を山下に葬る、葬つて三日、白虎其上に踞す、因つて名つく」と。

(チ)明月云々、李白の詩に、「庭前

越溪と號す、蓋し越の㋾若耶溪は、天下の勝槩なり、晉宋より今に至るまで名賢才子詩僧騷客一たび此に遊ばざるを以てして恨となすのみ、是こを以て此の地の譽、直に天と高を爭ふ矣、汝實をして名に愧ぢしめざらんと欲せば、當に宜しく志を勵まして進修すべし、悟證淵沖にして、常流に卓絶し、日に玄奥に達すること、㋻川の方に增すがごとく、大法の根源を濬うして、吾宗の正派を紹いで、名を百世の下に馳せば、豈偉ならざらんや。

書簡（合計拾五篇）

倫上人に答ふ。

久しく起居の問を致さず、慚惶の至に勝ふるなし、忽ち慈誨を領じて、道體の佳勝なるを審かにす、欣慰無量、前に既に㋕一花五葉を惠まる、山中無事、香を焚いて披閲し、般若の緣を結ぶ、尙ほ東語西話を缺く、殆んど渴して水を思ふが如し、今又厚恩を荷ふ、何を以てか之を謝せん、去春靈

月光を見る、これ地上の霜かと疑ふ」と。

㋷古人、惠可の雪中に道を求むるを云ふ。

㋦卒歲、詩に曰く「何以卒レ歲」と。

㋸幹蠱、古事を能くするを云ふ、經山雜錄に、「提點は虎岩の徒弟、頗る聰明幹蠱の才あり」と。

㋾若耶溪、越州府城東南四十五里にあり、卽ち歐冶子の劍を鑄し處也。

㋻川の方に云々、詩天保九如に、「川の方りに至るが如く以て增さずといふことなし。」

㋕一花五葉、東語西語、搭銘序に曰く、五篇を著書す、曰く、山房夜話、曰く、擬寒山詩、曰く、楞嚴微心辯見、或問曰く、信心銘闢義解、曰く、幻住家訓名けて一花五葉集といふ、又金剛般若略義一卷、洲

叟歿故す、諸子堅く請じて㋵明禪の席を繼がしむ、已むを獲ずして黽勉之に從ふ、夏罷んで、終に羈絆を脫し去れり、秋末に但州に到つて、古寺の閑房を借つて冬を過す、今夏猶ほ玆に就いて病を養ふ、鄙體輕安なり、幸に垂念を煩すなかれ、備州の忍兄、本業を律寺に隷ふ、倏爾として志を奮つて將衣を更へて參禪せんと欲す、中川雄兄の書を齎して以て介紹となし、愚に衣盂を授げんことを求む、愚佗に謂つて云く、「自己誤つて㋟田衣を服して、佛門を玷辱す、爭でか敢て小師を度すべけんや、」子須らく大方に去つて、名師宿衲に投じて、法器を成就すべし、豈不可ならんや、今已に渠が意、㋹夢窓和尚、臨川の㋞元翁兩老の間にあり、望むらくは尊兄方便して、渠をして其の志を遂ぐるを得せしめよ、則ち亦是れ利物の一分なり、愚毎に斯の如き事を以て、神用を勞煩し奉る、僭越の罪を免れず、唯だ渠跋涉を憚らず、特に來つて懇求すること甚だ力めたり、棄てゝ而して絕つに忍びず、勉強して稟聞す、慈愍を恪むことなくんば幸甚なり、不宣。

又。

傳覺心一卷、東語西語三卷、語錄十卷を著す、盛に世に傳ふ。

㋵備前の明禪寺なり。

㋟田衣、僧祇律に云く、「佛王舍城に住す、帝釋石窟の前に經行して稻田を見る、卽ち畦畔分明なり、阿難に語げて曰く、過去諸佛の衣相かくの如し、今より之れに依りて衣相となさんと、」又增輝記に、「田畦は水を貯へ嘉苗を長し、以て形命を養ふ、法衣の田は潤すに四利の水を以てし、增すに三善の苗を以てし、以て法身の慧命を養ふ」と。

㋹夢窓、天龍開山夢窓疎石禪師也。

㋞元翁、南禪元翁本元禪師、高峰顯日に嗣ぐ。

順公上人㋡尊兄の手墨を捧げて弊庵に來り、今夏聚首す、二六時中孜々として辨道す、眞の本色の道人なり、愚疇昔衆に隨ふこと二十年に幾し、未だ曾て箇樣の好兄弟を見るに及ばざるなり、豈期せんや、歲晚幸に肉身の菩薩と同住の勝緣を結ぶことを得んとは、是れ亦偏に吾兄道義深密の中より出でたり、詎を庸てか奉謝せん、皇恐不備。

實翁和尙に寄す

前日專介急に回る、悉く所懷を寫すに暇あらず、尙ほ中に慊むことあり、今歲看々又盡く、益驚く流景の過ぎ易きを、況んや殘齡良に以て多きことなし、知心は能く幾人かあるや、顏を奉じ談を接するは時中の願望なり、只だ老懶日に增すを以て、因循として虛しく數月を度り了る、心親しく跡疎なり、幸に乞ふ怠慢をもつて我を罪するなかれ、慈亮慈亮、㋧挑字猶ほ未だ此に到らず、想ふに精妙神に入つて尋常と同じからず、上刹の土地、殊に茲に秘惜して外に出づるを妬んで、陰かに詭計を設けて是に來るを得るの晚きを致すのみ、耐へがたし、耐へがたし、呵呵、弊寺の門前に幾箇の㋤潑皮あつて、近日許の魔難をなす、此に因つて、某早晚に衣を拂つて遠引せんやも也た定まらず、薄福の招くところ、怪しむに足らざる者なり、隆禪郤つて函丈に禮謁せんことを要す、冗中毫を援き、㋶覼縷して此に到る、時寒し、法の爲めに保重

㋡尊兄は倫上人也。

㋧挑字、蓋し墨跡扁書等を云ふなるべし。杜詩千家註に「誰か家ぞ錦字を挑ぐ、燭滅し翠眉顰す」と。

㋤潑皮、又波卑夜、惡といふ、釋迦出世の時魔王の名也。

㋶覼縷、委曲なり、又詳密なり。

せよ。

　實翁和尙に答ふ。

上復、忽ち示諭を辱うす、且つ審かにす、官辭狀を收めて、敢て勉め强ひて、以て吾が兄の安靜の趣を撓さざるを、竊かに之が爲めに助喜す、忻幸忻幸、壽兄は先師の最も㋰鍾愛の子、海外に孟浪すること二十年、今已に歸り來る、猶ほ㋒落包の地を缺く、誠に是れ憐むべきものなり、如今幾箇の法眷の占むるところの院子は、咸く是れ先師の遺席なり、何ぞ一箇を與へて、佗をして安頓せしめざるや、宛も蚖蛇の窟を戀ふが如くに相似たり、箇樣の㋸破落戸、如何ぞ把つて人となして看ん、天寒く歲暮る、春風一策便ち是れ相見の時なり、來人急に回る、㋨萬が一を伸ぶるを獲る能はず、恐愧の至り、伏して冀はくは法の爲めに珍重せよ。

　又。

越弟來つて賜ふ所の手敎を出し示す、香を焚いて繙閱す、仍つて審かにす、此日道福兼昌にして、㋔興寢淸勝なるを、欣慰已むことなし、細かに來諭を味ふに、區々として、愚が林下に關を掩うて世に趨くに懶きを痛責す、又云く、「㋨風雲の際會、以て峻擢に膺らん」と、夫れ何ぞ期せらるゝ

㋰鍾愛は、最愛に同じ。

㋒落包の地は卓錫の地を云ふなり。

㋸破落戸云々、善意にも惡意にも解せらる、譯者は善意に解して壽兄の如き破家散宅の英物を人ごとの如くにほつては置けまい、是非一院を與ふる義務ありの意、破落戸は身代つぶし也、或處にては「ごろつき」と用ふ。

㋨萬一、文公李愿盤谷に歸るを送る序に「萬一を僥倖して老死して後止む」と。

㋔興寢は起臥なり。

の太だ過ぎたるや、何を以てか敢て當らん、厚く㋳存撫を荷ふにあらざるよりは、則ち安んぞ此に到るを得んや、銘感の至に勝ふるなし、愚壯歲衆に隨ふの日、東西の斑列すら、倘ほ以て敢て意に措かず、何に況んや焉れより大なるものをや、是れ他なし、蓋し深く自ら己を量り分を知ればなり、頽齡㋮耳順に幾く、蒙昧年とともに相稱ふ、當初師友に得る處のもの、十に一を記せず、好一箇の藥物なり、天壤の間我を顧みるものある鮮し、獨り頂山の居兄、平日道義寒からず、退いて此の廢院子を與ふ、素山田數畦、蔬圃二三畝あり、甘じて箇の禿頭の老農となつて、躬耕手種、聊か以て歲を卒ふるを分とす、亦以て自ら娛むに足れり、幸に憂懸を煩すことなかれ、但だ此の生の中、左㋘右及び㋫方山笠峰諸公の高躅に追隨して、㋙嵩山に詣つて、祖塔を拜し罷んで、㋓龍峰に歸つて、茗を啜り舊を話するを得んと欲するも、亦未だ得べからざるなり、徒に悵怏を增すのみ、似かに聞く、㋢上刹嘗て元弘の兵火に罹つて、衆屋一燼すと、如今經營するところのもの、佛殿の一擧に止まるのみ、厨下淸淡にして、時に或は米を儲にして日を度ること多しと、㋐常人の分上ならば、必ず少勞慮なきを獲す、

㋗易の文言に、「同聲相應じ同氣相求む、水は濕に流れ、火は燥に就く、雲は龍に從ひ、風は虎に從ふ」と、又文選、吳の季重魏太子に答ふる牋に曰く、「臣幸下愚の才を得て風雲の會に値へり」と。

㋳存撫は恤安なり。

㋮耳順、孔子曰く、「六十にして耳順ふ」と。

㋘左右、實翁をさす也。

㋫方山、壽福方山元矩也。

㋙嵩山、建長寺西來庵の山號也。

㋓龍峰は佛燈塔なり、建長にあり。

㋢上刹、實翁の住する所也。

㋐常人ならば心配もせようが、貴下は豪傑の士、斯かる小事に齷齪せられまじと、左右は實翁を指す、下亦同じ。

㋚世故は世業也。

㋖乃祖は佛燈禪師也。

㋴問及云々、事の序に御尋に成

左右寛量大度、寧ろ復た目前の㋚世故高懷に介するに足らんや、切に希はくは、㋖乃祖の道危きこと累卵の如きを垂念し、槌拂に倦まず、正宗を發揮し、無窮の法利溥く迷徒を賑はゞ、是れ則ち愚不肖小弟等が渇望する所以に副はん、至祝至禱㋴問及の元泰は、今夏此に在つて聚首す、渠れ又日として左右の道風を慕はざるなし、恐らくは是れ秋涼宗禪を將ゐて、同じく去つて座下に執侍せんも也た定まらず、姑く此に略布す、極熱、法の爲めに保嗇せよ、不宣。

又。

久しく上問を㋱稽す、愧負劇だ深し、區々として東望、徒に懷仰を增すのみ、此日槌拂の餘、法候淸勝、㋯左右方に國に歸つて、未だ周歲に及ばざるに、㋛辟命を榮領すること兩次、竊かに喜ぶ、㋽巨瑞の遷、伊にあらずんば、師祖の法燈滅して再び燄するを俟つべけんや、後來關東京師の名刹、屢々庸主を換ふれども、我が左右に到つて、猶ほ未だ登擢を聞かざるは何ぞや、胡爲ぞ、公道遐然として㋪坎坷する、度るに亦㋲黑衣の宰相の議論、己を執して爾るか、凡そ叢林に意あるもの、孰か嘆息せざらん豈獨契脊の末のみならんや。左右の大節實行は、當に克く晩節に振ふべし、

つたあの元泰は、自分の會下で修行して居ますと。

㋱稽は稽留なり。

㋯左右は足下と云ふが如し。

㋛辟命は公侯の命を云ふなり。

㋽巨瑞は巨福瑞鹿の略、建長圓覺也、伊は向上の一著と見るを可とす、又賓翁とするも通ず、前後皆左右と云ひ、玆に伊と云ふ、斟酌あるに似たり。

㋪坎坷は差跌坎坷と用ひて、つまづくことなり。

㋲黑衣宰相は佛祖通載に僧の惠琳才學を以て幸を天子に得、與つて政事を決す、時に黑衣の宰相と號す云々、此處蓋し指す處あり、而も何人なるを知らず。

切に冀はくは益々保嗇を加へよ、禱祝の極なり、去年の秋、西祖の頂山兄疾既に亟かなり、愚を招いで、涕を垂れて訣別し、苦に其の徒に囑して曰く、「我が㋝澹然を待つて、愚を請じて用て遺席を補せよ」と、大いに欲するところにあらずと雖も、情義の在るところ、存沒を以て其の心を二にするに忍びず、故に勉強して之に從ふ、小祥已に除いて、乃ち尺田の明禪に歸隱す、尋いで安國の㋜灑掃に任ずべきもの無きを以て、又諦兄に㋑擴掇せられて、已むを獲ずして兩寺の間に往來し、分に隨つて常住に從事す、時に或は少冗煩慮するを免れず、報緣逃れ難く、累りに村院の主名に縻がる、自ら羞ぢ自ら笑ふのみ、輙ち少しく㋺于聞に懇なるあり、僧嗣禪人は頂山兄鍾愛の子なり、人となり柔和質直にして、敢て㋩衲子の過なし、本師に侍奉して八たび裘葛を更ふ、其の沒するに及び、愚に從つて遊ぶこと又一年、蓋し佗の遺付を受くるのみ、德に嚮ひ風を慕ふこと久し、特に去つて左右に依棲するを求めんと要す、其れ許さるゝや否や、渠れ亦玆に勤幹の資あり、事に涖んで恐らくは失あらず、衣鉢閣の裡、如し其の人を闕かば試に之を用ふべきに似たり、伏して乞ふ、㋥收錄を賜へ、餘は望むところなし、此の間の㋭刀子は古今名あり、只た剃刀底は和州の好きには如かず、適々人有りて一雙を

㋝澹然は奄忽を云ふ也、離騷に、寧ろ澹死以て亡すとも、余此態を爲すに忍びずと。
㋜灑掃、住寺をいふ、卑下して而かいふ。
㋑擴掇、俗にとらまへるの意なり。
㋺于聞、于は、こゝ、ゆく、なす等の意ありて、玆に聞くなり、于歸、于喁などと熟字して、皆こゝの意にとれり。
㋩衲子の過とは椀白縱逸の行狀を云へるならん、昔から雲的は奔馬の如くなれと見ゆ。
㋥收錄は收納記錄を云ふ。
㋭長船正宗は備前の産、蓋し其

寄せ來る、謾に此に馳納す、幸に㋬微浼を恕せよ、會見何れの日ぞ、書に臨んで㋣惘然たり、法の爲めに自重せよ、不備。

又。

上覆す、玆に區々として奉屈すること佗なし、祇に共に苦茗を啜り、淡飯を食うて、少しく遠別の懷を慰せんと欲するのみ、想ふに亦人事繁冗にして、㋠行李を打疊すること未だ辨ぜざらん、今旣に敢て勉め强ひて到り請せず、前に進發の日㋷面違を賜ふを蒙るべきを許さる、至意を感戴す、然れども、迂回兩里の路なり、是れ許多の㋦擔閣なり、切に下訪せらるゝなきを幸となす、乃ち米麪等の零碎の物子、件々少許り上納す、愧怍量るべし、要兄候謁參隨す、㋸一擧他と商量せば好し、昨は數帋を以て神用を干瀆す、得罪得罪、餘は要兄に附して道達す、不備。

又。

再拜、明禪堂上和尙侍者、㋾三陽交泰して萬物榮を發す、伏して惟みれば、卽辰尊候動止起居萬福、來る二十八日は、故靈叟の七周忌辰なり、是によつて㋻燈節以後、此に來つて佗の徒弟等と相共に㋕五部の大乘經を

以前より名刀を打ちしと見ゆ、刀子はかたななり、備前の刀は有名なれども、剃刀は大和の者がよい、然し一對貫ふたから進上しますと、歷史家の材料になりさうな記事なり。

㋬微浼は汚瀆也。

㋣惘然、惘然自失などと云ふて、きぬけしたるを云ふ。

㋠行李打疊は荷ごしらへ也。

㋷面違、違は乖離なり、面會して離別する義。

㋦擔閣は中峰錄十二に「驀鼻に頭を拽回して、始めて從來自ら擔閣するを信ぜん」の語あり、譯者按ずるに、擔は負擔なり、閣は捨置也、或は擔ひ或は置く、故に手數の掛るの義に用ふるなり。

㋸一擧は俗に云ふ萬事と云ふが如し、萬事要兄と相談なさつたら好かろう、要兄は備前の

看讀す、預め今日を取つて啓建す、忙冗に牽かれて、尙ほ上間に及ばず、獲罪の至なり、更に五日を過ぎ、看讀事畢らば、卽ち上刹に詣して、以て瞻拜の忱を竭さん、敢て望むらくは慈察せよ、不宣。

又。

久しく起居の問を致さず、(ヨ)企仰益々深し、此日伏して惟みれば、壽體淸勝、動止萬福、近ごろ(タ)金峰の名藍に榮遷すと承る、是れ乃ち湖海衲子の共に欽羨するところ、矧んや吾儕忝く友末に居す、忻慰豈言ふに勝ふべけんや、第恨むらくは、(レ)相違すること濶遠にして、參慶するに緣なきを、只だ法席を望んで、徒に鄙情を馳するのみ、亦聞く、(ソ)象外和尙已に巨福を領し、(ツ)雲山蚤に(ネ)龜峰を董すと、意はざりき師祖の道、復た世に振はんとは、私かに以て喜となすこと少からず、某此の山中に在つて、粗衰晩を要す、(ナ)春薇秋栗、枯淡の中極めて味あり、惜しむらくは人の能く斯の樂を知るものなきを、呵々、嗣兄昨に賜ふ所の手簡を齎して歸る、既にして路上(ラ)赤眉竇の爲めに奪得し去らる、以て教へらるゝ所の旨を知るなし、今に至るまで憾を抱くこと良に多し、便に因つて再び

人、神用は前出、神慮の意。

(ヲ)三陽交泰、泰は易の地天泰の卦也、舊暦十一月は地雷復、卽ち一陽來復に配し、同十二月は地澤臨、正月は卽ち三陽交泰、易泰の卦傳に「坤陰上にあり、乾陽下に在り、天地陰陽の氣相交る、而して和すれば萬物生成す」と、又象に「天地交泰」と、泰の卦は下の如し、䷊。

(ワ)燈節は正月十五日也。

(カ)五部は華嚴大集大品般若、法華涅槃也。

(ヨ)企仰、企は爪立つる也、爪立てゝ遠くを見る也、慕の切なる也。

(タ)金峰、金寶山淨智寺、鎌倉五山の隨一也。

(レ)違は隔離の義。

(ソ)象外和尙、圓覺桃溪德悟禪師法嗣也。

(ツ)雲山、圓覺雲山智越禪師也、

一字を示し及ばば幸甚、㋰少懇に奉白す、此の椿禪者は乃ち㋒智覺の法孫なり、人となり穩實にして薄英敏の資あり、學に進んで倦まず、恐らくは法器を成就せん者か、如今千里の艱辛を憚からず、特に往いて函丈に致拜す、其の志勤めたり、敢て希はくは一たび延見を賜はらば、眞に幸とせんものなり、區々たる所懷、百に一を盡さず、餘は惟だ〳〵萬々上大法の爲めに益々保嗇を加へよ、不宣。

濟禪人に寄す。

昨日㋭安國寺に到つて一宿す、齋罷んで明禪に歸るに當つて、早晨に偶々行李を撿點するに、忽ち前日惠まるゝ綿襖を得たり、且つ驚き且つ愧づ、竊かに己が行解を忖るに、尋常衆と同じく受用する底の粥飯すら、尚ほ其れ異時の㋨鐵丸銅汁ならんことを恐るゝなり、何に況んや別に常住の巨費を領ずるをや、是れ虛飾謝遣して貪るなきの譽を求めんと要するにあらず、實に㋔龍天の鑑裁を愧づるのみ、今抑へて之を受けしめば、更に地獄の業因を增さん、豈是れ道人の法友に推及する所以の義ならんや、重ねて取つて回納す、望むらくは慈容せよ、只だ恐らくは諸兄の厚意に負くことあらんことを、慚惶の極なり、不宣。

又。

無隱範師に嗣ぐ。
㋧龜峯山壽福寺也。
㋣春薇はぜんまい也、古人の句に「黎羹飯中天地自然の淡白を知る」と。
㋶赤眉は盜賊なり、綠林の豪、赤眉の賊、皆盜賊に代用す、後漢の初めに蜂起せしもの。
㋰少懇奉白は下の賴み事に係る語也。
㋒智覺は桑田の禪師號なり。
㋭寂室和尙嘗つて住院。
㋨鐵丸銅汁は、阿鼻地獄の苦也。
㋔龍天、護法龍天也。

早晨爲めに紙筆盞子等を取つて、僕夫に撥遣し去り了れり、然も專价送り來る、㋗感作の極なり、綿襖咋已に盛意に違拒す、何を以てか㋳愆を免れん、還つて過稱を蒙ること此の如し、惶愧曷ぞ言ふに勝ふべけんや、㋮上元の後、必ず回るべし、餘は面旣を俟つ。

㋘無夢和尙に寄す。

某甲、拜覆す、雄峯前の前版座元禪師、違奉せしより、旣に是れ幾乎三十有餘年、然も一日として風采を瞻望するの中にあらざるなし、忽ち㋫過訪を辱す、忻慰の至り、豈言ふに勝ふべけんや、第だ恨むらくは、象駕途に登ること太だ疾かにして、淸談に陪從し、欵曲を究盡するを獲ざることを、羚羊皮一片、麁茶二袋、聊か㋙微忱を表するのみ、幸に浼瀆を罪するなかれ、伏して慈亮を希ふ、道の爲めに自重せよ、不備。

震巖和尙に寄す。

揖別より倏ち晦朔を更ふ、唯だ日に馳仰を增すのみ、昨は忽ち手敎を領ず、時に洛中にあり、來人も亦急に回らんことを求む、仍つて裁答するに暇なし、因循として今に到る、愧悚の至なり、尊兄乍ち上刹に住す、恐らくは是れ㋓不濟事多からん、道慮を㋢干煩せん、然れども吾が兄才識超卓にして、量度宏深なり、誠を推して宗を護り、慈を垂れて物を拯ふを以て

㋗感作、感激愧怍也。
㋳愆、とが也。
㋮上元は正月十五日、面旣は面悉なり。
㋘舊注に、聖一國師の孫、無夢一淸ならんと、一淸は元に游び道譽あり。
㋫過訪、來尋也。
㋙微忱は少しの誠也。
㋓不濟事は事をなさずの義より込み入りたる事件に用ひしならん。
㋢干煩、又干犯とも用ふ。

念となさば、則ち兇肝無狀の徒も當に自ら㋐袵を斂めて服膺すべし、凡そ忍の一字を消して、衆魔を調伏するの器杖となすべきものか、稍々盜賊衰止し、路途の淸平を待つて、卽ち往いて展奉せん、面にあらずんば旣すなけん、略布、不宣。

㋚月心和尙に與ふ。

新命 定林堂上 月心和尙座前、卽辰伏して審かにす、公府の峻擢に光膺して、㋖定林の名藍を榮領することを、惟だ重ねて佛燈の光輝を揚ぐるのみにあらず、具に祖室の梁棟を㋴鼎新するを瞻る、矧んや月翁昔日最初開法の場にして、吾が兄今朝の應世此に權輿す、各自に道行時至ると雖も、是れ因緣際遇甚だ奇なり、大凡群衲咸く忻誠を增す、況んや復た孤貧忝く眷末に居す、多幸なり、弊庵と上刹と、相距ること多程に涉らず、竹杖芒鞋屢々詣つて淸話に奉接せんとす、豈圖らんや衰暮に玆の佳期を獲んとは、日に象駕の遄かに臻るを望んで、時に㋱犢廬を出でゝ佇立す、切に冀はくは快く猊座に登つて朗に雷音を振へ、人天を聳動せんことを何ぞ疑はん、高く㋯巨瑞に遷らんこと、未だ晩からず、時にしたがつて珍育して、式

㋐袵を斂む、文選魏都賦に「髽首の豪、鐻耳の傑、荒服を服て袵を魏闕に斂む」と、卽ち袖を斂めて帝闕の下に拜す〻也、先方に敬意を表するを云ふ。又心服するを云ふ。

㋚月心、南禪月心慶圓禪師也。

㋖定林、美濃土岐郡定林寺、伯州太守の建つる所なり。

㋴鼎新は新しきをとる也。

㋱犢廬、蝸廬などと同じ、自ら己が居を稱するに用ふ。

㋯巨瑞、巨福山、瑞鹿山を云ふ。

㋛按するに、三條殿は三條實繼、公豐の父子の何れかを指せるも、其何れなるを知らず、實繼は貞治六年內大臣に任じ、嘉慶元年出家、公豐は應永二年正二位內大臣、同年十一月出家とあり。

㋽閣下は三公に對する敬稱、今の閣下などと稍同じ意也、古制を按するに、三公は天子と

て願言に副へ、不備。

㊁三條殿に啓す。

某甲、誠恐頓首、謹んで三條殿㊂閣下に啓す、比日伏して承る、宸翰を下さると、言く、「山中平生提持の一句を進奉し、并に一日㊃長安の土を踏むべし云々、」玆者某天を望んで香を焚き、跪き讀んで驚き且つ窘す、竊かに顧みれば、某識性蒙昧にして道學空疎なり、退いて窮山に臥して、殘喘を盡すを待つ、寧ろ亦俚言の而も叡覽に備ふべきあらんや、實に明詔に應じ難し、唯だ深く自ら愧嘆するのみ、切に冀はくは閣下、區々の微忱を導いて、聖聽に上達せよ、下情激切㊄屛營銘感の至に堪ふるなし、某、誠恐頓首、謹んで啓す。

㊂殿稍亞ぐ、故に其閣を貴にし、(黃を正色にして上位を示す)是れ漢の制なり、閣下の稱これより出づ。

㊃長安は京都を云ふ也。即ち京都五山の一に住持すべきを云ふ也。

㊄屛營は文選三十七の注に、遑惶也とあり、李善は驚惶也と釋せり。

國譯永源寂室和尙語錄卷之三　終

國譯永源寂室和尚語錄卷之四

法語

(イ)再び手詔を賜ふに奉答す。

昔し(ロ)法常和尚、馬大師に問ふ、「如何なるか是れ佛、」大師云く、「即心即佛、」常言下に於て大悟す、便ち大梅山に往いて庵を卓して住す、馬大師聞き得て、僧をして去つて問はしむ、「和尚、馬大師に見へて箇の甚麼を得てか便ち此の山に住する、」常云く、「馬大師道ふ、即心即佛と、我れ者裡に向つて住す、」僧云く、「馬大師近日の佛法、又別なり、」常云く、「作麼生か別なる、」僧云く、「近日又道ふ、非心非佛と、」常云く、「這の老漢、人を惑亂して未だ了日あらざることあり、さもあらばあれ、儞は非心非佛、我れは只だ是れ即心即佛と、」僧歸りて馬大師に擧示す、師云く、「梅子熟せり、」恭しく惟みれば、辱く手詔を下さるゝを蒙り、一句子を懇求したまふ、私かに願ふ、某、法社の庸流、叢林の晩學、全く宗乘に昧うして、退いて頑愚を守るのみ、竊かに念ふ、古德云く、吾宗に語句なく、亦一法の

(イ)再び手詔を賜ふ。貞治元年壬寅、師七十三、帝復た手詔を給ふ。
(ロ)法常和尚、馬祖法嗣、大梅法常師也。

人に與ふる無しと、此の說の下、間に髮を容れず、直に得たり三世の諸佛も舌を縮め、歷代の祖師も聲を呑むことを、然も斯の如くなりと雖も、既に詔旨を賜ふこと再に及ぶ、逃避するところなし、勉强して如上の因緣を繕寫し、謹んで以て進奏す、伏して願はくは陛下萬機の餘暇、一切時中に、箇の卽心卽佛の四言を將つて宸襟に置き、㋩大疑情を起して、勇猛精進に擧覺提撕したまへ、嘗て聽く、大疑の下に大悟あり、小疑の下に小悟ありと、疑ひ來り疑ひ去つて、忽爾として疑情破れば、則ち頓に本來の面目を見、明らかに本地の風光に徹せん、那の時、心を覓むるに終に不可得ならん、寧ろ復た何の佛と之云かあらんや、翅だ㋥報化佛頭を坐斷するのみにあらず、亦須らく唐虞の帝業を恢興すべきものか、至祝至祝。

鎌倉の㋭源左典厩に答ふ。（基氏）

願はくは公只だ疑情破れざるところに向つて參ぜよ、行住坐臥放捨することを得ざれ、僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く、「㋬無」と、遮の一字子、便ち是れ箇の生死の疑心を破る底の刀子なり、遮の刀子の欛柄、只だ當人の手中にあり、別人をして手を下さしむること得ず、須らく是れ自家に手を下して始めて得べ

㋩大疑。蒙山曰く、「大疑あつて必ず大悟あり」と。
㋥臨濟錄に「道流山僧見處せば報化佛頭を坐斷す」と、言は佛法王法共に成就すべきを云ふ。
㋭貞治二年癸卯師七十四、鎌倉元帥源公基氏心要を問ふと、蓋し之れに答ふるなるべし。
㋬無。有無の無に非ず、眞無の無に非ず、眼を著けて參究すべき也と。
㋣千疑萬疑。如來八萬四千の法門、祖師一千七百則の公案等を云ふ也。

し、又云く、「㋣千疑萬疑只だ是れ一疑なり、話頭上に疑ひ破れば、則ち千疑萬疑一時に破る」と、又云く、「但だ長遠の心を辨取して、狗子無佛性の話と厮崖め、崖め去り崖め來つて、心之くところ無うして、忽然として睡夢の覺むるが如く、蓮花の開くが如く、雲を披いて日を見るが如くならん、恁麼の時に到つて自然に一片とならん、但だ日用七顚八倒のところ、只だ箇の無字を看よ、悟と不悟と徹と不徹に管するなかれ、㋠三世の諸佛も只だ是れ箇の無事の人、諸代の祖師亦只だ是れ箇の無事の人」、又云く、「僧趙州に問ふ、狗子に還つて佛性ありや也た無きや。」州云く、「無」と、只管提撕擧覺せよ、㋷左來も也た不是、右來も也た不是、又心を將つて悟を等つことを得ざれ、又㋦擧起のところに向つて承當することを得ざれ、又玄妙の領略をなすことを得ざれ、有無の商量をなすことを得ざれ、又眞無の無となして卜度するを得ざれ、又㋸無事甲裡に坐在することを得ざれ、又擊石火閃電光のところに向つて會することを得ざれ、直に用心するところなく、心之くところなきを得るの時、空に落つるを怕るゝなかれ、這裡却つて是れ好處なり、驀然として㋾老鼠牛角に入らば、便ち倒斷を見るなり、伏して承る、遠く㋻台翰を馳せて、忝く工夫用心の旨訣を問及せらるゝを蒙る、衰朽何人ぞ、仰いで

㋠三世の諸佛。眼横鼻直別様の事なし。

㋷左來右來。萬般の知見解會也、語を借りて云ふのみ。

㋦擧起の所。公案話頭を擧揚提起する處也。

㋸無事甲裡。又無事閣裡に造る、唐土棚を構へて重々に作り、甲乙丙丁の十干の字を以て銘に書す、第一甲の棚には一物をも置かず、故に之れを云ふ。

㋾老鼠云々。牛角に入れば出路なく、伎倆盡くる也。

㋻台翰。白氏六帖に三台星は三公之象、某氏公今三公に比する也、故に其書をしか云ふ也。

台誠を荷ふこと偏に此に至るや、下情慚惶の至りに勝ゆるなし、是を以て(カ)大慧書中の數句を抄寫し、聊か嚴覽に備ふ、大凡そ話頭を提し工夫を做すは、最も捷徑簡直、成佛做祖の基本なり、然りと雖も、只だ當人の信得及に在るのみ、切に冀はくは、閤下箇の無字を將つて、(ヨ)鈞抱に置いて、四威儀の內、二六時中猛く精彩を著け、疑情を逼起して、參じ去り參じ來つて、間斷あるなくんば、所謂重昏巖散、浮念雜想、遣るを待たずして自ら遣らん、厥の志堅密にして不退ならば、參じて未だ透らず、悟つて未だ徹せざるも、(タ)八識田中に在つて、永く道種となり、生々に人身を失せず、世々に惡趣に墮せず、再び出頭し來らば、一聞千悟せん、先哲の垂訓、豈人を欺かんや、假使臘月三十日に逗到するも、生死魔軍甲を卸して歸降し、(レ)閻家老子袵を斂めて服膺せん、夫れ之を橫に金剛王寶劍を按じて、宇宙を坐斷する、沒量の大人と謂ふものか。

月舟居士に示す。

參禪は猛烈大丈夫の事業、怯弱劣機の宜しく(ソ)趾及すべきところにあらざるなり、所以に云く、「若し戰を論せば、箇々力轉處にあり、」亦云く、「一人と萬人と戰ふが如くに相似たり、」或は云く、「賊馬に騎つて賊を追ふ」と、

(カ)大慧書。大慧書問又は大慧覺禪師書といふ、大慧語錄三十卷中廿五卷より三十卷迄、即ちこれに當る。

(ヨ)鈞抱は胸裡、襟懷裡などに同じ。鈞はたもり宰相のむねの內。

(タ)八識田中。中峰語錄山房夜話に、若し是れ箇の眞實、生死事大の爲めにする底の好人ならば、縱ひ是れ達磨世間に出現して、諸佛祖玄要の道理を把り情を盡して、彼が八識田中に放在すとも、也た須らく根に化して吐卻すべく、何を以てかくの如くなる、蓋し悟は、須らく自悟すべし、豈に他人半錢の事にあづからんや」と。

及び、臨濟の兒孫は單刀直入、恰も勇夫の敵に赴き、危亡を顧みざるが如し、然る後、脚實地を踏み、手に㋡吹毛を握つて、一斬一切斬、一了一切了、須らく是れ如上の體裁を具して、生死の魔軍を摧伏すべき者なるかな、昔し馮㋥給事偈あり、云く、「公事の餘坐禪を喜ぶ、何ぞ曾て脇をもつて床に到つて眠らん、然も宰官の相を現出すと雖も、長老の名四海に傳ふ」と、又㋤李駙馬云く、「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち判す、直に無上菩提に趣いて、一切の是非管するなかれ」と、從上の士大夫の學道、かくの如く穩實に、かくのごとく勇猛なり、望むらくは、公、龐藺希顏の志を奮發し、猛く精彩を著けて看よ、父母未生前、那箇か是れ本來の面目と看よ、㋶時節到來して、驀地に瞥脫せば、心華燦發して、十方空を照さん、只だ久遠不退轉の身心を辨取して、綿々密々に究め來り究め去らんことを要す、假使ひ、今生に打未徹なりと雖も、生々に人身を失はず、世々に善處に生ずるを得て、眞正の知識に遇うて、之れ一聞千悟せんこと必せり、更に一句子あり、未だ筆を點せざる以前に向つて、兩手に分付し了んぬ、急に眼を著けて看よ。

廬山居士に示す。

㋹閻家老子。即ち閻魔王なり、鬼官の總司也、閻浮提の南二鐵圍山の外に當り、閻魔王宮殿ありと。

㋞趾及。珍らしき文字なり、普通は企及と用ふ。

㋡吹毛は名劍、名刀也。

㋥給事は本朝の少納言に當ると、馮給事は即ち馮揖濟川居士也。

㋤李駙馬は、都城道勗居士也。

㋶時節到來。瓜熟して蒂落つ、春秋の間營養何ぞ間斷あらんや

參禪は猛烈大丈夫の事業なり、手に金剛王寶劍を提げて、佛來魔來を問はず、若し之に礙るあれば、屍萬里に橫ふ。縱ひ威音那畔空劫以前に向つて行履するも、正に是れ㋰階下の獃漢なり、實に它の知解情量㋒葛藤露布のために、羅籠せらるゝ底の窺覷すべきところにあらざるものか、脫し遮般の田地に到らずんば、且く不是心不是佛不是物、是れ什麼の話頭に參ぜよ、二六時中、四威儀の內、萬緣を放下して、把つて一件となし、綿々密々に究め將ち去つて、間斷あらしむるを得ざれ、驀忽に桶底子を打破せば、㋼方に本來の面目は只だ此の山中に在ることを知らん、廬山居士遠く來つて紙を出して語を求めて、警策とせんとす、筆を迅らして來命を塞ぐ。

絕倫居士に示す。

參禪は實に㋨隈々磈々たる淺根劣機の宜しく企及すべきところにあらず、須らく向上の人の直下に坐斷し、橫に吹毛を按じて、㋔佛來るも也た斬し、祖來るも也た斬せんことを要すべし、更に甚麼の生死無明、菩提涅槃とか說かん、かくの如く行履し、かくのごとく受用せば、方に自己脚跟下の事と、少分相應せんものなり、其れ倘し或は這般の田地に到らずんば、只だ僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く、「無」の話

㋰階下云々。金峰志禪師、僧問ふ、「四海安清の時如何ん、」師云ふ、「猶ほ是れ階下漢」と、獃漢は痴漢に同じ。

㋒葛藤露布。文字言句等、修業者の手足まとひとなるを云ふ。

㋼方に云々。東坡詩集廿三、橫ニ看成レ嶺、側成レ峰、遠近高低無ニ一同一、不レ識ニ廬山眞面目一、只緣ヨ身在ニ此山中ニ」と。即ち即心即佛也。

㋨隈々磈々。逶迤姑息なを云ふ、隈は水曲、磈は鳳舞也、因つて義とする也。

㋔佛來斬。中峰廣錄、西祖露双

を將つて、二六時中行住坐臥、切に須臾も放捨することなかれ、一人と萬人と戰ふがごとく、亦頭燃を救ふが如く、綿々密々に力を著けて參究せよ、是れ什麼の道理ぞと。日久しく歲深くして工夫熟し、伎倆盡き、能所忘じ、知解泯して、忽爾として(ク)漆桶を打破し、牢關を撥透せば、乃ち之を猛烈の大丈夫の事業と謂ふ者なるかな、絕倫居士特々として山中に來つて、語を需む、已むを獲ずして筆を迅らすと云ふ。

道觀禪門に示す。

弟子道觀、常に雲水の僧を接す、其の志實に嘉すべきなり、昔し宣律師、韋駄天神に問ふ、「世間の功德何者か最大なる、」天神の曰く、「齋僧の功德最も大なり」と、敎中に又曰く、「三世の諸佛に供養せんより、一無心の道人に供養せんにしかず、汝今有心無心聖僧凡僧を揀擇するを須ひず、一味平等にして、用つて供養せば、(ヰ)如上の功德に超越すること豈翅に百千萬倍のみならんや、仍つて示すに偈を以てして云く、「齋僧の功德誠に測り難し、聖凡を問ふことなく同じく慈を運らすべし、若し是れ此の心長へに退かずんば、直に佛地に登らんこと何の疑かあらん。」

(マ)了淸道人に示す。

僧、馬大師に問ふ、「如何なるか是れ佛、」祖云く、「卽心是佛、」其の僧言下に大悟す、凡そ太だ近うして

劍を擲つて佛來るも斬り祖來るも亦斬ると。

(ク)大慧書に「忽然として漆桶を打破し、一笑中に於て千了百當ならん」と。

(ヰ)如上功德は未だ差別の相を離れず。

(マ)了淸は尼歟。

見難きものは心なり、太だ遠うして(ケ)親み易きものは佛なり、心に迷へば則ち凡、心を悟れば則ち聖、全く男女老幼智愚人畜等の異なし、是の故に法華會上に、則ち南方無垢世界に往いて、寶蓮華に坐して、等正覺を成ずるは、豈(フ)八歳龍女の做にあらずや、昔し(コ)巖頭和尚嘗て渡子となる、一婆子あり、兒を抱いて來り問ふ、橈を呈し棹を舞するは卽ち問はず、婆子手中の兒子、何れの處よりか得來る、巖頭便ち打つこと一棒、婆子云く「我れ七子を乳す、六箇は智音に遇はず、這箇も亦(エ)消得せず」と、乃ち水中に抛つ、是れ箇の婆子、便ち卽心是れ佛に參得する底の樣子なり、了淸道人、紙を寄せ來つて、警策を求む、直に筆して以て贈る。

眞照居士に示す。

眞照居士、予に請ふて別稱を需む、因つて號して徹源と云ふ、蓋し名と實とは猶ほ影と形との如し、形を捨てゝ影を覓めば、(テ)是の處あるなし、實を捨てて名を覓むるも、亦復た是の如し、汝今旣に此の名を得たり、其の實と相應するを得んと欲せば、正に宜しく(ア)生死事大無常迅速を以て念となし、乃しひ(サ)萬法一に歸す、一何れの處に歸すの話頭を把つて、綿々密々に參じ去り參じ來るべし、忽爾として萬法の根源に照徹せば、方に老拙の浪りに號を安せざるを知らん、亦豈塵勞を出でずして、聖賢の事業を成

(ケ)親み易き云々。擧手、動足、左右、源に逢ふ也。

(フ)八歳龍女。法華提婆品にあり、文殊の化導によりて諸法實相の理を悟り、釋迦佛の前に來りて變じて男子となり、南方無垢世界に成佛すと、女人に因ある故に擢出せる也。

(コ)巖頭嘗つて渡子となる。通鑑志に曰く「唐武宗、會昌五年、趙歸眞、李德裕等」と、天下の沙門をして悉く還俗せしむ、之れ沙汰の時也、頭卽ち渡子となる、渡子は渡し守、又は

辨するものにあらずや。

昌宗道人に示す。

水潦和尙、馬祖に參じて、佛法的々の大意を問ふ、馬祖一蹋を與ふ、潦遂に大悟す、乃ち曰く、「百千の法門、無量の妙義も、只だ一毫頭上に向つて根源を識得す」と、卽ち呵々大笑す、平生衆に示して云く、「一たび馬師の蹋を喫してより、直に如今に至るまで笑ひ未だ休せず」と、又た復た呵々大笑す、又良遂麻谷に見ゆ、第一番に見ゆるときは、谷便ち方丈に入つて門を閉卻す、渠れ疑着す、第二次に至るに及び、谷驟步して菜園裡に去る、渠れ便ち㋖瞥地なり、乃ち谷に謂つて曰く、「和尙、良遂を謾するなかれ、若し來つて和尙に見えずんば、洎んど㋴十二本の經論に一生を賺過せらん」と、既に歸つて、徒に謂つて曰く、「諸人知るところ、良遂聽に知る、良遂知るところ、諸人知らず」と、昌宗道人紙を寄せて語を需め、進道の警策とせんとす、仍つて㋚二則の因緣を寫して以て贈る、若し把つて無言無說とせば、則ち大いに賊を認めて子となすが如くに相似たり、爾らずんば、則ち馬祖、麻谷甚麼の指示のところあつて、它の二人斯くの如く悟り去る、

渡船場にて渡す者也。

㋓消得せずは。用得せず也。

㋢法華の註に、「舍利弗比比丘、比丘尼自ら已に阿羅漢を得て、其最後の身、究竟涅槃と謂ふて復た阿耨多羅三藐三菩提を志求せざれば、此輩は皆增上慢の人、所以何となれば、若し比丘あつて、實に阿羅漢を得たるもの、若し此の法を信ぜずとならば、是の處り有らず」と。

㋐生死事大。生じて來處を知らず、之れを生大といふ、死して去所を知らず、之れを死大と云ふと。

㋚萬法一に歸す。傳燈十八趙州章、「僧問ふ萬法一に歸す、一何の處にか歸すと、師曰く、老僧青州に有り、一領の布衫を作り得たり、重きこと七斤」と。

㋖瞥地なり。瞥脫悟了底也。

㋴十二本經は十二部經、又は十

汝只だ玆に於て猛く精彩を著けて、參じ去り參じ來れ、㊂年深く日久しければ必ず須らく宗門下に果して大機大用奇特殊勝の事あることを知るべし、至祝至祝。

聖巖道人に示す。

㊃龐居士曰く、「難々、百斛の油麻樹上に攤す、」老婆曰く、「易々、百草頭邊の祖師意、」靈照女曰く、「也た難からず、也た易からず。㊄飢え來れば飯を喫し、困じ來れば睡る」と、聖巖道人千里を遠しとせずして、特々として來つて、予が巖居を訪ふ、其の志以だ嘉すべきに似たり。因つて如上の因緣を寫して、以て之に贈る、庶幾はくは之を座右に置いて、時々に眼を著けて看よ、未審し三人の中、那箇を擇んで師とせん、若し優劣ありと謂はゞ、也た不是、優劣なしと謂はゞ也た不是、二六時中四威儀の內、念々爾く、心々爾く、猛く精彩を加へて參取せよ、久しうして必ず飯は是れ米做する底の道理あることを知らん。

㊅雪江禪閤に示す。（大慧の語は錄せず）

法語の作、其の來ること尙し、大凡大眼目を具し、佛に代つて化を揚ぐ

二分敎とも云ふ。所謂、契經（素呾羅）重頌（祇夜）授記（和伽羅那）諷誦（伽陀）無問自說（優陀那）因緣（尼陀那）譬喩（阿波陀那）本事（伊帝目多迦）本生（闍他迦）方廣（毘佛羅）希法（阿浮多達摩）論議（優婆提舍）の十二種の內容を云ふ。

㊁二則。馬祖、麻谷因緣也。

㊂年深く日久しく。川潤ふこと九里。

㊃龐居士、一日茅廬裡にあり、坐して驀忽として云ふ「難々、十碩の油麻樹上に攤る、」龐が婆曰く易々眠牀に下りて脚地を踏むが如し、靈照女曰く也た不難也た不易百祖頭上の祖師意と、靈照女は居士の女なり。

㊄古德の語に曰く、飢來喫飯倦來眠。

㊅雪江禪閤は永源檀那崇永大居士、字多天皇十一世の孫六角

る本色の宗匠にあらざるよりは、豈末學庸流の容易に擬すべきの事業ならんや、倘し或は勉め強ひて、倣うて之を爲すも、焉んぞ敢て妄談般若の誚を逃るべけんや、而今忽ち老拙が語を需めて、用つて警策となさるゝを辱うす、老拙深く㋲僭越を慮り、嚴命を沮むるあり、愧悚の極、大慧禪師呂舍人に答ふる一篇を錄呈す、伏して希はくは、此に憑つて行ずること久しければ、必ず悟明の日あらん。

㋝禪達道人に示す。

六祖大師、㋜韋使君に答ふる、其の略に云く、「迷人は佛を念じて彼に生ぜんことを求む、悟人は自ら其心を淨む、所以に佛の言はく『其の心の淨きに隨つて淨土淨し』と、使君は㋑東方の人、但心淨ければ卽ち罪なし、西方の人と雖も心淨からずんば、亦愆あらん、東方の人罪を造らば、佛を念じて西方に生ぜんことを求むべし、西方の人罪を造らば、佛を念じて何れの國に生ずることを求めん、凡愚は自性を了せず、身中の淨土を識らず、東を願ひ西を願ふ」云云と、㋺大凡そ念佛は生死を脫せんと要し、參禪は心性を悟らんと欲す、未だ心性を悟る底の人、生死を脫せざるを聞かず、生死

判官氏賴公也、曆應元年十一月元服す、加冠は足利尊氏也、延文三年尊氏薨す、次で氏賴出家す、先妣菩提の爲め寺塔を剏むること十三、本朝大般若經を刊行すること氏賴に始る。寂室和尚を江州繖笠山より請來して、飯高山永源寺を建て開山の祖となす。

㋲僭越は、自己大眼目なくして、法語を示すなり。嚴命を沮むるは、辭して法語を呈せずんば、誠意に戻る。仍つて已むを得ず、他の古人垂示の語を錄呈すと。

㋝禪達道人は元と淨家の人か。

㋜韋使君は韶州刺史韋璩也。

㋑東方西方。古歌に云ふ「限りなき心の空の廣ければ、雲より西もよそならんやは」と。

㋺大凡云云。源俊基の末後の一偈に曰く「古來一句、死なく生なし、萬里雲盡き、長江水

を脱する底の人、豈亦心性に迷はんや、當に知るべし、名異にして體同じきことを、然りと雖も、古人云く、「㋩毫釐も繫念すれば三塗の業因、瞥爾として情生すれば萬劫の羈鏁」と、與麼なれば、則ち念佛も也た鏡上に塵を生じ、參禪も也た眼中に屑を著く、只だ此の如く信得及せば、則ち必ずしも相賺さず、禪達道人、念佛三昧を勤修すること此に年あり、忽ち余が室中に來つて、衣盂を授け兼て大戒を受けんことを請ふ、因つて日用の警策を需む、筆を迅らし、以て贈ると云ふ。

盲者通明に示す。

昔し阿那律尊者、睡眠を耽著す、佛呵して曰く、「蚌蛤の類なり」と、仍つて七日寢ねず、天眼通を發して、三千大千世界を見ること、掌中の㊁庵摩羅果を見るが如し云々、汝眞箇に生死の大事に志あらば、須らく卽心卽佛の公案を將つて、時々に擧覺し、處々に提撕すべし、一旦忽爾として漆桶を打破し去らば、之を頂門に正法眼を具すと謂ふものなるかな、那時豈翅に三千大千世界を見るのみならんや、百億の須彌、無量の佛刹、一毫頭上に在つて看卻して、更に餘りなきなり、至囑至囑。

嗣道禪者に示す。

學道の士は、先づ須らく身口意を愼護し、㋭貪瞋癡を屛除して、名を視ることは浮雲に等しく、利

清し」と、よつて其生死の境其徹性の如何を味ふべし。
㋩毫釐。月元圓々浮雲の能くこれを覆が故に、千種萬端なり。
㊁庵摩羅果。庵羅、或は庵沒羅、或は庵羅婆利と云ふ。卽ち柰を云ふ。之れを食す風冷を除く、時に手に是の果を執りたまふ。故に以て喩と爲と。
㋭貪瞋癡は意に屬す。

を棄つることは糞土の如くすべし、言を出すや詐僞虛妄を㋬袪くことを要し、行を立つるや穩實端潔を圖るを尊ぶ、任ひ世間種々違順の境緣に遇ふも、一々に㋣夢幻空華の中に收在して、然る後己事未だ明かならざるを以て、常に自ら勉勵せよ、古人すら尙ほ㋠剪爪の暇を容さず、吾は是れ何人ぞや、荏苒として一生虛しく光陰を度らんや、乃し能く精神を㋷抖擻し、志力を奮起して、精進上に精進を加へ、勇猛に更に勇猛を添へて、朝に參じ、暮に參じ、行にも究め、坐にも究めて、一旦漆桶連底に脫去せば、頓に本來の面目を見、本地の風光に撞著せん、之を出家行脚の本志一時に酬畢する底の解脫自在の活衲僧と謂ふものか、儞子が住庵を輔けて、七たび㋦涼燠を更ふ、一たび庫下に歸してより、今に到るまで、㋸祁寒隆暑を憚らず、備に艱辛を嘗め、井臼蔬圃の間に勤役し、敢て寧居するに遑あらず、料想するに、儞が日用の工夫、之が爲めに純密を致さざるなり、若し儞が道業を、成辨するあたはざらしめば、職として我れに之れ由る、咎誰にか歸せんや、今日より㋾去つて、庵中卒歲の計、都て懷に介むことを要せざれ、切に望むらくは、生死事大を把つて、須臾も忘念せざらんことを、老拙力めて此の葛藤を寫して、以て㋻勞徠に代ふと云ふ。

旨廣禪人に示す。

㋬袪は却に同じ。

㋣夢幻空花。三祖心銘に、「夢幻空花何んぞ把捉を勞せん、得失是非一時に放却せよ」と。

㋠剪爪の暇。舍利弗の舅倶希羅出家して梵志となり、西天竺に入り、誓つて爪を剪らず、十八種の經を讀めりと、蓋し寸陰を惜しむ也。

㋷抖擻は打拂ふなり、畢竟精を出すなり。

㋦涼燠は裘葛などゝ同しく一年を云ふ。即ち夏冬の意味也。

單傳直指の道は、實に㋕情識の測るところにあらず、得て名狀すべからず、所以に㋵南岳は徒に古甎を磨し、㋟龍潭は紙燭を吹滅し、㋹德山の棒は雨點の如く、㋞臨濟の喝は雷轟の如く、香嚴の擊竹、㋡靈雲の桃花、㋨倶胝一生指を竪て、㋤秘魔只箇に杈を擎げ、南泉は拂袖して便ち行き、永嘉は錫を振つて立ち、㋶投子の油々、㋰薦福の莫々、金剛圈と栗棘蓬、㋒破沙盆と㋼鐵酸餡、各々門庭を立つ、互いに鋪席を開いて、箭鋒相拄へ、機境互に陳す、龍驤虎躍、電馳雷動、疾熖過風、奔流度刃、豈小根劣機の企及すべきところならんや、然も此の如くなりと雖も、若し我が祖師門下に約せば、則ち唯に自己を埋沒するのみにあらず、抑も亦宗風を忝辱せん、其れ或は未だ如上の田地に到らずんば

㋸祁寒は酷寒也、祁は大也。

㋾去つて。以後と云ふが如し。

㋻勞徠。書の堯典に、之を勞し、之を來しの語あり、勞徠は之に基く、蓋し勞するものは之を勞ひ、來るものは之を來すなり、之を勞ひ、之を來すは煩瑣の務なり、故に其勤めに酬ゆと云はれしなり。

㋕情識云々。非思量の所、情識測り難し。

㋵南岳古甎は沙門道一との因緣。

㋟龍潭吹滅。德山和尙との因緣。

㋹德山雨點。佛殿を立てず、大凡そ僧の入るを看ては便ち棒すと。

㋞臨濟の喝。出世の後唯棒喝を以て徒に示す。

㋡靈雲の桃花。靈雲禪師、潙山に就いて大悟す、即ち桃花によるも也、偈あり「曰く三十年來劍客を尋ぬ、幾回か落葉枝を抽く、桃花を一見してより後直ちに如今にいたるまで更に疑はず」と。

㋨倶胝の一指。師金華に住す、天龍和尙到る、師前夜の神夢を告ぐ、天龍一指を竪つ、師當下に大悟す、以來參學の僧いたれば一指を擧けて別の提唱なしと。

㋤秘魔。五臺山秘魔和尙、嘗一木叉を持し、僧來つて禮拜するを見る每に、頸を叉却して云ふ。「那箇の魔魅が汝を出家せしむと、那箇の魔魅が汝をして行脚せしむ、道得するも叉叉下に死し、道得せざるも也た叉下に死せん、速かに道へ」學僧答ふるものあるなし。

㋶投子の油油。一日趙州諗和尙桐城縣に到る、投子禪師も又山を出づ、途中相遇ふも未だ相識らず、趙州潛かに俗士にきいて其投子なるを知つて、

但だ生死事大無常迅速を將つて、二六時中、造次顚沛も、孜々兀々として、茲を念ふこと茲にあつて、一切の得失是非、苦樂逆順等、一時に放下せよ。㋕然る後我が佛戒むところの事は、寧ろ身命を喪するも、敢て毫髮計りを違犯せず、山林を問はず、市朝を問はず、㋔穩便の所在を得ば、乃ち打住して、一則無義味の話を提起して、與に參究せよ、著衣喫飯、屙屎送尿の處、一切時中、要ず之を忘ぜざれ、寢を廢し餐を忘し、冰を嚙み蘖を嘗め、斯須少間も、徒らに光陰を喪するを用ひざれ、乃ち與麼に工夫を做さば、甚の三二十年とか管せん、只だ悟を以て期とせよ、日久しく歲深くして、念謝して慮消し、能所忘し、伎倆盡きば、忽然として桶底子の脫し、水底に火發するが如くに相似ん、然る後、千七百則の爛葛藤を返觀せば、豈啻に飛埃の目を過ぐるが如くなるのみならんや、古人云く、「參禪に秘訣なし、只だ生死の切ならんことを要す」と、至祝至祝。

　眞源禪者に示す。

法弟眞源、一日紙を出して法語を需め、日用の警策となさんとす、予謂らく、「法語は、道眼明白底、本色の宗匠の事業なり、其の宗說倶に通じ、

乃ち逆へて問ふて曰く、「是れ投子の山主なることなしや、」師曰く、「茶鹽錢一箇を乞ふ、」趙州先づ庵中に到りて坐す、師後に一餅の油を携へて庵に歸る、趙州曰く、「久しく投子と嚮く、到り來れば但此賣油翁を見る」と、師曰く、「汝只だ賣油翁を見て且投子を識らず」と、曰く、「如何か是投子」と、師曰く、「油々。」と。

㋰鷹福の莫莫。鷹福承左禪師、僧問ふ、「大善知識何を以て人の爲めにす、」師曰く、「莫し、」曰く、「恁麼なれば、問あり、答あり、去るや、」師曰く、「莫し。」

㋒破沙盆。永明、延壽智覺禪師問ふ、「如何か是大圓鏡」師曰く、「破沙盆」と。

㋼鐵酸豏。五祖法演禪師、「某甲十有餘年海上參尋數人の尊宿に見ゆ、自から了當と思へり、

意句圓に活するを以て、衲子取つて參禪の標式とするのみ、是の故に、之を得るものは、㋗隋珠卞璧を袖にして、家に歸るが如きなり、實に、單見淺識の流の容易に議するところにあらず、縱令勉强して作すも、唯だ佗に益なきのみにあらず、恐らくは、謗を己に招かんこと必せり、老拙法に於て未だ㋳夢にだも見ざることあり、語も也た曾て學得し來らず、筆を下すに分なきを爭奈せん、何に況んや、我宗に語句無く、亦一法の人に與ふるなし、此の說の下、間に髮を容れず、然りと雖も、汝今懇に請ふこと勤めたり、已を獲ずして些の屋裡の話を打す、汝は既に屋裡の人なり、想ふに亦外頭に出ださじ、今時學道の兄弟、㋮十箇に五雙あり、知解の過患あるを免れず、汝知らざるべからず、纔に衆に入り來つて、手脚未だ穩かならず、無始曠劫の無明煩惱、未だ曾て一點も屏除し將ち去らず、又た嘗て著實に工夫をなさず、亦曾て箇の悟由を得ず、遽かに、他の從上過量底の人の說話を偸んで、以て己が有となし、口を開いて便ち道ふ、元來法の得べき無く、道の修すべきなし、三業必ずしも愼まず、諸戒必ずしも守らず、元生死の相なし、豈涅槃の心あらんや、」又云く、「一代藏經の文

後日雲門下に到り、一箇の鐵酸餡を嚙破して直ちに百味具足するを得たり、且つ道頭子の一句作麽生か道はん」と。

㋕然る後云々。文意を按ずるに正に斯くの如く誓願すべしと、希望の邊に布辭せられしなり。

㋔穩便云々。范蜀公、圜悟の行脚を勸むる文に「成都況んや是れ繁華の國、打住只だ花酒の惑に因る」と。

㋗隋珠は隋侯の珠、隋侯齊國に往きて一蛇の沙中にありて頭上より血出るを見る杖を以て挑れて水中に放つ、後囘りて蛇の所に到る、乃ち蛇の一珠を啣みて來るを見る隨侯敢へて取らず、夜夢に脚下に一蛇を踏む驚き覺めて珠を得たり、光明日の如く輝く、號して隨侯の珠と云ふ、卞璧は卞和の璧也、秦昭王十五城を以

は瘡を拭ふの故紙、千七百の公案は、腐爛の葛藤なり」と、忽ち人に如何なるか是れ禪と問著せられて、便ち拳を竪て、喝を下し、目を怒らし、眉を撑へて、胡亂に支へ將ち去る、甚だしきものは、佛を罵り祖を呵し、神を欺き鬼を瞞じて、因果を撥無し、事として爲さゞるなし、㋘之を地獄の滓と云ふ、佛も也た救ひ難し、有る底は、聰明の資を以て、內外の典籍を㋫漁獵し、言と談じ、妙と談じ、心と說き、性と說き、江月松風を諷詠して、心地の印となし、青山綠水を和會して、本來の身となす、有る底は只管淨潔の球子を打して、是句も也た剗り、非句も也た剗り、但だ一塵立せざるところに向つて行履す、全く知らず、箇は是れ㋙陰識の會通なるを、更に一等の人あり、諸家の語錄を把つて數百句を抄寫し、一冊となして懷中に收在し、密々に背取して、到るところ互に相問酬す、一句多き底は、憍慢の色面に溢れ、一句少き底は、忿懣の氣胸に塞る、者般底の參禪に似たらば、如何か生死に敵し得ん、臘月三十日到來せば、悔ゆとも將た及ばざらん、汝旣に箇の事を知らば、須らく是れ步を退け、己に就いて、眞參實究し去るべきなり、老拙汝が爲めに、輒ち十件の要須を述して、具に後に

て之を買はんとす皆名玉也。

㋳夢にだも云々。孔子曰く吾復夢にたも周公を見す德の衰へたる哉と。

㋮十箇に五雙ありは、十人が十人皆知解の過患ありと、下に掛けて云はれしなり。

㋘之を地獄の滓と云ふ。人間の滓どころでない、地獄の滓じやと、かんで唾き出す樣に云ふてある。

㋫漁獵。唐史に「經史を見ること猶ほ漁獵の如し」と。

㋙陰識會通。中峰廣錄山房夜話に曰く「或は靜默の中に坐在して、塵勞暫息の頃に於て、忽ち陰識中に於て遂に箇の相似底の道理を省得する有れば便ち依約して是となし、經本中の語言を句引して證果して心中に含む、知らず此病是れ陰識の會通、眞の生死の本にして、見性に非ざるとを」と。

在く。汝當に齒を沒ふる迄、遵守して行ずべし。庶幾はくは虛に、袈裟下の士と作らざらんことを。

一には、生死事大無上迅速、須臾も忘念せざらんことを要須す。

二には、行住坐臥、身心を撿束して、律儀を毀犯せざらんことを要須す。

三には、偏空を執せず、精進に誇らず、㋓二乘の見に墮するなきを要須す。

四には、意を攝し、語を愼み、日夜靜坐して、閑妄想を遠離せんことを要須す。

五には、照々靈々を認めて、㋢黑山下の鬼窟裡に坐するなきを要須す。

六には、寢を廢し餐を忘じ、壁立萬仭にして、鐵脊梁を竪起せんことを要須す。

七には、父母未生前、那箇か我が本來の面目と看んことを要須す。

八には、話頭に參じて、工夫綿密なりと雖も、急に悟明を求むるなきを要須す。

九には、寧ろ發明せずして百千劫を經るも、㋐第二念を生ぜざらんことを要須す。

十には大心不退、大法洞明、佛の慧命を紹續せんことを要須す。

陰識は五陰、意識也。

㋓二乘は聲聞緣覺の二門也。

㋢黑山下。圜悟心要上に曰く、「終に肯て言句の中、話頭古人公案の間に向つて埋沒し、鬼窟裏、黑山下に向つて活計を作さゞれ。」

㋐第二念とは初めの一念の變ずるを云ふ、舍利弗因地に菩薩の行を修す、第六住にいたり波羅門のために眼睛を乞はれて終に大心退轉して、今日親しく釋迦の弟子となり、小乘聲聞の行を修し、最后法華會坐に於て得記せり、かくの如く途中の變心を云ふ也。

希運大師に示す。

世間一切の憎愛取捨、得失是非、顚倒妄想等の念慮、一時に放下して、須らく㊈死了燒了、那箇か是れ我が性の語を將て、二六時中、綿々密々に、間斷あるなく、參究し去るべきなり、是れ乃ち生死岸頭に臨んで、大いに得力底の消息なり、此を除いて外、別に方便なし、至囑至囑。

明大師に示す。

元男女の相なし、寧ろ迷悟の間あらんや、若し明かに本來の面目、本地の風光を見んと要せば、只だ、㊉四大分散の時、甚麽の處に向つて安身立命せんの話を將て、二六時中、斯須少間となく、究め來り究め去れ、古人云く、「參禪に祕訣なし、只だ生死の切なるを要す」と、所以に世間の憎愛取捨、得失是非、凡そ目前の一切の境緣、一時に放下して綿々密々に參究し去れ、歲深く日久しくして、工夫純熟せば、忽然として睡夢の醒むるが如く、蓮華の開くが如くならん、那の時甚の生死の怖るべく、涅槃の求むべきかあらん、⑪劉鐵磨尼總持が輩と、手を把つて共に行かば、豈平生を慶快するものにあらずや、明大師孜々として⑫道に在り、一日紙を袖にして日用の警策を需む、因つて筆を迅らせて之を書すと云ふ。

㊈死了燒了云々、元代の宗匠、鐵山紹瓊禪師の垂示の語なり、禪師の墨痕、時に日本に傳ふ、極めて能筆なり。

㊉四大分散。四大は地、水、火、風を云ふ、元箇々別々の萬物無し、四大假に和合して形色をなし、何ぞ自我生死あらんや。

⑪劉鐵磨尼。潙山門下、總持初祖門下共に比丘尼なり、明大姉

元參禪人に示す。

古人云く、「參は須らく㊀實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし、是故に㊁善財は五十三人の知識に參じ、㊂汾陽は七十餘員の知識に參ず、大凡佛祖より以來、大機を發し、大用を顯し、宗旨を立し、法幢を建つる底の人、參の字の上より出頭し來らざるものあるなきなり、汝が諱は參なり、身も亦參禪流輩の中に處る、尤も宜しく志を奮ひ、精を勵まし、跋渉を憚らず、師を尋ね友を擇ぶべし、忽爾として㊃聱頭の宗匠に撞著し、惡辣の鉗鎚を喫盡して、直に妄識妄情をして、箇の妙解妙會に和して、一時に蕩除せしむ、然る後、灑々落々、超宗越格、俊快伶俐の活漢と做り得ん、豈偉ならずや、其れ或は未だ然らずんば、萬慮を泯絶し、諸緣を放捨して、一則無義味の話頭を把つて、四威儀の中、少間斷なく、參じ去り參じ來れ、甚の十年五歳とか說かん、假使百劫千生も、悟らずんば休せざれ、是の如く信受し、是の如く操守する、之を眞の本色の道人と云ふ、若し如上の二途を離却して、諸の道業に於て一として辨ずるところなく、終日閑散、無根を游談して、荏苒として、空しく一生を過さば、舊に依つて六趣に輪轉

尼なる故に、之を配する也。

㊅道に在りは、念慮道を明むるにあるなり。

㊀實參。神鼎洪諲和尙嘗て數耆宿と襄潭間に至る、一僧宗乘を舉げて頗る敏捷なり、師曰く、「三界唯心、萬法唯識、眼聲耳色、是れ甚麼人の語ぞ、」僧曰く、「法眼の語、」師曰く、「其義如何」、曰く「唯心なるが故に根境相到らず、唯識なるが故に聲色摐然、」師曰く、「舌味是れ根境なりや否や、」曰く「是」、師箸を以て菜を筴し、口中に置き、含胡して語げて曰く「何ぞ相入ると謂はんや、」坐者駭然たり、僧答ふる能はず、師曰く「途路の樂、終に家に到らず、見解微に入るも遂に見道と名づけず、參は須らく實參なるべく、悟は須く實悟なるべし」と。

㊁善財童子。南方五十三の善智

せん、偏に徒に參禪の名のみあつて、全く悟入の實なきが爲めなり、愧づべし、畏るべし、之を思ひ之を勉めよ。

㊂秀格禪人に示す。

汝が年甚だ少しと雖も、言を出すこと頗る以て老いんたり矣、常に道友に語げて云く、「某甲、忝く先哲の芋を煨して涕を唾れ、茆を移して深に入るの高風を慕ふこと久し、異時必ず須らく、我を巖谷の中に索むべし」と、其の㊅志尙ほ善は則ち固に善なり、惟だ師友を遠離して提誨を聽くなく、閑遊安眠して甘じて庸翟に墮せんことを恐る、汝當に深く空山㊈閴爾として辨道に便りあるを念ふべし、生死は呼吸にあり、如何ぞ虛しく日を度らん、幸に㊀現成の公案あり、今汝に擧示す、僧㊃古德に問ふ、「如何なるか是れ淸淨法身、」云く、「山華開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し」と、又問ふ、「深山巖崖還つて佛性ありや也た無きや、」云く、「石頭大底は大、小底は小」と、猛く精彩を著けて看よ、是れ什麼の道理ぞと、蒲團竹椅の上は、良に㊇言に在らざるなり、薪を採り菓を拾ひ、圃を鋤き溪を汲むところ、正に好し參究底の時節あり、忽爾として㊁祖關を透得し、己事を發明せば、之を自

識に參じ、終に彌勒に見ゆと。

㊄汾陽。汾州太子院善昭禪師、剃髮受具杖を策いて遊方す、至る所少く留る、機に隨つて叩發す、知識七十一員に歷參し後に首山に到る、百丈席を卷いて「意旨如何」と問ふ、山曰く、「龍袖拂開して全體現す」と、曰く、「師の意如何、」山曰く、「象王行く所狐蹤を絕す、」師言下に大悟す、拜起して曰く、「萬古碧潭空海月、再三撈摝して始めて應に知るべし」と。

㊆饗頭。未だ明解に接せず、蜀の方の方語なり、「つむじまがり」と云ふが如し、語錄詩文に多く使用す、元布袋と云ふ和尙への印可に、圓悟頌して、「平生只說饗頭禪、撞二著饗頭一如二鐵壁一」の句あり、「いぢわる」と見れば、差支なき樣なり。

證自悟の活道人と謂ふものか。

又。

（ホ）大凡人の子たるものは、父の氣分を稟く、天下古今理の然らしむる所以なり、必ず求めて之を得、學んで之を取るにあらず、汝余が室に入つて、余が法子たり、然く凝頑踈慵の性、余と毫釐も差はず、益々夙生に（ヘ）師資の緣熟するを感ず、其の性や既に而く相同じ、其の跡も也た寧ろ然らざるべけんや、汝須らく余が溘然の後を俟つて、三箇五箇の所在と雖も、人と首を聚めて遊處するを要せざれ、只だ溪邊林下に去つて、旋や（ト）尖頭の茆廬を縛して、（チ）形影相弔し、分に隨つて修持して、此の生を終へんことを謀るべきなり、余に緊要の一訣あり、寶秘すること久し、今當に汝に付すべし、輕しく人に語るなかれ、汝每日晨に興きて、先づ須らく手を引いて自ら頭顱を摩で、亦目を以て身上の袈裟を顧みて、心に念じ口に演ずべし、吾は是れ釋迦文佛の遠裔なり、縱使喪身失命するも、誓つて毘尼の規範を壞せずと、至囑至囑。

應山善庵主に示す。

（モ）秀格禪人は江州高野佛日山退藏寺、第一世圓照佛慧禪師也。

（セ）志尙。尙は高尙の尙、易に曰く、「王侯に仕へず、其事を高尙にす。」と、志尙は志の高尙なり。

（ス）闃爾。寂靜なることを云ふ。

（イ）現成公案。傳燈睦州章に曰く、「師、僧來るを見て云ふ、見成公案汝に三十棒を放たん」と。

（ロ）古德は大龍和尙。

（ハ）言に在らずとは、猶ほ勿論と云ふが如く、言ふ迄も無しの意。

（ニ）大龍歸宗等の答話を指す。

（ホ）眞情流露の文、詞意未だ人の道破せざる處、一讀爽然たり。

（ヘ）師資。善人は不善人の師、不善人は善人の資と、即ち師弟を云ふ。

（ト）尖頭云々、老素首座山居の句に、「尖頭の屋子低きを嫌は

昔し出家學道の流は、才かに衆に入り來つて、㋷三篾腰を縛し、執爨負舂し、勞苦を憚らず、殆んど危亡に臨んで顧みず、蓋し法の爲めに軀を忘るゝのみ、所以に、㋦盧郎は碓を黄梅の糟廠に踏み、㋸演祖は磨を白雲山中に主り、㋾百丈は大義を說かんがために、預め田を開き、㋻木平は新到を見る每に、其れをして土を搬ばしむ、或は薪を折つて榮枯を論じ、或は㋕茶を摘んで體用を辨じ、或は㋵井を斟んで肩に上せて擔を折つて道を悟り、或は㋟桶を束ね手を失し、地に墮して禪を了ず、皆是れ外は盡日務に順倣して奔波するが若くなれども、內は須臾も參玄の正念を忘れず、故に往々に一機一境に㋹築著磕著す、方に知る、此の事は必ずしも竹椅蒲團面壁靜默の中にあらざることを、

上に長林あり下に池あり、夜久しくして驚飈黄葉を掠むるを、恰も蓬底雨來る時の如し」と。

㋠形影相弔し、李劉伯陳情の表に「煢々として孤立して形影相弔す」と、其獨り語るべきなきを云ふ、然れども道を以て友とす、一人即ち萬人、一心即萬象也、又何の闃爾たることかあらん。

㋷三篾腰を縛す、會元五に、馬祖藥山に告ぐるの語に「三條の篾をもつて、肚皮を束取して、隨處に遊山し去れ」とあり、之に原く、篾は葛なり、葛を以て帶に代ふるなり、船屋を葺くの竹篾とは別なり。

㋦盧郎は即ち六祖慧能禪師也。

㋸演祖主磨。會元十九、五祖演禪師章、白雲に至り、途に僧南泉に問ふ、摩尼珠の話を擧す、雲之を叱す、師領悟す、投機偈を獻じて曰く「山前一片の閑田地、叉手丁寧に祖翁に問ふ、幾度賣り來つて還た自ら買ふ、爲めに憐む松村の淸風を引くことを」と。

㋾百丈開田。百丈山涅槃和尙、一日衆に謂ふて曰く「汝等我と田を開けよ、我汝がために大義を說かん、」衆田を開き了つて歸つて大義を說かれんことを乞ふ、師乃ち兩手を伸ぶ、衆措くことなしと。

㋻木平搬土。會元六袁州木平山の善道禪師章、凡そ新到あれば未だ參禮を許さず、先づ土三擔を運ばしむ、而して偈を示して曰く「南山の路側たち東山低れり、新到辭する勿れ三轉の土、嗟す汝が途にありて田を經ること久しきことを、明々として曉らずんば却つて途となる」と。

㋕茶を摘むは潙仰禪の話を云

吾が應山善公、空門に入つてより以來、未だ嘗て㋞一雲も偸安逸體せず、初め松泉を開き、今明光に據つて、山を墾り址を夷げ、崖を穿つて泉を引き、松を栽ゑ、竹を種ゑ、貓を縛り、圃を鋤くに、咸く躬をもつてなし、敢て人を役せんことを欲せず、酷だ古德の風度あり、遐邇嘆服せざるなし、老拙公と㋡傾盖の日久しからずと雖も、其の義情の濃厚なること、喩をなすによしなし、一日紙を出して字を求む、之を寫して以て其の請に酬ゆと云ふ。

㋧是乘知客の居山するに示す。

上古の禪衲は、千峰萬嶽、幽巖邃谷の間に韜晦して、㋤身世兩ながら忘するを得、草木と倶に腐るもの、計ふるに勝ふべからず、吾が佛も亦說く、寂靜無爲安樂を求めんと欲せば、當に

ふ。

㋵井を掛むは、天衣懐禪師の話頭也、曰く、明覺を翠峰に禮す、尋いで水頭となる、水を汲み擔を折りて忽ち悟る、投擔偈を作りて曰く「一二三四五六七、萬仞峰頭獨足にして立つ、驪龍頷下明珠を奪ふ、一言勘破す維摩詰、」覺聞いて几を拊つて善しと稱す。

㋟東桶了禪。會元十二、雲峰文悅禪師、大愚曰く「今日雪寒し、衆の爲めに炭を乞へ」と、師又命を奉ず、能事畢つて又方丈に至る、愚曰く「堂司人を闕く、今以て汝を煩はす」と、師之れを受く、樂しまず、愚を恨むること心に去らず、後架に地坐す、桶箍忽ち散じて、架より墮落し、忽焉として開悟すと。

㋹築着磕着。會元七、保福院從展禪師、師因に僧侍立す、問うて曰く「汝恁麼に麤心なることを得たる、」僧曰く、「何れの處か是れ某甲麤心の處」と、師、一塊の石を拈じて僧に度與して曰く「向門前に抛てよ」僧抛ち了つて卻來して曰く「甚麼の處か是れ某甲麤心の處、」師曰く「我築着磕着することを見る、所以に汝を麤心なりと云ふ」と。

㋞一雲は一寸などの意に同じ。

㋡傾蓋。一村雨の宿に相逢ふて、知音になるを云ふ、又家語に、「孔子郯に之く、程子に塗に遭ふ、蓋を傾けて語る、終日甚だ相親し」と。

㋧雪舟是乘知客也。

㋤雲臥紀談の序に曰く「予始め南閩より出て、遠く江表に歸る、草木と倶に腐るゝことを分甘して、茅を城山に誅して、何書孫公仲益の書する所の雲臥庵の字を以て焉れに揭ぐ、

闤闠を離れて、獨處に閑居すべし、乃至ち若しくは山間に於ても、若しくは空澤の中、若しくは樹下閑處靜室に在つても、所受の法を念じて、忘失せしむるなかれ」と、何に况んや、叢林衰替して、看て㊂眼に上らず、苟も辨道に意あるの人は、彼の境界を望んで、當に蚖蛇の窟を畏れ、㊃蠱毒の鄕を避くるがごとくすべきのみ、雪舟乘知客、京師相陽の諸刹を徧歷して、寒酸の風味を嘗め盡す、而して乃ち衣を拂つて遠引し、林丘に臥せんことを圖る、去秋此に來つて同志五七輩と、首を蝸屋の下に聚め、一冬を過ぎ訖つて、猶ほ山の淺きを嫌ひ、且つ深きより深に入らんと欲す、其の高尙の趣、以だ嘉すべきに足れり、大抵學道の要は、最も明心を貴ぶ、明心の捷徑は、只だ生死の切なるにあり、生死切なるときは、即ち頭々物々、在々處々、我の警策たるにあらざる者なし、何ぞ必ずしも、師友に求むるを假らんや、谿聲山色、白雲青松、凡そ見聞に屬するもの、一々汝が爲めに禪機妙用を助發する㊄ものか、所以に㊅古人云く、「本來の心を識らんと欲せば、青山綠水深し」と、又云く、「心外無法、滿目の青山」と、之を思へ、之を勉めよ。

公又詩を以て寄せらる、身拋兩ながら相違ふ、「雲閑に臥して飛ばず」之句あり、蓋し其れ予を知るもの也」と。

㊂眼に上らずとは。眼に上すに堪へずの意、見れば目の汚れなり。

㊃蠱毒の鄕、蠱の毒たるや、醫書に載する所數種ありと雖も、而も中土之れを見る少し、古今相傳ふ、多く是れ閩、廣、深山の人、端午の日に於て、蛇虺、蜈蚣、蝦蟆の三物を以て同器に之れを貯へ、其互に相食啖するを聽き、一物獨存せるを待つ、則ち之れを蠱と謂ふ、其人を害せんとせば、其毒をとりて酒食の中に之れを啖はす、雪峰の贊に曰く「蠱毒鄕に生る、寧ろ小過なからん」と、福建路、廣南路に此人を殺す邪法あり、宮中甚だこれを禁ず、雪峰は福州にあ

㋷籥侍者に示す。

籥侍者は、雪村和尙の高弟なり、天資聰俊にして、事業絕倫なり、異時祖庭の末運を扶起せんもの、兄にあらずんば誰ぞや、一日忽ち學解機智の道に輔けなきを省して、掃蕩淨盡して、元字脚を留めず、孜々兀々として㋔寸陰を棄てず、自己躬下の事を究明す、亦去つて亂山の深うして更に深き處を尋ね、一平生を盡して、永く名字をもつて、人間に落さゞらんと欲す、甚だ敬愛すべきかな、切に㋗煨芋の烟を放つて戸外に出でしむるなかれ、恐らくは是れ九重城中に薫徹して、誤つて詔書を引いて雲に入らんのみ、正に宜しく愼護すべし、正に宜しく愼護すべし、老拙別に臨んで、一聯㋳落韻の詩を吟じて、之に贈ると云ふ。

㋮隱山は庵を燒いて何の處にか去る、大梅茆を移して跡已に空し、今日君丘壑の志を懷いて、千歲の舊高風を挽囘す。

正印大師に示す。

昔し僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く「無」と、只だ這の一字、便ち生死の命根を截斷する底の利器、本來の面目を照

り、故に蟲蒼の稱といふ也。

㋒ものか、寂室禪師は謙恭の人、故に文中斷定を下すべき處に往々謙して疑問の詞をなす、大抵一文中一箇兩箇あらざるなし、此處亦然り、讀者例して知るべし。

㋖古人云は、大慧普說に曰く、「修山主の道ふ、本來の心を知らんと欲せば、青山綠水深し、是れ心身の境にあらず、徒に聞見を以て尋ねんとす、識得せば卽ち識取せよ、更に沈吟を用ゐず」と、又天台韶國師、通玄峰にあり、投機偈あり、「通玄峰頂、是れ人間にあらず、心外無法、滿目青山」と。

㋷籥侍者は雪村友梅の弟子なり、村は南禪寧一山に嗣ぐ。

㋔寸陰、大禹は聖人也、卽ち寸陰を惜む、衆人に至りては當さに分陰を惜むべしと。（陶侃

破するの鏡光なり、汝只だ二六時中、四威儀の內、諸緣を放捨し、打成一片、鐵橛子を咬むが如く、栗棘蓬を吞むに似て、參じ去り參じ來つて、斯須少間も退志あるなかれ、忽爾として漆桶を打破せば、心華發明して、十方空を照さん、那の時縱ひ尼總持劉鐵磨と雖も、也た須らく衽を斂めて伏膺すべきものか。

南大師に示す。

汝只だ須らく勇猛向道の力を勵まして、㋘三百六十の骨節、八萬四千の毛竅を把つて、束ねて一箇の無字となして、大疑團を起して、孜々として參究せよ、則ち、正に堅兵嚴城の犯干すべからざるに似て、所謂昏散等の諸魔、色聲等の六賊、崖を望んで退くべし、此の志久遠不變ならば、何ぞ悟明の日あるなきを患へんや、我れ今生死事大無常迅速の八字を大書して以て汝に付す、好し收拾し去つて、切に須臾も身邊を離卻することなかれ、才かに工夫間斷あるを覺ゆるの時、當に取つて之を見るべし、其の策發勸誘の功、百千の良導善友と雖も、以て諸に逾ゆるなけん、至祝至祝。

㋫龍禪者に示す。

日）

㋗此の様な燒き芋の烟ならば、ちつとやそつとは揚げても苦しかるまじ、其れもすなと。

㋾落韻即ち踏落を云ふ、然し唯だ比興にして韵律に合はざるの意か。

㋮隱山燒庵。會元三、龍山和尙章、洞山辭退す、師卽ち偈を述ぶ、曰く、「三間の茅屋從來の住、一道の神光萬境閒なり、是非を把つて來つて我を辨ずる莫れ、浮生の穿鑿相關せず」と、これに因つて庵を燒く。

㋘三百六十骨節等、無門關に曰く、「參禪は須らく祖師の關を透るべし、妙語は心路を窮め絕せんことを要す、祖關透せず、心路絕せずんば、盡く是れ依草附木の精靈ならん、且く道へ、如何か是れ祖師の關、只だ者の一箇の無字、乃ち宗門の一關也、遂に之れを名づけ

參學の要は、專ら己事を洞明するにあり、若し直捷相應じ去らんと欲せば、只だ僧趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く「無し、」の話を將つて、大疑團を起して、孜々として㋙打捱せよ、忽爾として上頭の關棙子を撞飜せば、惟だ生死の根株を拔却するのみにあらず、佗の佛病祖病に和して、同時に打失せん、那の時龍の水を得、虎の山に靠るが如くに相似て、平生を慶快せん、豈㋓韙ならずや、龍姪病中に紙を寄せて語を求む、汗を揮ひ筆を迅らして、其の請を塞ぐと云ふ。

山上人に示す。

波州の山上人、辛丑の春、山中に來つて道聚す、夏罷んで別を告ぐるの次、袖より帋を出して法語を求む、余笑つて曰く、「我れ未だ一法の得べきを見ず、夫れ復た何の語をか云はんや、」山云く、「胡爲れぞ區々として辭を悋むこと斯の如くなるや、唯だ望むらくは、一則古人の因緣を示し及ぼせ、用つて前程の警策と爲さんと要す」と、勉め請ふこと至れり、余已むを獲ず、之に謂つて曰く、「昔し僧、雲門に問ふ、『不起一念還つて過ありや也た無きや、』門云く、『須彌山』と、汝只だ這の話を將つて、一切四威儀の中、綿密に打捱せよ、久々にして工夫純熟し、打成一

て禪宗の無門關と云ふ、透得し過者は但だ親しく趙州を見るのみならず、歷代の祖師と把手共行、眉毛相結び、同一眼に見、同一耳に聞く、豈慶快ならずや、透關を要する底、有ること莫らんや、三百六十の骨節、八萬四千の毫竅、通身に箇の疑團を起して、箇の無字に參せよ」と。

㋫龍禪者は師の法姪也。

㋙打捱。江湖集上、盧堂人の母を省するを送るの頌に、「十年來往す浙の東西、捱得す頭荒伏犀を露すことを、」捱は極め得るの義也。

㋓韙は是に同じ、左傳隱公十一年、「五の不韙を犯して以つて人を伐り、其れ師を喪ふこと又宜ならずや」と。

片ならば、須彌山便ち是れ自己、自己便ち是れ須彌山、須彌山を自己と、間に髮を容れず、甚の無明煩惱とか論ぜん、以て菩提涅槃眞如佛性に至るまで、亦須らく崖を望んで退くべし、汝此の如く信得及し去らば、直饒未だ直下に打徹するを得ずと雖も、定めて是れ知見解會露布葛藤に㊀籠絡せられざる底の本色の辨道人たらんか、」乃ち毫を援つて之を寫し、贈ると云ふ。

禪燈新戒に示す。

世尊拈華、迦葉微笑より以降、相傳へて、焰を續ぎ、輝を接して、直に而今に至るまで、天壤を㊁照映して、幽として燭さゞるなし、是を敎外別傳の禪と謂ふなり、儞既に㊂佗家の種草となる、操履當に上流を攀づべし、終始庸輩に墮するなかれ、志力を勉勵して、晝も參じ夜も參じ、一旦心光爍發して十方空を照さば、惟だ法燈門風を碩大するのみにあらず、亦自己名實厮當るを見るのみ、禪燈新戒紙を袖にして字を需む、筆を迅らして其の請を塞ぐと云ふ。

增禪人に示す。

僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く「無し」と、只だ這の話頭を將つて、行にも參じ坐しても參ぜよ、切に忌む忘念することを、大凡學道の人、正に㊃生死の二字を以て鼻尖

㊀籠絡。俗に「とりこ」にせらるの意、班孟堅西都賦に、「山を籠す野を絡す」と。
㊁冷齋夜話に曰く、「漢の高帝大事に臨み、印を鑄し印を消し、兒戲より甚だし、然るに其の正明直白、千古に照映たり。」
㊂佗家、即ち禪門を指す也、新戒故に爾か云ふ。
㊃生死の二字。大慧書に曰く、「黄知縣に答へて曰く、但生死兩字を把りて鼻尖頭上に貼在して忘了を要せず」と。

頭上に貼在して、百千違順の境界現前するも卽時に放下して、孜々兀々として、大死人の如くに相似て、之を究め之を明むべし、光陰倏忽として、時人を待たず、努力して今生に須らく了卻すべし、永劫に㋵餘殃を受けしむるなかれ、增禪者山中に在つて首を聚む、參禪に志ある佳道人なり、別に臨んで語を需む、筆を迅らして以て贈る。

山禪人に示す。

㋟通玄峰頂是れ人間にあらず、心外無法、滿目の青山と、且く古人恁麼に道ふ意、何の處にかある、此に於て㋹一隻眼を著得せば、汝卽青山、青山卽汝、汝と青山と、㋞無二無二分、無別無斷故、然も此のごとくなりと雖も、若し衲僧門下に約せば、猶ほ鐵圍を隔つることあり、直に須らく身を那畔に揚げ、㋡五須彌を踢倒して、方に此の事と少分相應ずべきかな、山姪語を需めて以て警策となさんとす、筆を迅らして之に付すと云ふ。

善教大德に示す。

若し生死を超脫して、直に佛祖の位に至らんと欲せば、只だ十二時中、四威儀の內、寸陰を棄てず、間斷あることなく、無義味の話頭を參究せよ、且く甚麼を呼んでか無義の話頭とせん、父母未生以前、那箇か是れ我が本來の面目と、只だ此の話頭

㋵餘殃、易坤封文言に、「積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり」と。

㋟通玄峰頂是れ人間に非ず。韶國師投機の偈也。

㋹一隻眼、碧岩錄一、雲峰曰く、「盡大地是れ沙門の一隻眼、汝等諸人什麼の處に向つてか屙せん」と。

㋞無二無二分。大般若百八十三、「善現色清淨なれば卽ち果清淨、果清淨なれば卽色清淨、何を以ての故に是色清淨と、果清淨と無二無二分、無別無斷故」とあり。

㋡觀無量壽經に、「眉間の白毫右に旋つて婉轉すること五須彌の如し」と。

を將つて、大疑團を起し、寢食を忘じ、寒暑を廢し、綿々密々に、參じ去り參じ來つて、恰も鐵橛子を咬み、栗棘蓬を呑むが如くに相似て、直に觜を下す處無きことを得て、忽然として蹉口に咬得破し呑得下せば、之を大徹大悟底の人と謂ふ、唯だ此の如く修行し去れ、直饒今生に打未徹なりと雖も、此の志堅固にして永く退失せずんば、臨命終の時に逗到して、人身失せず、惡趣に墮せず、重ねて出頭し來らば、必ず是れ一聞千悟せん、豈般若の靈驗なるものに非ざらんや、記取せよ記取せよ、旃れを勉めよ。

元杲上人に示す。

趙州の無字は、乃ち是れ諸聖の骨髓、列祖の眼睛、百千の法門、無量の妙義流出し、唯だ箇の無字上より流出し得來るなり、正に此の話を參究するに當つて、全く義味思量の及ぶべきにあらず、鐵橛子を咬み、栗棘蓬を呑むが如くに相似て、直に觜を下す處無うして、情盡き識銷し、知解泯し、能所忘ずるの時に至つて、忽爾として㊆囫地一下せば、則ち生死の根株を拔卻するのみにあらず、亦須らく涅槃の牢獄を掀翻すべし、豈平生を慶快するにあらざるならんや。

先天の兆庵主に示す。

㊆囫地一下は、一足踏み出せばの意、卽ち涅槃の地を得る也、間一髮を越すなり、大慧書上、張提刑に答へて曰く「老居士所作所爲、冥に道と合ふ、但だ未だ囫地一下を得る能はざる耳、若し日用緣に應じて故步を失はずんば、未だ囫地一下を得る能はずと雖も臘月三十日、閻家老子も亦手を拱して歸降せん」と。

古人云く、「盡三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一箇の無字となして、與麼に提起せば、更に甚麼の昏沈散亂をか討ね來らん」と、老拙は然らず、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅を併せて、打つて㊅一枚の鐵團圝となして參究せば、則ち所謂昏沈散亂、卻つて㊆我が伴侶とならん、還つて古人と相見の分ありや、也たなきや、只だ綿々密々にして、間に髮を容れざらんことを要す、若し此の如く做し將ち去らば、縱ひ直下に透徹すること能はずと雖も、臘月三十日に捱到せば、力を獲ること少からず。

玉禪者に示す。

㊇地の山を擎げて山の孤峻なるを知らざるが如く、石の玉を含んで玉の瑕なきを知らざるが如く、汝が十二時中、屙屎送尿、著衣喫飯は、誰が恩力を承くるや、若し此に於て、倘ほ未だ力を得ずんば、只だ箇の僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや」州云く、「無」の公案を將つて、綿々密々に、孜々兀々として、之に參じ之を究めよ、工夫熟し、時節至らば、漆桶を打破し去らん、豈平生を慶快するものにあらずや。

鏡大師に示す。

㊅一枚の鐵團圝は一箇の鐵丸也、故は猶ほ箇と云ふが如し。

㊆我が伴侶、物我凡聖無二なり。

㊇地擎山云々、傳燈七、盤山寶積章「上堂、禪德可の中の學道は地の山を擎ぐるに、山の孤峻なるを知らず、石の玉を含むも、玉の瑕なきを知らざるが如くに似たりと、若しかくの如くんばこれを出家と名く」と、而して此盤山和尚は之れを無心に譬へたるものなれども、此寂室和尚は蓋し隨義轉用して地及び石の山及び玉の存在を知らぬ、即ち自己の心珠の大寶を知らぬに譬へたるものならんか。

昔し潙山鏡を封じて仰山に送與す、仰山提起して衆に示して云く、「道ひ得ば撲破せず、」衆無對、山乃ち撲破す、汝這の話に於て薦得せば、妨げず明かに本地の風光、本來の面目を見ることを、脟し或は未だ然らずんば、破鏡重ねて照さず、落華枝に上り難し、參。

從本禪者に示す。

出家學道の士は、宜しく師を尋ね、友を擇ぶをもつて、要緊となすべきなり、汝今慈廣和尚の道風を仰慕し、去つて依棲を求む、厥の志良に嘉なり、聞説らく堂中數十輩、箇々本分の兄弟にして、晝夜孜々兀々、坐して枯株のごとしと、咸謂ふ、石霜の風規千載墜ちずと、汝萬一掛錫を許さるれば、當に須らく先づ三年を以て一期限となすべし、足は門を出づるを禁じ、脇は席に到るを愧ぢ、口戯嘲を絶し、意攀緣を離れ、只だ二六時中、綿々密々に死了燒了、那箇か我が性の話を參究せよ、既に此の如きの師に遇ひ、此の如きの友を得、此の如き便當の所在に居る、汝彼に在つて道業を轉ぜずんば、更に何の日をか待つべきや、其れ或は州に遊び縣に獵し、水を看山を觀て、徒らに時光を喪せば、全く予が法屬にあらざるものか、異日歸り來ると雖も、漸じて相見の分あるべからず、從本之を勉め之を思へ。

㋑破鏡云々、禪林類聚五、華嚴靜禪師、僧問ふ「大悟底の人甚麽人か爲めに却つて迷ふ」師曰く「破鏡重ねて照さず、落華枝に上り難し。」

㋺備前の大士山慈廣寺頂山和尚也。

㋩石霜の風規、傳燈、石霜山慶諸禪師章、師石霜山に止る二十年の間、學衆長坐して臥せず、株兀の如くなるあり、天下之れを枯木衆と云ふ。

㊁脇は席に到るを愧づ「脇尊者伏馱蜜者に値ひて、左右に執侍して未だ嘗て睡眠せず」と。

道芽侍者に示す。

余が(ホ)忘年の友子、芽侍者は、天資爽拔にして、道貌穩實なり、己事未だ明かならざるを以て念となして、天龍の法席を棄て、此の山中に來つて、同志五七輩と首を茆茨に俯して、一夏(ヘ)尺壁寸陰、孜々として參究す、眞に佳衲子なり、秋風一策、忽ち歸歟の興を催す、別に臨んで紙を出して拙字を需む、余筆を絶つこと久し、手を揮つて謝遣するのみ、然れども猶ほ懇求して已まず、因つて問うて曰く、(ト)黑豆芽を生ぜざる時、如何、」云く、「知らず、」又問ふ、「黑豆已に芽を生じて後、如何、」云く、「知らず、」又問ふ、「黑豆の芽を生ずると、未だ生ぜざる時、如何、」云く、「知らず、」余笑つて云く、「百千の法門無量の妙義、咸く箇の三不知の下にあつて、冰消瓦解し了んぬ、佗唯々たるのみ、余乃ち毫を援いて之を寫し、其の請を塞ぐと云ふ。

圜林の方長老に示す。

言前に旨を領じ、句外に宗を明め、乾坤に獨立し、眼宇宙を空ずるも若し衲僧門下に約せば、則ち喚び來つて(チ)他をして脚を洗はしめて始めて得ん、這般現成の說話、正に是れ家常茶飯のみ、宜しく且つ(リ)高閣すべし、眞箇に要らず生死の根株を截斷し、佛祖の田地に撈到せんことを欲せば、當に須らく歩を退けて己に就き、頻りに(ヌ)鈍工を下して、趙州の無字を參

(ホ)忘年の友子。學問才德上にて親密に交際することにて、年の老弱にかかはらぬを云ふ、書言故事に「禰衡逸才有り、少くして孔融と交る、時に衡未だ二十に滿たず、而して融已に五十、忘年の交をなす」と、友子兄弟と書經にあり。

(ヘ)尺壁寸陰。淮南子に曰く、「夫れ日回つて月周り、時人と游ばず、故に聖人尺璧を貴ばず

取すべし、是れ則ち把本の修行なり、圓林の圭巖長老、既に住院(ル)徒を匡すと雖も、大事因緣を以て念となし、問及せらるゝを獲、厥の志嘉すべし、仍つて筆を迅らして以て贈ると云ふ。

　聞翁の譽侍者に示す。

佛性泰禪師云く、「五祖師翁、趙州の無字を頌して曰く、『趙州の露刃劍、寒霜光焔々、更に如何と問はんと擬せば、(ヲ)身を分つて兩段となる、只だ露刃劍を消せば足れり、下面の三句を剩し了る』と、余が見處に據らば、爭でか我が箇の簷外の數株の梅花、忽ち昨夜の狂風暴雨に一時に空盡せられて、片も也た見えずと、」者箇卻つて是れ頌し得て恰好なるに如かんや、然りと雖も、若し又恁麼に領略せば、未だ眼中に華を生じ去ることを免れざるなり、(ワ)唯だ者の僧未だ問を設けず、趙州亦口を開かざる以前に向つて、是れ箇の甚麼の道理ぞと參取せよ、則ち歲久月深、必ず悟明の時あらんかな、聞翁侍者、趙州の無字に參ずるによつて、紙を出して其の旨訣を求む、之を寫して厥の請を塞ぐと云ふ。

　　定巖の一侍者に示す。

して寸陰を重んず」と。

(ト)黑豆云々、會元五、大顚通の法嗣王平章、問ふ、「黑豆未だ芽を生ぜざる時如何、」師云く「佛も亦不知」と。

(チ)其男に脚を洗はさせてやる。

(リ)高閣すべしは、高閣に束ぬべしの略語なり。

(ヌ)鈍工、大慧書上、曾侍郎問書に「兩則の因緣を擧して鈍工を下さしむ」と。

(ル)匡徒、碧岩十一則、擧す黃檗示衆して曰く、「汝等諸人盡く是れ噇酒糟漢、恁麼に行脚せば何の處にか今日有らん、還た大唐國裏に禪師無きを知るや」と、時に僧有り、出でゝ云く、「只だ諸方徒を匡し、衆を領するが如くには作麼生」と。

(ヲ)身を分つて兩段となる後の簷外數株の梅花、忽ち昨夜の狂風暴雨に一時に空盡せられて、片も又見えずに應ずる也。

天㋕一を得て清く、地一を得て寧し、衲僧一を得て作麽生、僧、趙州に問ふ、「萬法一に歸す、一何の處に歸す、」州云く、「我れ靑州に在つて一領の布衫を做す、重きこと七斤」と、儞既に參禪に志あり、只だ這の話を將つて專一に斷捱せよ、捱し去り捱し來つて、積むに歲月を以てし、捱して捱すべきなきの處に到らば、直に三世の諸佛、橫說竪說、雲の如く雨の如く、它の千七百則の陳爛葛藤に和して、一々に打して自己に歸し去るを得ん、影は形に由つて生じ、名は實を以て顯る、方に知る、當初一を用つて諱とすることの甚だ偶然ならざるを。

㋵霜林の果侍者に示す。

臨濟大師唯だ一喝を以て事を用ひ、㋟道常情を出でゝ、測度すべきこと難し、間々慈を垂れ物を救ふことあつて、乃し㋹三玄三要を區分し、㋠四賓主を排列し、四料簡を施設する等、皆大火聚吹毛劍の如く、之に觸れ之に近かば、喪身失命を獲ざるものあるなし、是の故に、其の直下の的孫、燈々相傳へて、繩々として絕えず、我が松源師祖に到つて。僅かに十有五葉、家業墜ちず、赤手に㋡全提す、儘門に登る者を見れば、恰も㋤金翅の

㋻唯だ、即ち四大未生前の天地、父母未生前の本來の面目也、何の無と說き有と云ふことを須ゐんや。

㋕老子に曰く、「天は一を得て以て淸く、地は一を得て以て寧く、神は一を得て以て靈、其の之れを致すや一也。」一は即ち道也。

㋵霜林は即ち霜林中果梵密の法嗣なり。

㋟道常情を出でゝ、會元十二、慈明禪師章、師一夕訴へて曰く、「法席に至つてより已に再夏、指示を蒙らず、但だ俗の塵勞を增す、念ふに歲月飄忽として己事明めず、出家の利を失はん。」語未だ卒らず、汾陽熟視して罵りて曰く、「是れ惡智識、敢て我を裨販す。」怒つて杖を擧げて之れを逐ふ、師伸救せんとす、陽師の口を掩ふ、乃ち大悟す、是に知

海を擘き直に龍をとつて呑み、㋤師子の一吼すれば百獸腦裂するが如し、亦㋶三脚の驢兒蹄を弄して行く、鐵酸餡、破砂盆、㋰口を開くことは舌頭上にあらず等の句あり、其の鋒に嬰り、其の毒に中たる底は、箇々羅籠を出で、窠臼を離れ、電馳星飛し、龍驤虎驟す、偉なるかな盛なるかな、㋒鍠々乎として一時に雷霆し、晃々焉として萬古を照映す、嗚呼、如今遺風餘烈、幾んど地を掃つて休す、斯道に意あるの士、豈坐視するに忍びんや、只だ箇の伶俐底の後生の、出でゝ宅家の種草となるを憑むのみ、其の人脫し或は命時に遇はず、力志に逮ぶなくんば、只だ去つて巖棲林居、㋼草衣菜食して、專ら己躬の下の事を究めよ、夫の今時猊床に踞し、麈尾を握つて般若を妄談し、累に罪愆を招くの輩と、豈翅に霄壤の侔しからざるのみならんや、古に云く、「㋨水を看山を看て坐す、名も無く利も無き身」と、其の詞は頗る淺近に似るも、意味極めて深くして深し、余一夕客と談此に及ぶ、果侍者旁に在つて竊かに聽き、翌旦に紙筆を備へ、來つて余をして此を寫さしむ、因つて勉めて其の請に應ずと云ふ。

平基藏主に示す。

んぬ、臨濟の道は常情に出づと、服役七年にして辭去すと。

㋹三玄三要。人天眼目上に曰く、「師云ふ、大凡宗乘を演唱せんとするものは、須らく一言に三玄の門を具ふべく、一玄門に須らく三要を具ふべし、權あり、實あり、照あり、用あり、汝等諸人作麼生か會せん」と、詳くは人天眼目に有り。

㋞四賓主、臨濟爲人の施設也、賓中の賓、賓中の主、主中の賓、主中の主これ也、賓は途中往來の客、主は歸來穩坐の主人、賓主相見して眞箇第一人たる主人公の一位に歸するを以て最終の目的とす。

㋡全提。全部提起のことにして、まるだしのことなり、半提に對す、從容錄に「默々として正令を全提す」とあり。

㋧金翅、名義集二「迦樓羅といひ、此には金翅と云ふ、翅翮

昔し水潦和尙、馬祖に參じて、佛法的々の大意を問ふ、祖㋔一踏を與ふ、水潦遂に大悟す、乃ち曰く、「百千の法門、無量の妙義、一毫頭に向つて根源を識得す」と、呵々大笑す、平生衆に示すに、「一たび馬師の踏を喫してより、直に而今に至るまで笑ひ休せず」と、又復た呵々大笑す、汝久しく敎衆を翫んで、玄理を研究す、未審し、三乘十二分敎の內、水潦の得處を將つて那の敎にか攝し去らん、須らく知るべし、宗門に果して箇の奇特の事あることを、若し奇特の想をなさば、又是れ不是にし了んぬ、子細に參取せよ、將つて等閑となすことなかれ、只だ㋨一臠を嘗めて鼎味を知らんことを要す、其れ尙し未だ然らずんば、只だ今休し去らば卽ち㋳休し去れ、了時を覓めんと欲するも了時なけん。

　興性禪人に示す。

興性禪人、此の山中にあること既に三載、庫務の間に勞役して、晨夕寧居に遑なし、其の志良に勤めたり、蓋し余と俗門の㋗瓜葛あるによるものなり、今亦暫く去つて京都に歸る、只だ望むらくは、儞此の大事因緣を以て念となし、諸緣を放下し、打つて一件の事となして、此の道を參究

金色兩翅相去ること三百三十六萬里、頸に如意珠あり、龍を以て食となす」と。

㋤師子一吼。臨濟錄、「師子の一吼野干腦裂す」と。

㋶三脚驢兒。會元十九、楊岐禪師章、問ふ、「如何か佛」、師曰く、「三脚驢子蹄を弄して行く。」

㋰口を開く云々、枯崖漫錄中、「松源岳禪師、傳ふる所の白雲端禪師法衣を以て亟かに人に付せんとす、三轉語を垂す、曰く、口を開けば舌頭上にあらず、大力量の人什麼としてか、脚を擡け、起たず、大力量の人什麼としてか、脚根下紅線不斷而して契ふもの無し」と。

㋒錮々乎。鐘、鼓、同時に聲相雜ふるを言ふ。

㋹草衣菓食、輔敎編四、廣原敎要義十六に、「深山幽谷に其衣

せよ、余已に㋘桑楡に迫り、且夕保ち難し、千萬久しく外に在るを要せざれ、歳の晩には歸り來つて、舊に依つて衰朽を輔弼せよ、是れ庶幾するところなり。

昇侍者に示す。

四大分散の時、甚麼の處に向つてか安身立命せんと、只だ要す、這の話頭を將つて、呻吟痛苦の中にあつて、刹那も間斷あるなく、參じ去り參じ來れ、忽爾として噴地一下せば、則ち翅だに㋒膏肓必死の疾を去卻するのみにあらず、亦須らく佛病祖病禪病等を屛除して、更に餘りなかるべきものなり、昇侍者病中に紙を寄せて語を需め、以て涅槃堂裡の警策となさんとす、因つて此を寫して之に酬ゆと云ふ。

㋙靈仲英侍者に示す。

嘗て聞く、「公案を提撕し、工夫を做す底は、手に㋓鏌鎁を握るが如く、塗毒鼓を擊つが如くに相似たり」と、之に嬰り之に觸るゝ者は、尸萬里に橫ふのみ、甚の生死の魔軍、煩惱の結賊とか說かん、以て眞如實相、菩提涅槃に至るまで、敢て近傍するに由なし、假使黃頭老碧眼胡も、亦須らく

を草し、其食を木にすと雖も、晏然として自得す」と。

㋨水を看云々。僧修睦睡起の作に曰く、「長空秋雨歇み、睡起淸神を覺ゆ、水を看、山を看て坐す、名無く身なき身、偈は諸祖の意を吟じ、茶は去年の春に碾る、此外誰か識らん、孤雲砌に到ること頻りなり。」

㋔祖一踏を與ふ、どぎつい、馬じや、水潦の體は一時に踏みつぶされた。

㋗一臠云々、一斑を看て全彪を知ると云ふが如き意、一切れの肉を甞むれば自ら一鼎の大味を識るならん。

㋳休し去らば、如今休し去らんと欲せば當下に休し去れ、了時を待たば了時なけんと。

㋮瓜葛は親族に譬ふ、其の延蔓綿遠たるを以てなり。

㋘桑楡。西日影を垂れ樹端にあるを桑楡と云ふ、晩年を日沒

倒退三千里すべきものか、僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く、「無し、」唯だ箇の無の字に於て大疑情を起し、痛く精彩を著けて、看よ、是れ什麼の道理ぞと、忽爾として一旦噴地一下せば、則ち千七百則の陳爛葛藤、這の無字に和して一時に瓦解氷消せん、豈快ならずや、豈快ならずや、吾郷の英靈仲、特に山中に來つて茆茨の下に道聚す、㋢夏罷んで告辭するとき、紙を出して語を求む、因つて筆に信せて此を寫し、以て其の請に酬ゆ、蓋し世の所謂法語の類にはあらず、只だ家裡の人に向つて、些の家裡の話を説くのみ、切に乞ふ、前程に出して人に示すなかれ、恐らくは譏誚を招かんかな。

松嶺の秀侍者に示す。

松嶺の秀侍者、久しく㋐實翁に侍して、以て㋚言行の師となす、得るところ酷だ多し、二十年前に、余が巖居を訪ひしよりして後、或は去り或は來る、厥の道義の篤きこと、今に至るまで、敢て少しも渝らざるなり、今夏亦來つて首を茆茨の下に聚む、向道の志唯だ進むことを知つて、退くことを知らず、加ふるに機辯峻捷を以てし、衲子の體裁を失はず、良に以て嘉すべきに足るかな、解制の前一日、來つて告辭するの次で、予に從つて臨濟黄檗に參ずる因緣を請益す、

に比する也。
㋫膏肓。「病膏の上、肓の下に入れば治せず」と、左傳成公十年に、「晉侯病む、醫曰く、病膏肓に入る治すべからず」と。
㋙靈仲英侍者は曹源の開山也。
㋓鏌鎁。又莫耶に作る、吳越春秋に干將は吳人也、歐冶子と師を同じうし、闔閭劍二枚を作らしむ、一を干將と云ひ、一を莫耶と云ふ、莫耶は干將が妻の名也。
㋢夏罷む、結夏の罷むを云ふ。
㋐實翁は大覺禪師の法孫也。
㋚言行の師、易繫辭の上に、「言行は君子の樞機」と。

予渠に謂つて云く、「臨濟道ふ、我れ初め先師に詣つて三度佛法的々の大意を問ふ、宅の六十の㊉烏藤を喫し了る、恰も㊀蒿枝の拂ふが如くに相似たり、㊁而今一頓を喫せんことを思ふ、誰か當に手を下すべき、惜むらくは當時等閑に宅を放過し了ることを、若し箇の漢出で來つて、某手を下し得んと曰はゞ、宅の口を開かんと擬するを待つて、彈指一下して云はん、「㊂蒼天蒼天」と、宅の氣を吐き身を轉ずるの分なきを管取せん、秀曰く、「千載の下不肖の孫、還つて如上の手段を具する底あるなしや、」予笑つて秀を指して云く、「咦、子にあらずんば、夫れ復た誰ぞや、」予毫を援いて此を記し、以て贈ると云ふ。

一　聖賢大師に示す。

僧趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや、」州云く「無し、」十二時中、一切處に、精彩を著けて看よ、箇は是れ甚麼の道理ぞと、㊃有無の會を做すなかれ、無無の會を做すなかれ、眞無の會をなすなかれ、世間の得失是非、人我憎愛、顚倒妄想等、佗方世界に暫在して、脊梁骨を竪起し、蒲團上を離れず、久遠不退轉の身心を㊄拌取して、一生兩生、乃至、盡未來際も、悟らずんば休せじと、是のごとく工夫を做し去らば、徹證の日無きことを患ひず、只だ要す、生死事大無常迅速、

㊉烏藤は拄杖を云ふ、又烏拄杖とも云ふ。
㊀蒿枝は「よもぎ」の枝也、蒿枝を拂ふは、草でも拂ふ樣ぢやと云ふ程の意。
㊁而今は臨濟出世してよりの事を云ふ也。
㊂蒼天、蒼天若し此の漢出で來たる云々。
㊃有無の會、大慧書八三、張舍人に答へて曰く「有無商量をなすことを得ざれ、又眞無ハ無と作し、卜度することを得ざれ」と。
㊄拌取、辨取と同じく「こしらへる」こと也。

這の八箇の字、胸中に蘊んで、須臾少間も、敢て忘れざらんことを、若し然らずんば、則ち昏散の二魔の爲めに侵撓せられて、永劫にも道業を成辨する能はざるなり、老夫今年六十八、餘算幾くもなし、想ふに復た相見の日なからん、唯だ此に依つて修行せば、㊆大圓鏡中、時々に對談せんなり。

天機庵主に示す。

參禪は、愚と智と、男と女とを論ぜず、只だ是れ天機俊捷に、識見超邁にして、氣乾坤を蓋ひ、眼古今を空ずる伶俐の活漢にして、方に箇の事と少分相應じ去ることを獲んなり、是の故に、㊇末山・無着・尼總持・劉鐵磨、皆是れ大法の淵源に徹して、祖師の骨髓を得たり、宜なるかな、其の遺風餘烈、今に至るまで天壤の間に凛々然たり、之を身女流に處して、大丈夫の事業を成辨する者と謂ふ、儞如今眞箇に此の道に志あらば、惟だ生死事大無常迅速を將つて念となして、卽ち世間一切の是非愛憎苦樂逆順等の妄情亂想を把つて一時に放下して、乃ち僧、古德に問ふ、「一念未起過ありや也た無きや、」德云く、「須彌山の話を把つて、綿々密々、孜々兀々として、行にも參じ、坐にも參じ、朝にも究め、夕にも究めよ、甚の三十年二十年とか說かん、縱ひ百千劫を歷るも、悟らずんば休せず」と、此の如く不退轉の身心を辨取して、參究し將ち去らば、必ず明めざるの理無けん、忽爾と

㊆大圓鏡智、中智の一也、法身邊の田地也、死了、燒了の以後、盡未來際に於て時々に對談せん、圭濟、古鼎を送りて西湖の上に到る、曰く「此別れ未だ會期をトせず、」古鼎の曰く「大圓鏡中、未だ嘗て公と相別れず」と。

㊇末山は大愚下、無着は大慧下、尼總持は初祖下、劉鐵磨は潙山下、何れも傑出せる尼僧也。

して心華燦發して、十方空を照さば、那の時惟だ它の古人と臂を把つて並び行くのみにあらず、正に能く佛祖の頂顊を坐斷せん、豈平生を慶快する者にあらずや、天機庵主、春秋富盛にして、遽爾として㋝落髪披緇し、三寶の數に墮す、加ふるに賦性純眞を以てして、惟れ道を惟れ勤む、夙に般若を薰ずるの甚深に非ざるよりは、豈克く斯の若くならんや、而今紙を出して語を需め、進道の警策となさんと欲す、輙ち毫を援いて、此の葛藤を寫して、其の請を塞ぐと云ふ。

齊雲の均侍者に示す。

我が松源大祖翁は、乃ち是れ臨濟十有五世の的傳の高弟なり、宋の㋜嘉泰開禧の間に在つて、㋑所得底の一百二十鈞の重擔子を以て、天下の衲子の肩上に迸在す、多くは怕怖驚走して、是の任を堪忍するもの鮮し、如今此の擔子、西來嵩山の下に留止す、予齊雲老兄を見るに、這の重擔子を荷擔するに力あるものなり、切に望らくは、忽にするなかれ、且く道へ、那箇か是れ這の重擔子、大力量の人什麼としてか脚を擡げ起さゞる、明眼の人什麼としてか脚跟下紅絲線不斷なる。

鎮庵主に示す。（先輩の語は錄せず）

㋝落髪。首飾なとる也。又髪は「もとどり」とも云ふ。
㋜嘉泰。趙宋第十三主、寧宗の即位第二歷、開禧は同第第三の曆に當る也。
㋑所得底云々、崇岳松源和尚の假設せる爲人の三轉等な云ふなり、曰く、「大力量の人、甚に因つてか脚を擡け起たざる、口を開くこと甚としてか舌頭上にあらざる、明眼の人甚に因つてか脚跟下紅絲線斷えざる」と、これ也。

㋺錤玉田は、積代の將爵、貴權功名の家に生れて、忽ち幻生の厭ふべきを省して、冠を裂いて緇を披す、一たび空門に入つてより、日夕精勤、脇席に到らず、直に㋩古人眞證の地に至つて後やまんと要す、大鑑聊か夙因を感じて、名を安じ、衣を附す、其の驗此に於て見るべし、甲辰の春、余が巖居を訪うて、首を茆茨に俯し、既に是れ一朞、一日告辭して曰く、「且く別山に去つて夏を過さん、秋風孤杖必ず是れ再會の日なり」と、乃ち紙を出して語を需め、以て途中の警策となさんとす、余容易に語を發して、輙ち妄談般若の誚を招かんことを欲せず、而も懇求して已まず、因つて疇昔聞くところの先輩の數語を寫して、以て其の請を塞ぐと云ふ。

子景大師に示す。（中峰の語は錄せず）

子景大師、須臾も生死事大を忘れず、孜々兀々として茲を念ふこと茲にあり、余垂木の嘉陰庵に寓せしとき、佗最初に來つて相見、問ふに此の道を以てす、余㋥野邊の山中に遷つて、茆を縛して居するに及び、又來つて民間に㋭僦屋し、乃し一夏を度る、前後來往すること三歲、其の志嘉すべきなり、而今中峯和尚の法語一篇を繕寫して之に贈る、是の如く的實痛快に、是の如く深切著明なり、汝此に依つて修行せば、當に須らく鐵磨の潙山に參じ、摠持の少林に見ゆると、以て異なるなかるべきなり。

㋺錤玉田は支那の人也、清拙禪師に隨つて來る、大鑑は清拙の禪師號なり。
㋩古人眞證、大慧書、轉侍郎問書に、悟は則ち須らく直ちに古人眞證の所に到つて方に大休歇の把となす。
㋥野邊。遠州野邊也。
㋭僦屋。借家に同じ。

珍禪者に示す。㋬

大元延祐庚申の冬、然可翁俊鈍庵と同じく㋣天目山に登つて幻住老人に謁せし時、雪千巖に滿ち、一庵閒爾たり、吾儕三輩、前立列拜して、各親しく鼻祖に少室峯前に見ゆるの想をなす、因つて扣くに宗門の要訣を以てす、第だ恨むらくは、疎鈍の跡、委曲垂示の旨を領會することを能はざるを、嗚呼、倒指すれば既に三十有七白、惟だ一日の如し、眞の間世の哲人なり、豈復た見るを獲んや、遠江の珍禪者、妙年英俊にして孜々として辨道す、一夏首を茆檐の下に聚む、忽ち進道警策の說を需む、即ち㋠如上の法語を抄寫して、以て其の請を塞ぐと云ふ。

中峰法語の後に書す。

㋷中峰の道三傳して雪巖に到る、㋦破沙盆を將つて空に和して擊碎して七零八落、將に謂へり、今已に孑遺あるなしと、幸に不肖の㋸的孫幻住老人あつて出でて、㋾從頭に整頓して、舊によつて㋻圓陀々地、甚生だ觀るべし、夫れ之を後中峰と謂ふものか、如し未だ證據せずんば、請ふ這の葛藤を把つて、子細に眼を著けて看よ。

壽位の下に書す。㋕

㋬是れ亦中峰の法語に附する跋語なり、珍禪者に示すと云ふ題は穩かならず、然れ共只其の傳燈の由來をのべて、開花十方世界を照すの道程を示すのみ、末文妙年英俊と見れば必らずしも當らずと云ふことなし。

㋣天目山は即ち中峰和尚の道を振ふの所なり、本朝の元應庚申師年三十一歲、天目中峰和尚道を華夷に振ふと聞き、舶便に附して天目山に登る、日方に晡に及ぶ、積雪庭に滿つ、同行の然可翁、俊鈍庵、與俱に侍立して退かず、峰、師の臂端に獨り「明日來也」四字を書す、師徑に後架に趨つて水

愚平生、人の爲めに知らるゝを欲せず、是を以て、巖壑に棲遲して、積んで年あり、邇來意はざりき、多く同志あつて尋訪し、屋を並べて散處す、關防するに由なきなり、亦是れ報緣の爾らしむる、之を奈何ともするなきなり、卽休の覺兄、愚をして㋵如上の數字を寫さしめ、永く身に隨へんと欲す、蓋し道義の過厚のみ、愚老いんたり、殘喘幾くもなし、我が兄、愚が物故せしを聞かば、此の軸子を把つて、急に須らく火くべし、愚は深く閑名を留取して、久しく塵世に在くを嗟する者なり。

朴禪人の十願十誓の文の後に書す。

關西愚隱の朴上人、翅だ參道の志酷だ切なるのみにあらず、旁ら亦㋟頂を煉り指を然して、刻苦精修、殆んど身を遺るにちかし、矧や嘗て十願十誓の文を設けて、之を護すること、恰も㋹目睛の如し、每に人に謂つて云く、「寧ろ此の生身を三途に淪墜せしめて、多劫を經歷せしむべきも、肯て如上の誓願若く毫髮計りを破犯せず、あらゆる善因は、專ら用ひて無上佛果菩提に回向せんもの」と、余嘉嘆の至に勝ふるなし、筆に命じて厥の文尾に書して以て贈ると云ふ。

を掬して之れを洗ふと。

㋠如上の法語、蓋し中峰の法語ならん。

㋷中峰の道三傳、中峰は密庵傑禪師なり、双徑の中峰に居る、三傳は破庵、無準、雪巖の順序なり。

㋦破沙盆は破れ「すりばち」なり、又ものを研く器也、密庵、應庵に答ふるの話頭にあり。

㋸的孫、雪岩は高峰に傳へ、峯は中峰に傳ふ、故に中峰は雪岩の的孫に當る。

㋾從頭に整頓、初めから、やりなほすの意。

㋻圓陀々地、圓くして美麗なること玉の如きを云ふ、陀々は梵語此には圓といふ。

㋕二卷の終に了達禪人の牌下に偈を題せらる、是は牌下に文を記せられしなり、釋迦の牌でも達磨の牌でも文殊の牌でも唐紙半切位に大書してあ

㋞遺誡。

老拙如今世緣將に盡きんとす、因つて諸の法屬等に㋡顧命す、余が溘然の後を待つて、宜しく林下に迹を晦し、火種刀耕して、一生を終ふるを圖るべし、㋧契經に曰く、「當に㋤閙閙を離れて、獨處に閑居すべし、山間空澤云々、」是れ乃ち吾佛最後の慈訓なり、寧んぞ遵奉せざるべけんや、汝等各々精嚴勤修せよ、庶はくは、袈裟の下に向つて人身を失却せざらん、是れ余が深く汝輩に望むところなり、汝等余の氣の絕ゆるを見ば、急に須らく㋵收窆すべし、切に遺骸を留めて、以て人に之を見せしむべからず、土を掩ひ石を疊み、既に畢らば、只だ首楞嚴神咒を諷すること一遍せんのみ、然る後、㋲熊原を把つて㋗太守に還し、茆庵を以て高野の父老等に付與して各自に散じ去れ、父老若し又固辭の意あらば、汝等諸の道友と相議して、一老成の宿衲を請じて、以て庵主に充て、佗の柴水の便當を討ぬる底の雲水兄弟の爲めに、一夏一冬、安禪辨道の所在となさんも亦可なり、餘は復た言ふべきなし、遺屬遺屬。

遺偈。

り、昔しは高德に賴んで牌名を書ひて貰ふたものである、大燈國師や一休和尙の書かれた牌は所々に存在して居る。

㋵如上の數字、寂室禪師の名字。

㋟頂を煉り指を然す。梵網經に「身を燒き、臂を燒き、指を燒くべし、若し身臂指を燒いて諸佛を供養せずんば、出家菩薩に非ず」と、又禪門寶訓下に、「黃龍積翠に居る、病に因つて三月出でず、眞淨、宵夜懇禱す、以至、頂を燒き臂を煉つて仰いで陰相を祈る」と。

㋪目睛云々。中峰雜錄上に「佛印元禪師、痛論の文に曰く、已悟は益々持守すべし、盤水を擎ぐるが如く、至寶を執るが如く、目睛を護るが如く、危險を踐むが如し」と。

㋞師貞治六丁未九月一日入滅、壽七十八歲、末後の垂誡也。

㋡顧命、書の顧命の註に「顧は

屋後の青山、檻前の流水、㋼鶴林の雙趺、㋨熊耳の隻履、又是れ㋔空華空子を結ぶ。

跋。

寂室和尚㋗南遊の後、跡を岩谷に晦まして、世と邈如たり、人事を謝遣し、筆を絶すること久し、晩年衲子の懇請によつて、已むをえざるに迫られ、往々一言半句江湖に流落す、或は爭ふて暗誦し、或は私かに傳寫す、烏焉の誤り蓋し亦少からず、其遺失を恐れ、本に據つて印行し、敢て加損せず、差誤なきを望むのみ。

時に㋳永和丁巳冬節の前三日、釋沙門性均謹んで白す。

還り視る也、成王將に崩ぜんとす、群臣に命じて康王を立つ、史其事を序して篇を作る、之れを顧命と謂ふ、死に臨んで回顧して命を發する也。」

㋭契經。十二部經の一、梵名修多羅也、この文は遺教經。

㋬闤闠。市門を云ふ也。

㋶收え。棺を土に下す也、埋沒の意也。

㋰熊原は永源之前郡也。

㋒大守は江州大守佐々木氏賴公を云ふ也。

㋼鶴林の雙趺、沙羅雙林に於て釋尊入滅の時、世尊の大悲二足の千輻輪相を即現して棺外に出し、迦葉に廻示し、千輻輪より千の光明を放ち、徧く十方一切界を照し、還た棺に入る封閉して故無なしと。

㋨熊耳隻履。達磨入滅後、熊耳山に葬る、後三年魏の宋雲、使を西域に奉じ回るや、祖に

葱嶺に逢ふ、手に隻履を携へ、翩々として獨り逝く、雲問ふ「師何處にか行く」と、祖曰く「西天に去る」と、雲歸りて具に其の事を說く、門人壙を啓くに及んで、唯だ空棺、一隻の革履存す焉、朝を擧げて之れが爲めに驚嘆す、詔を奉じて遺履を取り、小林寺に於て供養すと。

㋔空華云々、楞嚴義疏四上「相を觀る元無し、指陳すべきなし、猶ほ空華の空果を結ぶを邀つが如し。」

㋗南遊。雪堂の拾遺錄に「五祖字を逐ふて蓮經を禮す、一夕屎の字に遇ふ、唱禮せんと欲して遽に疑つて乃ち諸老宿に白して云く、如何ぞ屎の字亦稱して法寶とせんと、老宿曰く、汝が所問によらば以て南詢すべし、汝正に是れ宗門中の根器也と、祖遂に南遊す。」

增補

俊上人に示す。

昔し僧趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性有りや無しや」と、云く、「無し」と、只這の一字、便ち生死の根株を截斷する利器、本來の面目を照破するの鏡光也、汝只だ二六時中、四威儀の內、諸緣を放捨して、一片に打成して、鐵橛子を咬むが如く、栗棘蓬を呑むに似て、參じ去り參じ來つて、斯須少間も退志あること靡く、忽爾として漆桶を打破せば、心華發明して、十方空を照らさんか。

南遊は善財童子の故事による、卽ち行脚の意に用ふ。

㊉永和丁巳は禪師沒後の十一年也、此時此の錄初めて出版せらる、寬永中再版して一錄の行狀を添へたり、其後元祿十年に至り四卷本の頭書本出づ、此の時寬永の誤謬を訂正せしが、更に五十餘年後の寬延四年に至り、元祿頭書本を重刊冠注と改め出版す、此時寬本、木活本、元祿本の三種により、各卷末に校譌を添ふ、此板今尙存す、然れども是れ亦校正疎にして新たなる誤りを添ふる處多し、其永和版の舊本は甚だ少し、然れども尙所々に珍襲せらる。

國譯永源寂室和尙語錄卷之四　終

近江州瑞石山永源禪寺開山敕諡(イ)圓應禪師寂室和尚(ロ)行狀

師諱は元光、字は寂室、世姓は藤氏、作州の高田縣に隷す、(ハ)村上天皇の時に當つて、(ニ)小野宮左府實頼公政を攝す、其の玄孫、小野の宮少將某、某を生む、某平氏の女を聘して、師を生む、寔に(ホ)伏見天皇の正應三年庚寅五月十五日也、母氏憂なく、神光室に滿つ、宗族皆賀して曰く、「此の兒必ず異人たらんか、祥何ぞ斯の如くなるや」七歳のとき、郷閭の群兒、小魚を釣る、纔に之を得れば則ち師に屬して護せしむ、師謂らく、「此の魚微物なりと雖も、皆命あるの屬なり、其れ殺すに忍ぶべけんや」と、悉く縱つ、群兒怫然たり、(ヘ)丱角より天稟超慧なり、父母命じて釋に歸せしむ、遂に作の舊梓を辭して、京の東福に造り、(ト)大智海禪師に依つて緇を披す、一日姨母延いて(チ)葷を茹はしむ、師色を正して曰く、釋門に入るもの、豈佛禁を犯さんや」と、聽かず、斯の年十五、落髮受具して、江州の田上縣に適く、偶一僧の(リ)關より返つて宴坐するを見て、心竊かに愛慕す、此

(イ)圓應禪師は北朝第四代後光嚴天皇應安二年賜ふ所也。

(ロ)行狀は蓋し死者の世系名字爵里、行治、壽年等の詳を具するなり。

(ハ)村上天皇は第六十二代也。

(ニ)小野宮左府、太政大臣忠平公の嫡男、攝政實賴公なり諡して淸愼公といふ。

(ホ)伏見天皇は第九十一代也。

(ヘ)丱角。兩鬢の「ちごまげ」、小兒の結髮也、故に幼少を丱角と云ふ。

(ト)大智海、東福寺第七世無爲昭元禪師。

(チ)葷を茹、莊子人間世に出づ、顏回が私しは貧亡で酒も飮まず葷も茹はず、物忌みは充分

より離文字の法を學ばんと要す、一日衆に隨つて茶を摘む、一僧あり、師を視て、以爲らく、「奇(ヌ)貨なり」と、謂つて曰く、「汝の才不凡なり、胡ぞ其れ此に(ル)匏繫せらるゝ、方今關左に約翁儉公あり、天下緇徒の龍門なり、汝儻し彼の鑪鞴に入らば、則ち大器必ず成せん」と、師其の言に依つて、乃ち其の僧を拉して偕に行く、翁時に(ヲ)禪興の席を董す、師到れば則ち弟子の禮を執る、前夜翁夢らく、「諸聖降現して、光明山河を照燭するが如し」と、故に元光を以て法諱となす、瑞を志すなり、德治二年、約翁公命に膺つて、京の建仁に(ワ)視篆す、師湯藥に供奉す、此の時徒弟數輩、班次に列す、時論紛然たり、翁曰く、「古の善く人を用ふる者は、內親を避けず、外讎を避けず、惟だ材を是れ庸ふるのみ、流俗の言我に於て何渠ぞや」と、職既に滿ち、潛かに和州の安部に詣り、文殊の像前に於て七日を期して(カ)煉頂す、修道の成るに抵ることを祈るなり、業畢つて又翁に侍す、翁適々不安なり、師問うて曰く、「如何なるか是れ末後の一句、」翁驀面に打つこと一掌す、師豁然として領悟す、時に十八歲なり、明年偶々雪逹磨の頌を作る、曰く、「暫く空華を借つて半標を示す、普通年の事未だ迢々なら

出來てゐると、茹葷の二字之に本づく、葷は五辛也。

(リ)關、關東より西歸せる也。

(ヌ)奇貨、珍らしき寶なり、天稟超慧を器物に喩へし也、奇貨居くべし、秦の呂布韋の言。

(ル)匏繫。瓢簞もほこりまみれに繫け置かれては用をなさず。

(ヲ)禪興は鎌倉福源山禪興寺也。

(ワ)視篆。新命晉山するを云ふ也。

(カ)煉頂。頭香を燒く苦行を云ふ。

(ヨ)一山國師は一寧一山禪師也。

(タ)毘尼、三藏經中の律なり。

(レ)巾匜、巾は手巾、匜は手を洗ふ器、柄あり水を注ぐに用ふ、巾匜に侍すは左右に侍すに同じ。

(ソ)芟潤は添消と云ふに同じ、非を去り善を補ふ也。

(ツ)桃李春風二千は世尊傳法以後の綿々たるを云ふ也。

(ネ)謝郎は釣魚の船にあらず、會

ず、西天此の土飄零の恨、縱使ひ春風吹けども消せず、」(ヨ)一山國師是の作を見て、掌を撫して稱賞す、延慶二年、約翁の誨を受け、金澤の慧雲律師に隨つて(タ)毘尼の學を習ふ、纔かに三月に洎つて、其梗槩に渉る、辛酸の攻むるところ、血爲めに溺す、廼ち舍てゝ以て去る、翁時に龍峰に住す、又(レ)巾匝に侍す、佛涅槃に大衆、頌を作り、(ソ)芟潤を約翁に求む、翁從頭より一々之を校す、卷尾に逮び、(ツ)「桃李春風二千歳、(ネ)謝郎は釣魚の船にあらず」の句あり、翁曰く、「此れ必ず光侍者の作ならん」と、果して然り、一山國師南禪に住す、師を擧げて(ナ)侍香たらしむ、時に歳二十八なり、文保四年師歳三十一、天目中峰和尙の道、華夷に振ふと聞いて、舶便に附して南邁し、天目山に登る、日方に晡に逮び、積雪庭に滿つ、同行の然可翁俊鈍庵と、與に倶に侍立して退かず、峰、師の臂端に於て、獨り「明日來也」の四字を書す、師徑ちに后架に走つて、水を掬して之を洗ふ、徑山の(ラ)元叟、保寧の(ム)古林、鷄足の淸拙、靈隱の(ウ)靈石、般若の(ヰ)絶學、華頂の(ノ)無見、天目の(オ)斷崖、皆偏く之を扣く、問答機縁に到りては、師敢て人に擧著せず、本朝の(ク)嘉暦元年丙寅は卽ち大元の泰定三年なり、是の年

元七、玄沙師備宗一禪師、幼にして釣を垂るゝを好み、小艇を南臺江に汎べ、諸の漁者に狎る、唐の咸通の初め、年甫めて三十、忽ち出塵を慕ひ、乃ち舟を棄て芙蓉の訓禪師に從ひ、落髮受具、布衲芒履食纔に氣を接して、終日宴坐す、雪峰其の苦業を以て呼んで頭陀と云ふ。

(ナ)侍香。百丈清規下、兩序章六に「凡そ住持、上堂、小參、普說、開室、念誦、放參、節臘、特爲、通覆、相看、挂搭、燒香行禮、記錄、法語、燒香侍者之れを職る」と。

(ラ)元叟。藏叟珍禪師の法嗣、杭州徑山原叟行端禪師也。

(ム)古林。橫川洪禪師の法嗣、金陵保寧古林清茂禪師、別號は休居叟、溫州林氏等。

(ウ)靈石。虛堂愚禪師の法嗣、淨慈靈石如芝禪師也。

已に歸機を理す、海中風作つて怒濤空を排す、滿船人の色なし、師目を擧ぐれば、白衣の觀音、空中に現ず、少焉あつて風濤威を霽め、長州に著岸す、暫く三角縣に居る、初め一山師を稱して鐵船となす、中峰更めて今の字を製す、頌子あり、焉を證す、東歸に逮び、中峰及び一時の哲匠贈言あり、同船の人見て之を珍愛す、乃ち殫く散與す、建武元年、備後州吉津の平居士、雅より師の道に嚮ふ、其の室竹居迎へて㋳廳事に館せしむ、師㋮恬然として茲に居ること三年、竹居宅を捨てゝ師に施し、韜光庵と名く、後に其の基を宏にし、改めて永德寺と號す、觀應元年庚寅七月九日、長勝寺の命あれども就かず、大元より還つて二十五歳を積み、備作の際に在つて、專ら韜晦をもつてこれに居る、其の地を歌島、吉津、安田、椎村と曰ひ、其の寺院は乃ち西祖、明禪、安國、慈廣、菩提なり、越えて明年辛卯、攝州の福嚴寺に㋘僑居す、又道友の招に應じて江州の往生院に住す、一日㋻西禪の長老を訪ふの次、天龍の夢窓國師に邂逅す、談話して漏盡き窓白きに至る、延文五年師歳七十一、江州の大守佐々木雪江居士、師の名行を重んじ、獻ずるに㋙卓錫の地を以てす、奥島と云ひ雷溪と云ふ、且

㋖絕學。靈雲鉄牛定禪師法嗣、豫章般若絕學世誠禪師。

㋷無見。淨慈方山寶禪師法嗣、天台華頂無見覩禪師。

㋔斷崖。高峰妙禪師の法嗣、天目山斷崖了義禪師。

㋗嘉曆元年は後醍醐帝即位の第四曆也。

㋳廳事は訟を聽く所也、而し今の別墅の如きもの。

㋮恬然は安靜也。

㋘僑居は旅寓假り住居也。

㋻西禪は元嵯峨天龍寺の前にあり。

㋙卓錫の地。梁の景泰禪師、惠州寶積寺に居る、水無し、錫を地に卓す、泉湧くこと數尺と。

㋓眉目。白氏文集、沃州山の禪院の記に、東南の山水越を首と爲し、剡を面と爲し、沃州の天姥を眉目となすと、蓋し秀麗の冠たるを云ふなり。

つ曰く、「斯の二境は吾州山水の㋓眉目なり、師性に任せて居れ、」明年康安元年辛丑正月十八日、雷溪に入つて攸を相る、其の林壑の幽邃なるを觀るに、頗る素抱に愜ふ、岨を剔り㋢蓁を蠲き、梵居を營締す、山中の吏民㋐子來の助を効す、既に成つて山を飯高と曰ひ、寺を永源と云ふ、（永は太守の諱を取り、源は其の氏を取る）後山を改めて瑞石と號するは、石の靈なるを以てなり、寶殿に㋚聞思大士の像を安ず、㋖悟都管之を塑す、是より先き工に命じて造るところ、收めて龕背にあり、俱に師の供養の語あり、所謂瑞石は、後門の壁下に置き、其の半稜を顯す、斯の石舊東峰の頂にあり、高野父老夢に感じて衆に告げて致すなり、其重さ挽くに數百人の力を用ふべし、而も纔かに十數人之を扛ぐに、石自ら行くが如くにして、寺に達す、時に以て神運となす、殿の㋒巽位に僧堂あり、師嘗て之に牓して曰く、「坐中の警策、只だ衣を惹き、席を敲くに、過ぐべからず、痛く竹篦を以て事を行せば、則ち或は他の心念を動じて、恐らくは道義を壞せん、各庵此法式を遵守せば深く庶ふところの者なり」と、㋱除饉女慈源、岸本村の腴沃を奉じて、堂裡齋粥の資に充つ、殿の㋯坎位に㋛石磴を作る、直に登ること數十尺、上

㋢蓁は穢に同じ。

㋐子來。詩靈台に、「靈台を經始し、之れを經し之れを營し、庶民之れを攻むる、日ならずして、之れを成す、經始すること亟かにする勿れ、庶民子の如く來る」と。

㋚聞思大士は觀音を云ふ也。

㋖悟都管。世に傳ふる元朝の佛工日域に來ると之れなり。

㋒巽位。易說卦に、「巽は東南の卦也」と、卽ち東南方を云ふ。

㋱除饉。凡夫六塵に貪著すること、餓夫の食を貪つて厭足を知らざるが如し、今貪愛を斷除し六情の饑饉を除く、故に除饉といふと。

㋯坎位は北方也。

㋛石磴は石壇也、又石磴に同じ。

㋽兌位は西方也。

㋪光明帝。實は北朝第四代、後

に地あり、平衍寬爽なり、三重の寶塔を置く、(エ)兌位の高臺を含空と曰ふ、廼ち師の遷寂の處となす、(ヒ)光明皇帝、親筆の手詔を賜ふて曰く、「山中平生提持の一句、授與せらるべきの由、寂室和尙に傳命せらるべき者なり」と、復た天龍寺の詔あり、曰く、「天龍寺住持職の事、學道宏達、人間の緇素、會下を慕ふところなり、(モ)霧豹の跡年尙し、盍ぞ(セ)獨善の地を替へざる、雲龍の感時臻る、宜しく(ス)兼濟の道を闢くべし、早く雷溪の幽栖を辭し、龜山の禪刹に入つて、叢林の規範を紹隆せしめ、邦家の安泰を祈り奉るべきに、者ば、天氣此の如く、仍つて執達件の如し、康安二年二月十五日、左少辨」と、(イ)鹿王院普明國師、書を寄せ、其の出世を趣す、其の書云々、書辭累幅、茲に載せず、貞治二年癸卯(ロ)建長の命を辭す、專使力めて之を強ふ、潛かに避けて伊勢に往き、事寢んで瑞石に還る、妙喜の(ハ)中岩月公、師の徵命に赴かざるを聞いて、書を寄せて激勵し曰く、「方今佛法陵遲す、豈出世度生に無心なるべけんや」と、師偈を作つて之を謝す、是の時毳侶景從す、(ニ)芳玉畹、夫(ホ)一關、圓月心、愚大拙等の如き、天下知名の士數十輩、會裡にあり、一衆二千人、澗に傍ひ、茆を縛して以て居り、精勵咨訣す、固に

光嚴天皇也。

(モ)霧豹。烈女傳二、「陶の大夫荅子、陶を治むること三年、名譽興らず、家富んで三倍す、其妻數諫むれども用ゐず、妾聞く南山に玄豹あり、霧雨七日、而かも食に下らざるものは何んぞや、以て其毛を澤して文章を成さんと欲して也、故に藏して害を遠ざく」と。

(セ)獨善。孟子盡心の上に、「窮すれば其身を獨り善くす、達するときは、兼ねて天下を善くす」と、窮達は道を云ふ也。

(ス)兼濟。一切衆生を兼濟する也。

(イ)鹿王。春屋實錄に、師諱は妙葩、春屋と號す、皇帝師を請じて道場に於て親しく衣盂戒法を受く、明年中使詔を齎して山に入る、特に國號を贈る、詔旨に曰く、「爰に智覺普明國師之號を加へ、以て天下一人

山中一時の盛事なり、六年丁未九月一日、滅を含空臺に唱ふ、先づ遺誡を書して曰く、「老拙今世緣將に盡きんとす、因つて諸の法屬等に顧命す、余が溘然の後を待つて、宜しく須らく、林下に跡を晦して、火種刀耕、一生を終ふるを圖るべきなり、契經に曰く、『當に閫閙を離れて、山間空澤に獨處閑居すべし、云々、』是れ乃ち吾佛最後の慈訓なり、寧ろ遵奉せざるべけんや、汝等各々精嚴勤修して、庶はくは袈裟の下に向つて人身を失卻せざれ、是れ余が深く儞が輩に望むところなり、汝等余が氣の絶ゆるを見ば、急に須らく收龕すべし、切に遺骸を留めて、以て人に之を見せしむるなかれ、土を掩ひ石を疊むこと既に畢らば、同志を勸めて、只だ首楞嚴神咒を諷すること一遍せんのみ、然る後、熊原を把つて太守に還し、茆庵を以て高野父老に付與して、各自に散じ去れ、父老若し又固辭の意あらば、汝等諸道友と相議して、一老成の宿衲を請じて、以て庵主に充て、佗の紫水の便當を討ぬる底の雲水兄弟の爲めに、一夏一冬、安禪辨道の所在と作すも、亦可なり、餘は復た言ふべきなし、遺囑々々、又偈を書して曰く、「屋後の青山、檻前の流水、鶴林の雙趺、熊耳の隻履、又是れ空華に空子を結ぶ、」書し畢つて筆を擲つて卽ち化す、世壽七十八、坐夏六十六、諸徒遺命を奉じて、全身を塔す、是時擧州の民㊇考妣を喪するが如し、凡そ僧尼を度すること千餘人、衣冠の族、法諱を授くるに至つては、則ち其の數を知らず、師化緣の將に盡き

の上の偈を擧す」と。
㊁建長の命を云々、義詮の公帖現に永源にあり。
㊄中岩。佛種慧濟禪師也。
㊂玉畹。南禪玉畹梵芳、春屋葩に嗣ぐ。
㊅一關。建仁寺一關妙夫。
㊇考、妣は逝きし父、母を云ふ。

んとするを知つて、前數日に方つて、㋣靈仲彌天に命じて祭文を撰ばしむ、文成つて師に呈す、師覽て太だ喜ぶ、後に二老眞前に㋠裝香して、各自に默誦するのみ、師の人となりや、顏角端偉にして、風誼簡遠なり、聿に超邁特偉の資を負うて、人と競ふの態なし、平居讀書を勉めず、而も一覽則ち之を遺すなし、文辭の典麗、偈頌の幼妙に至つては、咸遊戲三昧の然らしむるものなり、第だ雅より丘嶽に意あるを以て、遽かに身を㋷稠廣に脫す、㋦蛇山鱷水、慨然として南遊し、往古の聖跡を歷、名師の門戶を扣く將に以て殊軌を覈究せんと欲するなり、然り而して、桑域に旋つて、㋸國師の舊盟を渝へず、蓋し大唐國裡に禪師なきの意か、頃者杜撰の知識、禪道を將つて戲具となし、㋾捭闔揣摩の術を扶けて、三家村裡の竈婦傭夫を誑誘す、師懷を玆に痛ましむ、故を以て岩居川觀、確乎として應世の志なく、勢利を視るや腐芥よりも賤しく、王侯を待つことは浮塵よりも輕し、煨芋の烟の戶を出でんことを恐る、然り而して天下之を望んで以て佛法の津梁となす、瑞石に居るに曁んで、參徒日に臻る、聿に止むを獲ずして之を受く、師の意にあらざるなり、攝政二條藤公良基、博學洽聞一時の碩匠

㋣靈仲彌天。靈仲は靈仲英、彌天は彌天釋也。

㋠裝香。雲門錄に曰く「問ふ、如何か是れ佛出身の所、師佛前に裝香し、佛後に合掌す」と。

㋷稠廣。稠衆、塵寰などに同じ。

㋦蛇山云々、唯難所を云ふのみ、韓文公鱷魚の文に鱷魚の難を云ふあり。

㋸國師は佛燈國師を云ふ、寂室和尚十八歲の時一掌を喫す。

㋾捭闔揣摩、捭は排なり、闔は閉也、他人を排斥し門戶を閉づるなり、揣摩は人意を忖測するなり、人の鼻息を考へるの意、此四字鬼谷子に出づ。

㋻設利は舍利なり、戒定慧の熏修する所甚だ得べき難し、最上の福田也。

㋕金剛乘敎。昔し大毘盧遮那世

たり、師の眞蹟を觀て曰く、「世皆師の道德人に孚あるを稱す、而も書楷の末技と雖も、特に是妙あるを知らざるなく、」字畫火中に入つて燒けざるものの往々にあり、齒の落ちたると髮の剃れると、爭ひ取つて十襲す、後に之を看れば、悉く(ワ)設利を產す、小師道澄、始め(カ)金剛乘教に入る、厥の祖弘法大師の肉身猶ほ存するを聞いて、高野山に往いて一たび瞻禮せんことを祈る、弘法夢に感じて曰く、「汝我を觀んと欲するや、今(ヨ)化を近江州に旺にして、寂室禪師と稱するもの即ち是なり」と、澄洒ぐが如くにして醒め、(タ)程を兼ねて北に走り、中路に一(レ)幍子を鬻ぐ者に遇ふ、展べて之を見れば則ち師の眞なり、澄意に之を異とす、既に瑞石山前に臻れば、墟落あり、高野と云ふ、澄益々前夢の符會を忻び、速かに師に授禮す、師初め後生を以て知を(ソ)海藏の虎關の錬公に稟く、錬公適々作を過ぎ、厥の地の形勝を觀て曰く、「偉なるかな(ツ)師の肖たるや、淸淑の氣、篤く一人を生ずる者か、」錬公は宗門の(ネ)南董なり、其の言を立つるや必ず以あるなり矣。

(ナ)贊に曰く、南天の祖師如來所傳の法を以て、分つて教內教外となす、顯密異なりと雖も、同一教內なり、昔者檀林皇后、密法を弘法に得、弘法

拿、秘密眞言印を以て金剛薩埵に付し、龍樹菩薩に傳へ、轉々して大廣智に至る、下つて弘法大師に至つて日東に來る、即ちこれなり。

(ヨ)旺化。臨濟錄に「師化を旺んにするに正つて普化全身脫去す」と。

(タ)程を兼ぬるは晝夜兼行を云ふ也。

(レ)幍子。畫像を云ふ也。

(ソ)海藏は東福の海藏院也、虎關錬公は寶覺の子聖一の孫也。

(ツ)師の肖たる、所謂地靈にして人傑也。

(ネ)南董、左傳襄公二十五年に大史書して曰く、崔杼其君を弑すと、崔子之れを殺す、其弟嗣いで書す而して死するもの二人、其弟又書す、乃ち之れを舍す、南史氏、大史盡く死せりと聞き、簡を執つて以て往

生心、第八如實一道心、第九

盛に之を稱す、后曰く、「更に法の之に過ぎたる者ありや、」弘法曰く、「太唐に佛心宗あり、是れ達磨の傳來するところなり、熾に彼地に行はる」と、后乃ち弘法の徒慧萼法師に海に泛んで法を覔めしむ、萼遂に杭州の㋶鹽官國師に參見す、且つ太后の幣を通じ、仍つて其の上座義空禪師を請じて還る、是に於て皇后檀林寺を創し居らしむ、官僚指令を受くるもの少からず、然り而して、本朝時機未だ熟せず、播揚するに由なし、弘法豈遺願あるか、萼再び支那に入り、蘇州開元寺の沙門㋰契元を乞ひ、事を勒して㋒琬琰に刻む、題して日本國首傳禪宗記と曰ひ、之を羅城門の側に立つ、是に因つて之を觀れば、弘法已に敎外の宗の流通を欲するもの必せり、其の㋼十住心論を作つて我が宗を載せざるは、蓋し

く、既に書すと聞いて乃ち還る、と、又左傳宣公二年に孔子の曰く、董孤は古の良史也、法を書して之れを隱さず、と。即ち其明鑑を記するを云ふ。

㋤贊は美を稱する也、文體明辨に、其體三ありと、一に曰く、雜贊、二に曰く、哀贊、三に曰く、史贊、此れ蓋し史贊に屬するものならんか。

㋶鹽官國師。傳燈七、馬祖禪師の法嗣、杭州鹽官の鎭國海昌院齊安禪師也。

㋰契元。其傳を詳かにせず。

㋒琬琰。淮南子說山訓の註に「琬琰は美玉なり」と。

㋼十住心論。空海毘盧遮那經及び菩薩心論に則つて十住心論を著して、諸宗を品藻す、第一異生羝羊心、第二愚童持齋心、第三嬰童無畏心、第四唯蘊無我心、第五拔業因種心、第六他緣大乘心、第七覺心不

極無自性心、第十秘密莊嚴心、是也。

㋨諦信諦當、圓悟心要に、印禪人に示す、語に諦信、諦信と、即ち道を諦め信ずる也、諦當は單に諦め知ること也、玄沙曰く、「諦當なるは即ち諦當、敢へて保す老兄の未徹在なることを。

㋔前身後身否泰同しからず、前弘法と後寂室と境遇同じからず、故に或は內を說き或は外を說く、即ち時の分の宜き也。

㋗十八上。南泉曰く、「我十八上にして便ち作活計を會す」と、又趙州曰く、「我十八上にして破家散宅を會す」と。

㋳張皇すは張大すに同じ。

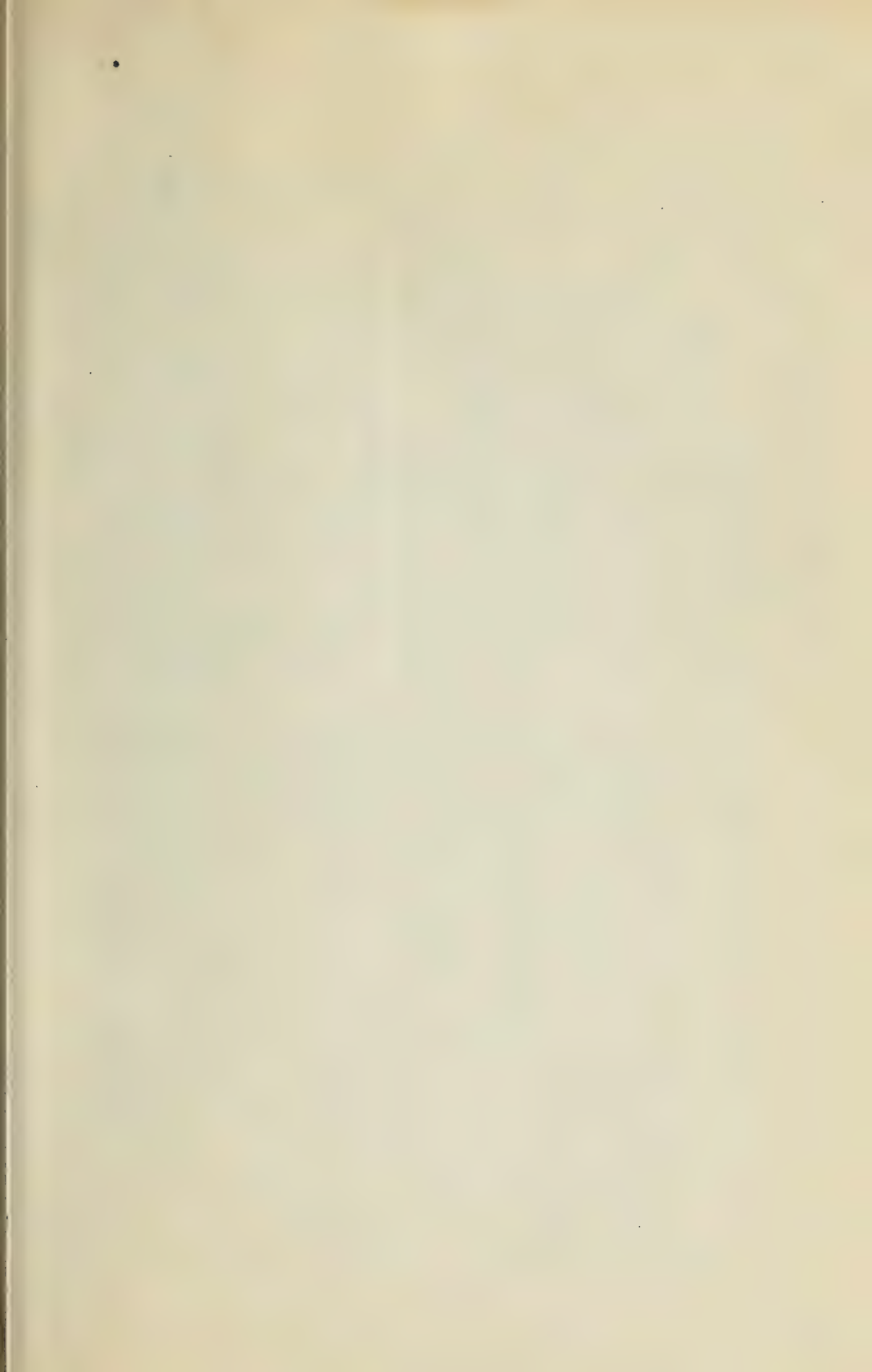
㋮阿字門。寂滅無爲安樂之田地也、眞言宗の阿字觀を云ふ也、密宗は阿吽の二字を玄要と爲す、阿吽は即ち不生不死也、古語に八識田中に阿字の一刀

知ることあればなり、五百年後、再び扶桑に現じて宿願を償ふ者か、然りと雖も、敎內の所談は、三機に漏れず、故を以て流通も亦遍く、聲光も亦纔なり、敎外の指すところ、專ら一類上に根機に被らしむ、㋨諦信のものすら尙ほ多く得難し、況んや復た諦當のものをや、宜なるかな、㋔前身後身、否泰同じからず、愚者以て疑を容るゝなし、嗟乎歲纔かに㋗十八上にして、忽ち儉師に一掌せられて臨濟の骨髓を徹證し、空手にして海に跨り、臂を掉つて諸大老の門に横行し、空手にして歸朝し、大覺正續の玄風を㋳張皇す、化を歛めて㋮阿字門內に歸入せんこと、亦遺恨なからんかや。

右昔時の年譜に據り、要を纂めて之を紀す。

寬永二十一年歲は甲申に次す。

永源住持一絲叟文守。

を下し、生死も又斷じ、涅槃も又截ずと。

永源寂室和尚語錄卷之一

偈頌

偶作

無業一生莫妄想、瑞巖只喚主人公、空山白日蘿窓下、聽龍松風午睡濃。

書金藏山壁二首

借此閑房恰一年、嶺雲溪月伴枯禪、明朝欲下巖前路、又向何山石上眠。

風攪飛泉送冷聲、前峯月上竹窓明、老來殊覺山中好、死在巖根骨也淸。

九月十三日遊田原村、投宿茅舍、同來諸弟皆曲肱就寢、獨開窓覩月聊寫老懷耳。

戊子季秋將半日、田原村裡宿煙蘿、看來五十餘霜月、幽興不如今夜多。

長州逸上人、袖出塊石、兩峽對峙、恰如擘青玉、中夾條白、直下若懸飛泉、凡寒巖空洞幽趣餘態、使人殊增丘壑之志、仍賦一絕贈之云。

故舊採懷示奇物、巑岏流瀑勢千尋、因思疇昔遊廬嶽、雙劍峰前獨自吟。

關西龍侍者高標淸致、眞叢林頭角者也、道聚山中共守枯淡、遽爾告別、以偈、仍與次韻壯其行色云。

雪後諸峰潑翠嵐、寒梅初綻野村南、臨岐一句只這是、三喚機前著眼參。

春日遊吉備中山韻

勝地千年寺、房房竹樹間、落花埋古徑、幽鳥叫空山、遊客凌晨到、歸程踏月還、留題誰耀壁、才拙媿追攀。

贈長勝專使謹禪者

使乎使乎不辱命、佳聲須是播叢林、盡情話到吾師席、月下寒蛩咽夜深。

蘆鴈二首。飛鳴宿食一隻翹立

湘岸慣雙宿、胡天成幾行、平沙寒日暮、獨立恨何長。

霜風吹秋老、楚甸稻粱稀、切莫呼眠起、夢飛可北歸。

密叟侍者、遠自都下建仁特來山中相探、夜話達旦、甚慰十年之傾想、今歸長州省師、留二偈而別、依韻奉謝云。

林下老來誰與期、夢魂幾度到京師、今宵閑卻安禪榻、燈盞添油話舊時。

嬾踏利門名路塵、千峰影裡獨凝神、故人俄把柴扉扣、又聽叢林事事新。

贈椿上人遊方

禪人來討贈行篇、暗把枯腸苦搜索、渾無一句可呈君、月照空山秋寂寞。

中秋値雨

指話以前正好看、覺天無滓影團團、頂門不具沙門眼、卻被中秋夜雨瞞。

寄靈叟和尚

五更起坐聽松風、算故人來半作空、不識何時埋臭骨、煩兄閑夢入荒叢。

賡韻酬雄藏主

不在交談與寄書、同參句子擧無餘、年來老弟多嬾僻、休罷區區問起居。

東南月皎海天晴、惹動高人萬古情、把沒絃琴彈一曲、風前誰是聽希聲。

寄靈叟和尚。在兵庫福嚴作

我此門頭接市鄽、那堪日日事紛然、百錢買得一柄钁、去斸青山安暮年。

重陽

凌晨掃葉立庭際、籬落西風露濕裳、時有山童來採菊、報言今日是重陽。

成親墓韻

身亡王事只名存、悲看荒墳長蘚痕、千古中山春寂寞、岩花香可返幽魂。

室山看花韻

野興催人靑晝長、行看岩院滿庭芳、僧從玉樹陰中過、鶯在瑤葩重處藏、擁砌應添山月色、飄窓又助瓦爐香、老來好景難多過、眼醉風光心欲狂。

遊八塔寺

一嶽壓三府、白雲覆碧天、峯高踰萬仞、寺古近千年、僧坐虛堂月、猿吟老樹煙、寄言浮世士、來此脫塵緣。

神根道中

怪石奇巖碧澗流、白雲紅樹夕陽秋、吳山楚水曾行徧、清興何如此勝遊。

佛涅槃

三界導師涅槃也、人天等是苦傷悲、鷄山二月花如錦、錯認秋風紅葉時。

送調上人之京

八月九月風月好、一聲兩聲鴈聲寒、公驗分明須進步、元來大道透長安。

再遊大和寺

此地得重遊、春殘院落幽、花難歸樹上、雪易點人頭、鳴竹風吹夢、烹茶客自留、明朝又携杖、去要臥林丘。

醻壽聖養直和尚來諭、僉爾同門諸法兄、辭長勝之命。

嘉音兩度到林巒、驚起午眠開竹關、寄語龍峰下頭角、一生放我得安閑。

寄大澤庵主

大士峰前思大澤、安心山下獨安禪、君今抱疾吾還老、來往不知能幾年。

曆應辛巳七月六日曉、偶夢將死、寫偈覺而記之云。

錯把黃金鑄鐵牛、草肥煙暖臥林丘、今年五十有二歲、且喜不耕還見秋。

建武丁丑六月廿五夜、夢中得兩句、覺而續之云。

人生倏忽同露電、計較何曾徒自瞞、萬事隨緣胡亂過、飽餐白飯看青山。

書椎村山庵壁

澗水下人間、巖雲過別山、聊聽幽鳥語、似喜野僧閑。

和韻夜話

三祇劫外舊寃讐、一夜山庵得聚頭、瞋恨怨言傾倒了、纏錢騎鶴下揚州。

謝訥堂和尚過訪

索寞春光巖下寺、高人金錫拂煙霞、空山日永將何待、唯有庭前一樹花。

宿西禪寺

火後西禪寺、門庭冷似灰、井河聲寂寞、嵐嶠碧崔嵬、唯有山雲宿、渾無俗駕來、上方老禪伯、古格復追回。

憶友人

山院春深客不來、空庭花落沒蒼苔、欲留流景怕無策、猶等佳人念未灰、身老尤宜居世外、慮閑只合臥巖隈、午眠一覺茶三椀、望斷千峰推闥開。

摘茶

枝頭葉底著精神、無限芬芳遠襲人、體用之中收不得、一籃漏泄十分春。

庚寅冬登備前金山、訪功上人幽居、援毫賦山中四威儀、書壁上云。

山中行、煙霞遠近失歸程、谿邊跌脚指頭破、流水聲和忍痛聲。

山中住、草衣藜食閱朝暮、千峰盡日入雙眸、不記青黃能幾度。

山中坐、石榻跏趺惟一箇、全非樂寂兼嫌喧、獨有閑雲相許可。

山中臥、高枕蘿窻縱怠惰、天風吹折老松枝、叵耐驚吾濃睡破。

寄倫上人

締交英俊自忘年、一夜馳情困枕拳、夢裡分明相見了、爐邊聽雪對談禪。

寄淨妙寶翁和尚

日聽聲光高耀天、衰殘依舊臥巖煙、西來三世重擔子、獨有荷山勞隻肩。

雪中寄東隆長老

庵外雪深積、庵中僧獨禪、同人如到此、共話普通年。

戊子姑洗之末、出遊而歸、忽覩北巖侍者見寄佳什、依韻寫懷云爾。

靑鞋踏徧幾春山、病翼倦飛今已還、慣待宿雲分半榻、日昏猶未掩柴關。

驪珠求可易、心友得尤難、獨弄閑中味、白頭對碧山。

北巖濟侍者天資英拔、而蘊藉淳素、頗有古衲之風、從愚游最久矣、實爲忘年友于、丁亥冬謝事慈光、欲止餅錫於西祖明禪之間、此計未決、俄來告辭、要復歸養愚庵全淸高之節、不可得而留遏、其志亦足可嘉也、聊摛拙辭贈之云。

多載聚頭誠有因、拾枯煑瀑寂寥濱、口甜心苦眞相識、義斷情忘道易親、高掩松關歸舊隱、俯看人世等浮塵、竹房留得老禪衲、獨喜靑山爲作隣。

聞鶯

鶴唳那曾堪比況、深花影裡弄幽簧、無人會得聲前旨、又逐春風過短牆。

次韻靜提藏主

可是憑君振祖風、曾聞宗說兩俱通、莫言千載知心少、且喜今朝同志逢、藏裡摩尼照襟字、金剛寶劍快機鋒、徹宵傾倒無生話、月上遙峯古澗東。

訪忍副寺庵居

何事拂衣深退藏、亂峯影裡卜禪房、雲居庫下有華延、終續楊岐六世芳。

震巖和尙前日見惠三偈、依韻奉謝、切勿示人、差招羅公之誚、一笑

撥轉白雲關捩了、人天眼目價聲增、龍生龍子尋常事、且喜吾兄熾佛燈。

深愛襟懷明似月、又添志氣烈如霜、浙東西與湖南北、共話還忘秋夜長。

宗眼高明道自尊、任教表率我空門、今朝坐斷靑峰頂、堪報先師不報恩。

再用震巖和尙韻

一出人間百不能、衰窮疎嬾日相增、餘生贏得安丘壑、靑眼看佗續祖燈。

一別到今三十白、蒼顏鶴髮老風霜、秋窓雨夜靑燈下、同打葛藤如許長。

末法僧中誰可尊、紛紛多走利聲門、淸高獨有雲峰在、奮志須酬佛祖恩。

夜宿千光寺

十有年前問故人、相看把手語如春、爭知此夜眠陳跡、月射寒窓風撼筠。

寒夜卽事

風攪寒林霜月明、客來淸話過三更、爐邊閑著忘煨芋、靜聽敲窓葉雨聲。

送曇浚之相陽

心到龍峰身不到、餘生已近鬼爲隣、如今喜得子前去、替我能除塔下塵。

送會禪人遊方

臨濟曾參黃檗禪、烏藤六十蒿枝拂、今爲君行贈此言、春山雨後碧如澱。

春日山行

滿頭疎髮撚銀絲、來歲逢春未可知、竹杖芒鞵多野興、山花看到幾株枝。

夜宿龍聖寺。月翁遺席

白雲峰下青嶂塢、一夜空房坐到明、露洗秋旻月初上、郎忙問訊老師兄。

訪俊鈍庵、夜話達旦、而見贈以偈、依韻謝之云。

一夕清談襟宇披、這回且喜扣玄扉、翻身跳下重淵底、奪得驪珠念八歸。

關西素維那、從淨智實翁老兄會中來、相訪巖居、而出示翁所惠偈、老拙輙依其韻贈云。

袖裡金槌影動時、桃花含笑柳舒眉、克賓不負老興化、又向寶山山下歸。

翡翠

何年離鬱林、彩羽照清泚、身居枯葦危、心在深潭底。

鶺鴒

不管弟兄難、獨翹原上石、貪看胡蝶飛、似破其幽寂。

三月盡

無限風光已索然、殘花猶自辭庭前、春歸定有重來日、人老何曾復少年、幻跡多留青嶂裏、幽懷常在白雲邊、閑窓晝永如經歲、課罷楞嚴隱几眠。

贈宏上人

白雲深處掩茅茨、慚媿禪人問舊知、相送出門兩無語、長松影下立多時。

贈清公上人歸省西禪和尙

鳥啼花笑興悠哉、知識門庭破草鞵、百衲如君無半箇、孤筇過我已三回、道情應是清秋水、世慮何其冷死灰、莫袖一雙窮相手、令師背上放光來。

戊午仲春、借榻於東禪之客檐、作涉旬之留、偶遊花嶽庵、訪于心公法兄、視其韜鏟之韻致、幾乎追配瓚亮之高風也、思謾遊江湖、垂二十載、以未獲歸休之計爲媿矣紫栗青蘋他日重來、從公乎水邊林下、非愚誰歟、因述俚語紀其志云耳。

寥寥清夜適幽情、蘿月松風孰共爭、不覺敲欄舒一嘯、知音只有曉鐘聲。

春入燒痕紫蕨肥、携籃拽杖出禪扉、袖中辣手未拈出、輸與竪拳那一機。

此生隱約倚寒巖、流涕難收口似緘、幽鳥不知頻話墮、亂峯影裏語呢喃。

澗水旋添茶鼎湯、山花時助石樓香、破蒲團上無餘事、又見林巓挂夕陽。

入定猿

盤陀石上禪、應是息攀緣、孤影沈巫峽、三聲斷冷泉。

次韻酬日峰和尙

一生贏得一身閑、此樂自知言及難、物外高人同趣味、杖藜時復到林間。

借忠侍者韻、寄幻居庵主、二首。筑前春日藏山徒弟

心字不須門上書、一拳頭上沒親疎、他時慧日與春日、照爍乾坤光有餘。

等閑相見俱傾倒、卻恨平生心跡疎、道聚情懷唯一日、尋常交舊十年餘。

清見方崖和尙、見寄一偈、拆成四絕酧之、

龍壽山中老古錐、人間難得箇頑癡、今朝自笑携籃去、拾栗餐時忘剝皮。

松風吹白鬢邊絲、應是秋深蒲柳衰、忽聽同參叢席盛、停鉏園手喜舒眉。

寄言保此千金重、巨鼇背上三山聳、播揚大教海潮音、那處叢林不悚動。

扶起祥雲零落時、須還鷲嶠老宗師、關門不鎖家風大、去去來來礙塞誰。

材翁侍者訪及野部新居、終宵擁爐清話、臨別聊成小詩、致謝云。

誅茅新卜空山塢、遠問幽閑意不輕、燒盡枯柴言亦盡、共聽寒雨打窓聲。

龜峰悅山首座、垂訪山中而留兩月、欵話傾倒、益見道義之厚、臨別聊寫拙章五十六言、以贈之云。

龜谷山中悅山叟、軒昂英氣出常流、攙南泉位老黃檗、掩古寺門陳睦州、衆衲服膺眞表率、佳聲驚耳有來由、這囘歸去躡峨擢、扶起宗風蕭索秋。

賢姪繁茂林、當初來備前安國、依止老拙、時歲未登志學、後十有二年、邂逅遠江野

部山中、執手話舊、相得甚歡、雖不同庵而住、數數來訪風雨不渝、既亦更涼燠、益見其道義之篤、老拙衰暮之極、又謀去遠方求幽棲地、今日一別、自非夢中者、無復會見之期、不免爲之悽然、仍寫與四十之字、後來若想念、宜取之見者耶、一笑。

幻影圖深隱、秋風袂欲分、法多清夜月、龍壽暮天雲、去後誰思我、可憐獨有君、精勤持志節、歲晚振斯文。

書海印庵扁榜後

吾佛當年輕按指、指頭放出大光明、庵中主得此三昧、月自珊瑚枝上撑。

示僧二首

箇事明明呈似君、不須特地策功勳、風和日暖黃鸝囀、春在花梢已十分。

參禪實大丈夫事、一片身心鐵打成、偏看從前諸佛祖、阿那箇是弄閑情。

賢姪石礀特特來訪、相陪旬餘、擁爐款話、甚感道義之篤、今又留偈而別、老拙不免、依韻謝之、敢望囅爾。

閒寂空巖霜夜月、薜蘿庵裏老夫情、明朝子又下山去、何日重聽敲戶聲。

賡翁和尚悼復庵和尚韻

古佛攝光聊誡徒、休言今日入無餘、禪參幻住人皆委、義在空巖我弗虛、塵積趨風群衲榻、篋殘問道搢紳書、年來宗社增寥落、只向蒼蒼打幾噓。

老弟特來瞻拜、偶師兄暫出、便欲歸去、而日既夕矣、一夜獨坐西軒之下、聊述五十

六言、以攄所懷云、伏希晒爾。

玉磵師兄和尚几下。

老龍隱是我知心、特問幽棲入邃林、寶杖凌晨何處去、空房投宿覺更深、照人山月全顏色、洗耳松風正語音、可謂這回眞會見、明朝脊脊下青岑。

臘八因雪

黃面今朝成道了、卻將禍事惱人天、我儂求得星兒火、燒爛枯柴看雪眠。

康安辛丑春、余誅茅江州飯高山下越谿之上、時有松侍者、蓋余舊識空室老師高弟也、寓于百濟僧舍、數數來見訪孤寂、雖相對移時、多是不交一詞而去、然其英邁之標、粹美之韻、藹然溢于眉宇之間、竊喜、衰暮偶得忘年友于也、一日告別、東歸受業、余亦不免、爲之增黯然耳、袖出紙需語、將爲再會之記、因卒摛二十八言、以贈云

老來生鐵作心肝、一句何曾上舌端、今日爲君通線路、西風霜葉滿谿山。

余忘年端友悅雲峯、一別二十有餘載、夢寐想念不已、一日忽扣巖扉、執手話舊、相得甚懽、而亦見惠妙偈、唱歎之餘、依韻奉謝。

蒼顏白髮經年別、彼此昔人非昔人、今夜肝腸傾不盡、曉窓霜月落氷輪。

與周姪

當信吾宗無語句、爾來得得欲何求、草鞋跟底西風急、八月依然是仲秋。

夜宿向陽寺

夜宿向陽山裏寺、開基尊者我知心、參拜壁間遺像立、春禽啼斷綠松陰、

鳴海浦

幾人東去又西還、潮滿沙頭行路難、會得截流那一句、何妨抹過海門關。

偶作

卽心卽佛鏡裏像、非心非佛火中氷、雨過雲開倚闌眺、遠山無數碧層層。

平生渾不愛玄談、多嬾所須唯黑甜、老鼠偸咬牀脚響、日穿疎竹照西簷。

與知足禪者

如何是佛卽心是、梅山梅子熟多時、苦風酸雨村烟斷、日暮行人迷路岐。

寄圭巖方書記。時住圓林寺

吾兄歸隱舊園林、衰朽猶居雲壑深、又是天寒歲云暮、擁爐聽雪憶知心。

相陽瑞侍者、迂訪山中、款話一宵、厥志可嘉、且曰、欲還故里省覲先師靈塔、庶得一偈以爲途中警策耳、余老矣、不辨平仄久之、然懇求不已、卒迅筆贈之云。

潭北湘南客夢驚、一笻千里問歸程、誰知綠水青山外、無限風光畫不成。

書西明寺壁

去春此地尋花到、今日又看黃葉秋、嶺上白雲凝不動、自慚衰朽好閑遊。

休耕庵

閑田一片在山前、耒耜抛來三十年、只採松花充午飯、煙蘿深處掩扉眠。

示村上人

道人來扣我柴門、欲把參禪旨要論、莫怪山僧嬾開口、老鶯啼斷落花村。

辛卯歲口占

四海煙塵幾日收、山林朝市盡戈矛、昨宵一夢金難換、聊入無何鄉裏遊。

遊古靈山

爛卻靈山古蘭若、春來尚自有遊人、二千年遠岩前樹、花引頭陀笑轉新。

贈達禪者之少林禮祖

大道本通達、休將心覓安、老胡肉猶暖、嵩嶽倚天寒。

謝謙侍者惠蠟燭韻

白雲青嶂石谿邊、可惜長年掩戶禪、文武火光高萬丈、憑君要看一燈傳。

和光知客韻

客來與我投花偈、字字如珠宗眼高、萬別千差俱截斷、且驚句裏有吹毛。

戊戌秋初投宿千馬郡如意寺、檀那明海一見如故、拍掌清談、秋宵猶短、仍留一偈而去、他日取之見、則與對余同也。

馬村信士號明海、雖在家中勝出家、只使道情堅密去、那憂鐵樹不開花。

與翼姪訪石渚客居

道人蹈雪問寓舍、月照寒窓坐對牀、瓦鼎烹茶春一盞、豈同政老橘皮湯。

定巖一侍者、於余有宗黨之瓜葛、遠來山中相共攻苦食淡、屢閱居諸、酷見道義之篤、今朝忽告辭、而歸覺雄師翁舊隱、余殘齡既逼桑榆、恐無復會見之日矣、老懷爲之悽愴而已、因攄俚語以壯其行云。

三年聚首空巖下、未暇傾腸亦瀝肝、此地須留末後句、歸來爲問屋頭山。

天關老兄來山中、一夏道聚、日夕相共逍遙、或時論懷、至于結角羅紋處、彼此擧手搖曳而已、今趁秋涼告歸舊隱、而見示佳什一篇、依韻以贈云。

蹈遍天涯海角還、誅茅偶得此幽閑、白雲實是無心友、因憶古人分半間。

老拙一生、寄幻影乎山色水聲之中、邇來經由古江飯高山下、林谿幽邃頗愜野情、因築室數椽、安眠燕坐、只圖居此俟殘喘盡耳、旋有愛樂空閑之道流、憧憧沓臻、松根石上誅茅散處、蓋物以類聚、所以理之令然歟、關西薰聞叟、亦其一也、夫爲人爽拔精敏、孜孜爲道、眞佳衲子、有時從容語曰、昔辭親離鄕之日、自謂、吾早徂大方、撥草瞻風、依棲良道善友、晨夕咨參、究明己事、報父母劬勞之恩、酬佛祖覆蔭之德、幸獲挂錫名藍、荏苒十霜於茲焉、同閱伏臘不下五七百衆、屆于要擇其一人、將爲言行之師、何止若撥波求火也哉、凡屬見聞、非唯焦敗菩提種子、殆可滋潤輪回業根、深知今時一日出隨于衆、萬劫失利乎己之必矣、因憶古人法席全盛之時、尙逃名跡累、茅茨石室果食澗飮、終身與世邈如、嘗聞、爲僧須是居巖谷、又云、榔栗橫擔不顧人、直入千峰萬峰去、吾今忝攀隱哲之勝軌、拂衣遠引、永歸雲山深更深處、乃竊

自誓、寧可將身投火坑、不復脚跨叢林門、寧可窮死荒藪下、不謂搢紳豪富門、寧可枉遭斷舌災、未悟不妄談般若、予聽其詞至當痛的、不覺涕下嘉歎久之、仍迅筆記取系之以二十八言贈云。

西山亮去唯幽谷、南嶽瓚亡空白雲、追慕清標高格者、又來巖下獨尋君。

康安辛丑、余投老江之飯高山下、時霜林果侍者、自京師來、同守枯淡、經春抵冬、余愛他天資絕倫、而不與聰明之所惑、孜孜兀兀斯道斯勤、敢無斯須少間慮棄底工夫、一夜擁爐閑談之次、語曰、吾陪衆之日、嗜好古書、幾乎廢寢忘餐、忽有自省、學解機智勵即長無明、增我見、殆爲求聲利之基本、寧非生死之根株乎、不如、不以元字脚留于心上、甘作百不會百不知底漢、退步就己、以悟爲期耳、亦思古人大法既明之後、尙逃物迹之累、或一入西山、永不復返、或谿流菜葉、始爲人知、或有世事悠悠不如山丘、臥藤蘿下、塊石枕頭等句、吾儕何人乎、只戀聚首打閧、徒問裘葛、今後誓不復入衆、追蹤隱哲芳躅、斷送斯生耳、余益嘆其機見高妙、實非碌碌餘子所逮、爲偈以贈云。

我擇江山深處住、谿頭石徑看雲臻、稺龍雛鳳英靈子、殘月長庚衰暮身、共掩茅茨庭積雪、旋燒榾柮室生春、莫言法社今岑寂、異日林丘自有人。

贈鏡庵主

卽心卽佛太郎當、非心非佛絕商量、芒鞵蹈破關山雪、處處寒梅撲鼻香。

和靈叟和尙韻

丘嶽襟懷氷雪面、庸流滿世少斯賢、可憐虛度光陰了、不見高標又十年。

芝巖書記、累枉顧山中、足見不忘道義、況亦惠以佳什、唱歎不已、媿其續貂、不敢攀韻尾、別寫小偈奉酧、切勿出示於人、只將去前頭糊窓、或是覆瓿、方知老拙用心之勤矣。

送收書記

年老身窮人所棄、吾兄何事問庵居、臨行求語無可說、强豎拳頭當贈車。

掃除夫子文章印、擊碎如來藏裏珠、一策春風阿剌剌、此行那敢涉脩途。

水車

奔流光裏機關立、便轉曹谿大法輪、器器相傳無異味、群生一洗渴心塵。

淸居軒

靑山一抹隔紅塵、蘿月松風能卜鄰、機境都來高坐斷、寥寥不見到門人。

成親墓

含忠殞命最堪憐、掩恨蒼苔二百年、無事休來平氏客、恐驚泉下永宵眠。

中秋偶作

中庭無人月自明、索索金風入衣裓、旋拾落英盈地香、冥鴻聲遠情何極。

月到中秋最利害、使人特地惱閑情、一年三百六十夜、輸卻今宵半刻明。

山居

不求名利不憂貧、隱處山深遠俗塵、歲晚天寒誰是友、梅花帶月一枝新。

丙午歲試筆

山中氣象卽辰新、盡是明心見性人、添得滿空飄瑞雪、梅開五葉一花春。

一毫頭上發春容、徧界藹然和氣濃、莫管山僧頭已白、曉來雪覆萬年松。

宿金剛寺

隣寺屢來遊、通宵談未了、山村無更鼓、窓白覺天曉。

耕月

趂起鐵牛頻著鞭、山前何處是閑田、一犂雨過千峰外、玉兎推輪下曉天。

無參

當處知非放下休、有何箇事可馳求、南方丫角小童子、空向百城煙水遊。

江月

渺茫楚水拍空流、潮撼錢塘夜不收、玉鑑光寒萬波底、依前天上一輪秋。

遁巖

塵世逃蹤如避秦、碧松崖下寄孤貧、寥寥無鳥含花落、不許空生來卜隣。

竹隱

爲憐貞節與虛心、特地移茅更入深、休擲片甎輕一擊、閑聲恐是落叢林。

竹堂

憶昔香嚴一擊來、六門長對遠峯開、茫茫摘葉尋枝底、多是空從閫外回。

孤雲

一片無羈自在飛、卷舒開合更何依、笑他多是從龍去、獨向舊山深處歸。

雪樵

風攪空花片片飛、老盧提斧出柴扉、自知徹骨寒來重、擔取無根樹枝歸。

要翁

休把三玄排列去、寧將至德比家風、是佗親切爲人處、老矣指西還作東。

別宗

雖離標月指頭邊、不是拈華微笑禪、聞說泥牛參木馬、迦文法派更流傳。

悟山

自從除卻礙膺物、拔地高風萬仞寒、一點迷雲飛不到、峰頭夜夜月團團。

慧海

一點靈知因定發、無邊香水納衆流、泥牛鬪入洪波裏、高吼珊瑚明月秋。

堪叟

面上唾痕如雨點、耳邊惡語似雷轟、長年一種平懷去、添得眉毛霜幾莖。

月翁

坐斷廣寒宮殿高、天風吹鬢半霜毛、光吞萬象無邊表、烱烱雙眸老益豪。

柏翁

千年貞操伴松根、蒼老勢如龍屈蟠、今日叢林梁棟漢、看來盡是我兒孫。

本閑

深窮萬法徹靈源、豈與末流同日論、物外寥寥常獨坐、任他地覆復天翻。

敬庵

動靜常居愼肅中、何人不仰這家風、低頭獨坐茅簷下、百鳥潛蹤春晝空。

雲叟

舒卷無心轉淡然、千峯萬壑幾經年、既休爲雨從龍去、自有兒孫垂布天。

鑒翁

揩磨淨盡一靈臺、曠劫古菱花正開、照破未生前面目、雪眉掀卻笑哈哈。

通叟

萬法根源都達了、任佗年老亦身閑、卻將千聖流傳底、分付兒孫高掩關。

友山

茫茫塵世少知己、眼界蕭條冷似秋、要見渠儂眞伴侶、千峰萬壑碧凝眸。

西峰

五天獨聳勢巍然、高壓東方萬八千、寸步不移窮到頂、衲僧脚下是通玄。

悦堂

慶快平生非等閑、燈籠露柱笑開顏、誰知千古分明意、大坐當軒風月寒。

怡雲

我此山中心悦適、清奇冷淡舊相依、倚欄盡日堪縱目、卻怕從龍爲雨飛。

嬾庵

獨遻疎慵謝萬緣、柴門深掩度殘年、對人猶自忘開口、莫怪無心强豎拳。

喝巖

忽雷轟破太虚空、嶮布危分幾萬重、千里聞風驚吐舌、啼猿尙在月明中。

月窓

氷輪高輾碧天秋、光透虚櫺灝氣流、内外玲瓏常不夜、如何著得睡獼猴。

月屋

圓未圓前眼豁開、茅茨變作玉樓臺、縱超物外南泉老、不許敲門推戸來。

玉斧修成幾度秋、瓊樓金殿類難侔、直饒光境俱亡底、爭似且居門外休。

石室

嶄巖函丈誰能入、戸牖堅頑鎖蘚痕、碧眼嵩山面寒壁、黃頭摩竭掩空門。

無塵

倒拈生鐵禿苕帚、驀忽翻身一掃來、普請諸人看脚下、閑閑地上絕纖埃。

月山

圓未圓前須著眼、屋頭靑嶂廣寒宮、若從光影那邊看、雲鎖煙籠千萬峰。
桂輪高挂碧天寬、萬朶峯巒玉一團、巖下空生腸欲斷、孤猿叫落五更寒。

永源寂室和尙語錄卷之一終

永源寂室和尚語錄卷之二

大林

森森植立閻浮樹、枝葉交加歲月長、覆蔭恒河沙數客、炎天無日不清涼。

字山

拈起毫端義炳然、孤峰峭峻勢凌天、更從一點已前看、未必須彌到半邊。

順叟

與物相逢未曾逆、得隨流處且隨流、滿頭白髮三千丈、餘算今年八十秋。

古巖

不落今時高著眼、玲瓏八面碧崔嵬、欲知空劫已前事、且向懸崖撒手來。

竺雲

靈鷲峯頭膚寸興、五天便見影層層、幾回爲雨霑沙界、歸伴半間分昰僧。

空極

諸法以何爲座也、十方不立一微塵、是心窮至無心地、選佛場中及第人。

竹澗

一兩莖斜三四曲、當頭直永截根源、後來末學論枝葉、昨夜前谿撈月痕。

樵屋

榮枯直下一刀斫、擔取歸來谿畔家、賣與買人人不見、柴門高掩臥煙霞。

腰斧擔歸枯爛柴、茅廬只是傍谿棲、盧郎常入新州市、門掩寒雲日又西。

石澗

最磽确處平如砥、下有寒谿徹底淸、大小山中閑佛法、流傳將去太忙生。

傑堂

門風挺出萬人頭、寂寞庭前丈草秋、正是衆中尊貴墮、燈籠露柱笑不休。

隱谿

韜光鏟彩幾春秋、澗底誅茅蓋卻頭、恐是世人知住處、莫敎柴葉放隨流。

默耕

口未開前談不二、山河大地怒雷轟、鐵牛鞭起一犂雨、祖父田園秋已成。

玉巖

一片無瑕耀萬山、玲瓏八面又高寒、連城至寶非難得、便請懸崖撒手看。

愚隱

棄才泯智返癡頑、拙跡嬾留塵世間、常祖移茅深處去、亮公拽杖入西山。

徹叟

百帀千重列祖關、一時拶透不爲難、而今年老無餘事、素髮垂垂心自閑。

茂林

深沈鬱密影敷榮、梁棟奇材集大成、因憶雄峯搊叢席、蔭涼徧界古風淸。

月舟

桂輪高挂碧天淸、萬頃煙波一葉橫、光境俱忘忘不立、蓬窗靜坐夜三更。

休庵

古德縛茅泉石邊、見僧尚自豎空拳、不如一歇一切歇、門掩煙蘿盡日眠。

西谿

萬里岷峨夾碧流、急如劈箭有源由、回巖亂石攔不住、直到東溟方始休。

大年

試將壽域配乾坤、無始無終寧紀元、算自威音至彌勒、聖凡是我小兒孫。

一澗

源脈何曾落二三、莫將支派涉多談、誰知不混常流底、涓滴全無湛似藍。

一叟

橫行湖海逞孤風、今古應無第二翁、試問生來年幾許、擡眸笑指太虛空。

松嶽

蒼翠豈惟千萬年、風濤激起祝融巔、大夫名不汚貞操、壓斷諸峯高插天。

不立

誰論是句與非句、一切剗除當處空、鴈字成行秋日晩、無端玷辱我宗風。

祖庭

少室門前平坦地、千年徒自長莓苔、一方明月光如雪、斷臂師僧殊未來。

華嶺

五葉開時萬木香、此山領得幾春光、誰能拈起誰微笑、絕頂寥寥又夕陽。

靜中

一室寥寥常獨坐、渾無外事動閑情、有時欲截窓前竹、耳亂風枝雨葉聲。

直翁

指人見性還迂曲、特地如何證父羊、爭似三家村裡漢、垂垂霜鬢事耕桑。

愚默

百不能時心已灰、飢飡渴飲放癡獃、雖然杜絕孃生口、誰聽其聲轟怒雷。

歸海

須知格物本無功、衆水皆奔渤澥中、當日馬師聊翫月、大雄峰頂浪翻空。

曉山

玉兎已過西嶺外、金烏初上最高峰、霜天欲曙唯寒色、萬嶽千巖一目中。

實堂

除二非眞唯一事、滿軒風月意分明、舉揚已得無虛僞、不管庭前荒草生。

覺海

大圓滿果浩無邊、自有金波湧拍天、始本雙忘忘不立、珊瑚枝上月嬋娟。

藏叟

恰似摩尼韜寶光、退身深隱幾青黃、殺佗魔佛窺難見、白髮吹秋坐夕陽。

雲澗

谿邊歸去抱幽石、似悔當初出岫行、從此凝然閑不徹、殺它流水太忙生。

日峰

金烏飛上碧層巓、暘谷咸池欲曙天、刹刹塵塵照臨下、孤高峭峻是通玄。

塵沙刹界照臨圓、屹立扶桑暘谷邊、脚下何人黑如漆、且來登此最高巓。

梅山

昨夜一枝凌雪開、千巖萬岳見春回、欲參心即是佛旨、向最高峯進步來。

竹叟

心虛體勁直還淸、獨立叢林稱老成、且喜此君增氣節、龍孫龍子逐年生。

霜山

青冥露結布寒威、染盡千林賬錦機、唯有孤峰白如雪、曉天雲靜峭巍巍。

春谷

雲罩桃花洞口横、如呼如答亂鶯聲、風光長是二三月、卻笑廬山錦繡名。

旨庵

得宗訣後便歸去、石室茅茨三十年、此意無人來問取、寥寥掩戶綠蘿煙。

萬山

等閑倒指算來看、疊嶂重巒歸十千、不涉數量高著眼、通玄峰頂插靑天。

方外

本色衲僧眞住處、遠離上下四維間、堪憐歷代傳燈祖、出得西天東土難。

釣月

垂絲千尺泛扁舟、意在金鱗幾度秋、今夜不空把竿手、玉蟾影動上鉤頭。

桃隱

煙霞鎖斷洞中空、獨愛花開爛熳紅、不許避秦人到此、夕陽流水幾春風。

松峰

風攪千年蒼翠動、山頭日夜激驚濤、似嫌凡木交枝葉、立處凌雲萬仞高

自聞

不是依他方現成、從來己事太分明、山堂夜靜聊傾聽、雨後前谿添得聲。

徹叟

翻身透得祖師關、百帀千重也是閑、老去渾無些子力、倚筇獨立看靑山。

無冐

佛語猶嫌到耳邊、等閑盻視祖師禪、渾無一法投吾意、只對青山高枕眠。

石叟

對人似有點頭心、苔髮垂霜歲月深、歷劫應無消日也、兒孫大小滿山林。

端堂

門庭徑直恰如弦、本是梁方又棟圓、古意分明人不薦、滿軒風月轉蕭然。

仙巖

閑名留得赤松子、陳跡徒存黃石公、猿叫蒼崖秋夜半、解空須坐月明中。

明海

心月孤圓影欲流、金波自湧幾時休、任教不昧靈源底、直見珊瑚枝上秋。

絕照盲者

工夫日用弄光影、歷劫何曾得道成、打破當臺閑古鏡、本來面目自分明。

高庵

欲知我箇誅茅地、三十三天在下方、佛祖無由仰望處、如何百鳥去忙忙。

月峰

靈山話與曹谿指、只在平常光影邊、峭峭巍巍高著眼、通玄孤頂一輪圓。

瑞巖

靈芝生處玉玲瓏、絕壁懸崖壓半空、昨夜孤猿叫明月、聲聲都喚主人公。

聞翁

飛聲宇宙似雷奔、側耳人皆喪膽魂、雙鬢霜寒秋已老、盡閻浮界是兒孫。

太原

昔年有箇師僧在、講罷法身歸我家、畫角風前唯一曲、寒梅落盡幾枝花。

信庵

養諸善法道之源、居此長年獨掩門、春過空山人不到、紫藤花落擁籬根。

默齋

毗耶杜口古風存、盡日寥寥獨掩門、箇事未曾輕漏泄、谿山檐外已多言。

天叟

碧霄漢是我生緣、俯看三千與大千、烏兎推輪過腳下、眉毛白盡不知年。

面鐵

堅頑露出六州邊、妙密鉗鎚打得全、鼻孔眼睛本來具、擬開口笑待驢年。

重雲

百千萬片成一片、那得輕輕出岫飛、鎖斷牛峰閑不徹、老融須掩半間扉。

潭月

古今誰下蒼龍窟、湛湛如藍萬丈深、唯有寒蟾光皎潔、夜來依舊落波心。

昨與防州騰上人扁所居廬曰幽棲、復來請安別稱、仍號高庵、乃作偈贈云。

獨居萬象森羅上、下視諸方門戶低、竪起拳頭春又過、無人來此問幽棲。

布衲

曹谿屈眴是爭端、鷲嶺金襴傳卻難、我箇麻衣較些子、年年補綴得遮寒。

世謂布衲乃直綴、若內衣之稱、全非袈裟類也、余偶意似大差誤矣、但余大元至治辛酉春、游南嶽、次抵于草衣寺、寺後有岩洞、而極幽邃、讀寺記云、昔蜀僧字奉初、嗣馬祖、嘗編草爲衣、隱于是、因號草衣岩、今爲寺、名草衣寺云云、余經行廊廡、回觀壁間、古今名賢、宿衲留題甚多矣、獨張無盡一聯、稱絕唱云、古人一悟便心安、計較何曾萬百般、識得草衣衣下事、任他麻衲與金襴、余引此詩、以爲證耳。

高巖

有巖有巖摩青霄、玲瓏八面轉岧嶢、煙霞猶自飛不到、烏兎還疑遶半腰、古今堪仰觀、若何容躋攀、佛祖望崖退、空生得坐難、道人素具衝天志、我取斯巖以爲字、名也實也正抗衡、乾兮坤兮少隣比、擧世都無高尙情、區區日逐下流行、早晩歸看幽鳥含花落、誰與同聽孤猿叫月聲。

遊星攀山僧舍

千峰嶒崪一目收、引臂戲攀斗牛立、徐步煙嵐紫翠間、迤邐石磴蹋零葉、老屋空山秋日寒、土堦積雨苔錢疊、因思呑佛視雲霄、誰復移茅深處入、此道今人渾蔑如、風松吟罷草露泣、歲晩幽棲意自容、且呼猿鳥爲相揖。

獨遊東谷之知足庵、時濟北巖養病於下庵、遂題其壁間而去。

披榛來扣禪扉、欲問煙霞痼疾、孤雲出岫不歸、只有松風瑟瑟。

懸侍者來山庵、道聚同守枯淡、夏罷告別、歸龜峰桂光庵、臨岐求偈、卒成長句以贈云。

僻居卜窮谷、將石支脉脚、道人從何來、且喜伴幽獨、三尺茅檐下、聚首度一夏、討柴與挑蔬、安禪有何暇、氣質不群又妙年、它時平步九層天、於莵頭上戴麟角、俄然別我下巖煙、布毛吹起處、侍者便悟去、一等弄業識、茫茫無本據、此事若爲論、笑倒鐵崑崙、爭如送出松門外、看山看水兩忘言、草鞋跟底清風生、行行掉臂等閑行、行到中秋三五夕、龜峰孤頂桂光明。

送珍上人之常州、見復庵和尙。

巖桂清香飄、西颷吹颯颯、江天雁聲寒、關山耀古月、臨濟德山堪縮頭、釋迦彌勒且結舌、描不就兮畫不成、知佗畢竟是何物、迷之者徒勞石上覓蓮花、悟之者也是眼中著金屑、全無巴鼻甚怪奇、古往今來難委悉、珍禪珍禪、爲道專切、我憐蒲柳衰躬、汝守松筠貞節、九登三到早留心、千山萬水暫相別、欲掃一千七百爛葛藤、先去參見常州老活佛。

贈僧謁復庵和尙。此僧遊五臺、得放光落髮二石、歸亦曾遊高麗云云。

上人袖裏有五臺、放光落髮太奇哉、非惟親見文殊去、參遍南方知識來、吳雲楚水草鞋底、又向三韓走一回、常州古佛今說法、行行切忌此徘徊。

古播言侍者、聚首山中、孜孜在道、佳衲子也、一日來告辭、乃贈古風一篇云。

言前領旨早是遲、句外明宗猶未徹、三呼讓討犀牛兒、爭識七華又八裂、倒騎鐵馬過崑崙、和

空蹈破水中月、德山拱手高閣棒、臨濟抵首且收喝、且收喝卻忉怛、雨霽亂峯青、春禽花裏聒。

贈釋侍者

凝滯頓釋、灑灑落落、電卷星飛、龍驤虎躍、疎慵老頭陀、一生投丘壑、同志遠方來、慚愧嘗氷蘗、酷愛移茅入深、甕火煨芋標格、古風不振久之、林下年年蕭索、千峯玉立掃秋旻、冷翠岩屏挂飛瀑、今朝君已下岩嶢、誰共同看山月白。

贈松嶺秀侍者東歸

侍者侍者參得禪、草鞋踍跳飛上天、虛空開口笑不徹、須彌顛倒走如煙、一條拄杖活似龍、等閑吞卻十方空、威音王佛驚吐舌、二三四七盡潛蹤、誰管嘗氷蘗、步步起清風、千里江山晴日照、白雲漠漠生遠峰、偉才豈是易討、扶取欲頹法幢、截斷葛藤之舊枝蔓、把金剛劍而加磨礱、將謂叢林已凋落、且看冬嶺秀孤松。

贈英侍者歸省

侍者參得禪了也、倒騎鐵馬空裏走、非唯笑殺崑崙兒、驚起須彌打筋斗、八十衰翁百不能、寧期英俊聊聚首、祖庭喜有箇長松、當持晚節於霜後、珍重楊岐栗棘蓬、如今既是入君手、他時拋出與人吞、四七二三難下口、那堪別我下層巒、風前倚杖獨立久、纔能蒲鞋莫留連、再扣柴扉問暮年。

贈照禪人歸故鄉

百花爛熳、幽鳥關關、春水千澗、春雲萬山、獨瞎衲僧頂門眼、照用同時也是閑、太奇絕、好正觀、

大悲千手攔不住、步步親從舊路還。

備前要侍者、借予寓但之金藏山、冬迄于春、忽一日辭往京師、俚語以代贄別云。

子伴病夫金峯索寞、對雪擁爐、口邊生醭、三玄三要懶商量、四句百非渾剗卻、今朝又逐春雲歸帝鄉、何日相逢共看山月白。

贈龍岩仙藏主

貞治癸卯仲秋月夕、余忘年友于光德龍岩老兄、特特遠來見訪岩居、相得懽甚、同下錦藍亭上翫月、余謂龍岩曰、靈山指、曹谿話等、且置不論也、寒山子云、吾心似秋月云云、正是秋月、今夜溢目最好、只吾心實未知其所在也、然龍岩將醻箇語之頃、時有山童侍旁、敲松根歌曰、心心心、向何處尋、山中閑寂、良宵欲深、皓月高懸、虛籟滿林、谿聲潺潺、漱玉鳴琴、石女木人起鼓舞、虛空開口笑吟吟、余勵聲訶曰、休休小子多口、二人携手歸庵就寢、翌旦援毫記焉、以贈龍岩公云。

佛祖贊

釋迦三尊

三界獨稱尊、十方無等匹、普賢乃左輔、文殊是右弼、象王休回旋、師子忘嚬呻、元來不起金剛座、萬德金容應刹塵。

菩提樹下金剛座、滿口縱橫大脫空、從此二千三百載、依然明月伴清風。

出山相

任他流水下人間、莫怪浮雲歸故山、六載艱辛柴骨露、這回果改舊時觀。

嘗氷嚼蘗成何事、討得通身瘦似柴、四十九年三百會、夢中說夢誑癡獃。

雪嶺枯坐、成箇甚麼、勉强出來、人天殃禍、等閑放過二千年、今日相逢親勘破。

杜陀釋迦。擎鉢盂、持錫杖、立岩瀑下。

雪嶺沙門、枉出人間、鉢盂無底金錫光寒、岩泉應有倒流日、滿面慚惶洗卻難。

彌陀佛

塵念頓除、如明鏡面、安養三尊卽時示現、區區若是望西方、華池寶樹怕難見。

紫金光聚慈容烜赫、區區迷徒向外求覓、把閑思念暫時忘、樂邦果不在西方。

聞說、此無量壽佛尊像、一夕罹回祿災、而後得之熱灰堆中、空絹皆燼、像無所壞耳、遐邇奔趨驚駭嗟嘆、遂知、劫火洞然大千俱壞、敢不隨他去、神異寔不可測、因焚香稽首、聊述贊詞云。

當初因甚離安養、今日無端入火坑、幸是幻身燒不爛、且居茲土度群生。

觀音大士

手掐念珠、足蹈蓮蕚、入流亡所、返聞遺覺、衆生界空、我願方極、剎剎塵塵、靈光赫赫、回首貪觀水中月、不知眼裏著金屑、別別別、無量劫來、得一橛。

瀑布透石、松崖撐空、碧草爲座、瓶柳春風、眼處聞兮耳處見、不知何劫悟圓通。

從聞思修、入三摩地、一身分化三十有二、應衆生心、如月印水、大智光明無處不至、苦海算沙念珠輪指、迷途忘歸寶蓮襯趾、春透百花、鶯啼千里、南無觀音、圓通大士。

入那伽定、示現圓通、悲心一點衆生界空、岩泉何事響玲瓏。

妙相巍巍、梵音落落、擬議不來、鐵圍懸隔、白花巖上千尋瀑。

磐陀石上、古瀑巖邊、悲願海潤、妙智光圓、開空聞性、見離見緣、圓通三昧、隨處現前、塵塵刹刹澍法雨、手裏春風柳色鮮。

圓通三昧、塵刹現成、耳裏山色、眼中水聲、劫外春風瓶柳青。

滄溟千尋、悲心甚深、崖瀑無聲、聞塵自清、大士圓通三昧力、世間那有苦衆生。

塵沙刹土、救人患難、將謂一去萬劫不還、咦、補陀巖上自安閑。

十方一華座、徧界大圓光、何止分身三十二、春來萬國百花香。坐圓相中。

塵塵圓成水月場、刹刹渾是空花座、歷劫無人入得來、普門元自不曾鎖。

百千三昧水中月、四八應身空裏花、歸去補陀巖上坐、青山老卻幾烟霞。

圓通門戸等閑開、惹得龍天特地來、終日寥寥對巖瀑、入流亡所坐堆堆。

清淨光圓、弘誓海濶、楊柳春青、頻伽水活、寥寥獨坐沒人來、可惜普門徒自開。

三有苦海、一葉慈舟、普度群類、到彼岸頭、壺中春滴柳條露、塵刹圓通法雨流。

寶華王座坐巍巍、湛然深入三摩地、刹刹塵塵應現身、豈惟四八而已矣、古皇天下樂無爲、化跡猶存丘索類、爭如瞻仰慈容入、悔過捐邪伏妙理、燒舩背水勞籌策、滅竈添兵又多事、大士

未由動聲氣、生死魔軍自逃避、普門歷劫缺關鑰、願海何嘗有涯涘、返聞聞盡見非見、鳥啼花笑只這是。

盡謂龍天來側耳、垂慈何必在音聞、無人入得三摩地、海畔青山空白雲。

大圓滿光、妙相堂堂、昏夜星月、苦海舟航、如今深入三摩地、瓶裏芙蕖吐定香、

瀑泉穿石、岩樹凝雲、天眞明妙、泯見亡聞、終日支頤坐、眼兼瓶柳青、無人入得三摩地、爭識普門元不扃。

如意輪觀音

終日撐頤坐思惟、善哉深入悲願海、度群生了已多時、珍重如意觀自在。

長州逸禪者、舊收印本普門品一卷、首有補陀大士像、嘗罹回祿、然後得之灰中、雖空紙少燔、像立經字敢無所壞者、從予需贊、乃稽首拜手、謹書其上云。

眞空妙相、圓通三昧、劫火光中、巍巍如是、噫、黑底墨兮白底紙。

文殊大士

覺城東際、敎壞童兒、謾把師子御作馬騎、祇緣方寸吹毛利、自肯堪爲七佛師。

沒字殘經看未了、亡鋒古劍只空持、長年癡坐金毛背、誰信曾爲七佛師。

地藏

忉利天宮、受佛遺付、有沈苦者、誓我救度、度生說盡到慈氏、虛空雖盡無窮已。

忉利天宮、親受佛勅、虛空有盡、悲願無極、寶珠在掌救拔世間困窮、金錫振威擊摧地下牢獄。

六環金錫、一顆摩尼、雨物救之、拔苦垂慈、雖有虛空墜地日、應無濟度棄人時。

達磨

梁王相對不相識、夜半扶桑日杲杲、踏斷大江無一滴、莖蘆葉冷幾秋風。右杲侍者請。

剛道廓然無聖、乃是觀體現成、元來自救不了、若何度得迷情、長江萬古東流去、腳下依然蘆一莖。

六宗邪破一言下、五葉花開萬國春、自普通年到今日、是誰得見箇全身。

寒山

家在五臺歸不得、路頭忘卻已多時、援毫側立寒岩下、想亦應題落韻詩。

強謂吾心似秋月、爭知肚裏暗昏昏、不須合掌勞人事、歸去臺山且掩門。

拾得

抛卻峨嵋好風月、赤城山水且逍遙、看人寫字忘研墨、回首那知劫石消。

閑卻峨嵋銀世界、國清寺裏恣佯狂、數行貝葉看未了、枯木岩前又夕陽。

布袋

率陀天上幾時得還、灰頭土面且放癡頑、等箇人來渾不見、長汀風月為誰寒。

誰信化身千百億、獨遊獨處四明鄽、卻將天上長年樂、換得人間一覺眠。

寄跡四明闤闠外、灰頭土面得人憎、自謂化身千百億、我言天地一閑僧、回頭轉腦笑何事、終日茫茫走市鄽、為愛長汀風景好、多時忘卻率陀天。

政黃牛

浮盆聊翫淸池月、留偈還辭國士筵、白鷺鷥邊黃犢背、眼中老卻幾風煙。

郁山主

一顆當頭三際斷、卻將魚目作明珠、安知今日谿橋上、又跨蹇驢歸畫圖。

大覺禪師鏡中現觀音像

謂之大覺全不是、喚作圓通被眼瞞、欲知二大士眞體、借手東平破鏡看。

大覺禪師

金錫出巫峽、踏遍楚水吳雲、泥牛過窓櫺、吼破淸風明月、隨方赴感、祠山靈神助化權、應物分形、鏡裏圓通呈醜拙、端的驗人、手親眼活、邪禪囊斂氣吞聲、老瞶翁遺風餘烈、特特西來何所爲、箇是本朝最初敎外別傳師、間世英哲蜀川權奇、松源的派無明光輝、初來本朝同別傳師、邪徒妬害累、百流支、回瀾砥柱屹然高崎、啓迪迷情深慈痛悲、天下建長開拓雄基、千古萬古福山巍巍。迪長老請。

奇哉大覺與圓覺、同德同風道亦同、震旦扶桑爲鼻祖、分身揚化振宗風。

中峯和尙

若論這老和尙面前、則山河大地亦是幻、色空明暗也是幻、三世諸佛也是幻、歷代祖師也是幻、乃至菩提涅槃眞如實相等、一一靡有非幻者也、掩光之後三十年、留得箇非幻底、握麈尾拂、踞曲彔牀、煒煒煌煌、堂堂巍巍、勢與西天月山爭其高寒、徧使盡大地人瞻仰肅恭而已矣。

萬德莊嚴圓滿身、虛空爲舌若何申、我今不免强道取、自佛已來唯一人。

南浦和尙

佩息耕眞印、離先聖途轍、舊眠橫岳雲、晚翫巨峯月、手握麈尾、坐趣來機、崖崩石裂、電卷星飛。夫之謂應天子之詔、唱松源之道、大應國師者耶。

佛燈國師

道德光輝揚日月、眼空寰宇僧中傑、宏振玄風何凜列、全機別舌轟霹靂、摧邪說、魔外纔聞肝膽裂、如今林下多饕餮、大法千鈞懸一髮、休愁殺、龍峰萬古盤寥泬。

咄者老和尙萬般似不會、當機雷奔電激、卽時天靜水澄、殺人刀活人劍、少處減多處增、佛也應難覓形跡、閻浮界裏無此僧、夫之謂碩大光明照映今昔、松源的派天下佛燈。寄白絹請。

超然標格、具大眼目、衲僧冤家、叢林軌則、語默才涉離微、聖凡共遭罵辱、有時激起平地波瀾、有時剗除參天荊棘、中流一壺昏衢明燭、千古萬古仰高風、巍巍突兀老龍峰。

復庵和尙

者老漢忒殺不近人情、揭卻釋迦腦蓋、搊瞎達磨眼睛、還將千七百公案、打成一箇鐵團圝、當頭與人咬、從敎下口難、扶桑夜半金烏翥、笑倒摩霄天目山。

空盡空岩空、幻視幻住幻、神機妙用並馳、露布葛藤等鏟、端的驗人、手親眼辨、假使通身鐵打成、擬議被它穿一串、象龍遠趁風、稻麻不足算、如今五彩施大虛、焉知當下自欺謾、白雲長是臥青山、流水從敎出寒澗。

再來小釋迦、三世的傳家、魔佛俱空盡、眼中爭著華、幾度人天推不出、法身爛卻老煙霞。
拈出陳年爛葛藤、使人嘗藥嚼寒氷、半輪天目山頭月、萬世扶桑國裏燈。半身。

寶翁和尚

眉間寶劍、當初挂於雲岩、塗毒鼓聲、晚年鳴乎巨福、毫端拈起鳳舞龍翔、一句全提神號鬼哭、
從教西來正宗、灼然歸我掌中、叢林莫謂今寂寞、萬古眞風振海東。

高山和尚

行已精嚴兮、氷清霜烈、爲人痛快兮、電奔雷驚、誰知靈洞高風別、百億須彌不足爭。

明窻和尚

寒猿嘯枯樹、老鶴立喬松、物外乾坤窄、眼中今古空、調高賞音少、越格亦超宗、西來的傳傑、明
覺大禪翁。

虎關和尚

人言再生音尊者、孰與當年遠錄公、誰識東山左邊底、光前絕後振宗風、振宗風有何窮、龍淵
支派遍天下、一一收歸海藏中。

一路和尚

做得萬年名山主盟、提起千聖頂顊一著、蕩盡桑田家法、流通松源正脈、喝下崖崩石裂、機前
電激雷奔、三尺黑蚰長在握、擬議遭它一口吞。
夜深落月印寒泉、日暮歸禽破翠煙、脫得眞如籠罝去、四稜塌地打安眠、打安眠氣衝天、誰知

淵默雷轟處、了卻通玄未了緣。

石天和尚

瀝乾教海、撈透禪關、棲雲庵裏、凝寂幽閑、萬古潛谿流不竭、龍淵處處起波瀾。

足庵和尚

是眞陸地行舟底、三據名藍震法雷、度盡迷徒知幾許、夢中記莂太奇哉、太奇哉絕疑猜、本自通玄峰頂來。

月江和尚。住獨照遍照兩寺。

神宇爽拔、眉宇古厖、宗通說通兮、履歸戶外、獨照照遍兮、籌盈室中、興慈運悲兮、老幼悅服、擊邪摧異兮、魔外潛蹤、夫之謂曹源的派遠孫、大雲入室之眞子、月江大禪翁者耶。

一月纔出、千江影寒、是佗面目、天上人間、叵耐曹源一滴水、無端平地起波瀾。

昔典牛以策禪師福不逮慧而憂、策曰、學者唯恐己眼不明、己眼若明、雖獨對聖僧喫飯、又何慊焉、於戲策公一言、抓著我老師兄柏巖公癢處、雖然、惜當初叢林閑卻好一箇主盟、如今拜瞻遺像、爲之歎息、其高弟儼侍者、請贊、贊曰。

神采爽拔、面孔儼然、已佩佛燈密印、尊忝大覺正傳、胸中掃除毫末、量外包裹大千、冷笑東寺折牀閙熱、仰慕法昌泥像因緣、有道聲喧區域、無心出應人天、萬機泯絕華藏界、一室高眠竹澗邊。

太虛和尚

江上千山雪晴後、樓頭午夜月明初、吾兄面目只這是、何事丹青繪太虛、

義堂和尙

面目嚴冷、神字玲瓏、學海枯竭、智境掃空、提起金剛王寶劍、是魔是佛可潛蹤、夫之謂東山下左邊底、跳竈跨釜的骨孫、義堂老禪翁。

無住和尙

簪纓雄族、宗門英靈、將謂韜光復鏟彩、胡爲增發法燈明、似即不住、住即不寺、鷲峯眞規、少室妙旨、要看箇老漢全身、且待華開鐵樹春。

一口平呑三世佛、妙高孤頂月明天、應無所住而常住、大法燈光萬古傳。住妙高。

仲聞和尙

松源遠裔、桑田的孫、遼天閑鼻孔、笑殺鐵崑崙、靈虎山頭高坐斷、凜凜威風振乾坤。

無極和尙

皇室玉葉、金枝叢林、砒霜鴆毒、學海波瀾、渺瀰何曾留元字脚、嗣天龍不肎天龍、果然超宗亦越格、靈龜孤頂太嵯峨、壓斷須彌衝碧落、夫之謂高峯直下的骨孫、佛慈禪師眞面目。

頂山和尙

最軟頑時堅似鐵、到諸訛處坦如砥、巍巍坐斷士峯頂、下視衆山眼轉青、自甘敢不爲人出、出則敎它魔外驚、一榻翛然久淵默、誰聞徧界怒雷轟。

浚翁和尙

俊翁老子吾端友、談笑忘懷歲月深、別去不堪追慕處、忽瞻遺像益傷心、休傷心、玉峰萬古翠千尋。

靈叟和尚。住蔣山

面目巉岩器材瑰瑋、一句全提半提、惡聲千里萬里、無明種草新生、佛燈光焔將熾、人言寶公再現蔣山、我道活龍誤下死水、禹門欠雷轟、叢社喪公議、枉把丹青畫太虛、孤風凜凜來未已。

孤峰德長老

松老竹癯、氷枯霜烈、胸中古今、脚底吳越、列祖重關、七通八達、收拾玄機、退藏於密、烟雲唯可沒半腰、天外孤峯轉崷崒。半身

南光開山觀長老。尼

氣壓丈夫、眼空寰宇、手握黑蛇、打風罵雨、圓機無著也低頭、山帶瑞雲千萬古。

昌快大德

參得天龍直指玄、寥寥盡日自安禪、遺芳餘烈有何極、桂子蘭孫億萬年。

前備中太守佐佐木西公禪閤

皇家一十四葉龍冑、武門百萬軍中羽儀、可欽可畏、惟德惟威、忠義精兮貫于日月、英雄氣兮吐乎虹霓、況是圓顱亦方服、佛魔須放一頭低。

妙喜禪尼

夙植信根、心游空門、爲功德母、桂子蘭孫、慈容影現鏡中人、虛幻華開劫外春、

自贊

秀格禪人請

大廈高堂我無分、松根石上還家風、茫茫塵世誰知己、欲去西山問亮公。

聖濟大師請

水中月影、華裏春容、畫虎成狸、喚蛇做龍、甜瓜棚上苦胡盧、德山臨濟惜盧都。

莊福天關長老請。圓相之中半身

幻身不全、神光虛圓、一生甘自韜晦林泉、誰是替吾發靈談、佛燈再得照人天。

道安侍者請

心光不昧轉團圝、且喜覓安能得安、箇是本來眞面目、夜深山月照秋寒。

曇心庵主請

心心心、夜來古月照霜林、禪禪禪、無角鐵牛飛上天、是則眞我爲鏡像、非則闍梨全老僧、黑蛇三尺閑在手、呑却乾坤似不曾。

元奇禪門請

清奇閑淡嶺頭雲、奔激潺湲澗底水、老夫無處隱全身、五彩畫空還不似。

慈源大師請

誰將麗妙紫金襴、包裹愚夫赤肉團、恐被傍人看便笑、不如送在舊青山。

日進禪人請

退而忘進、默爾泯玄、寥寥終日、孤榻翛然、生平誓不游人世、只在白雲峰下眠。

宗仁禪門請

丹青繪虛空、全似全不似、身披華袈裟、手握竹篦子、好一箇長老、欲赴來機底、林下癡頑叟、幾時敢得爾、這般大模樣、我儂所深恥、汝今收去勿示人、是乃爲余存道義。

松嶺秀侍者請

咄者衰翁、禪也缺參、道也絕學、縱目雲霄、寄身林壑、咸言大覺破家孫、寔是佛燈跨釜子、若何得箇傑秀人、扶起吾宗已湮墜。

翼姪請

似則固似、是則未是、離相離名、非彼非此、歷劫何嘗現全體。

月庵居士請

全身半身、日面月面、鏡上幻塵、空裏閃電、而今老矣歸圖畫、依然早是新羅箭、退藏放癡憨、誰言拒住院、眠雲知幾年、看山長忘倦、我儂活業只恁麼、一生擔板愛自便。

淨仁禪門請

林泉爲家、猿玃作伴、眼中有煙霞、胸次無涯岸、從來智體全不具、宜乎幻影亦缺半、咦、渠是誰也、天地之間、只一箇踈慵癡頑寂翁老漢。

慧鏡禪者請

幻化空身、鏡像水月、百年一夢、終歸變滅、儞儂教我入畫圖、久住煙霞山水窟。

聖玖大師請

視利等塵埃、懼名同桎梏、殘月落遙峰、孤雲老空谷、諸方浩浩說高禪、孰與渠儂伸脚眠。

元杲禪人請

杲日麗天、清風帀地、徧界不藏、面目現在、若非具眼頂門人、如何見得箇全體。

元綸侍者請

這擔版漢、甘老岩叢、一榻默坐、萬緣皆空、聞勸住院言、幾乎洗耳、猶見宗教替、爲之搥胸、有時江湖入夢、夜寒月照短蓬、稱意金鱗直鉤上、絲綸掣斷白蘋風

超曇大德請

參橫月落湖山曉、全露本來清淨身、丹青汚卻虛空面、冷地從教笑倒人、笑倒人誰識眞、試向威音劫前看、曇華方綻一枝春。

養侍者請。尼、松下坐石

青松爲屋廬、苔石作牀迬、但得佳山水、求居養幻軀、平生深恥被人識、豈料今朝入畫圖。

守顯禪人請

幻眞非眞、夢境何境、一彈指頃、百年流景、盡十方空諸聖賢、與吾同現鏡中影。

彌天釋侍者請

身披釋服、手掬虹心、獨步方外、眇視叢林、只貪風高月皎、都忘水寒雲深、這般一箇厖浮圖、古

往今來覓也無。

無相爲眞相、無門爲釋門、擬欲尋蹤跡、水中探月痕、畫不成時正好看、全身逼塞盡乾坤。預寄生縉請

高揖釋迦不拜彌勒、流行也得、坎止也得、一生獨自娛、水聲與山色、莫嫌幻質不完全、且要眉横還鼻直。

定巖一侍者請

畫工與我沒膠了、恰似當初立雪僧、只是不曾覓心法、安閑終老得人憎。

列岫科侍者請

胸呑雲夢還吐卻、選佛場中占甲科、一句機先曾會得、國師三喚更如何、堪笑山前老農父、被佗描畫上凌煙、枯木花開是今日、任教空體不完全。

堅卓禪人請

貪觀瀑泉飛、獨坐盤陀石、絕無人往還、幸免話今昔、一片雲添百衲衣、萬重山點雙眸碧。

龍巖汕長老請

焚香默坐古岩陰、最愛青山深更深、除卻同參木上座、誰知這老此時心。

英顏侍者請。半身

古道顏色、今時遺民、一法不存、若何爲人、可憐石鞏閑弓箭、射中三平半箇身。

霜林果侍者請

管甚眞常體不全、誰知鼻孔恣遼天、祖庭將謂秋已晚、且喜霜林結果圓。

靈仲英侍者雋逸絶倫、江湖播譽、忽棄平生所嗜奇知妙解、而來山中、單單只圖洞明自己、厥志良以可嘉也、一日繪余衰質求賛、余謂曰、顧我箇幻化空身、百醜千拙、有何一件可賛底事哉、然倘懇請不已、無奈之何、聊綴二十八閑言、還之云。

衆角叢中得一麟、隈岩老衲慰孤貧、因思歳晩天寒日、少室峰前立雪人。

隣松長老請

咄者老漢、漆桶不快、爲人百醜千拙、渾無一智半解、只圖飽餐安眠、白雲邊青山外、是什麼報緣、幻身不全、不完全、卻周圓、月到中秋光滿天。月夕

荊隱璵侍者請

咄箇老寂、全無準的、逢貴不肯重璠璵、遇賤奚亦輕瓦石、得少失多、進寸退尺、獨立天壤、眇視今昔、兩鬢霜寒八十秋、三衣染盡千峰碧、何時手裏黑蛇兒、白日成龍轟霹靂。

了達禪人請。位牌

閑名離幻質、隨汝入丹山、挂在壁間看、同居渾一般。

永源寂室和尚語錄卷之二終

永源寂室和尙語錄卷之三

小佛事

飯高山塑觀音像點眼幷安座

返聞聞盡盡處亦空、所以根門一一無功、塵塵三昧、刹刹圓通、千江月影、萬卉春容、惟道人久、機巧妙爛泥團裏寄逸想、唯在手之翻覆際、現出端嚴殊特相、非但人天增瞻仰也、教魔外退悉嗟、將回紫金山、盡瞬青蓮華、我見大地諸衆生、本來誰不具寶目、錯把色空明暗等、妄自一翳永翳、卻願同大士正法眼、頓獲眞觀淸淨觀、縱有虛空消殞日、巍巍坐斷飯高山。

中峰業海兩和尙點眼入塔

多子塔前、天目山巓、將錯就錯、無傳爲傳、這般沒面目底、卽今分座儼然、旣是狹路相逢、未免向佗頂門、點出金剛眼睛、普同盡十方徧法界、情與無情、放大光明去也、召大衆云、好生觀、以筆左邊點云、金烏啄破瑠璃殼、右邊點云、玉兎挨開碧落天。

永源寺觀音點眼安座

補陀圓通、大士來也、梵相端嚴、人天敬畏、新開淸淨寶目、靈光無處不至、說甚麼冥府幽都、法界皆煌煌煒煒、謂之正法眼藏、亦名大圓鏡智、夫吾大聖薩埵、昔在久遠劫前、從聞思修入三摩地、證百千甚深微妙諸大三昧、所謂大解脫三昧、大寂靜三昧、大智慧三昧、大慈悲三昧、大

旋無畏三昧等是、只爲惣盡大地衆生、雖具足如此三昧、迷妄所蔽、無由現成受用故、迫不獲已、區區而起、把箇晨鐘暮鼓、鴉鳴鵲噪、簷頭雨滴、澗下水聲、傾腸瀝膽、激揚掲示、汝等諸人、爲甚麼、恰如塞斷壊生耳根相似、於戯今朝瑞雪滿谿山、無限風光、正好看、游徧十方諸國土、不如歸去永安閑。

當麻禪門拈香

塵塵全在絶塵作、無髮龐翁摩詰流、臺樹冢冢歳云暮、木人石女也生愁、丈夫猛烈漢、全機自不同、不受生死控勒、寧不涅槃羅籠、便與麼承當、兎子何曾離得窟、任不與麼去、徒弄死蛇爲活龍、畢竟作麼生、昨夜須彌頭倒卓、天明踍跳太虚空。

又。佛成道之日。

夫以、正覺山中見星燦然、歷劫未明事、忽爾得現前、以海印三昧、一印印定、令大地群生頓出蓋纒、不論四生九類、説甚十聖三賢、一味平等、蜜無中邊、幻生幻滅一來一去、月沈寒水、雲挂靑天、如是領略將去、親恩佛德酬報周圓、其或未然、帶雪梅華初破玉、淸香透過竹籬𥭸。

拈香

大日本國、備前州、藤野保居住、菩薩戒弟子某、今値亡室某七周忌辰、就于大士山慈廣禪寺、拜屈滿堂淸衆、預卜七箇日、取大乘眞詮、且繙閲、且繕寫、啓吊揮金、營辦供具、加以裂冠披緇、方預三寶數、追嚴誠至、可莫大焉、仍命某焚香、獻諸聖、説偈作證明者、一向芙蓉城内遊、光陰倏忽七周秋、從教動地悲風起、山自安閑、水自流、寂滅現前觸目眞、迷情猶自隔重津、崑崙昨

夜奔滄海、撲碎珊瑚月一輪、從此遠離男女相、煌煌煒煒亦堂堂、慚愧德生與有德、欽光熱瞞紫金光、者回不墮千聖轍、揚身那畔行履別、掠轉面皮歸去來、塵塵刹刹皆超脫。

道浩禪門拈香

去來無象恒儼然、擬欲追求隔大千、幾度淸風明月夜、黃梅石女哭蒼天、欽焚一瓣兜樓、供養三寶勝位、奉爲某禪門、莊嚴報地者、恭惟、靈鑑懸胸照破生死窠窟、智及在掌裂開聖凡蓋纏、丈夫須辨丈夫事、玅在神機未兆前、轉轆轆活鱍鱍、切忌劍去刻舷、雪覆千山頂、孤峰聳碧巔、今日臨風聊表信、無根樹子起香煙。

脫叟和尚拈香。俗弟請

恭惟、某人、父視靈巖、祖智覺、平欺魔佛有來由、蕩盡生涯無折合、當頭坐斷自甘休、三十餘年打孤硬、眞機玅用取次收、輪奐寶坊如幻出、住山氣象古爲儔、遽拋鉳斧翻筋斗、鵂鶹原冷幾回秋、天倫義重逾山嶽、深恩厚德若何醻、法中復獲爲昆弟、雪峯請益老巖頭、年年斯日增追憶、白雲流水空悠悠。

頂山和尚拈香

此香實際理地栽培、大覺海中浸爛、雖然無銖兩、價直踰娑婆、觸之則燎却闍梨鐵面門、嗅著則塞斷衲僧閑鼻孔、直得盡虛空徧法界森羅萬象、四聖六凡、情與無情、以至從上佛祖、出世度生、唱般涅槃、靡有不稟渠資薰之力、今日伏值頂山和尚小祥之辰、代佗入室眞子感鼎諸兄、信手拈來、一爇爇卻、聊伸眞法供養、是爲報恩謝德、抑亦復雠雪屈乎、不見道出乎己者返

於己也。

全戒禪尼拈香

夫以、芙蓉城內慣優遊、眞淨界中歸去休、滿院落花春過後、從敎霧慘又雲愁、生住異滅恰同鏡像與水月、愛別離苦、舜若多神墮淚雨、五障三從不勞一掃空、八解六通懷中取寓物、所以龍女早唱無垢正覺、喜見終受靈山記莂、若是與麽荷負去、謂之女流成就丈夫事業、其脫末然、大洋海底火一星、徧界曇華香拂拂。

蓮阿禪尼拈香

夫以、一靈眞性、虛徹精明、脫體現成時、動靜無形、去來絕跡、纖毫不存處、彌綸三際、充塞十虛、了了然常在鑑覺之先、玄玄乎迥出思議之外、强名本地風光本來面目、亦謂正法眼藏涅槃妙心、背之則曠劫漂沈、合之則刹那超越、是故愛道先受記莂靈山會上、龍女始成正覺無垢界中、彼既丈夫吾寧不爾、直下領略、切莫遲疑、五障三從、喩如昨夢、脫出愛別離苦、娉婷芙蓉新綻泥裏、照破生住異滅、淸涼寶月高懸秋空、不昧正因、頓圓種智、塵塵刹刹、大用現前、只將沈水一爐煙、奉獻十方諸聖賢、即今莫惜運神足、請與證明臨法筵。

東禪巨舟和尙

遠駕鯨波歷大方、魔宮虎穴任行藏、一棹東歸三十白、聲名藉藉滿扶桑、某人、象骨峯前得轉身句子、三喚聲裏見藏珠自彰、掀翻海嶽空索索、賞音獨有箇會郞、眼目人天、時龍象易辨、睥睨湖海處、氣宇難量、寧無法幢倒而復立、當敎佛燈滅而重光、惜雖兩提鉗斧、無由大試鋒鋩、

應世緣云畢、忽爾一周霜、徧界大人相巍巍亦煌煌、明月上芝嶠、清風撼松岡、木人拊掌歌笑、石女攢眉悲傷、光也不佞忝嗣遺芳、昔日兄呼弟應、今朝義斷情忘、蕩離跳竈知多少、替彼聊供一炷香。

又

此香萬化大本、群有靈根、鬱然威音劫前、卓爾實際理地、離名離相、絕榮絕枯、倒抽不萠枝、强號無影樹、浸爛華藏海中、突出涅槃岸上、遭孟八郎漢截作三段來、雖無一點芬馥之氣息、還逾五分法身之薰聞、今朝臨風一爇爇卻、非獨驗過諸聖鼻孔、專用奉獻吾巨舟師兄、切冀享是眞法供養、插香云、咦、不見道、有伴卽來。

預脩

日本國、遠州路、河村莊居住、實心禪尼、今月十三日、謹發誠心、就于龍壽山永安禪院、施淨財、設精饍、預脩歿後冥福、其志頗以可嘉也、竊念、三毒熾爍、三塗苦報易招、五欲海深五障淪溺難免、大凡多劫罪累、未由懺除、雖徒懷慚惶、無處陳哀悃、仰願、三世十方諸佛菩薩諸賢聖等、不惜慈愍、降臨道場、且爲證明、且賜加被、專冀、實心禪尼壽報百年後、厭世緣時、不復墮女流、常得生淨界、菩提心而不退、般若智以現前、提挈河沙含靈、同證無上妙果者。

自從一惑於眞性、荏苒各繫乎幻業、蠢蠢六趣與四生、昇沈疲極百千劫、偉哉猛烈女道人、誓向今生度此身、一日命佗淸淨衆、頓寫靈山九會文、須信經王勝妙德、來報七分獲全得、華鮮本是海龍兒、無垢界中成正覺、將謂同途不同轍、元來無二亦無別、菡萏華開三四枝、遍法界

中香拂拂。

見公禪門拈香

一度興悲風樹邊、既成三十有三年、不知今日是何日、鐵眼銅睛淚潸然、某人、歷劫到今、隨迷逐妄、改頭換面、輪轉諸趣、而乃爺孃形生之本、彌綸三際、充塞十方、假使分身微塵刹土、嚴修恒沙善因、安獲報答劬勞萬分之一、惟除心源廓徹、當念消融、脚跟下一著卒地折、㘞地斷見生死相、猶如空裏繫風、往涅槃心、同水中捉月、是故寧有一法當情、本無三界可出、初中後善徒設、羊鹿牛車空馳、便與麼承當去、罔極深恩一時酬畢、其或未然、未曾點筆前看取、菡萏華開徧界香。

中峰和尚

天目名山倒卓頭、佛魔驚怖鬼神愁、刹那三十有三白、師子巖前月照秋、恭惟、某人、亞聖大人、間出季世、運慈利物勉乘願輪、生知現前全機活脫、飜身擲透乃師死關、方寸之中、平吞夫若須彌、若渤澥者八九、一毫頭上、揭開恒河沙數甚深微妙義門、宗通說通該盡法界、道富德富充塞乾坤、佛祖已來今古之下、應當求此於無業・永明・大珠・忠國師伯仲之間耶、縱使借萬象以爲舌、今去稽首讚揚、連綿不絕、從劫到劫、猶恐百千億分、不敢及其一分也、於戲已矣、香煙一縷淚千絲、大法主盟其復誰。

道善禪門拈香

於戲夾截虛空成兩片、森羅萬象哭聲連、就中擬覓去來跡、獨脚烏龜飛上天、某人、志氣貫虹

蜺、操履潔氷雪、處鄉黨則溥輸和睦之誠、事君家則固持至忠之節、移居近蘭若、樂聞鐘梵以鄙絲竹之聲、隨僧陪禪牀、耽嗜素饌而忘芻豢之味、不出塵中辨出塵事、譬如芙蓉開淤泥裏、濁世安能忍久住、攢眉常自暗嗟噓、浮世五十有二年只將一夢寄華胥、此夢俄然驚起、撒手浩歌歸歟、遮莫雲愁霧慘也、青山依舊體如如。

特峰和尚拈香

恭惟、某人、佛通的傳英裔、大福中興主盟、提唱宗乘也、雷馳電激、崖崩石裂、居常懷抱也、冰枯霜烈、雲閑水清、咸謂、龍淵復興波浪、慧日重增高明、自從一回假示生滅之相、至今雲愁霧慘、鬼哭神驚、老拙昔年俱在巨福山中、肩摩衫屬、風前月下、同坐同行、悔不與他道著末後句、今日狹路相逢、不免借水獻華去、揷香云、沈水一爐茶一盞、黄梅時節雨慳晴。

川庵濟禪門拈香

風樹葉飛三見秋、忽驚光景疾如流、法身眠熟呼不起、江上青山也著愁、夫以、幻妄境中有生有死、實際理地無去無來、只獲一念頓空了、枯髏頂門活眼開、便見傾湫倒嶽、地轉天旋、全機瞥脫、寂滅現前、只要與麼信得及、大家不用哭蒼天。

了道禪門拈香

世間之人、雖知有生死、懼生死者鮮矣、終日擾擾役役、繫于塵網、虛度歲月、全不顧前程大有事在、忽爾臘月三十日到來、則方始驚窘慞惶、無處頓手脚、宛與不知有生死者無以少異也、可憐愍者耶、播州道公禪門、獨懼生死之人、何以知之、其平生區區究志至誠、預修歿後之善

因、咋已寄信、命老僧營辦卒哭之佛事、今又請作小祥之功德、老僧嘉嘆久之仍唱伽陀、以聊加讃揚、云、若教一念空三際、便是吾門活脫人、昔日不生今不死、金剛正體本來身。

淨霑大師拈香

日本國、遠州路、濱松莊居住、菩薩戒弟子義俊、今月二十日、玆遇亡女比丘尼淨霑小祥之忌辰、得得遠來、就于永源精舍揮金辨供、拜命闔山清衆、奉繕寫妙蓮經一部、尋命山野、焚此寶香、供養十方婆伽梵法界賢聖衆、所鳩善因、專冀淨霑頓脫多劫輪回苦因、速證諸佛清淨妙果者耶。

夫以、人生處世其親在、則晨夕不離左右、靡憚勞苦、罄其侍奉之誠、及乎其亡、則或廬墓畔、持服三年、若是出家之士、固守心喪、勤苦煉行、不限歲月而薦冥福、謂之孝終者也、於戲幽靈、落髮披衣、遊方之日多、承顏之時少、素念參禪學道見性明心、庶幾報酬劬勞之恩、爭奈志願雖大、力用未充、一旦無常遽至、蘊志永逝、悲夫、重願惟靈、生生如尼總持得達磨印證、世世同大愛道受世尊記莂、幻妄境內有生滅、眞淨界中無去來、萬古秋空一輪月、清光夜夜照高臺。

鈍庵和尙

自從到得休歇地、世外棲遲四十年、祖道任教都爛卻、臥雲深處打安眠、某人、透玄關旨、早應覺雄聲前三呼、遊大鑑門、首領眞淨堂中一衆、險崖句流出胸襟、撥天名雷鳴海上、衰拙昔年追陪杖屨、吳頭楚尾江西湖南、伊余倦遊歸隱桑梓、殘山剩水茅屋石田、邇來隣壁分光、共嘆歲晚佳會、遽爾棄我長逝、無奈老淚難收、然雖與麼、涅槃後有大人相、澤山巍巍摩蒼蒼、不堪

義斷情忘處、挿此兜樓一片香。

爲洞禪人下火

洞然明白、是箇何物、擬議不來、七華八裂、畢竟如何、火中紙馬嘶生鐵。

密庵主下火

豎拳消息無人會、門掩煙蘿幾度秋、一夜虛空消殞了、須彌頂上輥華毬、草露浥浥風蕉片片、唯一堅密身一切塵中現、向上更有轉身一路在、以火把打圓相云、石火電光一見便見。

西祖頂山和尚

西祖已踰葱嶺行、虛空消殞須彌倒、山河大地起悲風、夜半扶桑日杲杲、某人、玄機妙用佛祖窺覰無門、潛德幽光魔外伏膺有分、一生擔版、三處住山、滅卻通玄正傳、掃蕩瑞龍活計、門庭孤峻具瞻古格叢林、規矩森嚴堪革今時途轍、一周事畢、瞥爾翻身、拳倒涅槃城、踢翻生死窟、更有末後一句分付諸人、還會得麼、看看紅爐飛片雪、丙丁童子面門寒。

蘊上座下火

五蘊非有四大本空、泥牛夜吼澄潭月、木馬時嘶碧落風、只如亡僧面前觸目菩提、且作麼生和會、以火把打圓相云、其或未委悉、大家問取丙丁童。

省院主

幻境忽省、大夢俄寤、葉落歸根、金風體露、既是初秋夏末、須向萬里無寸草處、別求活路、雖然與麼、院主借取眉毛好、何故木佛不渡火。

不思善、不思惡、面目分明、驀地去、驀地來、全機獨脫、偉哉猛烈大丈夫、生死牢關當下拔、既出眞俗羅籠、寧墮聖凡途轍、正與麼時那裏是佗眞歸處、紅爐焰上飛片雪。

伊大師。燈節日

一夜須彌打筋斗、驚虛空起皺雙眉、從敎明月照海嶠、爭奈悲風動地吹、某人、四十六年借路人間、惟道惟勉嘗苦氷寒、坐斷末山不露頂、寧居鐵磨牸牛欄、說甚伊字三點、拶透向上一關、是則是、豎起火把云、更有末後句子、切須理會始得、其或未然、問取燈王古佛看。

明應大師

一念與道相應時、堪做吾家眞種草、潙山門下老牸牛、法華會上大愛道、當頭拔卻生死關、直下掀翻涅槃窟、末後句子又如何、烈焰堆中一片雪。

鏘侍者

三呼三應、金石鏗鏘、末後一句、徧界不藏、只如毀犯聖制破夏行脚、果有出生入死超宗越格分也無、擧火把召大衆云、看看火中菡萏吐馨香。

慈慶禪尼。預請

風前薤露易晞墜、岸樹井藤良險哉、五十六年惟一夢、任敎殘月照西臺、某人、受生業繫、暫處女士濯流、是其天資甚踰丈夫志氣、舊守三從勞服勤、忽驚五障難迴避、毀形既厠六和衆、旋踵須昇諸聖位、染疾歲云深、奄息時將至、四大空身有去有來、一靈眞性不變不異、拈起火把

云、大衆還見得麼、金剛正體鎮長存、劫火幾回燒海底、

棱猛庵主。結夏日

不幸捨俗歸眞志、猛烈工夫已十成、失脚踢翻生死窟、放身靠倒涅槃城、某人、夙生知有箇事、頂門具活眼睛、百千法門卽時蕩盡、七十六歲幻夢忽驚、萬里渾無雲一點、參州只是月孤明、以火把打圓相、諸人高著眼看、安居禁足蠟人冰、卻踏紅爐焔上行。

爲靈叟和尚入塔

佛燈滅卻瞎驢邊、知是無明得的傳、慚媿頂門正法眼、空餘夜月照青天、恭惟、某人、誤入長勝籌室、喫著痛拳、從此喪盡命根、露些風骨、出言吐氣處越格超宗、揚眉瞬目時截釘斬鐵、南詢歷盡二十年、勘過諸方老古錐、便見大唐國裏只是有禪無師、還向巨福山中平分風月、宏開萬壽爐鞴鍛鍊聖凡、橫拈倒用星飛電卷、眞操實行氷潔霜嚴、太古正音和者寡、調轉無生七見春、末後一句淵默雷轟、直至如今疑殺幾人、一義同心山缺高兮海缺深、兄弟十字無限清風來未已、者箇是、某人、一平生受用不盡底三昧、卽今卻要知眞歸處麼、未免重通箇消息去、流水潺潺一谿曲、白雲長鎖碧層巒、湘南潭北黃金國、不似自家田地間。

心庵主入塔。舊爲明禪檀那。

不昧正因、心華開發、立大基業、爲法檀越、豎起拳處打破生死牢關、低頭歸時領略故家風月、釋迦腦蓋達磨眼睛、畢竟是箇什麼閑鬼骨、空留三尺浮屠兒、千古萬古峭巍巍。

覺眞禪門入塔

出生入死、兩俱空名、離真除妄、也是何物、浮屠三尺礙須彌、虛空撥出黃金骨。

頂山和尚入塔

千聖頂顙骨氣別、當陽突出好生觀、大士峰前全體現、層層落落影團團、正與麼時莫是本寺開山頂山和尚還家穩坐底消息麼、依俙華藏甚深海、髣髴𡶴高不動山。

說

松巖說

作陽操禪人從予遊久矣、一日需安別稱、故取松巖為號、渠亦請聞其說、且與語之曰、從上參學之士、先固信根而深究道本、志氣高衝霄漢、不憂不入時人意、雖嘗盡霜雪之苦、終難改歲寒之姿、然後立處孤危八面玲瓏、鳥道玄路假使佛祖只斫額而仰望耳、當其垂一機示一境、或濟北巨樹榜樣後世、無限蔭涼淸風未已、或雙峰山前、鈍钁頭邊、忽爾打翻筋斗、再來不直半錢、或烏舍華落、錯下名言、致人作境會、閑過二十年、或振威一喝、崖崩石裂、青天迅雷掩耳不及、汝勉勵力行遠攀先哲勝躅、乃希顏者顏之徒也、正宜不負所以予命子之旨、庶幾名實相當乎、時有管城翁、在旁起歌曰、鶴唳喬枝、猿叫落月、山撼夜濤、瀑飛晴雪、名耶實耶、天風瑟瑟。

材翁說

夫非良木者、無由締構大廈、是美器而可庸、庶幾先修、昔臨濟在黃檗栽培寸青、漸成巨樹蔭涼宇宙、標榜叢林、自爾以降、分苗連根、殆不知其幾千萬章、不施繩墨、不勞斧斤、長短方圓自

然中度、是以競撥洪基、宏開戶牖、充塞天壤之間、後來獨有石霜慈明老人、頗具破家散宅手段、數領院事、不動一椽、然後勃然而興臨濟之將仆、其十有二世、不肖遠孫、我燈佛先師、是法門梁棟、天下宗匠、只以一平生罵佛呵祖、口業所招、如今門庭冷若死灰、悲夫、駿陽梁姪、天資英敏亦老成也、薄有起家之才、宜乎足庵取材翁二字、爲之別稱、唯望勤業勵行、扶立保社、要令其實不愧其名也、勉旃勉旃。

無住說

關西本姪、來需別稱、爲寫無住二字、遺之、渠亦欲聞其說、予謂之曰、莫是從無住本立一切法也麽、莫是應無所住而生其心也麽、莫是有佛處不得留、無佛處急走過也麽、總不是者般底道理、儞而今只向父母未生前、猛著精彩體究久之、名相雙泯、人法兩空、三際平沈、十虛消殞、那時方見無住之義忽爾現前、思之。

道山說

一日有客、謂余曰、吾抱參道之志有年於茲、而復賦性愛山、雖棲遲易地、皆不離山、所以縱目而觀、則疊嶂列屏層巒潑黛、白雲抱幽石、赤日下高岩、全是道也、側耳而聽、則谿流漱玉、松籟翻濤、寒猿嘯深崖、老樵歌空谷、也是道也、今既頗覺、境智冥合、物我雙忘、方知道本不在山、山亦何離道、追思古人云、平常心是道、又云、無心是道、或云、牆外底及透長安、豈止外邊打之遠者哉、時古濃河邊大昌主翁信公、從余需偈乎道山雅號、余耄矣、不辨平仄之久、借客語寫以塞其請云。

別禪說

正燈庵主、一日從予需安道號、因寫別禪二字醻其請、時有一驪烏侍傍研墨、乃問曰、旣是別禪、想非四七二三稟承將來底不立文字等禪、未審、甚麼禪、余笑曰、今日是延文己亥臘月二十五。

授庵說

相陽傳姪、一夏與余掌庫務於飯高山庵、執爨負舂、區區賤役、無事不辨、甚感有志斯道矣、解制後且辭參方、亦需別稱、仍號授庵、儞此去看山翫水、游州獵縣之時、勿忘自己大事因緣、切著眼看、佛佛授手、祖祖相傳底、是什麼邊事、忽爾蹉脚踏得到底、方是名實厮當、至屬至屬。

及庵說

古播信姪、訪余近江石塔客居、需安別稱之次、從容語曰、我師太虛旣歿、而慘怛未已、尋亦喪母、忽省、無始以來、業繫受身、展轉昇沈、三有界內喫盡無量艱辛、若不今日截斷生死根源、則極未來際、靡有超脫之日也、況我濫厠空門十有餘年、而於此道全無些子入頭之處、唯是波波挐挐徒閱涼燠、實自慚自愧而已、乃歸故里、就樹縛屋、終日掩關、休罷萬機、把做一件、舉取一則無義味話頭、默默參究、依舊肚裏疑團黑漫漫地、無奈之何、云云、予謂云、汝今如此信得及、眞箇難得也、斯志久遠不退、安患弗獲辨明己事、古人得旨之後、猶拂衣遠引、韜晦岩谷、一生與世遯如、纔見人參扣、卻不獲已、或豎起空拳、或門上書字、或云、谿深杓柄長、這般高風逸韻、皆從最初信得及之上流出將來、至今照映天壤之間、予號汝及庵、意豈非在茲耶。

劒關說

演祖頌趙州無字曰、趙州露刃劍、寒霜光焰焰、更擬問如何、分身成兩段、性禪者求安別稱、因號劍關、汝由今而後、放捨諸緣、把做一件、孜孜兀兀參箇無字、一旦知解忘、能所泯、使儞盡揮翻關棙子、非惟割斷生死魔網、亦須勦絕佛祖命根、謂之不動干戈、坐致太平云。

直前說

少林云、直指人心見性成佛、淨名亦云、直心是道場、皆俯應時宜、枉順人情、豈翅七曲八曲而已哉、縱使有佛處不得住、無佛處急走過、奔流度刃、疾焰過風、遼鶴三千、溟鵬九萬、杳出羅籠、超脫窠臼、揚身那畔、別立生涯、若約衲僧門下、正是癡獃漢也、儞若在這裏著得一隻頂門眼、須分鐵磨總持之鞏、向背後叉手耳、大抵如今學道之人、不能一往直前、達得入手、多在一機一境之上、做途路活計、如是躁跟、如是躊躕、所以未有歸家穩坐、實可憐愍者哉、鏡邸接待庵主端大師、需別稱、因號直前、寫此以爲其說云。

定巖說

古人晦跡岩間、與世邈如、只專以禪寂將爲樂矣、所以孤猿叫月無聞亂耳之聲、幽鳥銜華不見遮眼之色、若斯三二十年、一旦厥道顯著、紫詔入雲、出做人天導師者有之、或亦誓不下石室、煨芋充饑、編草爲衣、樵汲之外、宴坐靜默、泯泯待終者有之、然其高風逸韻、尙鳴韶濩于百世之下、咸是靡有不從那伽定之中得來者、予賢姪字一、與予作林下之遊久矣、需別稱、因號定巖、略示其說耳。

南雲說

予昔游豫章、舟泊滕王閣下、有一少年梢工扣舷、朗誦王勃記詞者、予蓬窻起坐、終宵側聽、私增感激、良足以想見騷人墨客幽致雅韻耳、嗟乎俛仰之頃旣逾三紀、今視鈍庵老兄與神足棟禪、大書南雲二字、而爲其別稱、乃覺西山南浦歷爾聚乎毫端、朝雲暮雨宛然在於眼底焉

高原說

太元至治壬戌春、游袁之南源、見方丈扁榜、曰、水出高原、蓋取慈明禪師住此山日、有僧問、如何是佛、答云、水出高原之意耶、備陽長福抄老、不憚跋涉、來訪于飯高巖居、留信宿而去、其志可嘉、臨別需別稱、號之高原、切希參究慈明垂示之旨、徹其源底、恐是名實厥當焉。

彌天說

東晉安公僧中之龍、德名俱高、靡有出其右者、故自稱彌天釋道安、良有以也、如今釋侍者樹彌天用爲別號、且喜吾門復獲希顏慕藺之徒也。

雪懷說

昔王子猷雪中乘舟、訪于戴安道幽居、未到其處、乃回棹、人問其故、云、乘興來興盡歸、蓋參禪行脚亦復如是、若途中忽爾有洗面摸著鼻孔底時節、何必用宗師面前、承言接氣問如之若何也哉、猷侍者需別稱、因號曰雪懷、迅筆亂道贈之云。

霜林說

果侍者別稱霜林、蓋霜也靑冥露結積久、凝白濃淸、林也衆木叢生、經年蔭涼高大、人也德足

道優、而後必成名器、一朝霜露果熟、人天推轂扶起叢林凋殘之秋、方始不孤余所以號儞霜林之旨焉。

快翁說

若論此事、則棒頭明旨、早是鈍鳥棲蘆、喝下轉機、不免困魚止濼、爾以高亭隔江橫趍、南泉拂袖便行、其遲豈翅七刻八刻矣哉、且問快翁禪伯、作麼生是伶俐衲僧分上事、汝向未開口已前、下得一轉語、名不浪得也。

石磵說

余性喜遊山水之間、一日飯罷拉同志兩三輩、入屋後山、從樵徑行殆乎數里、松風吹耳空翠濕衣、忽見一洞壑、幽邃嶮岈陰風凛凛、老木交枝、古藤垂蔓、兩崖對峙如側翠屛、中有巨石、高丈餘計、屹然特立若削青鐵、硉矹磈磊怪奇可觀、潤澤被物、草木華滋、谿山明媚、蓋疑內含美玉、而乃致然乎、下有磵泉色似挼藍、泓然瀲灔浸爛雲根、瞪目俯臨、令人心寒股慄而已、亦恐有靈物蜿蜒於茲歟、余聊有感懷、卽謂同志曰、坐吾語汝、古隱士覓揖塵世、遠尋雲山棲遲空谷之中、考槃寒谿之上、守志堅確、天飜地覆、不移不轉、心源淵深、歲積月累、彌淸彌澄、唯羞世人知住處、亦恐聲名流江湖、而今回觀石磵、與古隱士之道貌頗相逼似也、汝意謂何如、同志拂袂起笑曰、老夫實耄耶、若但謂酷愛彼石磵天生淸絕佳致、則良以可也、引古隱逸偷庸比倫、何其言之骫骳如是、豈復非好事者哉、余失所對、赧面而休、夕陽已懸木末、相呼而歸、翌旦泉姪來相訪、瀹茗同啜次、話及乃事、泉云、或號吾石磵、庶識所由、正欲來從老夫而聞其說、幸

希記山中所見所語、在石磵字尾矣、余曰、前所言者、是同志所捨、汝用是奚爲、泉云、彼已非我、我亦非彼、彼我各異、用捨寧同、余不獲已、援毫書贈云。

可庭說

老拙疇昔遊于元朝、度夏姑蘇虎丘、一夕竊出堂外、經行千人石上、時一方明月白如秋霜、忽爾追憶古人獨立齊腰雪覓法、艱難之至、嗚呼倒指、今既逾於三紀、茌苒光景惟如一日、尾陽方侍者來需別稱、爲號可庭、聊記舊事、以書厥尾云。

越谿說

吾子秀格年、未甫志學、來入余室、忘身服勤、須臾不離左右、已逾一紀、余住庵所在、動不下三十餘輩、渠醇以卒歲之計爲懷耳、所以幹蠱周旋、無功不辨、然而無矜伐之色、口絕勞苦之言、只疾世情之爛似泥、圖吾道貌淸如水而已、一日袖紙需別稱、因號越谿者、蓋越之若耶谿、天下勝槩自晉宋至今、名賢才子詩僧騷客、以一不游於此而爲恨耳、是以此地之譽、直與天爭高矣哉、汝欲不數實愧名、當宜勵志進修、悟證淵沖卓絕常流、日達玄奧、若川之方增、濬大法之根源、紹吾宗之正派、馳名乎百世之下、豈不偉也哉。

書簡

答倫上人

久不致起居之問、無勝慚惶之至、忽領慈誨審道體佳勝、欣慰無量、前既見惠一花五葉、山中

無事、焚香披閲、結般若縁、尙缺東語西話、殆如渴思水、今又荷厚意、何以謝之、去春靈叟殘故諸子、堅請繼明禪席、不獲已而黽勉從之、夏罷終脫羈絆去也、秋末到但州、借古寺閑房過冬、今夏猶就茲養痾、鄙體輕安、幸勿煩垂念、備州忍兄本隸業律寺、倏爾奮志將欲更衣參禪、齋中川雄兄書以爲介紹、求愚授衣盂、愚謂佗云、自己誤服田衣玷辱佛門、爭敢可度小師乎、子須大方去投名師宿衲、成就法器、豈不可哉、今已渠意在夢窓和尙・臨川元翁兩老之間、望尊兄方便、令渠得遂其志、則亦是利物之一分、愚每以若斯事奉勞煩神用、不免僭越之罪、唯渠不憚跋涉、特來懇求甚力、不忍棄而絕、勉强稟聞、勿悋慈愍幸甚、不宣、

又

順公上人捧尊兄手墨而來弊庵、今夏聚首、二六時中孜孜辨道、眞本色道人、愚疇昔隨衆幾乎二十年矣、未嘗及見箇樣好兄弟也、豈期歲晚幸得與肉身菩薩結同住之勝緣、是亦偏出於吾兄道義深密之中、詎庸奉謝、皇恐不備、

寄實翁和尙

前日尊介急回、不暇悉寫所懷、尙有慊於中、今歲看又盡、益驚流景易過、況殘齡良以無多、知心能有幾人乎、奉顏接談、時中願望、只以老懶日增、因循虛度數月了也、心親跡疏、幸乞勿將怠慢我罪、慈亮慈亮、挑字猶未到此、想精抄入神、與尋常不同、上刹土地、殊茲秘惜、而妬出於外、陰設詭計致是得來之晚耳、叵耐叵耐、呵呵、弊寺門前、有幾箇潑皮、近日作許魔難、因此某早晚拂衣遠引也、不定、薄福所招、亦不足怪者、隆禪卻要禮謁于函丈、冗中援毫覼縷到此、時

寒、爲法保重。

答實翁和尚

上復、忽辱示諭、且審、官收辭狀、不敢勉强、以撓吾兄安靜之趣、竊爲之助喜、忻幸忻幸、壽兄先師最鍾愛之子、孟浪海外二十年、今已歸來、猶缺落包之地、誠是可憐者也、如今幾箇法眷所占院子、咸是先師遺席、何不與一箇、教佗安頓乎、宛如蚖蛇戀窟相似、箇樣破落戶、如何把作人看、天寒歲晚、春風一策、便是相見之時也、來人急回、不能獲伸萬一、恐愧之至、伏冀爲法珍重。

又

越弟來出示所賜手教、焚香繙閱、仍審此日道福兼昌、興寢淸勝、欣慰無已、細味來諭、區區痛責愚林下掩關、懶於趨世、又云、風雲際會、以膺崚擢、夫何見期太過、何以敢當、自非厚荷存撫、則安得到於此耶、靡勝銘感之至、愚壯歲隨衆之日、東西班列、尙以不敢措意、何況大焉者乎、是無花蓋深自量己知分也、頹齡幾乎耳順、蒙昧與年相稱矣、當初所得於師友者十不記一、好一箇棄物、天壤之間、鮮有我顧者、獨頂山居兄、平日道義不寒、退與此廢院子、素有山田數畦、蔬圃二三畝、分甘作箇禿頭老農、躬耕手種、聊以卒歲、亦足以自娛、幸勿煩憂懸、但欲得此生之中、追隨左右及方山・竺峰諸公高躅、詣于嵩山、拜祖塔罷、而歸龍峰、賢若話舊、亦未可得也、徒增悵怏耳、似聞、上刹嘗罹元弘兵火、衆屋一燼、如今所經營者、止於佛殿一舉而已、厨下淸淡、時或俵米度日之多矣、常人分上、必不獲無少勞慮、左右寬量大度、寧復目前世故足介。

高懷也哉、切希垂念乃祖之道危如累卵、不倦槌拂、發揮正宗、無窮法利溥賑迷徒、是則副愚不肖小弟等所以渴望、至祝至禱、問及元泰、今夏在此聚首、渠又無日不慕左右道風、怕是秋凉將宗禪同去執侍座下、也不定、姑此略布、極熱、爲法保嗇、不宣。

又

久稽上問、媿負劇深、區區東望、徒增懷仰、此日槌拂之餘、法候清勝、左右方歸國、未及周歲、榮領辟命之兩次、竊喜、巨瑞之遷、匪伊可後師祖法燈滅而再餤也、從來關東京師名刹、屢換庸主、到我左右、猶未聞登擢何也、胡爲公道遽然坎坷、度亦黑衣宰相議論、執己爾耶、凡有意叢林者、孰不嘆息、豈獨契眷之末也哉、左右大節實行、當克振於晚節、切冀益加保嗇、禱祝之極、去年秋、西祖頂山兄、疾旣亟矣、招愚垂涕訣別、苦屬其徒曰、待我逝然、請愚用補遺席、雖大非所欲、情義所在、不忍以存沒二其心、故勉强從之、小祥已除、乃歸隱尺田明禪、尋以安國無可任灑掃者、又被諦兄識撥、不獲已往來兩寺之間、隨分從事常住、未免時或少冗煩慮、報緣難逃、累麼村院主名、自羞自笑耳、輒有少戀于閒、僧嗣禪人頂山兄鍾愛之子、爲人柔和質直、敢無衲子之過、侍奉本師八更裘葛、迨乎其沒、從愚而游又一年、蓋受佗遺付耳、嚮德慕風久之、特去要求依棲左右、其見許否、渠亦薄有勤幹之資、莅事恐不有失、衣鉢閣裏如闕其人、似試可用之、伏乞、賜收錄、餘無所望、此間刀子古今有名、只剃刀底不如和州好、適有人寄一雙來、謾此馳納、幸恕微浼、會見何日、臨書惘然、爲法自重、不備。

又

上覆、茲者區區奉屈無佗、祗欲共喫苦茗食淡飯、而少慰遠別之懷耳、想亦人事繁冗、打疊行李未辨、今既不敢勉强到請矣、前見許進發日蒙賜面違、感戴至意、然迂回兩里路也、是許多擔閣、切勿下訪爲幸、乃米麵等零碎物子、件件少許上納、媿怍可量、要兄候謁、參隨一擧與佗商量也好、昨以數紙干瀆神用、得罪得罪、餘付要兄道達、不備。

又

再拜、明禪堂上和尙侍者、三陽交泰萬物發榮、伏惟、卽辰尊候動止起居萬福、來二十八日、啟靈叟七周忌辰、緣是燈節以後、來此與佗徒弟等相共看[illegible]五部大乘經、預取今日啓建、被忙冗牽、尙不及上問、獲罪之至、更過五日、看讀事畢、卽詣上刹、以竭瞻拜之忱、敢望慈察、不宣。

又

久不致起居之問、企仰增深、此日伏惟、壽體淸勝、動止萬福、近承榮遷金峰名藍、是乃湖海衲子所共欽羨、矧吾儕忝居友末、忻慰豈可勝言乎、第恨、相違濶遠、無緣參慶、只望法席、徒馳鄙情耳、亦聞、象外和尙已傾巨福、雲山丞董龜峰、不意見師祖之道復振於世、私以爲喜不少、某在此山中、粗要衰晩、春薇秋栗、枯淡中極有味也、惜無人能知斯樂者、呵呵、嗣兄昨齋所賜手翰歸、既而路上爲赤眉叢奪得去、靡知所以見教之旨、至今懷慽良多矣、因便再示及一字幸甚、少懇奉白、此椿禪者乃智覺法孫、爲人穩實、薄有英敏之姿、進學不倦、恐成就法器者耶、如今不憚千里艱辛、特往致拜函丈、其志勤矣、敢希一賜延見、眞爲幸也、區區所懷百不盡一、餘惟萬萬上爲大法、益加保嗇、不宣。

寄濟禪人

昨日到安國寺一宿、齋罷當歸明禪、早晨偶撿點行李、忽得前日見惠綿襖、且驚且媿矣、竊忖己行解、尋常同衆受用底粥飯、尚其恐異時鐵丸銅汁也、何況別領常住巨費乎、不是虛飾謝遣而要求無貪之譽、實媿龍天鑑裁耳、今令抑而受之、更增地獄業因、豈是道人所以推及法友之義哉、重取回納、望慈容只恐有負諸兄厚意、慚惶之極、不宣。

又

早晨爲取紙筆盞子等、撥遣僕夫去了也、然專价送來、感怍之極、綿襖昨已違拒盛意、何以逃傯、還蒙過稱、如此惶媿曷可勝言、上元之後、必須回也、餘候面既、不備。

寄無夢和尚

某甲拜覆、雄峰前前版座元禪師、達奉既是幾乎三十有餘年、然無一日不在瞻望風采之中、忽辱過訪、忻慰之至、豈可勝言哉、第恨象駕登途太疾、不獲陪從清談究盡欵曲耳、麤羊皮一片、麤茶二袋、聊表微忱者、幸勿罪涴瀆、伏希慈亮、爲道自重、不備。

寄震巖和尚

揖別倏更晦朔、唯日增馳仰耳、昨忽領手敎、時在洛中、來人亦急求回去、仍無暇裁答、因循到今媿悚之至、尊兄乍住上刹、恐是不濟事多矣、于煩道慮、然吾兄才識超卓量度宏深、以推誠護宗、垂慈拯物爲念、則兇肝無狀之徒、當自斂袵服膺、凡可消忍之一字、爲調伏衆魔器杖者乎、稍待盜賊衰止、路途清平、卽往展奉、非面罔旣、略布、不宣。

與月心和尚

新命定林堂上月心和尚座前、卽辰伏審、光膺公府峻擢、榮領定林名藍、非惟重揚佛燈光顯、且瞻鼎新祖室梁棟、矧乎月翁昔日最初開法之場、吾兄今朝應世權輿于此、雖各自道行時至、是因緣際遇甚奇、大凡群衲咸增忻誠、況復孤貧忝居眷末、多幸、弊庵上刹、相距不涉多程、竹杖芒鞋屢詣奉接清話、豈圖衰暮獲茲佳期、日望象駕之遄臻、時出犢廬而佇立、切冀快登猊座、朗振雷音、聳動人天、何疑、高遷巨瑞未晩、若時珍育、式副願言、不備。

啓三條殿

某甲、誠恐頓首、謹啓。　三條殿閣下、比日伏承、被下　宸翰、言進奉山中平生提持一句、并一日可踏長安之土、云云、玆者某望
天、焚香、跪讀驚且喜矣、竊顧、某、識性蒙昧、道學空疎、退臥窮山、待盡殘喘、寧亦有俚語而可備
叡覽、實難應
明詔、唯深自愧嘆耳、切冀閣下導區區微忱、上達于
聖聽、下情靡勝激切屛營銘感之至、某、誠恐頓首謹啓。

永源寂室和尚語錄卷之三終

永源寂室和尚語錄卷之四

法語

奉答再賜

手詔

昔法常和尚問馬大師、如何是佛、大師云、卽心卽佛、常於言下大悟、便往大梅山、卓庵而住、馬大師聞得、令僧去問、和尚見馬大師、得箇甚麼、便住此山、常云、馬大師向我道、卽心卽佛、我向者裏住、僧云、馬大師近日佛法又別、常云、作麼生別、僧云、近日又道、非心非佛、常云、這老漢惑亂人、未有了日、任儞非心非佛、我只是卽心卽佛、僧歸擧示馬大師、師云、梅子熟也。

恭惟、辱蒙被下

手詔、懇求一句子禪、私顧、某法社庸流叢林晚學、全昧宗乘、退守頑愚耳、竊念、古德云、吾宗無語句、亦無一法與人、此說之下開不容髮、直得三世諸佛縮舌、歷代祖師吞聲、然雖若斯、旣賜

詔旨及再、無處逃避、勉强繕寫如上因緣、謹以進奏、伏願、

陛下萬機餘暇、一切時中、將箇卽心卽佛之四言、置于

宸襟、起大疑情、勇猛精進、擧覺提撕、嘗聞、大疑之下有大悟、小疑之下有小悟、疑來疑去、忽爾疑情破、則頓見本來面目、明徹本地風光、那時覓心、終不可得、寧復何佛之云哉、非翅坐斷報

化佛頭、亦須恢興唐虞帝業者耶、至祝至祝。

答鎌倉源左典厩。基氏

願公只向疑情不破處參、行住坐臥、不得放捨、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、遮一字子、便是箇破生死疑心底刀子也、遮刀子欛柄、只在當人手中、教別人下手不得、須是自家下手始得、又云、千疑萬疑、只是一疑、話頭上疑破、則千疑萬疑一時破、又云、但辨取長遠心、與狗子無佛性話廝崖、崖去崖來、心無所之、忽然如睡夢覺、如蓮華開、如披雲見日、到恁麼時、自然成一片矣、但日用七顛八倒處、只看箇無字、莫管悟不悟徹不徹、三世諸佛只是箇無事人、諸代祖師亦只是箇無事人、又云、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、只管提撕擧覺、左來也不是、右來也不是、又不得將心等悟、又不得向擧起處承當、又不得做玄妙領略、不得作有無商量、又不得作眞無之無卜度、又不得坐在無事甲裏、又不得向擊石火閃電光處會、直得無所用心、心無所之時、莫怕落空、這裏却是好處、驀然老鼠入牛角、便見倒斷也。

伏承遠馳台翰、忝蒙問及工夫用心之旨訣、衰朽何人、仰荷台誠徧至于此乎、下情靡勝慚惶之至、是以抄寫大慧書中數句、聊備嚴覽、大凡提話頭做工夫、最捷徑簡直、成佛做祖基本也、雖然只在當人信得及而已、切冀閤下將箇無字、置于鈎抱、四威儀內、二六時中、猛著精彩、逼起疑情、參去參來、靡有間斷、所謂重昏麤散、浮念雜想、不待遣自遣、厥志堅密不退、參未透、悟未徹、在八識田中、永做道種、生生不失人身、世世不墮惡趣、再出頭來、一聞千悟、先哲垂訓豈欺人哉、假使逗到臘月三十日、生死魔軍卸甲歸降、閻家老子歛衽服膺、夫之謂橫按金剛王

寶劍、坐斷宇宙沒量大人者耶。

示月舟居士

參禪是猛烈大丈夫事業、非怯弱劣機所宜趾及也、所以云、若論戰、箇箇力在轉處、亦云、如一人與萬人戰相似、或云、騎賊馬追賊、及臨濟兒孫單刀直入、恰如勇夫赴敵不顧危亡、然後脚踏實地、手握吹毛、一斬一切斬、一了一切了、須是具如上體裁、摧伏生死魔軍者哉、昔馮給事有偈云、公事之餘喜坐禪、何曾將脇到床眠、雖然現出宰官相、長老之名四海傳、又李駙馬云學道須是鐵漢、著手心頭便判、直趣無上菩提、一切是非莫管、從上士大夫學道、如此穩實、如此勇猛、望公奮發慕藺希顏之志、猛著精彩看、父母未生前、那箇是本來面目、時節到來驀地瞥脫、心華燦發照十方空、只要辨取久遠不退轉身心、綿綿密密究來究去、假使今生雖打未徹、生生不失人身、世世得生善處、遇眞正知識、一聞千悟之必矣、更有一句子、向未點筆以前兩手分付了也、急著眼看。

示廬山居士

參禪是猛烈大丈夫之事業也、手提金剛王寶劍、不問佛來魔來、若有嬰之、尸橫萬里、縱向威音那畔空劫以前行履、正是階下趼漢、實非與它知解情量葛藤露布被羅籠底所可窺覷者耶、脫未到遮般田地、且參不是心、不是佛、不是物、是什麼之話頭、二六時中四威儀內、放下萬緣、把做一件、綿綿密密究將去、不得教有間斷、驀忽打破桶底子、方知本來眞面目只在此山中、廬山居士、遠來出紙求語爲警策、迅筆塞來命矣。

示絶倫居士

參禪實非隈隈瑣瑣淺根劣器所宜企及、須要向上人、直下坐斷、横按吹毛、佛來也斬、祖來也斬、更說甚麼生死無明、菩提涅槃、如此行履、如此受用、方與自己脚跟下事、少分相應者也、其偷或未到這般田地、只將僧問趙州狗子還有佛性也無、州云、無之話、二六時中行住坐臥、切莫須臾放捨、如一人與萬人戰、亦如救頭燃、綿綿密密著力參究、是什麼道理、日久歲深、工夫熟、伎倆盡、能所忘、知解泯、忽爾打破漆桶、拶透牢關、乃謂之猛烈大丈夫事業者哉、絶倫居士、特特來山中需語、不獲已迅筆云。

示道觀禪門

弟子道觀、常接雲水之僧、其志實可嘉也、昔宣律師問韋駄天神、世間功德何者最大、天神曰、齋僧功德最大、敎中又曰、供養三世諸佛、不如供養一無心道人、汝今不須揀擇有心無心聖僧凡僧、一味平等而用供養、超越如上功德、豈惟百千萬倍者耶、仍示以偈云、齋僧功德誠難測、勿問聖凡同運慈、若是此心長不退、直登佛地有何疑。

示了淸道人

僧問馬大師、如何是佛、祖云、卽心是佛、其僧言下大悟、凡太近而難見者心也、太遠而易親者佛也、迷心則凡、悟心則聖、全無男女老幼智愚人畜等異矣、是故法華會上、卽往南方無垢世界、坐寶蓮華成等正覺、豈非八歲龍女之做乎、昔巖頭和尙、嘗作渡子、有一婆子、抱兒而來問、呈橈舞棹卽不問、婆子手中兒子、何處得來、巖頭便打一棒、婆子云、我乳七子、六箇不遇知音、

這箇亦不消得、乃抛手水中、是箇婆子便參得卽心是佛底樣子哉、了淸道人寄紙來求警策、直筆以贈。

示眞照居士

眞照居士請予需別稱、因號曰徹源、蓋名之與實、猶影之與形、捨形覓影、無有是處、捨實覓名、亦復如是、汝今既得此名、欲得與其實相應、正宜以生死事大無常迅速爲念、乃把萬法歸一一歸何處話頭、綿綿密密參去參來、忽爾照徹萬法根源、方知老拙不浪安號、亦豈非不出塵勞、成辨聖賢事業者耶。

示昌宗道人

水潦和尚參馬祖、問佛法的的大意、馬祖與一蹋、潦遂大悟、乃曰、百千法門無量妙義、只向一毫頭上識得根源、卽呵呵大笑、平生示衆云、自從一喫馬師蹋、直至如今笑未休、又復呵呵大笑、又良遂見麻谷、第一番見、谷便入方丈閉卻門、渠疑著、及至第二次、谷驟步去菜園裏、渠便瞥地、乃謂谷曰、和尚莫謾良遂、若不來見和尚、洎被十二本經論賺過一生、既歸謂徒曰、諸人知處、良遂總知、良遂知處、諸人不知、昌宗道人寄紙需語、爲進道警策、仍寫二則因緣以贈焉、若把無言無說、則大如認賊爲子相似、不爾則馬祖麻谷、有甚麼指示處、它二人如斯悟去、汝只於茲猛著精彩、參去參來、年深日久、必須知宗門下果有大機大用奇特殊勝之事、至祝至祝。

示聖巖道人

龐居士曰、難難、百斛油麻樹上攤、老婆曰、易易百草頭邊祖師意、靈照女曰、也不難也不易、飢

來喫飯因來睡、聖巖道人不遠千里、特特來訪予巖居、其志足以可嘉、因寫如上因緣以贈之、庶幾置之座右、時時著眼看、未審三人之中、擇那箇爲師、若謂有優劣也不是、謂無優劣也不是、二六時中四威儀內、念念爾心心爾、猛加精彩參取、久之必知有飯是米做底道理也。

示雪江禪閤。大慧語不錄

法語之作其來尙矣、大凡自非具大眼目代佛揚化本色宗匠者、豈末學庸流、容易可擬之事業哉、倘或勉强効爲之、焉敢可逃妄談般若之誚乎、而今忽辱被需老拙語用爲警策、老拙深慮僭越有沮嚴命、媿悚之極、錄呈大慧禪師答呂舍人一篇、伏希憑此而行久之、必有悟明之日焉、

示禪達道人

六祖大師答韋使君厥略云、迷人念佛求生於彼、悟人自淨其心、所以佛言、隨其心淨即佛土淨、使君東方人、但心淨即無罪、雖西方人心不淨、亦有愆、東方人造罪、念佛求生西方、西方人造罪、念佛求生何國、凡愚不了自性、不識身中淨土、願東願西、云云、大凡念佛要脫生死、參禪欲悟心性、未聞悟心性底人不脫生死、脫生死底人、豈亦迷心性、當知、念佛參禪名異體同、雖然、古人云、毫釐繫念、三途業因、瞥爾情生、萬劫羈鎖與麼、則念佛也鏡上生塵、參禪也眼中著屑、只如此信得及、則不必相賺、禪達道人、勤修念佛三昧有年、於此忽來余室中、請授衣盂、乘受大戒、因需日用警策、迅筆以贈云、

示盲者通明

昔阿那律尊者、耽著睡眠、佛訶曰、蚌蛤之類也、仍七日不寢、發天眼通、見三千大千世界、如見掌中菴摩羅果云云、汝眞箇有志生死大事、須將即心即佛公案、時時擧覺、處處提撕、一旦忽爾打破漆桶去、謂之頂門具正法眼者哉、那時豈翅見三千大千世界耶、百億須彌無量佛刹、在一毫頭上看卻、更無餘也、至囑至囑。

示嗣道禪者

學道之士、先須愼護身口意、屛除貪瞋癡、視名等浮雲、棄利如糞土、出言也要袪詐僞虛妄、立行也貴圖穩實端潔、任遇世間種種違順境緣、一一收在夢幻空華之中、然後以己事未明、常自勉勵、古人尙不容剪爪之暇、吾是何人也、荏苒一生虛度光陰、乃能抖擻精神、奮起志力、精進上加精進、勇猛更添勇猛、朝參暮參、行究坐究、一旦漆桶連底脫去、頓見本來面目、擔著本地風光、謂之出家行脚本志一時蔚畢底解脫自在活衲僧者耶、儞輔予住庵、七更涼燠、自一歸庫下、到今不憚祁寒隆暑、備嘗艱辛、勤役於井臼蔬圃之間、敢不遑寧居、料想、儞日用工夫爲之不致純密、若今儞道業、不克成辨、職我之由、咎歸于誰乎、從今日去、庵中卒歲之計、都不要介懷、切望、把生死大事、須臾不忘念耳、老拙力寫此葛藤、以代勞徠云。

示旨廣禪人

單傳直指之道、實非識情所測、不可得而名狀、所以南嶽徒磨古甎、龍潭吹滅紙燭、德山棒若雨點、臨濟喝如雷轟、香嚴擊竹、靈雲桃華、倶胝一生豎指、祕魔只管擎杈、南泉拂袖便行、永嘉振錫而立、投子油油、薦福莫莫、金剛圈栗棘蓬、破砂盆、鐵酸餡、各立門庭、互開鋪席、箭鋒相拄、

機境互陳、龍驤虎躍、電馳雷動、疾焰過風、奔流度及、豈小根劣機所可企及、雖然如此、若約我祖師門下、則非唯埋沒自己、抑亦忝辱宗風、其或未到如上田地、但將生死事大無常迅速、二六時中、造次顛沛孜孜兀兀、念茲在茲、一切得失是非苦樂逆順等、一時放下、然後我佛所戒之事、寧喪身命、不敢違犯毫髮許也、不問山林、不問市朝、得穩便所在、乃打住提起則無義味話、與之參究、著衣喫飯、屙屎送尿處、一切時中不要忘之、廢寢忘餐、嚼冰嘗蘗、不用斯須少間徒喪光陰、乃與麼做工夫、管甚三二十年、只以悟爲期、日久歲深、念謝慮消、能所忘、伎倆盡、忽然如桶底子脫水底火發相似、然後返觀千七百則爛葛藤、豈啻如飛埃過目也哉、古人云、參禪無祕訣、只要生死切、至祝至祝。

示眞源禪者

法弟眞源、一日出紙需法語爲日用警策、予謂、法語者道眼明白底本色宗匠事業、以其宗說俱通、意句圓活、而衲子取爲參禪之標式而已、是故得之者、如神隋珠卞璧而歸家也、實非單見淺識之流容易所議、縱使勉强而作、非唯無益於佗、恐招謗乎己之必矣、老拙於法未夢見在、語也不曾學得來、爭奈無分下筆、何況我宗無語句、亦無一法與人、此說之下開不容髮、雖然汝今懇請勤矣、不獲已打些屋裏話、汝既屋裏之人、想亦不出外頭也、今時學道兄弟、十箇有五雙、不免有知解過患、汝不可不知、纔入衆來、手脚未穩、無始曠劫無明煩惱、未嘗一點屛除將去、又不曾著實做工夫、亦不曾得箇悟由、遽偷它從上過量底人說話、以爲己有、開口便道、元來無法可得、無道可修、三業不必愼、諸戒不必守、元無生死相、豈求涅槃心、又云、一代藏

數文、拭瘡故紙、千七百公案、腐爛葛藤、忽遭人問著如何是禪、便竪拳下喝、怒目攢眉、胡亂支將去、甚者罵佛呵祖、欺神瞞鬼、撥無因果、無事不爲、謂之地獄滓、佛也難救、有底以聰明資漁獵內外典籍、談玄談妙、說心說性、諷詠江月松風、而爲心地印、和會青山綠水、而作本來身、有底只管打淨潔毬子、是句也剗、非句也剗、但向一塵不立處行履、全不知箇是陰識會通、更有一等人、把諸家語錄、鈔寫數百句、作一冊子、收在懷中、密密背取、到處互相問酬、多一句底憍慢色溢面、少一句底忿懣氣塞胸、似者般底、參禪如何敵得生死、臘月三十日到來、悔將不及、汝既知箇事、須是退步就己、眞參實究去也、老拙爲汝輙述十件要須、具在于后、汝當沒齒遵守而行、庶幾不虛作袈裟下之士者。

一者要須、生死事大、無常迅速、須臾不忘念。

二者要須、行住坐臥、檢束身心、不毀犯律儀。

三者要須、不執偏空、不誇精進、勿墮二乘見。

四者要須、攝意愼語、日夜靜坐、遠離閑妄想。

五者要須、莫認昭昭靈靈、坐黑山下鬼窟裏。

六者要須、廢寢忘餐、壁立萬仞、豎起鐵脊梁。

七者要須、看父母未生前、那箇我本來面目。

八者要須、雖參話頭工夫綿密、勿急求悟明。

九者要須、寧不發明經百千劫、不生第二念。

十者要須、大心不退大法洞明、紹續佛慧命。

示希運大師

世間一切憎愛取捨、得失是非、顛倒妄想等念慮、一時放下、須將死了燒了那箇是我性之話、二六時中、綿綿密密、無有間斷參究去也、是乃臨生死岸頭、大得力底消息、除此外別無方便、至囑至囑。

示明大師

元無男女相、寧有悟迷閒、若要明見本來面目、本地風光、只將四大分散時、向甚麼處安身立命話、二六時中無斯須少閒、究來究去、古人云、參禪無祕訣、只要生死切、所以世間憎愛取捨、得失是非、凡目前一切境緣、一時放下、綿綿密密參究去、歲深日久、工夫純熟、忽然如睡夢醒、如蓮華開、那時有甚生死可怖、涅槃可求、與劉鐵磨尼總持之輩、把手共行、豈非慶快平生者哉、明大師孜孜在道、一日袖紙需日用警策、因迅筆書此云。

示元參禪人

古人云、參須實參、悟須實悟、是故善財參五十三人知識、汾陽參七十餘員知識、大凡佛祖以來、發大機、顯大用、立宗旨、建法幢底人、靡有不從參之字上出頭來也、汝諱參也、身亦處參禪流輩之中、尤宜奮志勵精不憚跋涉、尋師擇友、忽爾撞著咨頭宗匠、喫盡惡辣鉗鎚、直教妄識妄情、和窩妙解妙會、一時蕩除、然後做得灑灑落落、超宗越格、俊快伶利活漢、豈不偉哉、其或未然、泯絕萬慮、放捨諸緣、把一則無義味話頭、四威儀中無少間斷、參去參來、說甚十年五載、

假使百劫千生不悟不休。如是信受、如是操守、謂之眞本色道人。若離卻如上二途、於諸道業無一所辨、終日閒散游談無根、荏苒空過一生、依舊輪轉六趣、徧爲徒有參禪名、全無悟入實、可媿可畏、思之勉之。

示秀格禪人

汝年雖甚少、出言頗以老矣、常語道友云、某甲、忝慕先哲煨芋垂涕、移茅入深高風之久、異時必須索我巖谷之中、其志尙善則固善、惟恐遠離師友、無聽提誨、閒遊安眠、甘墮庸輩、汝當深念、空山閒爾有便辨道、生死在呼吸、如何虛度日、幸有現成公案、今舉示汝、僧問古德、如何是淸淨法身、云、山華開似錦、澗水湛如藍、又問、深山巖崖還有佛法也無、云、石頭大底大、小底小、猛著精彩看、是什麼道理、蒲團竹椅之上、良不在言也、採薪拾果、鋤圃汲谿處、正好參究底時節、忽爾透得祖關、發明己事、謂之自證自悟活道人者耶。

又

大凡爲人子者、禀父氣分、天下古今所以理之令然也、非必求而得之、學而取之、汝入余室爲余法子、然癡頑疎慵之性、與余毫釐不差、益感夙生師資緣熟焉、其性也旣而相同、其跡也寧可不然乎、汝須俟余溘然後、雖三箇五箇所在、不要與人聚首遊處、只去谿邊林下、旋縛尖頭茅廬、形影相弔、隨分修持、謀終此生也、余有緊要一訣、實祕之久、今當付汝、勿輕語人、汝每日晨興、先須引手自摩頭顱、亦以目顧身上袈裟、心念口演、吾是釋迦文佛遠裔、縱使喪身失命、誓不壞毘尼軌範、至囑至囑。

示應山善庵主

昔出家學道之流、才入衆來、三篾縛腰、執爨負舂、不憚勞苦、殆臨危亡之不顧、蓋爲法忘軀耳、所以盧郎踏碓乎黃梅糟廠、潙祖主磨於白雲山中、百丈爲說大義、預去開田、木平每見新到、令其搬土、或者折薪論榮枯、或者摘茶辨體用、或者斟井上肩、折擔悟道、或者束桶失手、墮地了禪、皆是外若盡日順做務、而奔波、內不須臾忘參玄之正念、故往往一機一境、築著磕著、方知、此事不必在竹椅蒲團面壁靜默之中、吾應山善公、自入空門以來、未嘗一霎偸安逸體、初開松泉、今據明光、鑿山夷址、穿崖引泉、栽松種竹、縛籬鋤圃、咸將躬爲、不敢欲役人、酷有古德之風度、遐邇靡不嘆服、老拙與公、傾蓋之日雖不久矣、其義情濃厚、無由爲喩、一日出紙求字、寫之以酬其請云。

示是乘知客居山

上古之禪衲、韜晦千峰萬壑幽巖邃谷之間、得身世兩忘、與草木俱腐者、不可勝計矣、吾佛亦說、欲求寂靜無爲安樂、當離閙閧獨處閑居、乃至若於山間、若空澤中、若在樹下閑處靜室、念所受法勿令忘失、何況叢林衰替、看不上眼、苟有意辨道之人、望彼境界、當如畏蚖蛇之窟、避蠱毒之鄕耳、雪舟乘知客、徧歷京師相陽諸剎、嘗盡寒酸風味、而乃拂衣遠引、圖臥林丘、去秋來此、與同志五七輩、聚首蝸屋之下、過一冬訖、猶嫌山之淺、且欲從深入於深、其高尙之趣、足以可嘉也、大抵學道之要、最貴明心、明心之捷徑、只在生死切、生死切則頭頭物物在在處處、無非爲我之警策者、何必假求師友乎、谿聲山色、白雲青松、凡屬見聞一一、爲汝助發禪機妙

用者耶、所以古人云、欲識本來心、青山綠水深、又云、心外無法滿目青山、思之勉之。

示籥侍者

籥侍者、雪村和尚高弟也、天資聰俊、事業絕倫、異時扶起祖庭末運、非兄者誰歟、一日忽省學解機智無補於道、掃蕩淨盡、不留元字腳、孜孜兀兀、不棄寸陰、究明自己躬下事、亦欲去尋亂山深更深處、盡一平生、永不將名字落人間焉、甚可敬愛乎、切勿令放煨芋煙出乎戶外、恐是薰徹九重城中、誤引詔書入雲耳、正宜愼護、正宜愼護、老拙臨別吟一聯落韻詩、贈之云。

隱山燒庵何處去、大梅移茅跡已空、今日君懷丘壑志、挽回千載舊高風。

示正印大師

昔僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、只這一字、便截斷生死命根底利器、照破本來面目之鏡光、汝只二六時中四威儀內、放捨諸緣、打成一片、如咬鐵橛子、似吞栗棘蓬、參去參來、斯須少間莫有退志、忽爾打破漆桶、心華發明、照十方空、那時縱雖尼總持劉鐵磨、也須斂衽伏膺者耶。

示南大師

汝只須勵勇猛向道之力、把三百六十骨節、八萬四千毛竅、束做一箇無字、起大疑團、孜孜參究、則正似堅共嚴城不可犯干、所謂昏散等諸魔、色聲等六賊、望崖而退、此志久遠不變、何患靡有悟明之日、我今大書生死事大無常迅速之八字、以付汝、好收拾去、切莫須臾離卻身邊、才覺工夫有間斷之時、當取見之、其策發勸誘之功、雖百千良導善友、勿以逾諸、至祝至祝。

示龍禪者

參學之要、專在洞明己事、若欲直捷相應去、只將僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無之話起大疑團、孜孜打捱、忽爾撞飜上頭關捩子、非惟拔卻生死根株、和他佛病祖病、同時打失、那時如龍得水虎靠山相似、慶快平生、豈不韙歟、龍姪病中寄紙需語、揮汗迅筆、塞其請云。

示山上人

波州山上人、辛丑春來山中道聚、夏罷告別之次、袖出紙而求法語、余笑曰、我未見一法之可得、夫復何語云哉、山云、胡爲區區恪辭如斯、唯望示及一則古人因緣、用要爲前程警策、勉請甚至、余不獲已、謂之曰、昔僧問雲門、不起一念還有過也無、門云、須彌山、汝只將這話、一切四威儀中、綿密打捱、久久工夫純熟、打成一片、須彌山便是自己、自己便是須彌山、須彌山與自己間不容髮、論甚無明煩惱、以至菩提涅槃眞如佛性、亦須望崖而退、汝如此信得及去、直饒雖未得直下打徹、定是不被知見解會露布葛藤籠絡底本色辨道人耶、乃援毫寫之贈云。

示禪燈新戒

世尊拈華迦葉微笑以降、相傳續焰接輝、直至而今照映天壤、無幽不燭、謂是敎外別傳之禪也、儞既爲他家種草、操履當攀上流、終始勿墮庸輩、勉勵志力、晝參夜參、一旦心光燦發、照十方空、非惟頋大法燈門風、亦見自己名實斷當耳、禪燈新戒袖紙需字、迅筆塞其請云。

示增禪人

僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、只將這話頭、行參坐參、切忌忘念、大凡學道之人、正須

以生死二字、貼在鼻尖頭上、百千違順境界現前、卽時放下、孜孜兀兀、如大死人相似、究之明之、光陰倏忽、時不待人、努力今生須了卻、莫敎永劫受餘殃、增禪者在山中聚首、有志參禪佳道人也、臨別需語、迅筆以贈。

示山禪人

通玄峰頂不是人間、心外無法、滿目青山、且古人恁麼道意在何處、於此著得一隻眼、汝卽青山、青山卽汝、汝與青山、無二無二分、無別無斷故、雖然如此、若約衲僧門下、猶隔鐵圍在、直須揚身那畔、踢倒五須彌、方與此事少分相應哉、山姪需語、以爲警策、迅筆付之云。

示善敎大德

若欲超脫生死、直至佛祖之位、只十二時中四威儀內、不棄寸陰、無有間斷、參究無義味話頭、且喚甚麼爲無義味話頭、父母未生以前、那箇是我本來面目、只將此話頭、起大疑團、忘寢食、廢寒暑、綿綿密密、參去參來、恰如咬鐵橛子吞栗棘蓬相似、直得無下觜處、忽然蹉口咬得破吞得下、謂之大徹大悟底之人、唯如此修行去、直饒今生雖打未徹、此志堅固、永不退失、逗到臨命終時、人身不失、惡趣不墮、重出頭來、必是一聞千悟、豈非般若靈驗者哉、記取記取、勉旃。

示元杲上人

趙州無字、乃是諸聖骨髓、列祖眼睛、百千法門、無量妙義、唯從箇無字上流出得來也、正當參究此話、全非義味思量可及、如咬鐵橛子吞栗棘蓬相似、直無爾下觜處、至于情盡識鎖、知解泯能所忘之時、忽爾団地一下、則非惟拔卻生死根株、亦須掀翻涅槃牢獄、豈不慶快平生也

哉。

示先天兆庵主

古人云、盡三百六十骨節、八萬四千毛竅、作一箇無字、與麼提起、更討甚麼昏沈散亂來、老拙不然、併三百六十骨節、八萬四千毛竅、打做一枚鐵團圞、參究、則所謂昏沈散亂、卻爲我伴侶、還有與古人相見分也無、只要綿綿密密、間不容髮、若如此做將去、縱雖不能直下透徹、捱到臘月三十日、獲力不少、

示玉禪者

如地擎山、不知山之孤峻、如石含玉、不知玉之無瑕、汝十二時中、屙屎送尿、著衣喫飯、承誰恩力、若是於此尚未得力、只將箇僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無公案、綿綿密密、孜孜兀兀、參之究之、工夫熟時節至、打破漆桶去、豈不慶快平生者耶、

示鏡大師

昔潙山封鏡送與仰山、仰山提起示衆云、道得不撲破、衆無對、山乃撲破、汝於這話薦得、不妨明見本地風光本來面目、脫或未然、破鏡不重照、落華難上枝、參、

示從本禪者

出家學道之士、宜將尋師擇友、而爲要緊也、汝今仰慕慈廣和尚道風去、求依棲、厥志良嘉、聞說、堂中數十輩、箇箇本分兄弟、晝夜孜孜兀兀、坐若枯株、咸謂、石霜風規千載不墜矣、汝萬一見許挂錫、當須先以三年爲一期限、足禁出門、脇娩到席、口絕戲劇、意離攀緣、只二六時中、綿

綿密密、參究死了燒了、那箇是我性之話、既遇如此師、得如此友、居如此便當所在、汝在彼不辨道業、更可待何日哉、其或遊州獵縣、看水觀山、徒喪時光、全非予法屬者耶、異日雖歸來、斷不可有相見之分、從本勉之、思之、

示道芽侍者

余忘年友于芽侍者、天資爽拔、道貌穩實、以己事未明爲念、棄天龍法席、來此山中、與同志五七輩、俯首茅茨、一夏尺璧寸陰、孜孜參究眞佳衲子也、秋風一策、忽催歸歟之興、臨別出紙而需拙字、余絕筆之久、揮手謝遣耳、然猶懇求不已、因問曰、黑豆未生芽時如何、云、不知、又問、黑豆已生芽後如何、云、不知、又問、黑豆生芽與未生時如何、云、不知、余笑云、百千法門無量妙義咸在箇三不知之下、氷銷瓦解了也、他唯唯而已、余乃援毫寫之塞其請云、

示園林方長老

言前領旨、句外明宗、獨立乾坤、眼空宇宙、若約衲僧門下、則喚來、教它洗脚始得、這般現成說話、正是家常茶飯、宜且高閣、眞箇要截斷生死根株、撈到佛祖田地、當須退步就己頻下鈍工、參取趙州無字、是則把本修行也、園林圭巖長老、雖既住院匡徒、以大事因緣爲念、獲見問及、厥志可嘉、仍迅筆以贈云、

示聞翁譽侍者

佛性泰禪師云、五祖師翁頌趙州無字曰、趙州露刄劍、寒霜光焰焰、更擬問如何、分身成兩段、只消露刄劍足矣也、剩了下面三句、據余見處、爭如我箇檐外數株梅華、忽被昨夜狂風暴雨

一時空盡、片也不見、者箇卻是頌得恰好、雖然若又恁麼領略、未免眼中生華去也、唯向者僧未設問、趙州亦未開口以前、參取是箇甚麼道理、則歲久月深、必有悟明之時哉、聞翁侍者、因參趙州無字、出紙求其旨訣、寫之塞厥請云。

示定巖一侍者

天得一清、地得一寧、衲僧得一又作麼生、僧問趙州、萬法歸一、一歸何處、州云、我在青州、做一領布衫、重七斤、儞既有志參禪、只將這話專一厮捱、捱去捱來、積以歲月、捱到無可捱之處、直得三世諸佛、橫說豎說、如雲如雨、和它千七百則陳爛葛藤、一一打歸自己去、影由形生、名以實顯、方知、當初用一爲諱、甚不偶然。

示霜林果侍者

臨濟大師唯以一喝用事、道出常情、難可測度、間有垂慈救物、乃區分三玄三要、排列四賓主、施設四料簡等、皆如大火聚吹毛劍、觸之近之、靡有不獲喪身失命者、是故其直下的孫、燈燈相傳、繩繩不絕、到我松源師祖、僅十有五葉、家業不墜、赤手全提、儘見登門者、恰如金翅擘海、直取龍吞、師子一吼百獸腦裂、亦有三脚驢兒弄蹄行、鐵酸餡破砂盆、開口不在舌頭上等之句、嬰其鋒中其毒底、箇箇出羅籠離窠臼、電馳星飛、龍驤虎驟、偉哉盛歟、鍧鍧乎雷霆一時、晃晃焉照映萬古、嗚呼如今遺風餘烈、幾乎掃地而休、有意斯道之士、豈忍坐視、只憑箇伶俐底後生出、作他家種草耳、其人脫或命不遇時、力無逮志、只去巖棲林居、草衣果食、專究己躬之下事、與夫今時踞猊牀、握麈尾、妄談般若、累招罪愆之輩、豈翅霄壤不侔而已、古云、看水看山

坐、無名無利身、其詞頗似淺近、意味極深之遠矣、余一夕與客談及於此、果侍者在旁竊聽、翌旦備紙筆、來敎余寫此、因勉應其請云。

示平基藏主

昔水潦和尙、參馬祖問佛法的的大意、祖與一踏、水潦遂大悟、乃曰、百千法門無量妙義、向一毫頭識得根源、呵呵大笑、平生示衆、自從一喫馬師踏、直至而今笑不休、又復呵呵大笑、汝久翫敎乘、硏窮玄理、未審、三乘十二分敎內、將水潦得處、攝那敎去、須知宗門果有箇奇特事、若做奇特想、又是不是了也、子細參取、莫將爲等閑、只要嘗一臠知鼎味、其倘未然、只今休去卽休去、欲覓了時無了時。

示興性禪人

興性禪人、在此山中既三載、勞役庫務之間、晨夕靡遑寧居、其志良勤矣、蓋緣與余有俗門之瓜葛者、今亦暫去歸京師、只望儞以此大事因緣爲念、放下諸緣、打做一件事、參究此道、余已迫桑榆、旦夕難保、千萬不要久在外、歲晚歸來、依舊輔弼衰朽、是所庶幾也、

示昇侍者

四大分散時、向甚麽處安身立命、只要將這話頭、在呻吟痛苦之中、剎那無有間斷、參去參來、忽儞噴地一下、則非翅去卻膏肓必死之疾、亦須屛除佛病祖病禪病等、更無餘者、昇侍者、病中寄紙需語、以爲涅槃堂裏警策、因寫此贐之云。

示靈仲英侍者

嘗聞、提撕公案做工夫底、如手握鏌鎁、如擊塗毒鼓相似、嬰之觸之者、尸橫萬里耳、說甚生死魔軍、煩惱結賊、以至眞如實相、菩提涅槃、敢無由近傍、假使黃頭老碧眼胡、亦須倒退三千里者耶、僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、唯於箇無字、起大疑情、痛著精彩看、是箇什麼道理、忽爾一旦噴地一下、則千七百則陳爛葛藤、和這無字、一時瓦解冰銷、豈不快哉、豈不快哉、吾鄉英靈仲、特來山中、道聚茅茨之下、夏罷告辭、出紙求語、因信筆寫此、以酬其請、蓋非世之所謂法語類矣、只向家裏人、說些家裏話耳、切乞、前程莫出示人、恐招譏誚哉。

示松嶺秀侍者

松嶺秀侍者、久侍實翁、以爲言行之師、所得酷多矣、二十年前、訪余巖居、而後或去或來、厥道義之篤、至今敢不少渝也、今夏亦來、聚首茅茨之下、向道之志、唯知進而不知退、加以機辯峻捷、不失衲子體裁、良以足可嘉哉、解制之前一日、來告辭之次、從予請益臨濟參黃檗因緣、予謂渠云、臨濟道、我初詣先師三度問佛法的的大意、喫它六十烏藤了、恰如蒿枝拂相似、而今思喫一頓、誰當下手、惜當時等閑放過它了、若箇漢出來、曰某下得手、待它擬開口、彈指一下云、蒼天蒼天、管取它無吐氣轉身之分、秀曰、千載之下、不肖之孫、還無有具如上手段底麼、予笑指秀云、咦、非子夫復誰歟、予援毫記此、以贈云。

示聖賢大師

僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、十二時中一切處、著精彩看、箇是甚麼道理、莫做有無會、莫做無無會、莫做眞無會、世間得失是非、人我憎愛、顚倒忘想等、暫在他方世界、豎起脊梁

骨、不離蒲團上、拌取久遠不退轉身心、一生兩生、乃至盡未來際、不悟不休、如是做工夫去、不患無徹證之日、只要、生死事大、無常迅速、這八箇字、蘊于胸中、須臾少間、不敢忘之、若不然、則與昏散二魔侵撓、永劫不能成辨道業也、老夫今年六十八、餘算無幾、想無復相見之日、唯依此修行、大圓鏡中時時對談也。

示天機庵主

參禪不論愚之與智、男之與女、只是天機俊捷、識見超邁、氣蓋乾坤、眼空今古伶俐活漢、方獲與箇事少分相應去也、是故末山無著尼總持劉鐵磨、皆是徹大法之淵源、得祖師之骨髓、宜乎、其遺風餘烈、至今凜凜然乎天壤之間、謂之身處女流、成辨大丈夫事業者、爾如今眞箇有志此道、惟將生死事大無常迅速爲念、卽把世間一切是非愛憎、苦樂逆順等妄情亂想、一時放下、乃把僧問古德、一念未起有過也無、德云、須彌山話、綿綿密密、孜孜兀兀、行參坐參、朝究夕究、說甚三十年二十年、縱歷百千劫、不悟不休、若此辨取不退轉身心、參究將去、必無不明之理、忽爾心華燦發、照十方空、那時非惟與它古人把臂並行、正能坐斷佛祖頂顙、豈非慶快平生者哉、天機庵主、春秋富盛、遽爾落髮、披緇墮三寶之數、加以賦性純眞、惟道惟勤、自非夙熏般若之甚深、豈克若斯乎、而今出紙需語、欲爲進道警策、輙援毫寫此葛藤塞其請云。

示齊雲均侍者

我松源大祖翁、乃是臨濟十有五世之的傳高弟也、在宋嘉泰開禧之間、以所得底一百二十鈞重擔子、送在天下衲子肩上、多怕怖驚走、堪忍是任者鮮矣、如今此擔子、留止西來嵩山之

下、予見齊雲老兄、有力荷擔這重擔子者也、切望、莫忽焉、且道那箇是這重擔子、大力量人爲什麼、擡脚不起、明眼人爲什麼、脚跟下紅絲線不斷。

示錤庵主。先覺語不錄

錤玉田生于積代將爵貴權功名之家、忽省幻世可厭、而裂冠披緇、自從一入空門、日夕精勤、脇不到席、直要至古人眞證之地、而後已矣、大鑑聊感夙因、安名付衣、其驗於此可見、甲辰春、訪余巖居、俯首茅茨、既是一朞、一日告辭曰、且去別山過夏、秋風孤杖必是再會之日、乃出紙需語、以爲途中警策、余不欲容易發語、輒招妄談般若之誚、而懇求不已、因寫疇昔所聞先輩之數語、以塞其請云、

示子景大師。中峰語不錄。

子景大師、須臾不忘生死事大、孜孜兀兀、念茲在茲、余寓于垂木嘉隱庵、他最初來相見、問以此道、及余遷野部山中、縛茅而居、又來僦屋民間、乃度一夏、前後來往三載、其志可嘉也、而今繕寫中峰和尚法語一篇贈之、如是的實痛快、如是深切著明、汝依此修行、當須與鐵磨參潙山總持見少林、無以異也。

示珍禪者

太元延祐庚申冬、與然可翁俊鈍庵、同登天目山、謁于幻住老人時、雪滿千巖、一庵闃爾、吾儕三輩、前立列拜、各做親見鼻祖於少室峰前之想、因扣以宗門要訣、第恨疎鈍之跡、弗克領會委曲垂示之旨、嗚呼倒指、既三十有七白、惟如一日、眞間世哲人、豈獲復見也哉、遠江珍禪者、

妙年英俊、孜孜辨道、一夏聚首茅檐之下、忽需進道警策之說、即抄寫如上法語、以塞其請云。

書中峯和尚法語之後

中峯之道三傳而到雪巖、將破砂盆和空擊碎、七零八落、將謂、今已靡有孑遺、幸有不肖的孫幻住老人出、從頭整頓、依舊圓陀陀地、甚生可觀、夫之謂後中峯者耶、如未證據者、請把這葛藤、子細著眼看。

書壽位之下

愚平生不欲與人所知、是以棲遲巖壑、積有年矣、邇來不意、多有同心尋訪、並屋散處、無由關防、亦是報緣令爾、勿奈之何也、即休覺兄、敎愚寫如上數字、欲永隨身、蓋道義過厚耳、愚老矣、殘喘無幾、我兄聞愚物故、把此軸子、急須火之、愚深嗟留取閑名、久在塵世者耶。

書朴禪人十願十誓文之後

關西愚隱朴上人、非翅參道之志酷切、旁亦煉頂然指、刻苦精修、殆幾遺身、矧乎嘗設十願十誓文、護之恰如目睛、每謂人云、寧可令此生身淪墜三途、而經歷多劫、不肯破犯如上誓願若毫髮許、所有善因、專用回向無上佛果菩提者、余雖勝嘉歎之至、命筆書厥文尾、以贈云。

遺誡

老拙如今世緣將盡、因顧命諸法屬等、待余溘然之後、宜須林下晦迹火種刀耕、圖終一生也、契經曰、當離閙閙獨處閒居、山閒空澤云云、是乃吾佛最後慈訓、寧可不遵奉哉、汝等各各精嚴勤修、庶不向袈裟之下、失卻人身、是余深所望于儞輩耶、汝等見余氣絕、急須收窆、切莫留

遺骸以使人見之、掩土疊石、既畢勸乎同志只諷首楞嚴神呪一遍而已、然後把熊原還于太守、以茅庵付與高野父老等、各自散去、父老若又有固辭意、汝等與諸道友相議、請一老成宿衲、以充庵主、爲他討柴水便當底雲水兄弟、作一夏一冬安禪辨道之所在亦可、餘無復可言、遺屬遺屬。

遺偈

屋後青山、檻前流水、鶴林雙趺、熊耳隻履、又是空華結空子。

跋

寂室和尚南遊之後、晦跡巖谷、與世邈如、謝遺人事、絕筆久之、晩年因衲子懇請、迫不獲已、往往一言半句、流落江湖、或爭暗誦、或私傳寫、烏焉之誤、蓋不亦少、恐其遺失、據本印行、不敢加損、望無差誤、旹永和丁巳冬節之前三日、釋沙門性均謹白。

增補

示後上人

昔僧問趙州、狗子還有佛性也無、州云、無、只這一字、便截斷生死根株底利器、照破本來面目

之鏡光也、汝只二六時中、四威儀內、放捨諸緣、打成一片如咬鐵橛子、似吞栗棘蓬、參去參來、

斯須少閒、靡有退志、忽爾打破漆桶、心華發明、照十方空耶。

永源寂室和尙語錄卷之四終

近江州瑞石山永源禪寺開山敕諡
圓應禪師寂室和尚行狀

師諱元光、字寂室、世姓藤氏、隷作州高田縣、當村上天皇時、小野宮左府實賴公攝政、其玄孫小野宮少將某、生某、某聘平氏女生師、寔伏見天皇正應三年庚寅五月十五日也、母氏無憂、神光滿室、宗族皆賀曰、此兒必爲異人歟、祥何若斯也、七歲鄉閭群兒釣小魚、纔得之則屬師護焉、師謂、此魚雖爲微物、皆有命之屬也、其可忍殺哉、悉縱、群兒佛然矣、自丱角天稟超慧、父母命歸釋、遂辭作之舊梓、造京東福、依大智海禪師披緇、一日姨母延茹葷、師正色曰、入釋門豈犯佛禁、不聽、十五落髮受具、適江州田上縣、偶見一僧返關宴坐、心竊愛慕、從此要學離文字法、一日隨衆摘茶、有一僧、視師以爲奇貨、謂曰、汝才不凡、胡其匏繫於此、方今關左有約翁儉公、天下緇徒龍門也、汝儻入彼爐鞴、則大器必成矣、師依其言、乃拉是僧偕行、翁時董禪興席、師到則執弟子禮、前夜翁夢、如諸聖降現、光明照燭於山河、故以元光爲法諱、志瑞也、德治二年、約翁膺公命、視篆京建仁、供奉湯藥、此時徒弟數輩、列于班次、時論紛然、翁曰、古之善用人者、內不避親、外不避讎、惟材是庸而已、流俗之言於我何渠矣乎、職既滿、潛詣和州安部、於文殊像前、期七日、煉頂祈修道抵于成也、業畢又侍翁、翁適不安、師問曰、如何是末後一句、翁驀面打一掌、師豁然領悟、時十八歲也、明年偶作雪達磨頌、曰、暫借空華示半標、普通年事未

迢迢西天此土飄零恨、縱使春風吹不消、一山國師見是作、撫掌稱賞、延慶二年受約翁誨、隨金澤慧雲律師習毘尼學、纔浹三月、涉其梗槩、辛酸所攻、血爲之溺也、廼舍以去、翁時住龍峰、又侍巾匜、佛涅槃大衆作頌、求斐潤約翁、翁從頭一一校之、逮卷尾、桃李春風二千歲、謝郎不在釣魚船之句、翁曰、此必光侍者作也、果然、一山國師住南禪、擧師侍香、時歲二十八也、元應二年師歲卅一、聞天目中峰和尚道振華夷、附船便南邁、登天目山、日方逮晡、積雪滿庭、同行然可翁俊鈍庵、與俱侍立不退、峰於師臂端、獨書明日來也四字、師徑走后架、掬水洗之、徑山元叟・保寧古林・鷄足清拙・靈隱靈石・般若絕學・華頂無見・天目斷崖、皆徧扣之、到問答機緣、師不敢擧著於人焉、本朝嘉曆元年丙寅、即大元泰定三年也、是年已理歸檝、海中風作、怒濤排空、滿船無人色、師擧目、白衣觀音現于空中、少焉風濤霽威、著岸于長州、暫居三角縣、初一山稱師爲鐵船、中峰更製今字、有頌子證焉、逮東歸、一時哲匠有贈言、同船人見而珍愛之、乃殫散與焉、建武元年備後州吉津平居士、雅嚮師道、其室竹居迎館於廳事、師恬然居茲三年矣、竹居捨宅施師、名韜光庵、後宏其基、改號永德寺、觀應元年庚寅七月九日、有長勝寺命不就焉、自大元還、積二十五載、在備作際、專將韜晦而居焉、其地曰歌島・吉津・安田・椎村、其寺院乃西祖・明禪・安國・慈廣・菩提也、越明年辛卯、僑居攝州福嚴寺、又應道友招、住江州往生院、一日訪西禪長老之次、邂逅天龍夢窻國師、談話至漏盡、窻白延文五年庚子、師歲七十一、江州大守佐佐木雪江居士、重師名行、獻以卓錫之地、奧島云、雷谿云、且曰、斯二境吾州山水眉目也、師任性居焉、明年康安元年辛丑正月十八日、入雷谿相攸、觀其林壑幽邃、頗愜素抱、剔岨蠲

儀、營締梵居、山中吏民効子來之助、既成、山曰飯高、寺曰永源、（永取大守諱、源取其姓。）後改山號瑞石、以石之靈也、寶殿安聞思大士像、悟都管塑之、先是命工所造、收在龜背、俱有師供養語、所謂瑞石置後門壁下、顯其半稜、斯石舊在東峰頂、高野父老感夢告于衆、致焉、其重挽可用數百人力、而纔十數人扛、如石自行、達于寺、時以爲神運焉、殿之巽位、有僧堂、師曾榜之曰、坐中警策、只不可過惹衣敲席耳、痛以竹篦行事、則或動他心念、恐壞道義、各庵遵守此法式、深所庶者也、除饉女慈源、奉岸本村腴沃、充堂裏齋粥之資、殿之坎位、作石磴、直登數十尺、上有地、平衍寬爽、置三重寶塔、兌位高臺、曰含空、廼爲師遷寂之處焉、光明皇帝賜親筆手詔、曰、山中平生、提持之一句、可授與之由、可被傳命寂室和尙者也、復有天龍寺詔、曰、天龍寺住持職事、學道宏達、人間緇素、所慕會下也、霧豹之跡、年尙盡替、獨善之地、雲龍之感時臻、宜闡兼濟之道、早辭雷谿之幽棲、入龜山之禪刹、令紹隆叢林之軌範、可奉祈邦家之安泰者天氣如此、仍執達如件、康安二年二月十五日、左少辨、鹿王院普明國師、寄書趣其出世、其書云云、（書辭累幅、茲不載。）貞治二年癸卯、辭建長命、專使力强之、潛避往於伊勢、事寢還瑞石、妙喜中岩月公、聞師不赴徵命、寄書激勵曰、方今佛法陵遲、豈無心于出世度生乎、師作偈謝之、是時毳徒景從、如芳玉畹夫一關・圓月心・愚大拙等、天下知名之士數十輩、在會裡、一衆二千人、傍澗縛茅以居、精勵咨訣、固山中一時盛事也、六年丁未九月一日、唱滅含空臺、先書遺誡曰、老拙如今世緣將盡、因顧命諸法屬等、待余溘然之後、宜須林下晦跡、火種刀耕、圖終一生也、契經曰、當離闠鬧、獨處閑居、山間空澤、云云、是乃吾佛最後慈訓、寧可不遵奉哉、汝等各各精嚴勤修、庶不向袈裟之

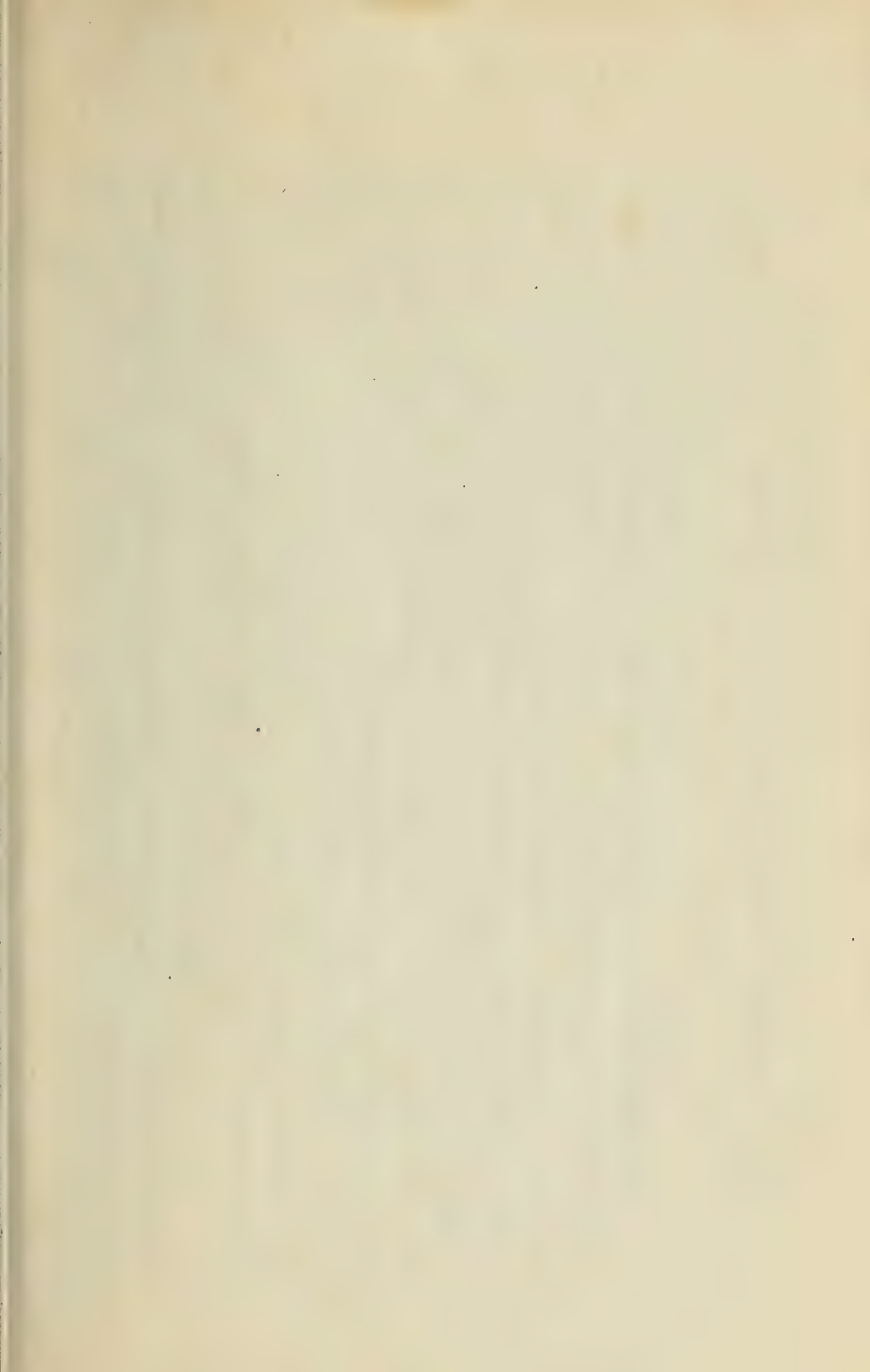
下失卻人身、是余、深所望于偏蠶耶、汝等見余氣絕、急須收窆、切莫留遺骸以使人見之、掩土疊石既畢、勸乎同志、只諷首楞嚴神呪一遍而已、然後把熊原還于大守、以茅菴付與高野父老等、各自散去、父老若又有固辭意、汝等與諸道友相議、請一老成宿衲以充庵主、爲佗討柴水便當底雲水兄弟、作一夏一冬安禪辨道之所在亦可、餘無復可言、遺囑遺囑、又書偈曰、屋後靑山、檻前流水、鶴林雙趺、熊耳隻履、又是空華結空子、書畢擲筆卽化、世壽七十八、坐夏六十六、諸徒奉遺命塔全身、是時擧州之民、如喪考妣、凡度僧尼千餘人、至衣冠之族授於法諱則不知其數矣、師知化緣將盡、方前數日、命靈仲彌天撰祭文、文成呈師、師覽太喜、于後二老裝香眞前、各自默誦而已、師之爲人也、顏角端偉、風誼簡遠、蚤負超邁特偉之資、而無與人競之態、平居不勉讀書、而一覽則無遺焉、至文辭之典麗、偈頌之幻妙、咸遊戲三昧之使然者也、第以雅意丘岳、遯脫身於稠廣、蛇山驪水、慨然南遊、歷往古聖跡、扣名師戶庭、將欲以嚴窮殊軌也、然而旋於桑域、不渝國師舊盟、蓋大唐國裏無禪師之謂歟、頃者杜撰知識、將禪道爲戲具、扶掉闔揣摩之術、誑誘三家村裏竈婦傭夫、師痛懷於茲、以故巖居川觀、確乎無應世之志、視勢利也賤於腐芥、待王侯也輕於游塵、恐煨芋之煙出戶、然而天下望之以爲佛法津梁、鑒居瑞石、參徒日臻、聿弗獲止而受之、非師之意也、攝政二條藤公良基、博學洽聞、爲一時碩匠、覩師眞蹟曰、世皆稱師道德爭於人、而不知雖書楷末技特有是妙也、字畫入火中不燒者往往在焉、齒落之與髮剃、爭取十襲者後看之、悉產設利矣、小師道證、始入金剛乘敎、聞厥祖弘法大師肉身尙存、往高野山、祈壹瞻禮、弘法感夢曰汝欲我覩乎、今旺化近江州、稱寂室禪

師卽是矣、證如洒而醒、兼程走北、中路過、濤一樫子者、展而見之、則師之異也、證意異之、既臻瑞石山前、有墟落、曰高野、證益忻前夢之符會、速授禮於師矣、初以後生稟知於海藏虎關鍊公、鍊公適過作、覩厥地形勝、曰、偉哉師之肖也、淸淑之氣、篤生一人者乎、鍊公宗門南董也、其立言必有以成矣哉。

贊曰、南天祖師、以如來所傳之法、分爲敎內敎外、顯密雖異、同一敎內矣、昔者檀林皇后、得密法於弘法、弘法盛稱之、后曰、更有法之邁之者乎、弘法曰、大唐有佛心宗、是達磨之所傳來也、熾行彼地、后乃使弘法之徒慧蕚法師、泛海覓法、蕚遂參見杭州鹽官國師、且通太后之幣、仍請其上座義空禪師而還矣、於是皇后創檀林寺居焉、官僚受指令者不少、然而本朝時機未熟、無由播揚、弘法豈無遺願乎、蕚再入支那、乞蘇州開元寺沙門契元、勒事刻琬琰、題曰日本國首傳禪宗記、建之羅城門側、因是觀之、弘法已欲敎外之宗流通者必矣、其作十住心論、不載我宗、蓋有知也、五百年後、再現扶桑而償宿願者乎、雖然敎內所談、不漏三機、以故流通亦遍、聲光亦熾、敎外所指、專被一類上上根機、諦信之者尙難多得、況復諦當者乎、宜哉、前身後身、否泰不同、愚者莫以容疑焉、嗟乎歲纔十八上、忽被儉師一掌、徹證臨濟骨髓、空手跨海、掉臂橫行諸大老門、空手歸朝、張皇大覺正續玄風、斂化歸入阿字門內、亦無遺恨乎哉。

永源住持比丘一絲叟文守。

右據昔時年譜、纂要紀之。

寬永二十一年歲次甲申

國譯禪學大成奥付

昭和五年十一月二十日印刷
昭和五年十一月廿五日發行

編者 國譯禪學大成編輯所
代表者 宮裡祖泰

不許複製

發行者 宮下軍平
東京市神田區錦町一丁目十六番地

印刷者 藤本茂入
東京市神田區表猿樂町二丁目五番地

印刷所 藤本印刷所
東京市神田區表猿樂町二丁目五番地

發行所 二松堂書店
東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番